

千歳市

キウス7遺跡(4)

—北海道横断自動車道(千歳—夕張)埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成8年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター

千歳市

キウス7遺跡(4)

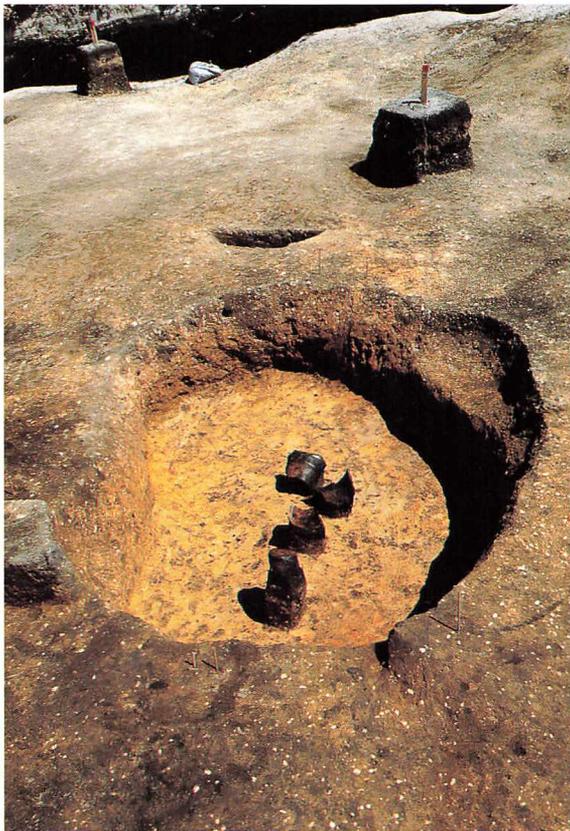
—北海道横断自動車道(千歳—夕張)埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成8年度

財団法人 北海道埋蔵文化財センター



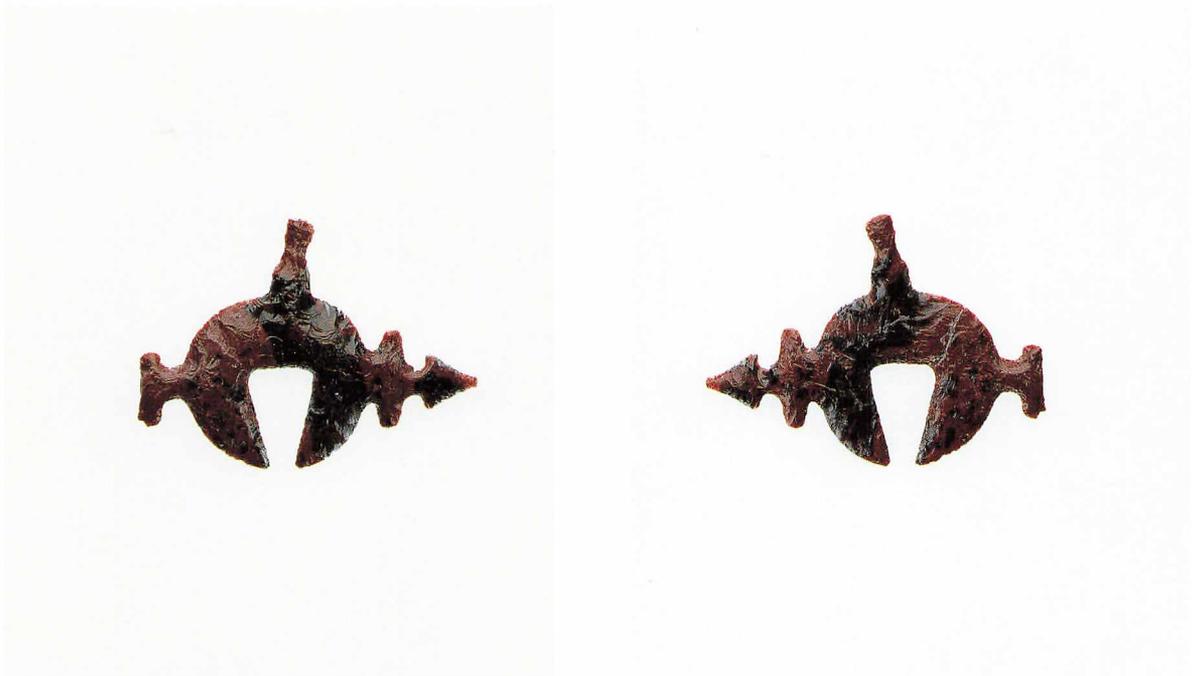
調査風景 E→W



H-26土器出土状況



左の復元



黒曜石製異形石器

例 言

1. 本書は、北海道横断自動車道(千歳～夕張)建設工事に伴い、財団法人北海道埋蔵文化財センターが実施している、千歳市キウス7遺跡の発掘調査の報告書である。本書では、平成8(1996)年度調査分を報告する。キウス7遺跡の調査報告書としては、4冊目にあたる。
2. 本書の編集・執筆は、三浦正人、倉橋直孝が主となって行った。文責は各項目の文末に括弧で示した。
3. 遺物整理は、土器を鎌田望・倉橋が、石器・動植物遺体を倉橋が担当した。
4. 調査写真は主に吉田裕吏洋が撮影し、遺物写真は全て吉田が担当した。
5. 植物遺存体の同定は、静修女子大学の吉崎昌一氏と北海道大学埋蔵文化財調査室の椿坂恭代氏に依頼中である。
放射性炭素年代測定は、京都産業大学の山田 治氏に依頼中である。
ヒスイの原産地同定は、京都大学原子炉実験所の藁科哲男氏に依頼中である。
6. 調査にあたっては下記の諸機関、各氏から御指導御協力をいただいた。
千歳市教育委員会埋蔵文化財センター、恵庭市教育委員会、北広島市教育委員会、北海道開拓記念館、渡辺重建工業株式会社
大谷 敏三、田村 俊之、高橋 理、豊田 宏良、松田 淳子、遠藤 昭浩、上屋 真一、松谷 純一、森 秀之、佐藤 幾子、遠藤 龍畝、吉崎 昌一、椿坂 恭代、林 謙作、天野 哲也、都出 比呂志、野村 崇、山田 悟郎、右代 啓視、宮 宏明、森岡 健治、小林 貢、佐藤 一志、羽坂 俊一、清水 恵一、大沼 忠春、種市 幸生、千葉 英一、田才 雅彦、西脇 対名夫、藤原 秀樹

記号等の説明

1. 遺構の表記は以下に示す記号を用い、原則として調査順に番号を付した。

H：住居跡	TP：Tピット
HP：住居跡に伴うピット	UP：T a - c 層上位の土壌
HF：住居跡に伴う焼土	LP：T a - c 層下位の土壌
BP：T a - c 層下位の大型土壌	UF：T a - c 層上位の焼土
DP：T a - c 層下位の深型土壌	LF：T a - c 層下位の焼土

2. 遺構図の縮尺は、スケール等が入っているもの以外は、原則として40分の1である。

遺構平面図に方位記号がない場合は、上がN-15°-Wである。

遺構平面図の+はグリッドラインの交点で、交点傍らの名称記号は右下の区画を示している。

遺構平面図の・小数字とセクションレベルは標高(単位m)である。

3. 遺構平面図の出土遺物は記載のない限り、以下の記号を用いている。

●：土器	■：礫石器	×：フレイクチップ
▲：剝片石器	□：礫	★：その他

4. 遺構の規模は、「長軸の上端/下端×短軸の上端/下端×確認面からの最大深・最大厚」で示してある。

一部破壊されているものは現存長を()で示し、不明のものは-で示した。

5. 土層名は、下記の略号を用いた場合がある。

樽前 a 降下軽石層：T a - a	恵庭 a 降下軽石層：E n - a
樽前 c 降下軽石層：T a - c	E n - a 起源のローム層：E n - L
樽前 d 降下軽石層：T a - d	E n - a 未風化軽石礫層：E n - P
白頭山-苫小牧火山灰層：B - T m	支笏軽石流堆積物：S p f l

火山灰の略号は、曾屋龍典・佐藤博之(1980)『千歳地域の地質』

北海道火山灰命名委員会(1982)『北海道の火山灰』による。

6. 土層の混在状態は、基本土層や上記の略号などを用いておもに下記のように表わしてある。

A + B：AとBがほぼ同量混じる

A > B：AにBが少量混じる

A ≧ B：AにBが微量混じる

7. 遺物実測図と土器拓影図の縮尺は、スケール等が入っているもの以外は、原則として以下のとおりである。

復元土器：4分の1 剝片石器・石斧：2分の1

土器拓影：3分の1 礫石器(石斧を除く)：3分の1 土製品・石製品：2分の1

8. 石器・石製品の大きさは、「最大長×最大幅×最大厚」で記してある。

目 次

口絵

例言

記号等の説明

I 調査の概要

1 調査要項	1
2 調査体制	1
3 調査にいたる経緯と経過	1
4 前年度までの成果	2
5 今年度調査の概要	4
6 遺跡の位置と環境	5
(1) 位置	5
(2) 地形・地質と立地	5
(3) 周辺の環境	10
(4) 地図と地名	10

II 調査の方法、遺物の分類

1 調査の方法	15
2 土層の区分	17
3 土器・土製品の分類	18
4 石器等の分類	19

III 遺構とその遺物

1 概要	21
2 住居跡	25
3 土壌	34
4 焼土	43
一覧表	61

IV 包含層の遺物

1 概要	67
2 土器・土製品等	83
3 石器・石製品等	90
一覧表	106

写真図版117

報告書抄録179

目 次

I 調査の概要

図 I - 1	キウス7 遺跡調査遺構位置図	3
図 I - 2	周辺の地形	6
図 I - 3	Ⅲ層上面・Ⅴ層下面コンター図	7
図 I - 4	遺跡の位置(1)	8
図 I - 5	遺跡の位置(2)	9
図 I - 6	周辺の遺跡	12

II 調査の方法, 遺物の分類

図 II - 1	発掘調査区の位置・設定・表示	16
図 II - 2	土層柱状模式図	17

III 遺構とその遺物

図 III - 1	中の沢兩岸の遺構位置図	24
図 III - 2	H-24	26
図 III - 3	H-24出土の遺物	27
図 III - 4	H-25	28
図 III - 5	H-25覆土焼土・炭化材位置図	29
図 III - 6	H-25出土の遺物	30
図 III - 7	H-26	31
図 III - 8	H-26出土の遺物	32
図 III - 9	H-27	33
図 III - 10	H-27出土の遺物	33
図 III - 11	LP-65~71	35
図 III - 12	LP-72~75	38
図 III - 13	LP-76・77、UF-72~75	39
図 III - 14	LP出土の遺物(1)	41
図 III - 15	LP出土の遺物(2)	42
図 III - 16	LF-87・176~180	44
図 III - 17	LF-181~186	45
図 III - 18	LF-187~191	46
図 III - 19	LF-192~197	47
図 III - 20	LF-198~204・208	48
図 III - 21	LF-205~207・220~222	49
図 III - 22	LF-209~219	50
図 III - 23	LF-223~230	51
図 III - 24	LF-231~239	52
図 III - 25	LF-240~245	53
図 III - 26	LF-246~252	54
図 III - 27	LF出土の土器(1)	56
図 III - 28	LF出土の土器(2)	57
図 III - 29	LF出土の土器(3)	58
図 III - 30	LF出土の石器(1)	59
図 III - 31	LF出土の石器(2)・玉	60

Ⅳ 包含層の遺物

図Ⅳ-1	包含層出土の土器(1)……………	68
図Ⅳ-2	包含層出土の土器(2)……………	69
図Ⅳ-3	包含層出土の土器(3)……………	70
図Ⅳ-4	包含層出土の土器(4)……………	71
図Ⅳ-5	包含層出土の土器(5)……………	72
図Ⅳ-6	包含層出土の土器(6)……………	73
図Ⅳ-7	包含層出土の土器(7)……………	74
図Ⅳ-8	包含層出土の土器(8)……………	75
図Ⅳ-9	包含層出土の土器(9)……………	76
図Ⅳ-10	包含層出土の土器(10)……………	77
図Ⅳ-11	包含層出土の土器(11)……………	78
図Ⅳ-12	包含層出土の土器(12)……………	79
図Ⅳ-13	包含層出土の土器(13)……………	80
図Ⅳ-14	包含層出土の土器(14)……………	81
図Ⅳ-15	包含層出土の土器(15)……………	82
図Ⅳ-16	包含層出土の土製品……………	83
図Ⅳ-17	I群b類土器分布図……………	84
図Ⅳ-18	Ⅲ群b類・Ⅳ群b類土器分布図……………	85
図Ⅳ-19	Ⅳ群c類・Ⅴ群a類・Ⅴ群b類土器分布図……………	86
図Ⅳ-20	Ⅴ群c類・Ⅵ群a類・Ⅵ群b類土器分布図……………	87
図Ⅳ-21	Ⅵ群c類・Ⅵ群d類・Ⅶ群土器分布図……………	88
図Ⅳ-22	包含層出土の石器(1)……………	94
図Ⅳ-23	包含層出土の石器(2)……………	95
図Ⅳ-24	包含層出土の石器(3)……………	96
図Ⅳ-25	包含層出土の石器(4)……………	97
図Ⅳ-26	包含層出土の石器(5)……………	98
図Ⅳ-27	包含層出土の石器(6)・石製品……………	99
図Ⅳ-28	包含層石器点数図(1) 石鏃 Ⅲ・Ⅴ層 石槍・両面加工のナイフ Ⅴ層 ……	100
図Ⅳ-29	包含層石器点数図(2) 石錐・つまみ付きナイフ Ⅲ・Ⅴ層 ……	101
図Ⅳ-30	包含層石器点数図(3) スクレイパー・楔形石器・石核 Ⅲ・Ⅴ層 ……	102
図Ⅳ-31	包含層石器点数図(4) 石斧・たたき石Ⅲ・Ⅴ層……………	103
図Ⅳ-32	包含層石器点数図(5) すり石・台石・石皿 Ⅲ・Ⅴ層 ……	104
図Ⅳ-33	包含層石器点数図(6) 砥石 Ⅲ・Ⅴ層 ……	105

表 目 次

I 調査の概要

表 I - 1	キウス7遺跡 年度別・種別遺物点数一覧	2
表 I - 2	キウス7遺跡 年度別・種別検出遺構数一覧	2
表 I - 3	周辺の遺跡一覧	13

III 遺構とその遺物

表 III - 1	遺構一覧(1) 平成8年度	22
表 III - 2	遺構一覧(2) 平成8年度	23
表 III - 3	遺構掲載土器・土製品一覧(1)	61
表 III - 4	遺構掲載土器・土製品一覧(2)	62
表 III - 5	遺構掲載土器・土製品一覧(3)	63
表 III - 6	遺構掲載土器・土製品一覧(4)	64
表 III - 7	住居跡出土石器掲載一覧	65
表 III - 8	土壇出土石器掲載一覧	65
表 III - 9	焼土出土石器掲載一覧	65
表 III - 10	遺構遺物集計表	66

IV 包含層の遺物

表 IV - 1	包含層掲載土器一覧(1)	106
表 IV - 2	包含層掲載土器一覧(2)	107
表 IV - 3	包含層掲載土器一覧(3)	108
表 IV - 4	包含層掲載土器一覧(4)	109
表 IV - 5	包含層掲載土器一覧(5)	110
表 IV - 6	包含層掲載土器一覧(6)	111
表 IV - 7	包含層掲載土器一覧(7)	112
表 IV - 8	包含層掲載土器一覧(8)	113
表 IV - 9	包含層掲載土器一覧(9)	114
表 IV - 10	包含層出土石器掲載一覧(1)	115
表 IV - 11	包含層出土石器掲載一覧(2)	116

図版目次

- 口絵-1 調査風景・出土土器
口絵-2 黒曜石製異形石器

I 調査の概要

- 図版 I-1 調査前風景(1) ……117
図版 I-2 調査前風景(2) ……118
図版 I-3 火山灰除去作業 ……119
図版 I-4 東側調査風景(1) ……120
図版 I-5 東側調査風景(2) ……121
図版 I-6 西側調査風景(1) ……122
図版 I-7 西側調査風景(2) ……123
図版 I-8 縄文時代の調査終了状況 ……124
図版 I-9 旧石器確認調査 ……125
図版 I-10 TP-2 崩落状況 ……126
図版 I-11 調査終了状況 ……127

III 遺構とその遺物

- 図版 III-1 H-24 ……128
図版 III-2 H-24の遺物 ……129
図版 III-3 H-25 ……130
図版 III-4 H-25の遺物 ……131
図版 III-5 H-26 ……132
図版 III-6 H-26の遺物(1) ……133
図版 III-7 H-26の遺物(2) ……134
図版 III-8 H-27 ……135
図版 III-9 H-27の遺物 ……136
図版 III-10 LP-65・66・67・68 ……137
図版 III-11 LP-65・66・69・70・71 ……138
図版 III-12 LP-72・73・77 ……139
図版 III-13 LP-74 ……140
図版 III-14 LP-75 ……141
図版 III-15 LP-76 ……142
図版 III-16 LP出土の土器 ……143
図版 III-17 LP出土の石器 ……144
図版 III-18 UF-72・73・74 ……145
図版 III-19 LF-87・177・183・184 ……146
図版 III-20 LF-190 ……147
図版 III-21 LF-193・198・200・205 ……148
図版 III-22 LF-210~219・223・224・
232・236 ……149
図版 III-23 LF出土の土器(1) ……150
図版 III-24 LF出土の土器(2) ……151
図版 III-25 LF出土の土器(3) ……152
図版 III-26 LF出土の土器(4) ……153
図版 III-27 LF出土の石器(1) ……154
図版 III-28 LF出土の石器(2)・玉 ……155

IV 包含層の遺物

- 図版 IV-1 包含層の土器(1) ……156
図版 IV-2 包含層の土器(2) ……157
図版 IV-3 包含層の土器(3) ……158
図版 IV-4 包含層の土器(4) ……159
図版 IV-5 包含層の土器(5) ……160
図版 IV-6 包含層の土器(6) ……161
図版 IV-7 包含層の土器(7) ……162
図版 IV-8 包含層の土器(8) ……163
図版 IV-9 包含層の土器(9) ……164
図版 IV-10 包含層の土器(10) ……165
図版 IV-11 包含層の土器(11) ……166
図版 IV-12 包含層の土器(12) ……167
図版 IV-13 包含層の土器(13) ……168
図版 IV-14 包含層の土器(14) ……169
図版 IV-15 包含層の土器(15) ……170
図版 IV-16 包含層の土器(16) ……171
図版 IV-17 包含層の土器(17) ……172
図版 IV-18 包含層の土製品 ……173
図版 IV-19 包含層の石器(1) ……174
図版 IV-20 包含層の石器(2) ……175
図版 IV-21 包含層の石器(3) ……176
図版 IV-22 包含層の石器(4) ……177
図版 IV-23 包含層の石製品 ……178

I 調査の概要

1. 調査要項

事業名：北海道横断自動車道埋蔵文化財発掘調査

事業委託者：日本道路公団北海道支社

事業受託者：財団法人 北海道埋蔵文化財センター

遺跡名：キウス7遺跡（北海道教育委員会登録番号：A-03-265）

所在地：千歳市中央852ほか

調査期間：平成5年度 5月6日～7月15日・9月6日～10月27日

平成6年度 5月6日～10月29日

平成7年度 5月8日～10月25日

平成8年度 5月7日～6月29日

調査面積：平成5年度 4,513㎡・1,100㎡

平成6年度 1,600㎡

平成7年度 9,570㎡

平成8年度 1,720㎡

2. 調査体制

平成8年度

第2調査部	部長	鬼柳 彰
第2調査部第2調査課	課長	西田 茂（発掘担当者）
	主任	三浦正人（発掘担当者）
	文化財保護主事	倉橋直孝
	〃	吉田裕吏洋

3. 調査にいたる経緯と経過

1987年10月に日本道路公団札幌建設局から北海道教育委員会に対し、北海道横断自動車道（千歳市～夕張市間）建設について埋蔵文化財保護のための事前協議書が提出された。これを受けて北海道教育委員会は1988(昭和63)年4月～5月に千歳市～夕張市間の全線を対象とした遺跡所在確認調査を実施し、19箇所埋蔵文化財包蔵地について遺跡範囲確認調査が必要との回答が出された。その後幾度かの変更を経て、1991(平成3)年10月から1996(平成8)年9月には範囲確認調査が行われた。

範囲確認調査を終えた遺跡で、工事計画の変更が不可能であるために発掘調査を必要とする埋蔵文化財包蔵地は千歳市11か所、恵庭市4か所、由仁町2か所、夕張市3か所が明らかになっている。発掘調査は、工事の優先順等に従って、平成5年度から実施されている。

キウス7遺跡において、工事に先んじて発掘調査が必要となる面積は、1991年10月と1992年11月及び1993年秋に行われた範囲確認調査をもとに、27,900㎡となっている。発掘調査は財団法人北海道埋蔵文化財センターにより、1993年5月から以後毎年、継続でなされている。1993年の調査は遺跡東側の5,613㎡、1994年の調査は遺跡西端の1,600㎡、1995年の調査は遺跡のほぼ全域の北半9,570㎡である。今年度は、本線車道の北の側道部分で、遺跡中央部の中の沢より北側の部分1,720㎡が調査範囲となった。本書はこの1996年の1,720㎡分の報告である。

I 調査の概要

表 I-1 キウス7 遺跡 年度別・種別遺物点数一覧

種別	年度	平成5年度 1993	平成6年度 1994	平成7年度 1995	平成8年度 1996	種別合計
土器		22,119	1,860	62,566	29,975	116,520
石器等		3,518	760	16,394	5,397	26,069
礫・礫片		3,489	425	3,254	1,533	8,701
土製品等		20	0	277	80	377
石製品等		11	2	9	9	31
自然遺物		有	有	有	有	有
年度合計		29,157	3,047	82,500	36,994	総計 151,698

* 合計数に自然遺物は含まれていない。

表 I-2 キウス7 遺跡 年度別・種別検出遺構数一覧

種別	年度	平成5年度 1993	平成6年度 1994	平成7年度 1995	平成8年度 1996	種別合計	内訳
住居跡 H (V層)		4	4	16	4	28	竪穴*17 平地 11
土壌 (Ⅲ・V層) UP. LP		62	6	55	13	136	UP 59 LP 77
大型土壌 (V層) BP. DP				5		5	BP 4 DP 1
Tピット (V層) TP		1	4	1		6	
焼土 (Ⅲ・V層) UF. LF		82	14	150	81	327	UF 75 LF 252
集礫 (Ⅲ層)				1		1	
埋め壟 (V層)				1		1	
道跡 (Ⅲ層)				3		3	
柱穴群 (Ⅲ層)				1		1	
年度合計		149	28	233	98	総計 508	

* 1軒未報告あり (平成5年度分 H-X)

4. 前年度までの成果

遺跡の台地縁辺をほぼ全域にわたって調査したことになる。ここでは、古い時代から各期ごとにその様相を記しておく。

旧石器時代：合計で調査面積の約4%にあたる各所の恵庭a降下軽石層を、重機と人力で掘り下げ調査してきたが、遺物は確認されていない。

縄文時代早期：コッタロ式・中茶路式・東釧路Ⅲ式土器が少量点在している。遺構も土壌・焼土が少数点在するのみである。

縄文時代前期：土器の出土はない。川下のキウス5遺跡では、縄文式期の集落が確認されている。

縄文時代中期：東側から中央部にかけて天神山式・柏木川式土器が点的に少量出土している。やや西寄りの平坦部では、柏木川式の住居跡が1軒確認されている。西側では土壌から北筒式土器が出土している。

縄文時代後期：東側の中の沢南側段丘平坦面では、柱穴で囲まれる内側に焼土を持つ平地の住居跡が5軒、4本柱建物跡2軒、竪穴住居跡2軒が検出されているほか、貯蔵穴と思われる大型土壌4基も調査している。これらの住居跡や大型土壌の詳細な時期判定に有効な遺物の出土は少ないが、前葉から中葉にかけて特に、タプロポ式、手稲式・鮎潤式期のものと推定できる。中央やや西寄りの平坦

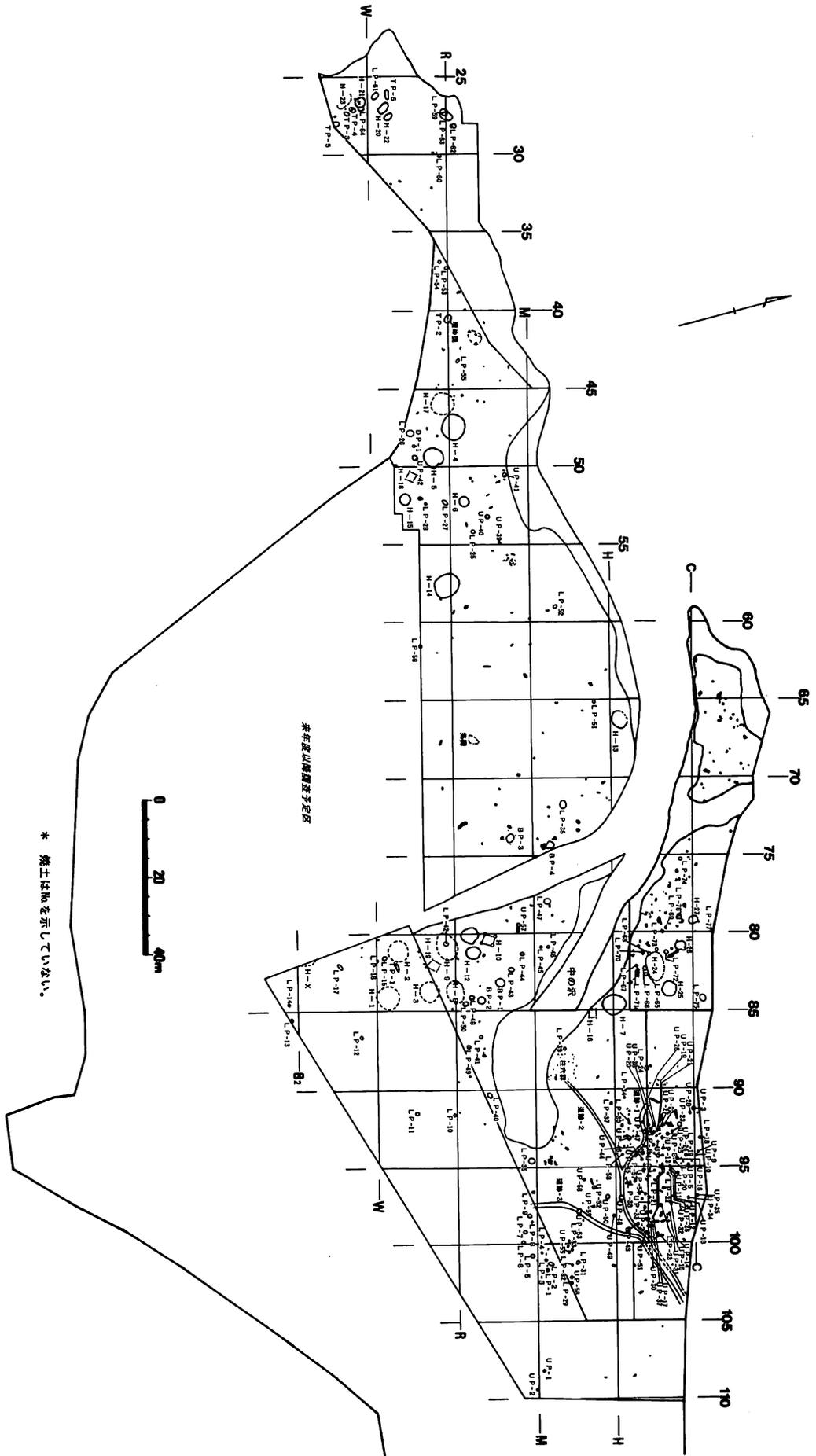


図 I-1 キウス7遺跡調査遺構位置図

I 調査の概要

面では、平地の住居跡が1軒、4本柱建物跡1軒、竪穴住居跡4軒が検出されている。中葉の手稻式・鮭潤式期にあたる。中の沢両岸の傾斜面にもこの時期の竪穴住居跡2軒と4本柱建物跡1軒が検出されている。西側では中葉の手稻式期の竪穴住居跡3軒がある。これら住居跡グループにそれぞれ属する形で、多くの土壌・焼土が存在する。

前葉の土器は、余市式、タブコブ式がやや多く、手稻砂山式が少量ある。中葉の土器は手稻式・鮭潤式が多数あり、器形は深鉢形、浅鉢形、注口形、壺形などがあり、下部単孔土器や異形台付土器、オロンガネ状土製品等もある。西側ではウサクマイC式もみられる。後葉では堂林式、御殿山式土器が少量ある。

縄文時代晩期：当該期は全域で、Ⅲ・Ⅴの両層にわたり、後葉のタンネトウL式土器がその大半を占める。東・西の両辺に土壌と焼土が集中してみられる。墓域と推定される。また西側で竪穴住居跡1軒が検出されている。

続縄文時代前期：中の沢北東部の平坦面～斜面で初頭の大狩部式系の土器が多めに出土している。この手の土器は、縄文時代晩期の土器と非常に区別が付けにくい、口縁部や底部からその分類が可能になる。また層的に区分できるものもある。

続縄文時代中期：東側では後北C₂D式土器が多く出土しているが、中央部や西側ではごく少量の出土である。中の沢北東部の平坦面に後北C₂D式期の土壌と焼土が比較的集中してみられる。また後北C₂D式と赤穴式に類する土器が近接して出土している例もみられる。

続縄文時代後期：中の沢周辺で北大Ⅰ・Ⅱ式土器がごく少数出土している。

擦文文化期：西側の焼土から土器1個体が出土している。

アイヌ文化期：中の沢の北東部で道跡が3筋検出された。このうちの1筋は中の沢縁辺の柱穴群へと続いている。遺物では、ガラス玉が1点出土している。

5. 今年度調査の概要

中の沢に南面しキウス川に向かって突出する、東西100m、南北20mの範囲、1,720m²の調査である。東と南側で、平成3年度と5年度の調査区と接続する。

Ⅲ層の遺構と遺物：Ⅲ層は縄文時代晩期からアイヌ文化期にかけての包含層である。今年度の調査では、遺構は焼土4基(UF-72~75)が散在するのみで時期も明確ではない。

遺物は土器でみると、縄文時代晩期タンネトウL式、続縄文時代の後北C₂D式がやや多い。続縄文時代の恵山式1個体や、北大Ⅲ式か擦文文化期十勝最寄Ⅰ式とされる2個体、擦文文化期後期の1個体の単独での出土が特徴的である。

Ⅴ層の遺構と遺物：Ⅴ層は縄文時代早期から縄文時代晩期にかけての包含層である。遺構は、調査区東側で竪穴住居跡3軒(H-25~27)、平地住居跡1軒(H-24)、土壌13基(LP-65~77)が検出され、標高41m以下のほぼ全域で焼土77基(LF-176~252)が確認された。これらの遺構はほとんどが、縄文時代後期の手稻式、鮭潤式土器の時期ととらえられるが、大型の焼土には晩期のタンネトウL式土器の時期のものがある。

土器は縄文時代後期の手稻式、鮭潤式が多く、晩期のタンネトウL式がこれに次いで多い。後期のタブコブ式や堂林式、晩期の大洞系がごく少数みられるほか、早期の東釧路Ⅳ式も2個体確認された。石器は石鏃・石槍・石錐・つまみ付きナイフ・スクレイパー・楔形石器・石斧・たたき石・台石・すり石・石皿・砥石・石錘などがある。この中では石鏃・石斧が多めで、他の礫石器が少なめの傾向

にある。これらの定形的な石器には、分布状態や形態的な特色などから判断して土器との対応関係が明瞭に推定されるものもあるが、縄文時代前期にあるような大型の石錘は、対応する土器が確認されていない。装飾品には、黒曜石製の精巧な細工の異形石器や、ヒスイ製やカンラン岩製の玉がある。

6. 遺跡の位置と環境

(1) 位置

北海道の南西部、太平洋岸の苫小牧市から北北西へ約70km、日本海に抜けるこの地域は、地理学上の呼称として「札幌・苫小牧低地帯」または「道央低地帯」「石狩低地帯」と呼ばれている。石狩低地帯における太平洋側と日本海側との分水界は、太平洋から15kmほどの新千歳空港の所在する標高25m足らずの低い台地である。

この「石狩低地帯」の東縁には南北に30kmと長い、低平な地形「馬追丘陵」がある。第四紀の隆起地形であるこの丘陵の最高地点は、その北半、長沼町と由仁町の境にある馬追山の標高273mで、稜線はおおよそ150mの高さで南北に伸びている。稜線の近くはやや急峻な地形をなしているが、それより低い部分は緩やかな地形であり、その裾は沖積地に連続的につながっている。

馬追丘陵は、古くは石狩国と胆振国の境界線の接するところであり、現在では空知支庁、石狩支庁、胆振支庁が接するところであるように、自然地形上・人文環境上の境界地域となっている。

馬追丘陵の緩やかな西側傾斜面には多くの遺跡が知られている。この中でキウス7遺跡は、丘陵のやや南寄りのコムカラ峠の西側中腹にある。千歳市街地から北東に約9km、恵庭市街地からは東方約11kmの距離にあり、標高は37～45mほどに位置する。5万分の1地形図から計測した遺跡の位置は、東経141度43分52秒、北緯42度52分31秒である。

なお、周辺の遺跡については、昨年度報告『千歳市キウス7遺跡(3)』北埋調報105に掲載したので、今年度は、周辺遺跡地図と一覧表(図I-6・表I-3)を付すのみとした。

(2) 地形・地質と立地

馬追丘陵の西側緩斜面は、丘麓に多数の浸食小河川が形成され、この河川沿いに多くの遺跡が営まれている。これら小河川は、千歳川中流域のオサットーなどの大小の沼や著しい蛇行河川で形成される、広大な湿地帯に集約されて行く。キウス7遺跡の広がり、コムカラ峠下から流れ出る小河川キウス川左岸の斜面と段丘上の広い範囲が推定される。キウス川と遺跡段丘面の比高は約10mである。コムカラ峠や遺跡からは、千歳川中流域の沖積地や対面の山地塊(樽前山-恵庭岳-漁岳-空沼岳-札幌岳-手稲山)が遠望できる。キウス川筋はコムカラ峠を通過して、馬追丘陵を横断するルートとして、早くから開けていた。図I-2は道路工事予定図をもとにした遺跡周辺の地形図である。

調査予定範囲は、高速道路の計画路線のうちで、本線車道のほかパーキングエリア設置部分にあたるので、東西の長さが約360m、最大の幅が160mに及ぶ範囲27,900㎡である。調査終了区域を含めて図II-1に示した。

この東西に長い段丘面は、支笏軽石流(Spfl)で形成された緩斜面が、湧水・流水による浸食・下刻作用によって谷地形が幅広くなり、相対的に台地状をなしたものである。ほぼ水平な広がりとして目視できるが、東から西へ100mにつき2mほどの割合で低下している東高西低の緩やかな傾斜地となっている。

遺跡周辺には沖積世の降下火山噴出物が、多くみられる。肉眼で判別できるのは、恵庭a降下軽石(En-a)、樽前d降下軽石(Ta-d)、樽前c降下軽石(Ta-c)、樽前a降下軽石(Ta-a)などである。

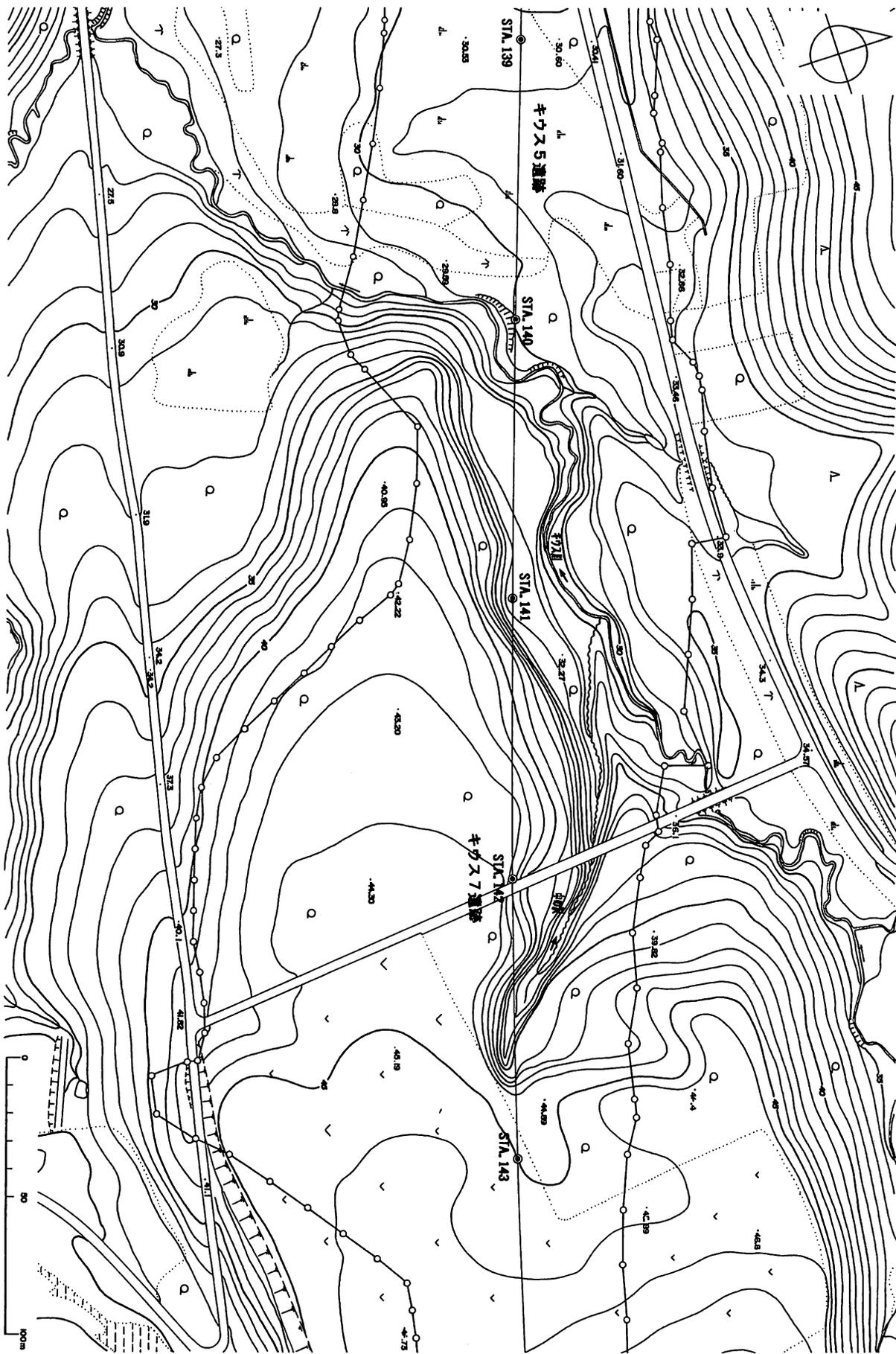


図 I-2 周辺の地形

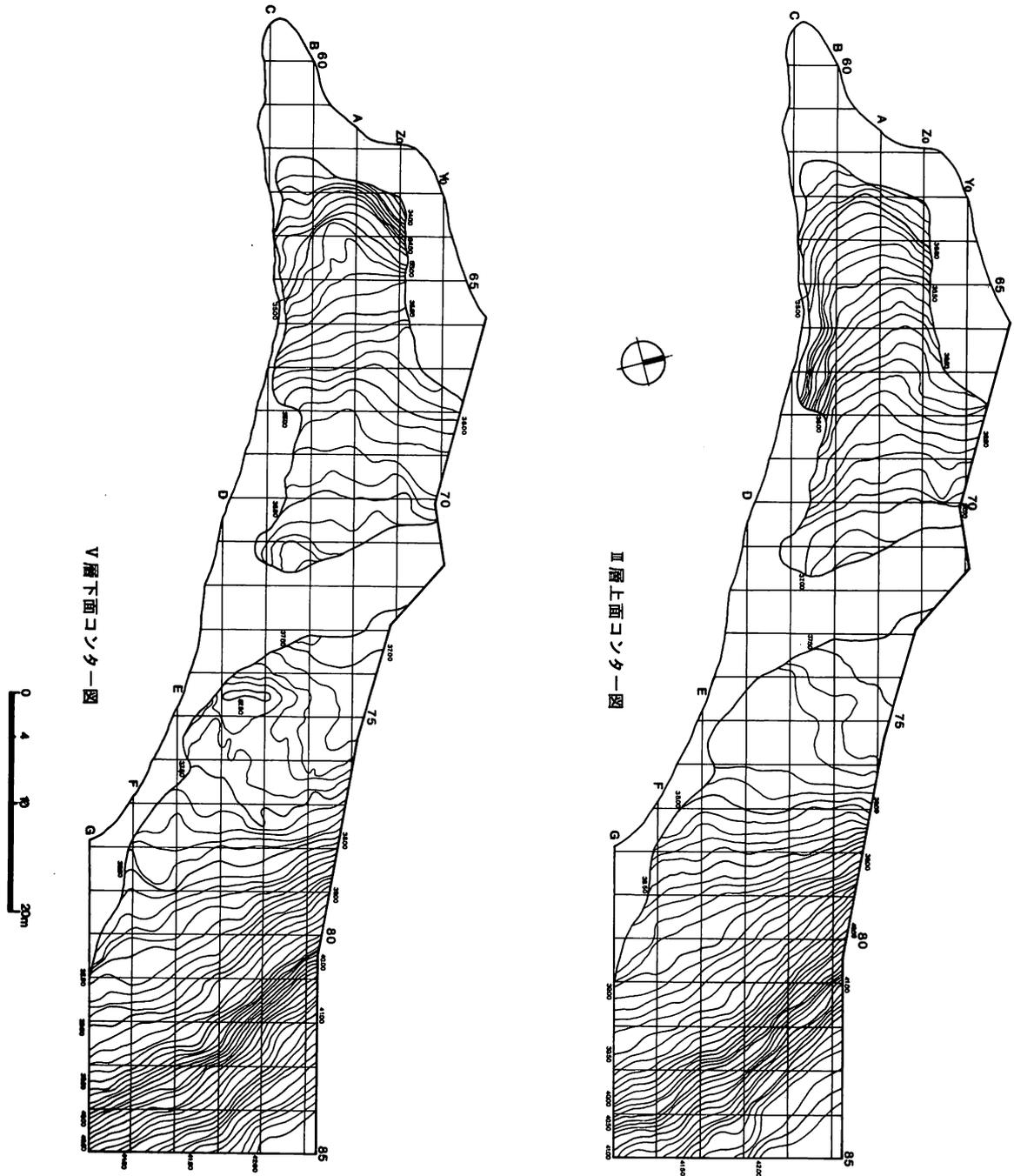
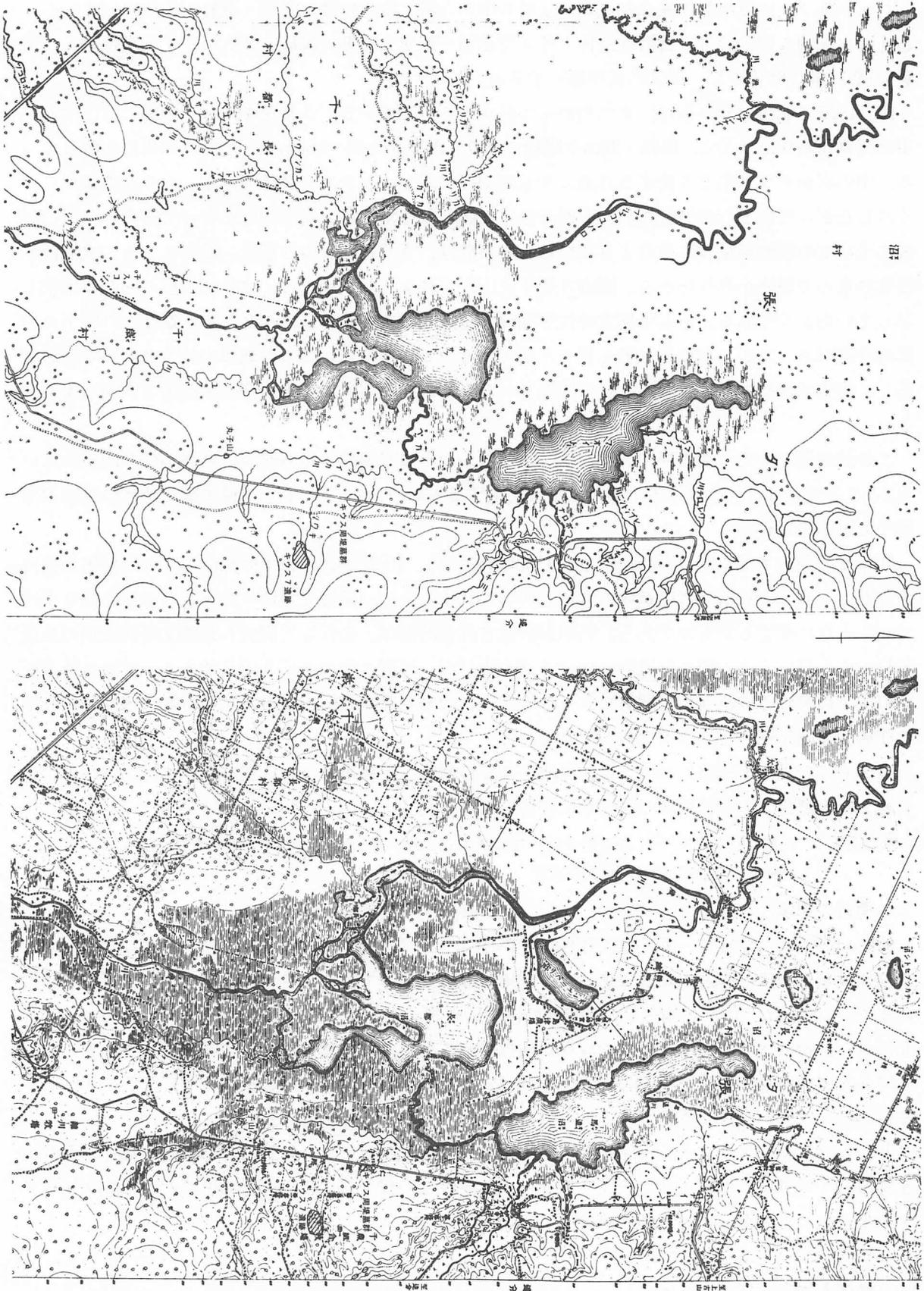


図 I-3 III層上面・V層下面コンター図



(この図は、千歳市教育委員会発行「千歳市埋蔵文化財包蔵地分布図」の
No.6・7・8・12・13・14・18・19・20に加筆し、30,000/1に
縮小複製したものである。)



(この図は、〈上〉陸地測量部、明治29年製版の假製五万分の一地形図、札幌第七號「長都」
 〈下〉同、明治42年部分修正測、43年改版の假製五万分の一地形図、札幌第七號「漁」に
 加筆し、100,000/1に縮小複製したものである。)

図 I - 5 遺跡の位置(2)

I 調査の概要

これらの降下火山噴出物に挟まれる腐植土層の中から縄文時代以降の遺構・遺物が検出されている。遺物の本来的な包含層は、Ⅲ層（近世アイヌ文化期～擦文文化期～続縄文時代～縄文時代晩期）とⅤ層・Ⅵ層（縄文時代晩期～縄文時代早期）である。

調査区域の北西部分からは、東に向かって沢が入り込んでいる。これを中の沢と呼ぶことにする。中の沢は比高10mほどで、幅15～20mの窪地であり、沢頭から西へ150mほどでキウス川に合流している。中の沢がキウス川と合流する低地よりも西側の右岸が、キウス5遺跡である。沢の窪地は奥に行くにしたがって急激な斜面となり、沢頭の付近は崖となっている。発掘調査によって得られた沢の形成についての観察結果は、次のようになる。中の沢は、支笏軽石流の堆積後、風水による二次堆積・浸食のなかで概略が形作られる。恵庭a降下火山灰が積もったときには、すでに地形の凹凸は出来上がっていたようである。そして縄文時代早期以降、人間の生活の舞台となり、また幾度かの降下火山灰の堆積があったが、沢地形は奥へ奥へと拡大する一方であった。この沢地形の拡大は沢頭の後退であり、調査では斜面の連続崩落として観察された。これの営力は地下水の湧出・流出と表面水流である。

この沢地形をも突っ切る形で、調査予定地のなかほどに略南北に走る直線の道路が切り開かれている。この道路は近代における土地の区画に由来するものであり、5～10mの幅で縄文時代の遺物包含層までも削平し移動している。

昨年度の調査で調査区域の西端寄り（O-50区付近）に、比高0.8mほどで直線的に走る断層崖が検出された。これは旧石器時代の遺物の有無を明らかにするための調査で恵庭a降下軽石を深く掘り下げているときに確認したものである。断層が形成された時期は、先行して調査した縄文時代後期の住居跡H-4とH-5との間に直線的に伸びる溝の走行が、断層の崖の走行と同じであり、恵庭a降下軽石の上下における同時異相と理解できることから、恵庭a降下軽石（En-a）よりも後、縄文時代後期の住居（3500年前）よりも前と推定できる。

遺跡周辺の地形・地質については、平成6年度の報告『千歳市キウス5遺跡・キウス7遺跡(2)・ケネフチ8遺跡』北埋調報92の第Ⅱ章に詳述してある。

参考文献 西田 茂・羽坂俊一・小林幸雄 1996「北海道馬追丘陵キウス7遺跡で見つかった断層」『地質ニュース』1996年2月号(第498号) 地質調査所

(3) 周辺の環境

遺跡の営まれた段丘は、高速道路用地になる前は、東半分は開墾され畑地として利用されていたが、その他は周辺の広い範囲が山林であった。畑地は機械によって均平化されており、一部は遺物包含層にまで達していた。山林は南側は、自然林の落葉広葉樹が卓越するが、一部に植林のマツも見られる。北側は、明治時代を中心に炭焼きの原料が伐採されており、二次林主体の雑木林となっている。水辺に向かう斜面の林床で目を引くのは春であれば、黄色のフクジュソウと群落をなす紅紫色のカタクリや白いミヤマエンレイソウ、コゴミ・ゼンマイ・ヤチブキなどである。遺跡の近辺にはオニグルミ、クリ、ヤマクワ、タラノキ、ヤマブドウ、コクワ、ホオノキなどがみられた。林縁の一部には荒れ地をあらわすヨモギ、クマイササ、イタドリ、ヤナギなどが侵入している。なお中の沢はサンショウウオの生息地であったといわれている。

(4) 地図と地名（図I-4・5）

図I-4は国土地理院発行の現在の5万分の1地形図に、遺跡位置や高速道路路線を加筆し縮小したものである。かつてのオサツトーや旧河川の位置など、千歳川中流域と馬追丘陵の状況等が読み取

れる。国指定史跡「キウス周堤墓群」も表示されている。キウス7遺跡周辺の地名は「中央」になっている。1925（大正14）年に着工した農業水利、キウス遺跡群を南北に貫く「南長沼用水」も示されている。

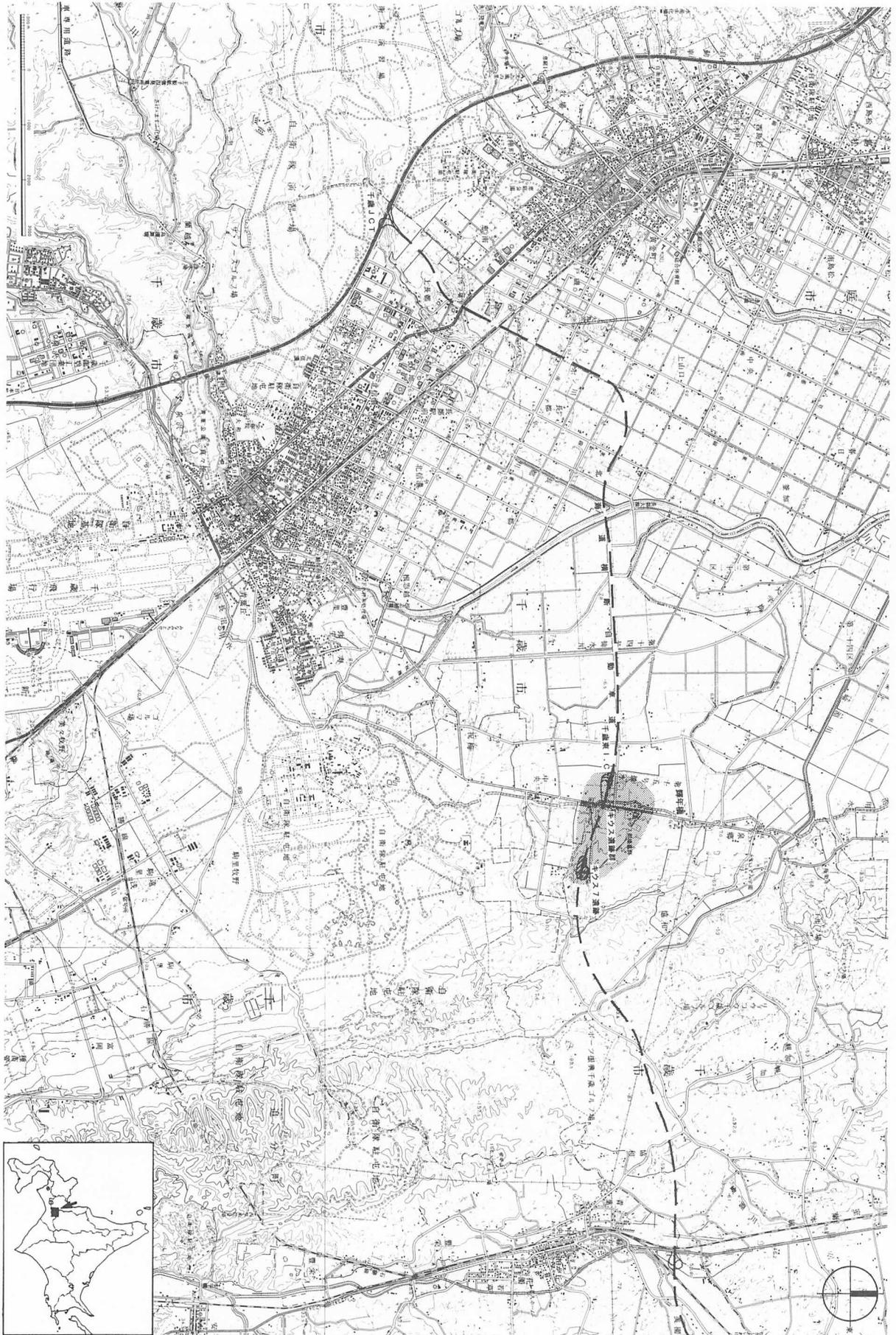
図I-5（上、下）はキウス7遺跡周辺の古い地図である。ともに元図は5万分の1の図である。図I-5上は1896（明治29）年「陸地測量部」製版の「北海道假製五万分一図」『長都』（おさつ）である。これは「假製」という制約もあって、湖岸線や河川に比べて山地形の表示は概略的なものである。キウス7遺跡の近辺も概略的な等高線になっており、地形の細かな屈曲は読み取れない。キウス7遺跡にあたる場所の西側には、丘陵斜面に沿って直線的に南北に延びる小路と道路が表示されている。道路は1891年に完成した由仁と千歳とを結ぶ「由仁道路」の一部である。小路は由仁道路開設以前の踏み分け路なのであろう。かつての由仁道路の一部は、現在国道337号と呼ばれている。この図の地名表記はアイヌ語を片仮名・漢字で写したものばかりである。

図I-5下は1910（明治43）年「陸地測量部」改版の『漁』である。この図には詳細な等高線が入り、地形が読み取れる。キウス7遺跡の近辺は「千歳組合牧場」で「潤葉樹林」が広がっており、「由仁道路」の表示やキウス周堤墓群の表現もみられる。

明治の地図では、キウス7遺跡あたりの地名は、前者が「キウシ」と川の名が示されており、後者では「キウス」と地区名として表されている。『北海道蝦夷語地名解』（永田方正 1891）によると「Kiusi・キウシ＝鬼茅大キ處・川ノ名」とされていることから、現在もこれが地名語源と考えられている。ただ、キウス周堤墓群の600mほど北で国道337号線が「南長沼用水」を渡る橋の名に、“輝年橋”というところがある。読みは“Ki・nen”であるが、“キトシ”とも読み返せる。これは全道各地にある地名「キト・ウシ Kito-us-i＝ギョウジャニンニク・群生する・処」（『北海道の地名』山田秀三 1984 など）からの変化とは考えられないだろうか。[キトシ←キトウシ→キウシ→キウス]のごとく変化するならば、キトウシが地名語源というのもまた一考であろう。

（三浦 正人）

I 調査の概要



(この図は、国土地理院、平成7年発行の五万分の一地形図「恵庭」・「千歳」・「追分」・「早来」に加筆し、100,000/1に縮小複製したものである。)

図I-6 周辺の遺跡

表 I-3 周辺の遺跡一覧

No	遺跡名	種別	時期	発掘調査歴等	文献No等
68	丸 子 山	周堤墓2基・集落跡・環壕ほか	旧石器、縄文早・前・中・後・晩期、統縄文、擦文	1990～1993 千歳市教委	1
76	キウス1号環状土籬	周堤墓	縄文後期	1964 大場利夫・石川徹、1979 国指定史跡	2・3・4・5
77	キウス2号環状土籬	周堤墓	縄文後期	1965 大場利夫・石川徹、1979 国指定史跡	2・3・4・5・6
78	キウス3号環状土籬	周堤墓	縄文後期	1979 国指定史跡	2・3・4・5
79	キウス4号環状土籬	周堤墓	縄文後期	1965 石川徹 外周部 1979 国指定史跡	2・3・4・5・7
80	キウス5号環状土籬	周堤墓	縄文後期	1979 国指定史跡	2・3・4・5
81	キウス6号環状土籬	周堤墓	縄文後期	1979 国指定史跡	4・5
82	キウス7号環状土籬	周堤墓	縄文後期	1950ごろ 河野広道・近藤義雄	4・5・8
83	キウス8号環状土籬	周堤墓	縄文後期	全壊？ 1987道教委試掘確認により1988登載抹消	4・5
84	キウス9号環状土籬	周堤墓	縄文後期	全壊？ 1987道教委試掘確認により1988登載抹消	4・5
85	キウス10号環状土籬	周堤墓	縄文後期	全壊？ 1987道教委試掘確認により1988登載抹消	4・5
86	キウス11号環状土籬	周堤墓	縄文後期	1979 国指定史跡	5・9
87	キウス12号環状土籬	周堤墓	縄文後期	1979 国指定史跡	5・9
88	キウス13号環状土籬	周堤墓	縄文後期		5・9 図範囲の南西枠外
89	キウス1	集落跡・遺物包含地	縄文後・晩期、統縄文	1964 大場利夫・石川徹	4
90	キウス2	周堤墓5～6基	縄文後期		航空写真によるソイルマーク
91	キウス3	遺物包含地	縄文後期		
92	キウス4	周堤墓15基・集落跡ほか	縄文早・後・晩期、擦文	1993・95・96 (跡道埋文センター、1995 千歳市教委	10・11・20・整理中 道埋せ継続調査
93	キウス5	集落跡・墓・低湿地ほか	縄文早・前・中・後・晩期、統縄文、擦文、アイヌ	1994・95・96 (跡道埋文センター 1996 千歳市教委	12・16・18・19・ 整理中 両者とも継続調査
94	キウス川	遺物包含地	縄文後期		
95	中央目黒	遺物包含地	縄文後・晩期		
102	ケネフチのチャシ	チャシ跡	アイヌ文化	1935 原田二郎・近藤義雄	6・13
103	トブシナイ1	遺物包含地	アイヌ文化		
104	トブシナイ2	遺物包含地	縄文中・後期		
105	トブシナイ3	遺物包含地	縄文後・晩期	1922ごろ 河野常吉・福元寅太郎 遺物採集か？	14
106	イカベツ1	遺物包含地	統縄文		
107	イカベツ2	遺物包含地	縄文前・後・晩、擦文		
108	ケネフチ1	遺物包含地	縄文早期		
109	ケネフチ2	遺物包含地	縄文後期		
110	ケネフチ3	遺物包含地	縄文早・晩、擦文		
111	ケネフチ4	遺物包含地	縄文中期		
114	ホロカケネフチ1	遺物包含地	縄文？		
115	ホロカケネフチ2	遺物包含地	縄文		
116	ホロカケネフチ3	遺物包含地	縄文中期		
117	ホロカケネフチ4	遺物包含地	縄文晩期		
118	ホロカケネフチ5	遺物包含地	縄文中期		
119	ホロカケネフチ6	遺物包含地	縄文晩期		
120	ホロカケネフチ7	遺物包含地	縄文早期		
143	吉野流1	遺物包含地	縄文後・晩期		
144	吉野流2	遺物包含地	縄文後・晩期		
242	キウス6	遺物包含地	縄文晩期		
250	ケネフチ5	集落跡ほか	縄文早・中・後期	1995 道文化財保護協会	21 継続調査
261	ケネフチ6	集落跡	縄文早、擦文		
262	ケネフチ7	遺物包含地	縄文晩期		
264	ケネフチ8	遺物包含地	縄文中・晩期	1994 (跡道埋文センター	12
265	キウス7	集落跡・墓ほか	縄文早・中・後・晩期、統縄文、擦文、アイヌ	1993～1996 (跡道埋文センター	12・15・17・ 当報告
269	オサットー1	遺物包含地・墓	縄文早・中・後・晩期、アイヌ	1993 (跡道埋文センター	15

I 調査の概要

[表 I-3 の文献]

- 1 千歳市教委 1994 『丸子山遺跡における考古学的調査』市文調報XIX
 - 2 河野常吉 1918 「キウスの遺跡」『北海道史付録地図』
 - 3 河野常吉 1924 「キウスのチャン」『北海道史蹟名勝天然記念物調査報告書』
 - 4 千歳市教委 1967 『千歳遺跡』
 - 5 大谷敏三 1978 「環状土籬」について『考古学ジャーナル』156
 - 6 原田二郎 1937 「北海道千歳村のチャンに就て」『軍事史研究』2-3
 - 7 石川 徹 1969 「北海道千歳市キウス環状土籬外縁部墳墓について」『北海道考古学』5
 - 8 長見義三 1983 「文化財」『増補千歳市史』
 - 9 千歳市教委 1979 『千歳市における埋蔵文化財(上)』市文調報V
 - 10 (財)北海道埋蔵文化財センター 1994 『千歳市キウス4遺跡』(事前発掘調査概報)
 - 11 皆川洋一 1994 「北海道千歳市キウス4遺跡の詳細試掘調査」『考古学ジャーナル』376
 - 12 (財)北海道埋蔵文化財センター 1995 『千歳市キウス5遺跡・キウス7遺跡(2)・ケネフチ8遺跡』北埋調報92
 - 13 乾芳宏・鈴木邦輝・園部真幸・長谷部一弘・福田友之 1977 「千歳川流域のチャンについて」『北海道の文化』38
 - 14 宇田川洋校註 1981 『河野常吉ノート 考古篇1』P164・165 脚註に「長沼町ウレロッチ川左岸遺跡付近」とあるも、「千歳村字ケヌフチ」の標記や地形等からトプシナイ3遺跡の可能性が高いとおもわれる。玉の図があり、その写真が宇田川洋編 1984 『河野広道ノート 考古篇5』P200に掲載されている。
 - 15 (財)北海道埋蔵文化財センター 1994 『千歳市オサットー1遺跡・キウス7遺跡』北埋調報90
 - 16 (財)北海道埋蔵文化財センター 1996 『千歳市キウス5遺跡B地区(2)』北埋調報104
 - 17 (財)北海道埋蔵文化財センター 1996 『千歳市キウス7遺跡(3)』北埋調報105
 - 18 (財)北海道埋蔵文化財センター 1997 『千歳市キウス5遺跡(3)A地区』北埋調報115
 - 19 (財)北海道埋蔵文化財センター 1997 『千歳市キウス5遺跡(4)B地区・C地区』北埋調報116
 - 20 (財)北海道埋蔵文化財センター 1997 『千歳市キウス4遺跡』北埋調報119
 - 21 北海道文化財保護協会 1996 『千歳市ポンオサツ遺跡・ケネフチ5遺跡』北文保調報2
- * 千歳市教委 1979 『千歳市における埋蔵文化財(上)』市文調報V
- * 千歳市教委 1994 『千歳市埋蔵文化財包蔵地分布図』
- * 北海道教育委員会生涯学習部文化課 埋蔵文化財包蔵地カード
遺跡No.は包蔵地カードの登載番号による

Ⅱ 調査の方法、遺物の分類

1. 調査の方法（図Ⅱ-1・2）

発掘区の設定 現地調査の基本図は、北海道横断自動車道工事予定図1,000分の1を使用した。発掘区の設定は、平成5年度に調査に着手するにあたり、以下のようにおこなわれた。まず、工事予定中央線のSTA143・STA143+40をそれぞれM-100・M-110とする。これを基軸線として4mの方眼を設定する。この4mの方眼は、北西端の交点のアルファベットと数字の組み合わせで呼称される（例：B-74）。さらにこの4mの方眼は2m四方に分割されて小発掘区となり、反時計まわりに、北西端からa、b、c、dと呼ぶ（例：B-74-b）。

今年度の調査は、昨年度調査の延長であるので、従前の方眼に相当するものを延長して設定した。この方眼の平面直角座標は、第XⅡ系でつぎの通りである。

M-45：X=-124739.028、Y=-42449.933 M-70：X=-124764.172、Y=-42353.197

R-45：X=-124758.269、Y=-42454.960 R-70：X=-124783.514、Y=-42358.237

今年度発掘区の設定と修正

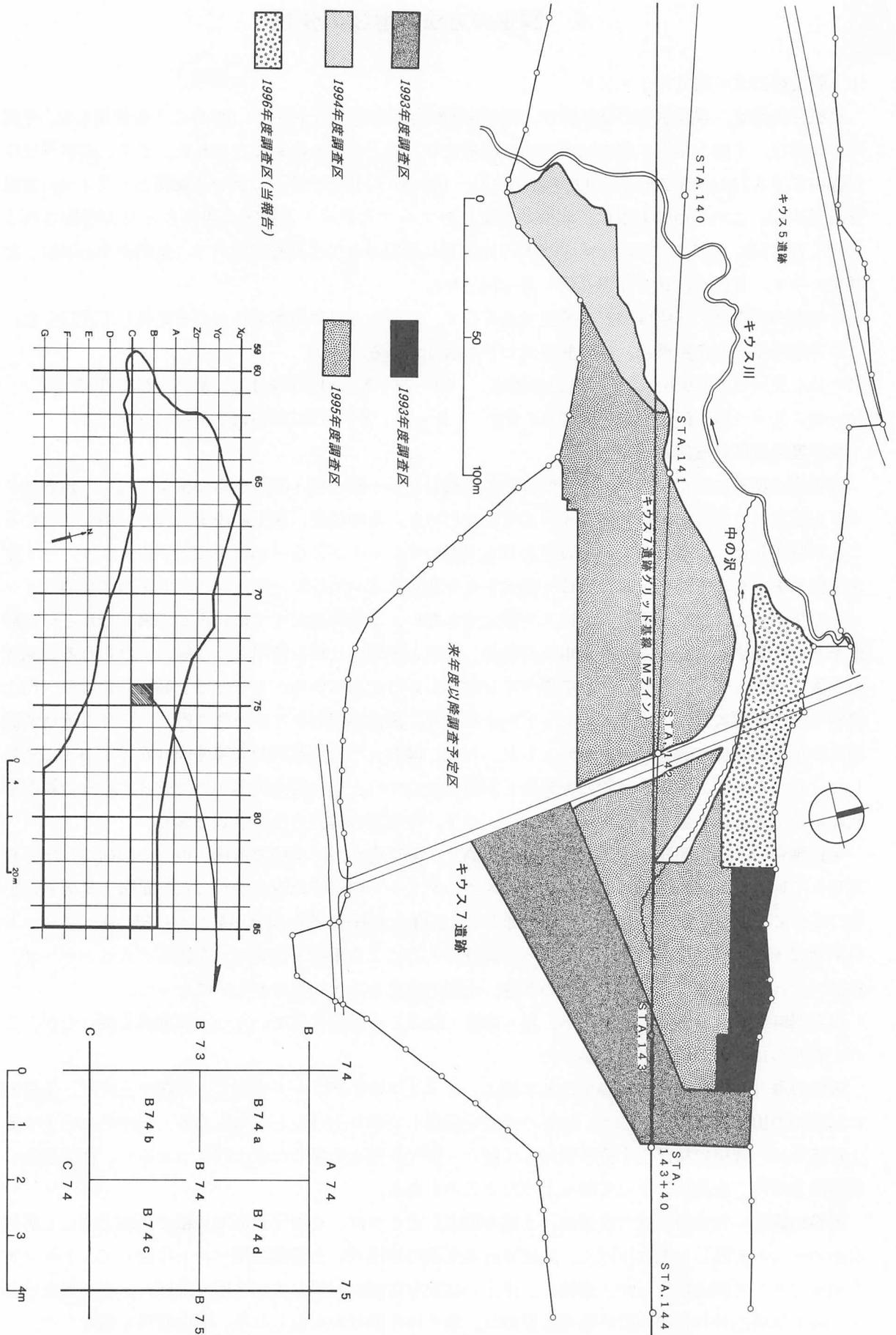
今年度の調査に当たっては、昨年度打設して残したG-83・84・85の3本の杭を使用して調査グリッドを設定し、北側の工事境界ラインまで杭を打った。その結果、図上の設定とはズレが生じていることが判明した。すなわち、図上設定よりも実際のグリッドが、G-85杭を軸とするように3～4度北東側にあったのである。また、G-85杭もやや北東にズレていた。原因は、①本来の基準Mラインとその杭がすでに本線車道工事下に入り復元できない、②昨年度もすでに修正して報告したという経緯がある、③すぐ脇を通る工事用車両の振動、④ひと冬置いた杭を使用した、等が上げられる。調査の実施に当たっては、北側の工事境界ラインは正しいのであるから、そこまでを発掘対象とし、出土遺物や検出遺構にはその通りのグリッドNo.を与えた。図は実際のラインで作り直し、全体の遺構位置図は昨年度の図にこれをはめこむ形とした。ただ、図Ⅱ-2の年度別調査範囲図は昨年度のまま利用した。したがって、昨年度までの報告書と本書においては、全体図の幾葉かは平成8年度分の範囲形状に若干の違いがあることを断っておく。以下、今年度の調査方法を示しておく。

発掘調査の進行と手順 細長い調査範囲であり、昨年度からの継続で遺構・遺物の傾向がほぼとらえられているので、東側から順次的に4×4mグリッドの調査に取りかかった。Ⅲ層とⅤ層とはⅣ層(Ta-c)によって区別できるので分層発掘とし、Ⅲ層で遺構・遺物の調査が終わり次第、同一グリッドのⅤ層以下の調査に手をつけた。これらの調査は人力による手掘り作業で、発掘区ごとにスコップ、移植ゴテ、竹ヘラなどを用いて遺物の多寡、土層の変化をみきわめながらおこなった。

旧石器時代の遺物確認調査のため、Ⅶ・Ⅷ層(En-a)も手掘り作業でいくつか試掘溝を掘ったが、この土層からは遺物が検出されなかった。

遺物の取り上げ 包含層調査では基本的に、2×2mの小グリッドで層ごとに取り上げた。部分的には遺物の出土の状況に応じて、位置や土層を記録して取り上げたところもある。集中的に出土する土器破片は、破損の状況を十分に検討して接合・復元作業を考慮した取上げにつとめた。微細遺物の密集部分では、水洗いによって取り上げたところもある。

遺構の調査 包含層調査で住居跡、土壌を推定したときは、その平面形の長軸や短軸方向に土層観察用のベルトを残して掘り下げた。想定される床面の検出は、土層観察用ベルトに接して小トレンチを掘るなどして慎重に行った。遺物は、出土の状況を詳細に記録してから取り上げた。平面形をおさえた後も遺構内外の付属施設の精査に努めた。焼土は平面形を記録した後、断面観察を記録した。



図II-1 発掘調査区の位置・設定・表示

遺物整理の方法 出土した遺物は、野外作業と並行して現地で水洗・注記作業をおこなった。小片あるいは微細なものを除いて、遺物には発掘区・出土層・取上げ番号を注記した。遺物収集帳点検・補正（遺物台帳作成）、大まかな遺物の分類の後、室内整理作業で、土器の接合・復元作業、石器や黒曜石剥片類の接合、土器・石器の実測・製図、集計および種々の記録類の整理をおこなった。

2. 土層の区分（図Ⅱ-2）

基本的に昨年度までの報告、北埋調報第90集・92集・105集のキウス7遺跡報告と同じである。そのため図は、図Ⅱ-2の土層柱状模式図のみを掲載した。遺構検出及び、遺物包含層は、Ⅳ層樽前c降下軽石(Ta-c)の上のⅢ層と、下のⅤ層の黒色土層並びにⅥ層漸移層である。千歳周辺で確認される樽前b降下軽石(Ta-b)は検出されていない。また、層状には検出されなかったが、樽前d降下軽石(Ta-d)はⅤ層の下位からⅥ層にかけて粒状に点在し、確認されている。

今年度の土層で特徴的なことは、中央部を掘削して貫通する道路より西側、およそ72ラインより西側の地区においては、Ⅲ層黒色土層の層厚が東側と比べて薄く、Ⅴ層の黒色土は未発達な部分が多いことである。とくにⅤ層は、西に行くに従って褐色土あるいは濁黄褐色土としてあらわれ、縄文後期の遺物や焼土が検出される。この地点で、縄文時代に大きな木の成育がなかったことが、Ⅴ層の腐植土化を妨げた一因と考えられる。西側に大きな風倒木痕がないことがこれを物語っている。

以下、基本層序を簡単に説明する。

I層：黒褐～灰褐色の表土層。

II層：灰白色、樽前a降下軽石(Ta-a)。層厚50cmほど。

III層：黒色腐植土層。粘性弱く乾燥しやすい。層厚は5～20cm。新千歳空港用地内での調査報告にある、第0黒色土層と、第I黒色土層に相当する。アイヌ文化期とそれ以前縄文時代晩期までの遺物包含層である。今年度は、擦文土器、続縄文時代北大式土器、後北C₂D式土器、晩期タンネトウL式土器やそれに伴う石器などの遺物や焼土を検出。

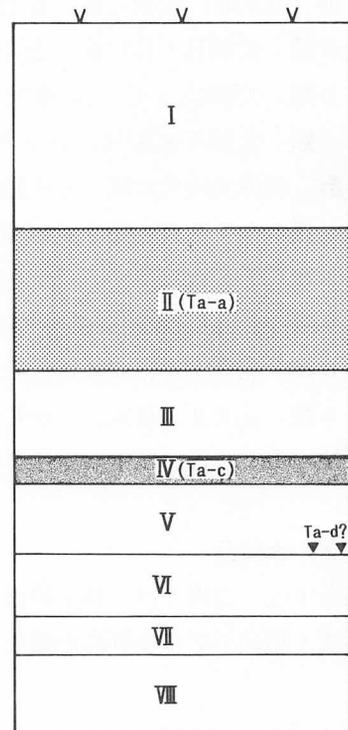
IV層：茶褐色、樽前c降下軽石(Ta-c)。層厚は10～15cmで上下とも層界の不明瞭な部分もある。晩期の遺物が混入。

V層：黒色～褐色腐植土層。細粒で粘性強い。層厚は10～30cm。新千歳空港用地内での調査報告にある、第II黒色土層に相当する。縄文時代晩期以前、早期までの遺物包含層である。タンネトウL式土器、後期鮭潤式、手稲式、早期東釧路IV式土器やそれに伴う石器・石製品などの遺物が出土している。遺構は後期の住居跡・土壇・焼土、晩期の焼土を検出。

VI層：暗褐～黄褐色土層。Ⅴ層とⅦ層の漸移層で層界は不明瞭。早期の遺物を包む可能性がある。

VII層：黄褐～明黄褐色、恵庭a降下軽石(En-a)の風化ローム層。

VIII層：明黄褐色、恵庭a降下軽石(En-a)。 (三浦)



図Ⅱ-2 土層柱状模式図

3. 土器・土製品の分類

(1) 土器

I群 縄文時代早期に属する土器群を本群とする。

a類：貝殻腹縁圧痕文、条痕文のある土器群。今年度の調査では出土していない。

b類：縄文、撚糸文、絡条体圧痕文、組紐圧痕文、貼付文のある土器群。

b 1類：東釧路Ⅱ・Ⅲ式に相当するもの。今年度の調査では出土していない。

b 2類：コッタロ式に相当するもの。

b 3類：中茶路式に相当するもの。今年度の調査では出土していない。

b 4類：東釧路Ⅳ式に相当するもの。

Ⅱ群 縄文時代前期に属する土器群を本群とする。今年度の調査では出土していない。

a類：胎土に繊維を含む、厚手で縄文の施された丸底・尖底の土器群。

b類：円筒土器下層式、大麻Ⅴ式に相当するもの。

Ⅲ群 縄文時代中期に属する土器群を本群とする。今年度の調査では出土していない。

a類：円筒土器上層式に相当するもの。

b類：a類以外のもの。

b 1類：天神山式に相当するもの。

b 2類：柏木川式に相当するもの。

b 3類：北筒式（トコロ6類）、ノダップⅡ式、煉瓦台式に相当するもの。

Ⅳ群 縄文時代後期に属する土器群を本群とする。

a類：前葉の土器。余市式、タブコブ式、入江式に相当するもの。

b類：中葉の土器。船泊上層式、手稻式、鮎澗式、エリモB式に相当するもの。

c類：後葉の土器。堂林式、三ツ谷式、御殿山式に相当するもの。

Ⅴ群 縄文時代晩期に属する土器群を本群とする。

a類：大洞B・BC式、上ノ国式に相当するもの。今年度の調査では出土していない。

b類：大洞C₁・C₂式に相当するもの。

c類：大洞A・A'式、タンネトウL式、弊舞式、緑ヶ岡式に相当するもの。

Ⅵ群 続縄文時代に属する土器群を本群とする。

a類：大狩部式・恵山式に相当するもの。

b類：後北A・B・C₁式、天王山式・赤穴式に相当するもの。今年度の調査では出土していない。

c類：後北C₂D式に相当するもの。

d類：北大Ⅰ式、5世紀代の土師・須恵器に相当するもの。今年度の調査では出土していない。

e類：北大Ⅱ・Ⅲ式、6世紀代の土師・須恵器に相当するもの。

Ⅶ群 擦文時代に属する土器群を本群とする。

(2) 土製品

今年度の遺物では、縄文時代のものには、土器片を利用した再生土製円盤、オロシガネ状土製品、形状・用途不明の土製品の破片などがある。

4. 石器等の分類

石器等の分類については、I群からIII群までが剝片石器、IV群からIX群までが礫石器群とし、大部分の定型的な石器については記号を用いて分類した。分類記号を用いたもののほかにRフレイク、Uフレイク、フレイク、礫、石製品がある。石製品には異形石器・玉類などがある。今回の調査では石鋸は出土していない。

< I群 > 石鏃・石槍類

A類 石鏃

- | | |
|----------------------|----------|
| 1：石刃鏃 | 2：長身のもの |
| 3：薄身のもの | 4：三角形のもの |
| a：柳葉形のもの | a：凹基のもの |
| b：五角形のもの | b：平基のもの |
| 5：木の葉のもの | 6：菱形のもの |
| 7：有茎のもの | |
| 8：破片（細分の困難な破片）・未製品など | |

B類 石槍・両面加工のナイフ

- | | |
|----------------------|----------------|
| 1：茎を持つもの | 2：茎が明瞭にみられないもの |
| 8：破片（細分の困難な破片）・未製品など | |

< II群 > 石錐

A類 石錐

- | | |
|-----------------------|----------------------|
| 1：刺突部を作り出したもの | |
| 2：棒状のものにつまみ部を作り出されたもの | |
| 3：棒状のもの | 8：破片（細分の困難な破片）・未製品など |

< III群 > つまみ付ナイフ・スクレイパー・楔形石器・石核

A類 つまみ付ナイフ

- | |
|----------------------------|
| 1：片面全面加工のもの（裏面の側縁に刃部をもつもの） |
| 2：片面全面加工のもの |
| 3：片面周縁加工のもの |
| 4：両面加工のもの |
| 8：破片（細分の困難な破片）・未製品など |

B類 スクレイパー

- | |
|-----------------------------|
| 1：石べらと称されるもの |
| 2：円形のもの |
| 3：主に縦長で下端部に刃部が設けられているもの |
| 4：素材の縁辺にえぐりを入れ、それを刃部としているもの |
| 5：縦長で、側縁に刃部が設けられているもの |
| 6：素材の形状を大きく変えていないもの |
| 8：破片（細分の困難な破片）・未製品など |

C類 楔形石器

D類 石核

II 調査の方法、遺物の分類

<IV群> 石斧類

A類 石斧

- 1：擦り切り技法によって製作されたもの
- 2：部分的に磨かれているもの
- 3：全面磨製のもの
- 8：破片（細分の困難な破片）・未製品など

B類 丸のみ型石斧

C類 擦り切り残片

<V群> たたき石

A類 たたき石

- 1：棒状礫を素材としたもの
- 2：扁平礫を素材としたもの
- 3：円礫を素材としたもの
- 4：くぼみ石と称されるもの
- 8：破片（細分の困難な破片）・未製品など

<VI群> すり石

A類 すり石

- 1：断面が三角形の礫の稜をすったもの
- 2：扁平礫を素材としたもの
- 3：扁平礫を半円状に打ち欠き弦をすったもの
- 4：円礫を素材としたもの
- 8：破片（細分の困難な破片）・未製品など

<VII群> 台石・石皿

A類 台石・石皿

<VIII群> 石鋸、砥石類

A類 石鋸

- 1：石鋸
- 8：破片（細分の困難な破片）・未製品など

B類 砥石

- 1：研磨面に溝があるもの
- 2：板状のもの
- 3：角柱状のもの
- 8：破片（細分の困難な破片）・未製品など

<IX群> 石錘

A類 石錘

- 1：四カ所の打ち欠きをもつもの
- 2：長軸の両端に打ち欠きをもつもの
- 3：短軸の両端に打ち欠きをもつもの
- 8：破片（細分の困難な破片）・未製品など

(倉橋 直孝)

Ⅲ 遺構とその遺物

1. 概要

報告する遺構は今年度調査したもので、Ⅲ層の焼土4基(UF-72~75)、V層の住居跡4軒(H-24~27)・土壇13基(LP-65~77)・焼土78基(LF-87・176~252)である。LF-87は半分を昨年度調査したものの継続調査である。昨年度まではⅢ層とV層の遺構を別章で報告していたが、今年度はⅢ層の遺構が焼土4基のみなので、まとめて報告することとした。

既報告分とあわせると、Ⅲ層の焼土は75基、V層の住居跡27軒・土壇は77基・焼土は252基となる。既報告分を含めた全遺構は、図I-1に図示してある。

報告分の住居跡(H)と土壇(LP)は縄文時代後期に営まれたものである。焼土(LF)は縄文時代後期を主とするが、晩期に営まれた大型のものもある。焼土(UF)は晩期かそれ以降の時期の所産である。

住居跡のうちH-24は、柱穴と炉・焼土を検出した平地住居、H-25は円形の竪穴住居、H-26・27は小型の長円形の竪穴住居である。土壇は、やや大型のLP-75と76を除くといずれも、直径1m前後の円形を呈する。焼土は地面がしっかり焼けて遺物が伴うものと、焼けた土が動かされた様な状態のものがある。

遺跡全体でみた縄文時代後期の住居跡の分布は、昨年度までの調査で、①：西側の標高40mより高い平坦面、②：中の沢兩岸の傾斜面、③：中の沢南側段丘上平坦面の3グループに分けたが、今年度調査分は②群に属する。

土壇はLP-74と75以外は住居跡の近辺に位置している。特に南東部に対になるように位置する深さ70cm前後のものは墓壇かと思われる。

今年度の焼土のありかたは、ア：標高40.8~38.3mの東側斜面に位置するグループ、イ：調査範囲の中央部で中の沢に面した平坦面にあるグループ、ウ：西側の尾根上にあるグループの3群ととらえられる。ア群は西LF-242から東LF-201まで、イ群は西LF-224から東LF-219まで、ウ群は西LF-197から東LF-176までとできよう。

遺跡の広がりや道路用地範囲を越えた北側にも及んでおり、遺構分布も北側へ続くものと考えられる。特に焼土のウ群やLP-75・77は、キウス川本流の上流部に面して展開する遺構グループと考えられる。

(三浦)

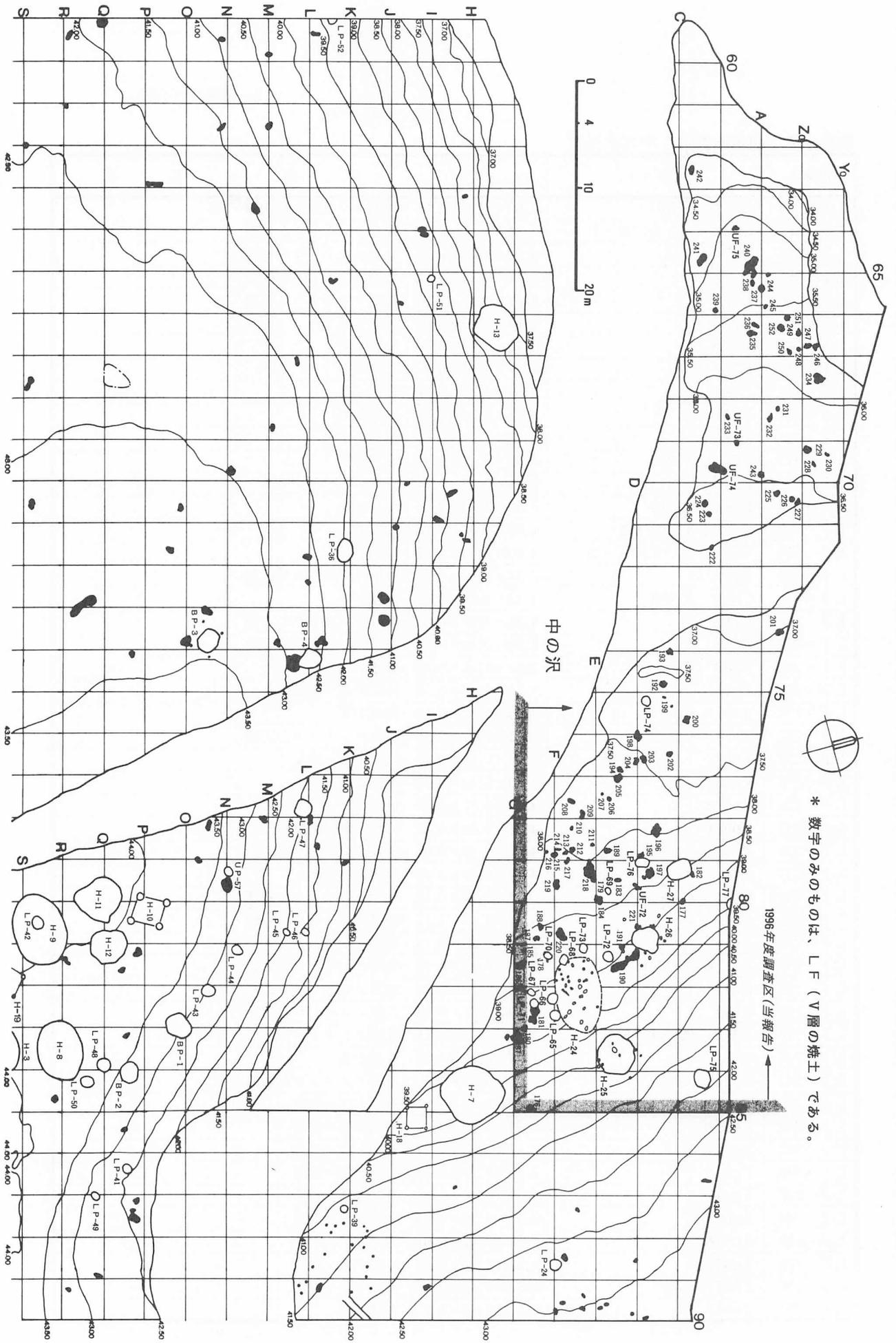
Ⅲ 遺構とその遺物

表Ⅲ-1 遺構一覧(1) 平成8年度

遺構名	グリッド	規模 長径×短径×深さm()推定	時 期	備 考
H-24	D81・82、E81~83	6.57×3.84×—	後期中葉手稲式期	平地
H-25	C83、D82・83	4.15×3.62×0.37	後期中葉手稲式期	
H-26	C80・81、D80・81	2.67×2.04×0.60	後期中葉手稲式期	
H-27	B78・79、C78・79	2.44×1.95×0.51	後期中葉手稲式期	
LP-65	E82c、F82d	1.00×0.89×0.74	後期中葉手稲式期	
LP-66	E82b、F82a	0.96×0.94×0.55	後期中葉手稲式期	
LP-67	F82a・b	0.80×0.63×0.16	後期中葉手稲式期	
LP-68	E81a・b	0.83×0.74×0.46	後期中葉手稲式期	
LP-69	D79c	0.60×0.45×0.12	後期中葉手稲式期	
LP-70	F81a	0.70×0.58×0.18	後期中葉手稲式期	上にLF-178
LP-71	F82b・c	0.74×0.71×0.27	後期中葉手稲式期	
LP-72	D81b	0.90×0.83×0.45	後期中葉手稲式期	
LP-73	E80d、E81a	0.66×0.64×0.30	後期中葉手稲式期	
LP-74	C75b	0.87×0.86×0.24	後期中葉手稲式期	
LP-75	B83c・d、B84a・b	1.88×1.58×0.62	後期中葉手稲式期	
LP-76	C78c、C79b、D78d、D79a	1.22×0.68×0.26	後期中葉手稲式期	
LP-77	A79c、A80b	(0.90)×(0.82)×0.24	後期中葉手稲式期	
UF-72	C79c、D79d	0.73×0.46×0.09	続縄文～擦文	
UF-73	A69b	0.42×0.23×0.07	続縄文～擦文	
UF-74	A69c、B69d	0.76×0.40×0.11	続縄文～擦文	
UF-75	A63c	0.47×0.39×0.03	続縄文～擦文	
LF-87	F83b、G83a	0.70×0.61×0.13	晩期タンネットウL式期	昨年の続き・時期変更
LF-176	F84c・d	0.84×0.36×0.09	後期中葉	
LF-177	B79c、B80b	0.42×0.38×0.05	後期中葉	
LF-178	F81a	1.01×0.24×0.07	後期中葉	LP-70の上
LF-179	D79c、D80b、E79d	0.70×0.54×0.11	後期中葉	
LF-180	F82c、F83b	0.38×0.22×0.06	後期中葉	
LF-181	F82a・b・c・d	0.64×0.40×0.12	後期中葉?	
LF-182	B79b	0.69×0.41×0.16	早期?	
LF-183	D79a・b	0.52×0.31×0.08	後期中葉?	
LF-184	D79c、D80b、E79d	0.90×0.53×0.18	後期中葉	掘り込み・周辺小ピット
LF-185	F81b	0.25×0.13×0.06	後期中葉	
LF-186	F81b・c	0.91×0.52×0.11	晩期タンネットウL式期?	
LF-187	F80c・d	0.66×0.31×0.13	後期中葉	
LF-188	F80d	0.66×0.42×0.11	後期中葉	
LF-189	D78c	0.65×0.54×0.14	後期中葉	
LF-190	C81b、D81a・b・c・d	3.25×0.48×0.13	晩期タンネットウL式期	
LF-191	D81a	0.52×0.44×0.14	晩期タンネットウL式期	
LF-192	C74d	0.82×0.58×0.14	後期中葉	
LF-193	C73d、C74a	0.62×0.52×0.05	後期中葉	
LF-194	D76d	0.59×0.44×0.11	晩期タンネットウL式期	
LF-195	C78c	0.67×0.52×0.05	後期中葉	
LF-196	C78a・b	1.10×0.68×0.11	晩期タンネットウL式期	
LF-197	C79b	1.24×0.61×0.07	後期中葉	
LF-198	C75c、C76b、D75d、D76a	0.94×0.48×0.05	後期堂林式期	
LF-199	C75a	0.85×0.29×0.08	後期中葉?	
LF-200	B75c	0.76×0.53×0.08	後期中葉?	
LF-201	Z ₀ 73a・b・c・d	0.54×0.34×0.13	晩期タンネットウL式期	
LF-202	C76a・d	0.48×0.38×0.12	晩期タンネットウL式期	
LF-203	C76c	0.66×0.44×0.08	晩期タンネットウL式期	

表Ⅲ-2 遺構一覧(2) 平成8年度

遺構名	グリッド	規模		時 期	備 考
		長径×短径×深さm()推定			
LF-204	C76c、D76d	0.66×0.28×0.06		晩期タンネットウL式期	
LF-205	D76c・d、D77a・b	0.84×0.66×0.20		晩期タンネットウL式期	
LF-206	D77c	0.42×0.28×0.06		晩期タンネットウL式期	
LF-207	D77b	0.17×0.14×0.03		晩期タンネットウL式期	
LF-208	E77c	0.70×0.47×0.07		晩期タンネットウL式期	
LF-209	E77d	0.84×0.25×0.09		後期中葉?	
LF-210	E78b	0.41×0.22×0.03		後期中葉	
LF-211	E78d	0.37×0.34×0.04		後期中葉	
LF-212	E78c	0.50×0.41×0.06		後期中葉	
LF-213	E78c	0.41×0.30×0.07		後期中葉	
LF-214	E78c	0.48×0.17×0.08		後期中葉	
LF-215	E78c、F78d	0.58×0.43×0.10		後期中葉	
LF-216	F78d	0.24×0.13×0.03		後期中葉	
LF-217	E78c、E79b	0.49×0.34×0.10		後期中葉	
LF-218	E78d、E79a・d	1.89×0.82×0.05		後期中葉	
LF-219	E79b・c、F79a・d	0.92×0.52×0.15		後期中葉	
LF-220	E80c	1.16×0.67×0.10		晩期タンネットウL式期	
LF-221	C80c、D80d	0.42×0.23×0.11		後期中葉	
LF-222	B71d	0.36×0.20×0.03		晩期タンネットウL式期	
LF-223	B70d	0.48×0.38×0.12		晩期タンネットウL式期	
LF-224	B70a・d	0.54×0.46×0.10		早期?	
LF-225	Zo70b	0.52×0.46×0.12		後期中葉～晩期	
LF-226	Zo70a・d	0.54×0.48×0.10		後期中葉	
LF-227	Zo70a・d	0.54×0.37×0.16		晩期タンネットウL式期	
LF-228	Yo69c	0.44×0.18×0.13		後期中葉～晩期	
LF-229	Yo69b	0.80×0.54×0.11		後期中葉～晩期	
LF-230	Yo69a	0.38×0.11×0.05		後期中葉～晩期	
LF-231	Zo68b	0.46×0.44×0.07		後期中葉～晩期	
LF-232	Zo68b・c	0.46×0.43×0.06		晩期タンネットウL式期	
LF-233	A68b・c	0.50×0.30×0.06		後期堂林式期	
LF-234	Yo67b・c・d	1.12×0.76×0.17		晩期タンネットウL式期	
LF-235	A66a・d	0.84×0.44×0.17		晩期タンネットウL式期	
LF-236	A66a	0.88×0.28×0.14		晩期タンネットウL式期	
LF-237	Zo65b、A65a	0.62×0.52×0.15		晩期タンネットウL式期	
LF-238	A65a	0.50×0.28×0.12		晩期タンネットウL式期	
LF-239	B65d	0.53×0.51×0.08		晩期タンネットウL式期	
LF-240	A64d、A65a	2.17×1.18×0.18		晩期タンネットウL式期	
LF-241	B64c・d	1.05×0.50×0.22		後期中葉	
LF-242	B62b・c	0.98×0.40×0.17		晩期タンネットウL式期	
LF-243	Zo69c、A69d	0.48×0.46×0.07		後期中葉～晩期	
LF-244	Zo65b	0.42×0.33×0.06		後期中葉～晩期	
LF-245	Zo65c	0.40×0.28×0.11		後期中葉～晩期	
LF-246	Yo66c	0.63×0.28×0.11		後期中葉～晩期	
LF-247	Yo66c	0.59×0.36×0.07		後期中葉～晩期	
LF-248	Zo66d	0.34×0.19×0.04		後期中葉～晩期	
LF-249	Zo66a	1.58×0.47×0.07		後期中葉～晩期	
LF-250	Zo66d	0.64×0.28×0.07		後期中葉～晩期	
LF-251	Zo66a・d	0.54×0.45×0.16		後期中葉～晩期	
LF-252	Zo66a・b	0.72×0.66×0.17		後期中葉	



図Ⅲ-1 中の沢兩岸の遺構位置図

2. 住居跡

今年度の調査で検出された住居跡は4軒で、時期はすべて縄文時代後期中葉手稲式のものである。H-24、26の覆土から出土した土器の特徴は器形、文様構成で手稲式の中でも古い要素を持つ。H-24は、人為的な掘り込みを検出することができず、自然の凹みを利用して作られたものである。中央に炉跡と考えられる焼土を検出した。H-25は、東から西に下りの傾斜を持つ緩やかな斜面の方の部分に形成されている。覆土の中層に厚さ5cm~10cm程の焼土が広がり、その下位の部分に住居の屋根の部分に詰まった恵庭aのローム質土の崩落したものが堆積している。覆土の焼土が形成された時期は、住居が焼失したときと、住居が廃棄され埋没した直後の2通りが考えられるが、層位の断面観察、平面観察から確定はできなかった。しかし、埋没の状況から大きな時間差があったものではなく、住居跡と同時期の縄文時代後期中葉のものであると考える。住居跡の東側部分にはベンチ状の構造が検出された。さらに東側には風倒木跡の凹みがあり、人為的に若干改変しているように観察された。住居の排水溝として利用していた可能性がある。昨年度のH-4とH-5の間にも同様に、断層の跡を住居の排水溝と考えられるものが検出されている。H-26は覆土下層に焼土が検出され、それを上下するように手稲式の一括土器が検出された。その下面と側面に汚れたⅦ層が堆積しており、その遺構が廃棄されたあとに焼土が流れ込んだものとする。遺構の内部には柱穴状小ピットは外に数個可能性のあるピットを検出した。遺構の北東側部分に出入り口と考えられる黒色土の落ち込みを確認した。H-27は覆土のほとんどが黒色土で構成されており、その上部から手稲式の壺の上半部が出土した。出土土器は住居跡が埋没後その位置に流れ込んだものであり、遺構に伴うものではない。(倉橋)

H-24 (図Ⅲ-2、3 表Ⅲ-3、7 図版Ⅲ-1、2)

位置：D81・82、E81~83

規模：6.57m×3.84m×-m

調査：D81・82、E81~83の包含層調査中、Ⅴ層中位で焼土の広がりを検出した。竪穴住居跡を想定し、グリットの境界を土層観察用のベルトを残し、壁面、床面の確認を行った。その結果、掘り込み、壁面を確認することができなかったが、床面と考えられるⅦ層の面で、柱穴が検出されたことから、平地形の住居跡とした。

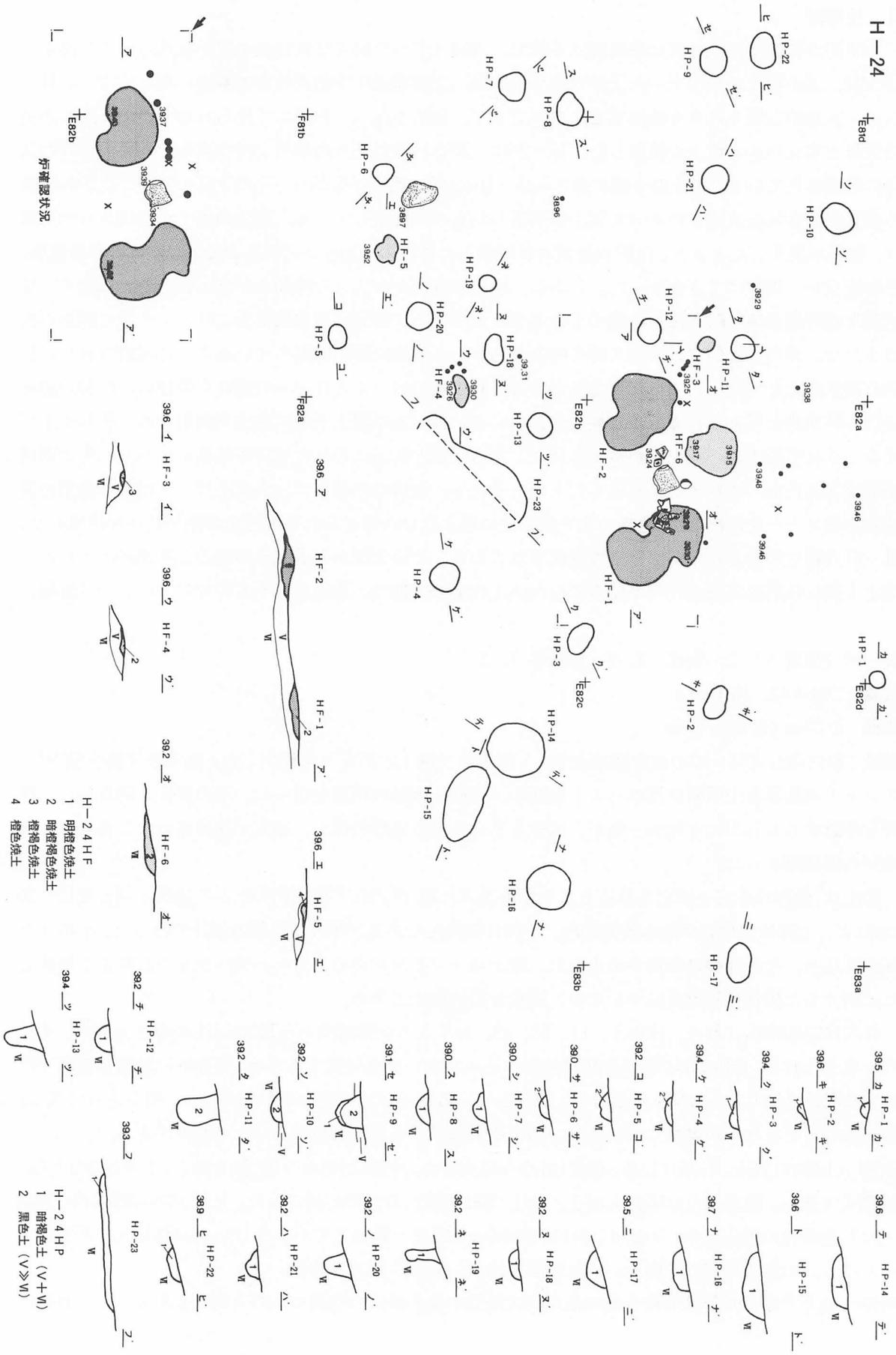
焼土は、住居の中央と推定される場所で検出された。厚さはⅤ層中位相当からⅦ層上面まで15~20cmほど、上部は炭化物が絡み暗橙褐色、下部は橙褐色である。作図は下部の部分で行った。土器片が挟まり込み、その周囲に石皿が出土した。焼土はサンプリングし、フローテーション法により処理した。出土した炭化植物遺体については、現在分析依頼中である。

柱穴は23個検出された。HP-9、11、13、19、20の5本が確認面から10cm以上の深さを持ち、主柱穴と考えられる。HP-23は、竪穴住居跡の掘り込みがないかを確認するため、部分的にⅦ層を掘り下げている際に検出した。欠損した部分は、残存している部分とほぼ対称の形であった。掘り込みは浅く、黒褐色のしまった土が埋積している。いわゆる灰床炉のようなものであった可能性がある。

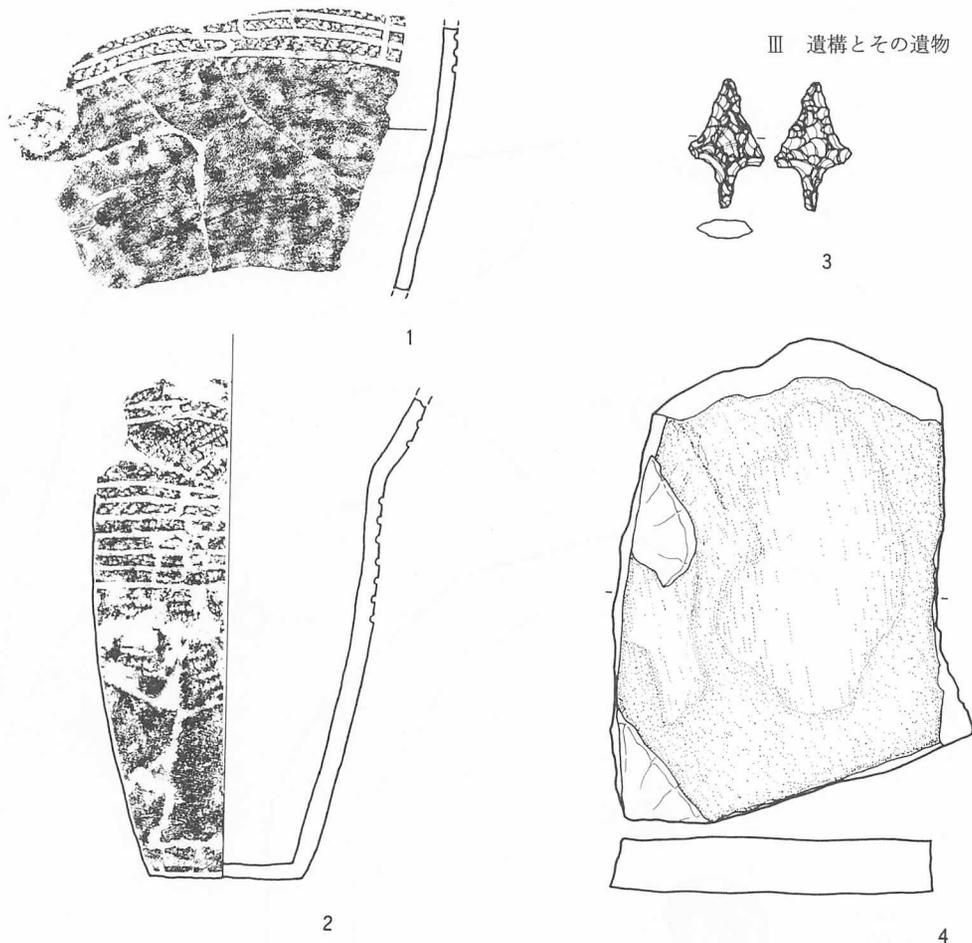
遺物：土器は121点、石器は10点、総数131点が出土した。土器は1点のⅤ群c類を除き、Ⅳ群b類の手稲・鈍潤式である。図Ⅲ-3-1は床直上出土とE81、E82区出土の土器が接合した。Ⅳ群b類の深鉢。2は住居上のⅤ層相当の黒色土からの出土。2はⅣ群b類の口頸部~底部までが接合した。3は住居上の黒色土からの出土。石鏃で石質は黒曜石。4は床直上出土。石皿。石質は砂岩。

時期：出土土器よりⅣ群b類土器の縄文時代後期中葉手稲式の時期のものと考えられる。(倉橋)

III 遺構とその遺物



図III-2 H-24



図Ⅲ-3 H-24出土の遺物

H-25 (図Ⅲ-4、5、6 表Ⅲ-3 図版Ⅲ-3、4)

位置：C83、D82・83

規模：4.15/3.52×3.62/3.52×0.37m

調査：C83、D82・83の包含層調査中に、V層上面で焼土の広がりを検出した。グリットの境界を土層観察用のベルトに残し、順次掘り下げた。焼土はV層相当層に、その下位はⅦ層主体の崩落土が堆積していた。トレンチ調査により、床面、壁面の検出を行ったところ、V層中から掘り込まれ、Ⅶ層を掘り込んで構築された竪穴住居跡と確認した。

覆土3、7層からは、丸太状、角形などの炭化材が出土した。覆土中層のⅦ層主体の覆土3層は、住居の外側の詰め土が崩落したものと考える。住居跡の東側は、ベンチ状の段差を持ち、さらに東側の上部には風倒木痕を改変し、排水路とした可能性のあるものを確認した。

柱穴は13個検出された。全体に浅く、規則的な配列を持たず、確認面から15cmを越えるものはない。

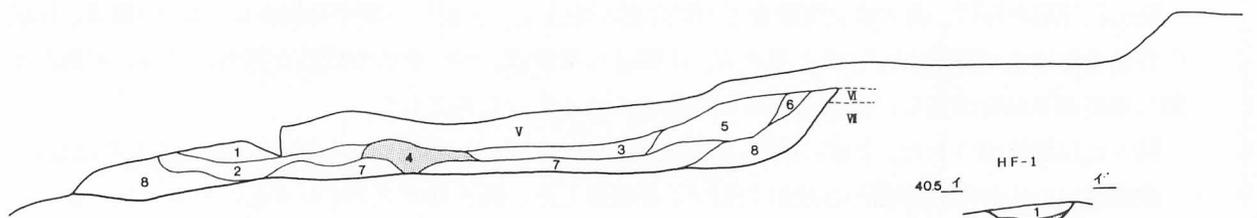
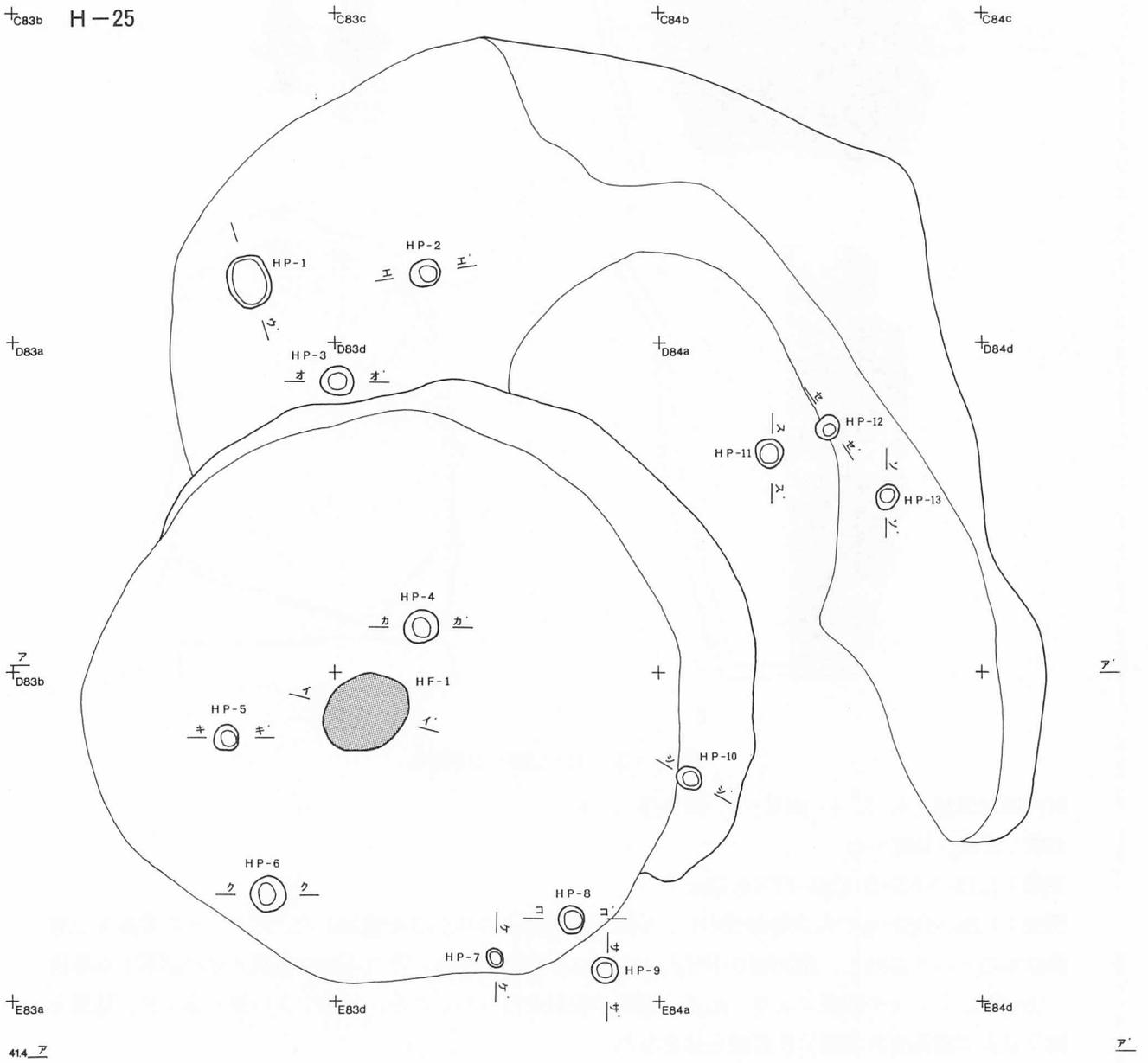
住居跡ほぼ中央部の床面からは炉(HF-1)を検出した。焼土はサンプリングし、フローテーション法により処理した。その資料の選別から得られた炭化植物遺体は、現在分析依頼中である。

遺物：土器は10点、石器は7点、総数17点が出土した。土器はⅢ群b類、V群、V群c類の各1点を除き、Ⅳ群b類の手稲・鮎潤式である。図Ⅲ-6-1は床面とE81区が接合。Ⅳ群b類の深鉢の口縁部。2は床面とE81区が接合。Ⅳ群b類の深鉢の口縁部。3はH-24床直上、床面とH-25の床面出土の土器が接合。Ⅳ群b類の深鉢、胴部～底部。4は床直上出土。スクレイパー。石質はメノウ質頁岩。5は壁面出土のスクレイパー。石質は黒曜石。

時期：出土土器よりⅣ群b類土器の縄文時代後期中葉手稲式の時期のものと考えられる。

フローテーション選別作業により得られた炭化物片を炭素14年代測定に現在依頼中である。(倉橋)

III 遺構とその遺物

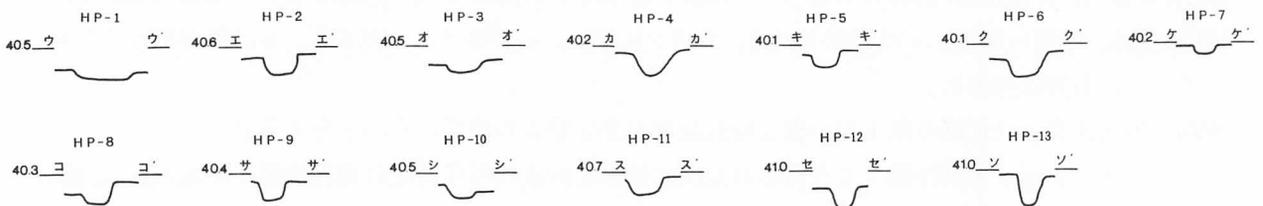


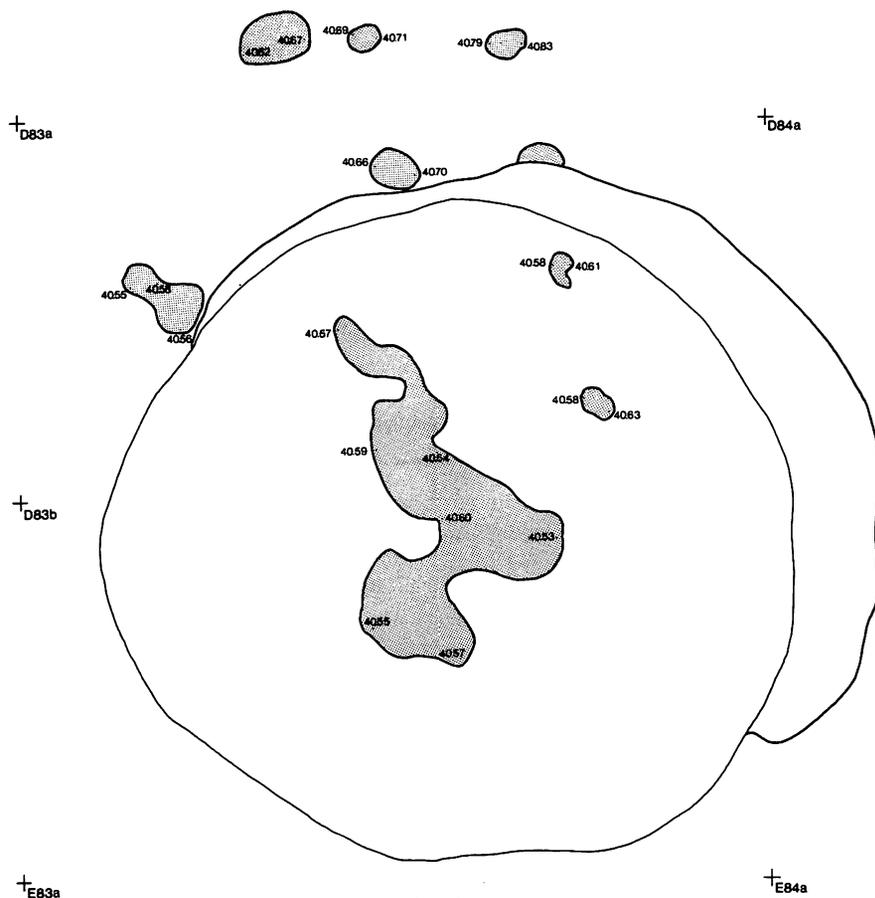
H-25

- | | |
|---------------------|---------------------|
| 1 暗褐色土 (V+VI) | 5 暗褐色土 (VI>V) |
| 2 黄褐色土 (VII>V·VIII) | 6 暗黄褐色土 (VII>V) |
| 3 暗黄褐色土 (V+VII) | 7 黒褐色土 (V>VII·VIII) |
| 4 橙褐色焼土 | 8 黄褐色土 (VII>V) |

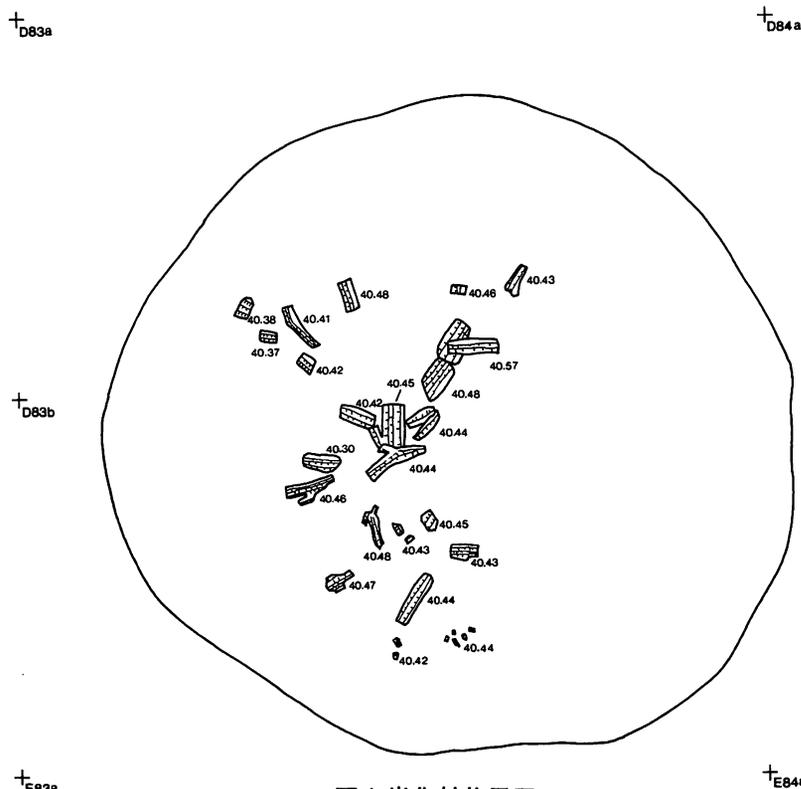
H-25 HF-1

- | |
|--------------------|
| 1 黒褐色土 (VI、炭化物まじる) |
| 2 橙褐色焼土 |





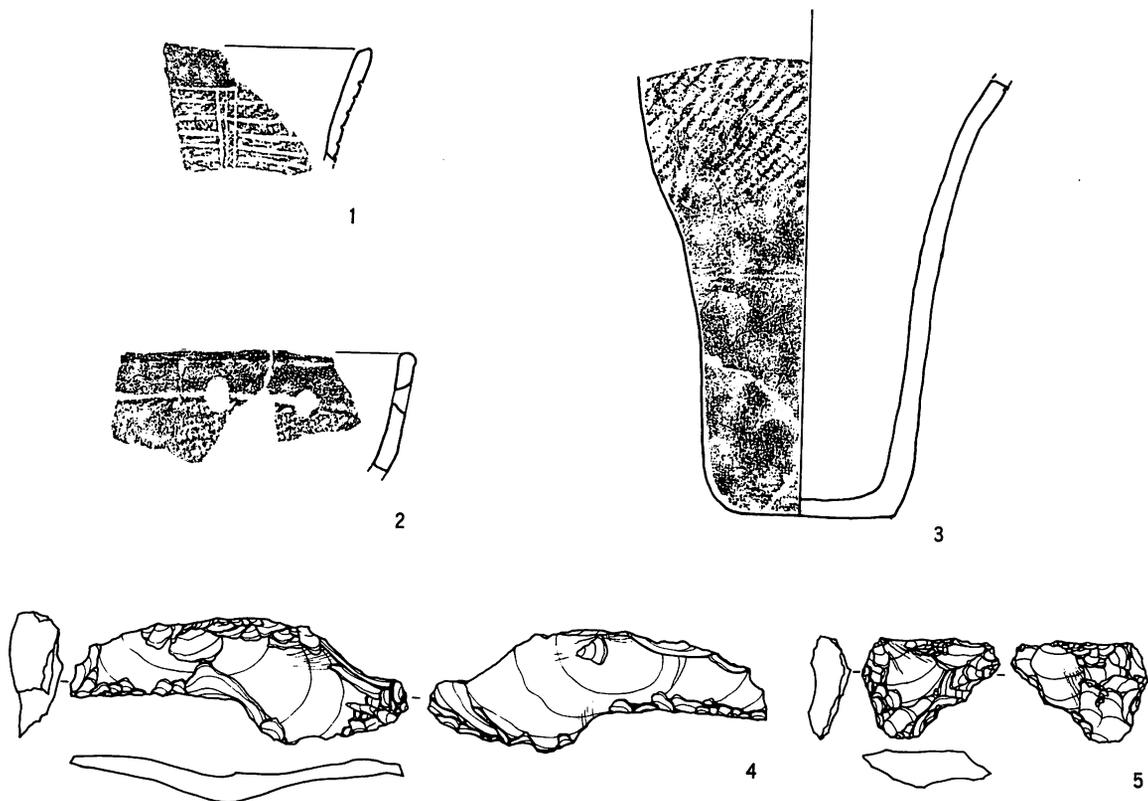
覆土焼土位置図



覆土炭化材位置図

図 III-5 H-25 覆土焼土・炭化材位置図

Ⅲ 遺構とその遺物



図Ⅲ-6 H-25出土の遺物

H-26 (図Ⅲ-7、8 表Ⅲ-4、7 図版Ⅲ-5、6、7)

位置：C80・81、D80・81

規模：2.60/2.20×2.06/1.78×0.60m

調査：C80、D80の包含層調査中に、Ⅵ層上面でⅤ層の落ち込みを検出した。土壌を想定し、土層観察用のベルトを残し、順次掘り下げた。埋土の中層より焼土が検出され、さらに壁際にⅦ層主体の崩落土が検出されたことから、竪穴住居跡とした。掘り込み面から10cm程度はⅦ層の崩落土で埋積しており、その上面から焼土が検出された。焼土の検出面が生活面と捉えられるか、意図的に覆土とともに埋め戻されたものかは、確定できなかった。焼土周辺から検出された一括土器は、底部が2個体分存在した。1個体は図Ⅲ-8-1のように復元された。焼土と、焼土の下の覆土をサンプリングし、フローテーション法により処理した。その資料の選別作業により得られた炭化植物遺体は、現在分析依頼中である。

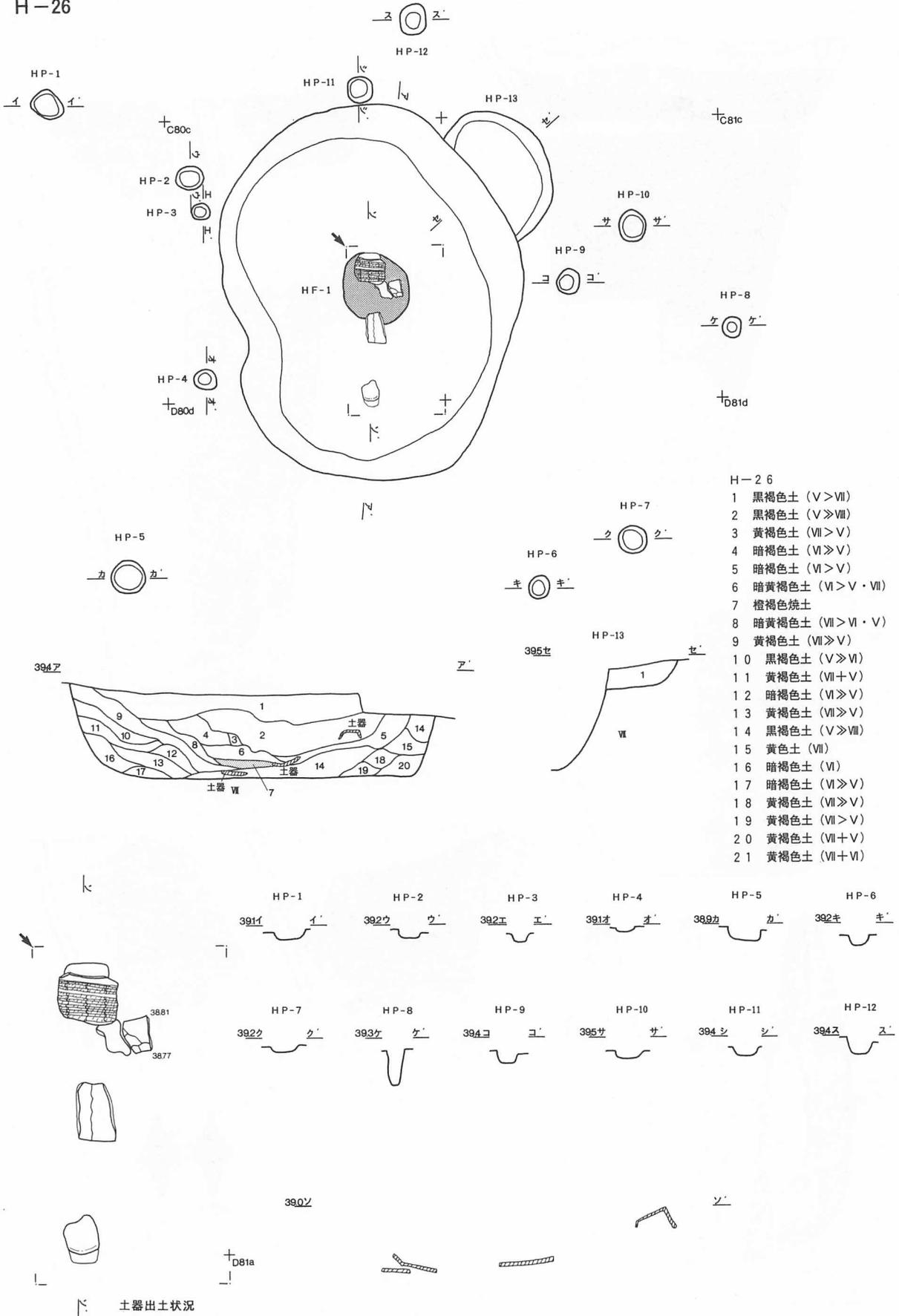
柱穴は12個検出された。すべて竪穴住居の外のものである。HP-8が確認面から30cm、他は10cm程度の深さである。

床面から焼土は検出されなかった。

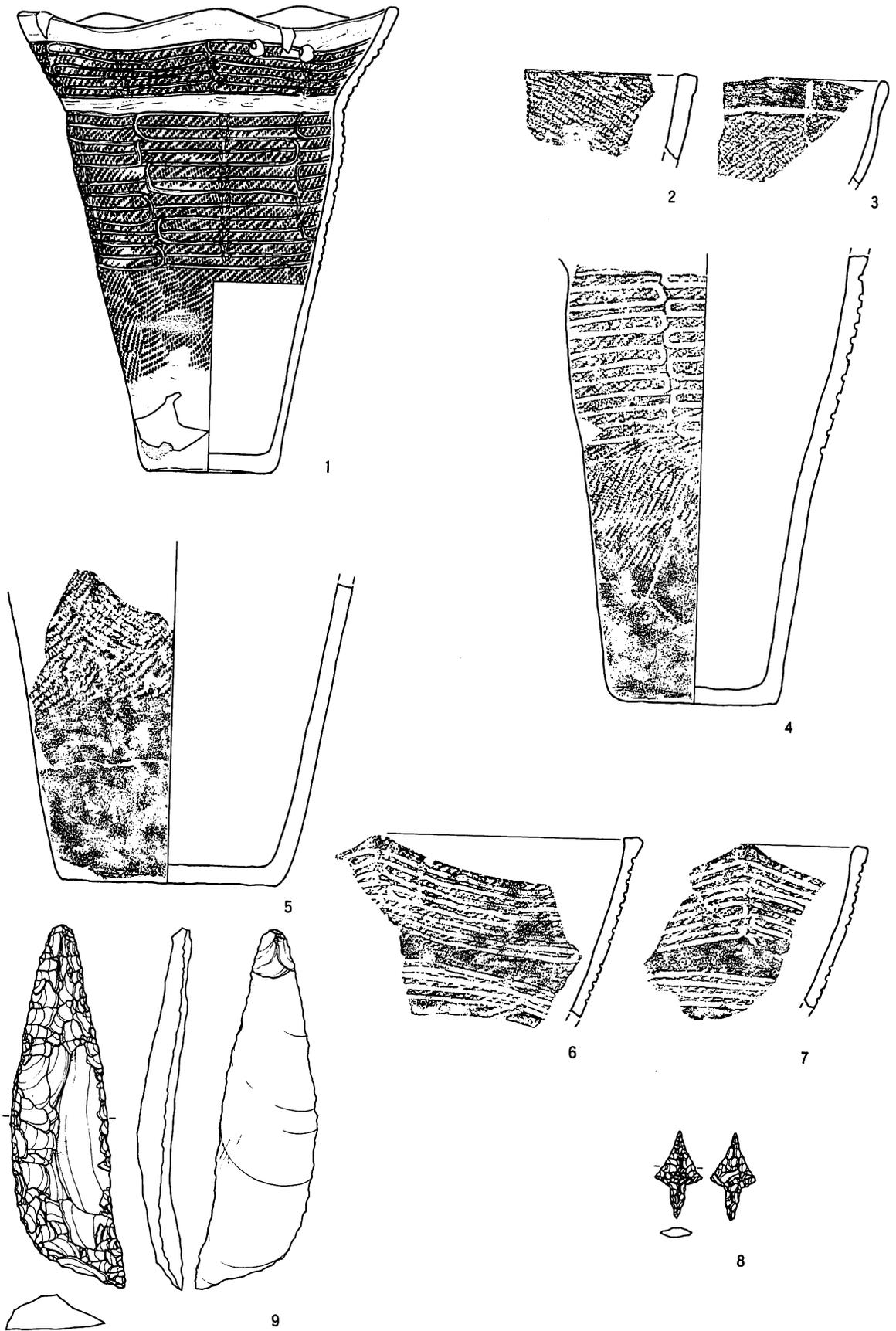
竪穴住居跡の北東部分には黒褐色土の覆土の堆積する掘り込みがあり、出入り口であると考え。遺物：土器は80点、石器は10点、総数90点が出土した。土器は、Ⅴ群c類の各1点を除き、Ⅳ群b類の手稲・鈍潤式である。図Ⅲ-8-1は覆土上～下が接合。Ⅳ群b類の深鉢。2は覆土上出土。Ⅳ群b類の深鉢の口縁部。3は覆土中とE81区出土土器が接合。Ⅳ群b類の深鉢、口縁部。4は覆土上～下出土。Ⅳ群b類の深鉢。5、6、7は同一個体。8は覆土中出土。石鏃。石質は黒曜石。9は覆土中出土のスクレイパー。石質は頁岩。

時期：出土土器よりⅣ群b類土器の縄文時代後期中葉手稲式の時期のものと考えられる。(倉橋)

H-26



図III-7 H-26



図III-8 H-26出土の遺物

H-27 (図III-9、10 表III-3 図版III-8、9)

位置：B79

規模：2.44/2.16×1.95/1.68×0.51m

調査：B79の包含層調査中に、Ⅵ層でⅤ層の落ち込みを検出した。その黒色土中にⅣ群b類の壺と大型の礫が検出された。土壌を想定し、土層観察用のベルトを残し、順次掘り下げた。西側は風倒木の攪乱等で破壊されており、壁面の立ち上がりを検出できなかったが、東側で、Ⅶ層をわずかに掘り込み、Ⅵ層を壁面とする状態を確認できたので、竪穴住居跡と確認した。

掘り込み面からは焼土が検出されなかった。壁際から検出されたⅦ層の崩落土は、住居の外側に詰まっていた積み土である可能性がある。

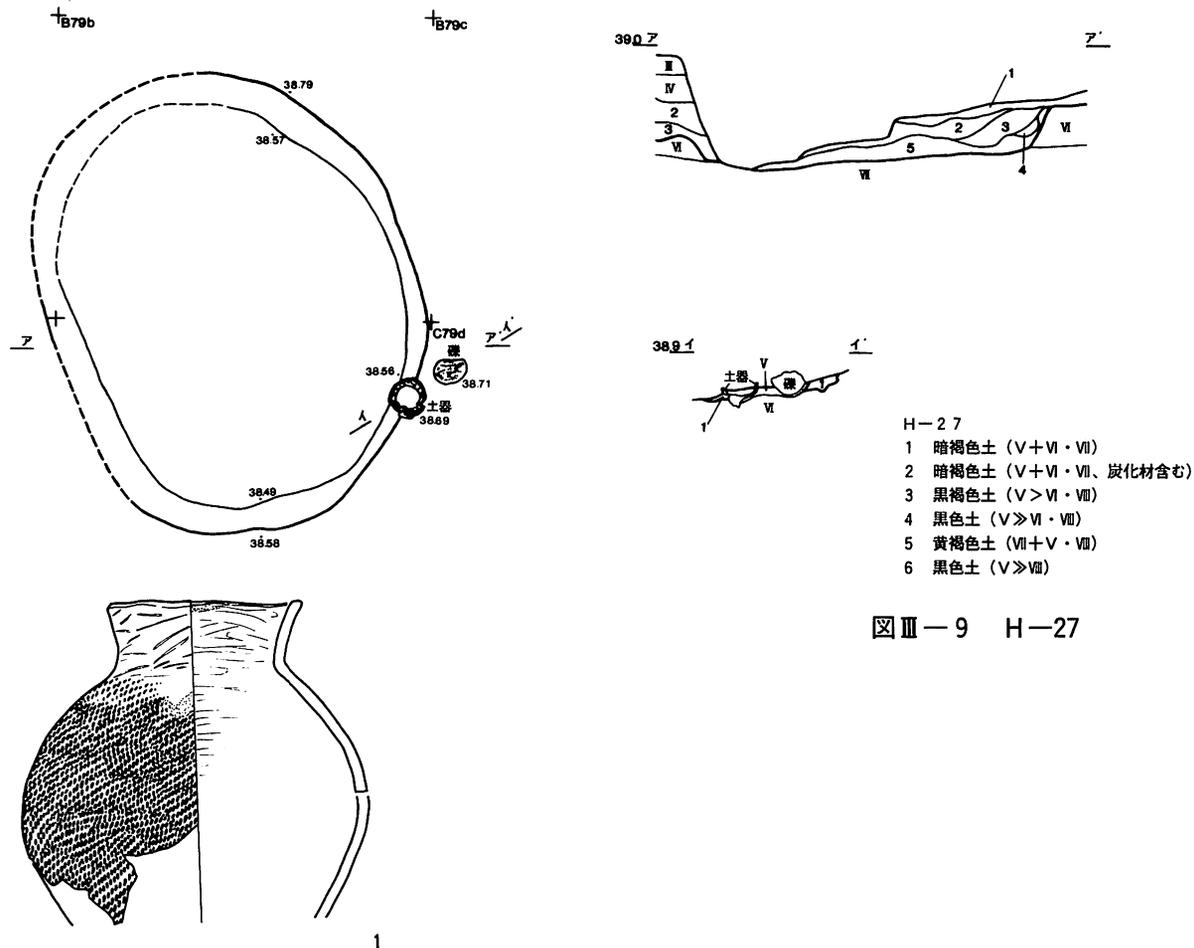
柱穴は住居跡内、外部ともに精査を行ったが検出できなかった。恐らく外側にⅤ層中まで打ち込んだ柱が存在したものと考える。

住居跡内から焼土は検出されなかった。

遺物：遺物は検出されなかったが、住居の外側にⅣ群b類の壺と大型の礫が検出された。覆土中の検出ではないが、住居跡の時期の決定の根拠となると考え、ここに掲載する。1はⅣ群b類の壺。口縁部～胴部。

時期：検出した包含層出土土器よりⅣ群b類土器の縄文時代後期中葉手稲式の時期か、多少古い時期が想定される。
(倉橋)

H-27



図III-9 H-27

図III-10 H-27出土の遺物

3. 土壌

LPは65～77までの11基が検出された。覆土はすべて埋め戻し状の土が埋積していたので、土壌墓が想定される。

中の沢を囲むように検出されたLPは、標高38.5m～39.5mに存在し、LP-65と71、66と67、68と70、72と73が4つの対をなすように確認された。平面的な位置では土壌の規模が大小が組になっている。LP-74と75はそれぞれ、1基単独で存在する。

さらに、土器の接合からH-26出土の土器とLP-72出土の土器、LP-68出土の土器とLP-74出土の土器が接合し、それぞれがほぼ同時期のものであると考えられる。

LP-70出土のⅣ群c類土器は、包含層出土の他の土器片と接合し、図Ⅲ-14-2のように復元された。LP-70の時期はLP-68と対をなし、Ⅳ群b類の時期のものと考えていたが、土器の接合からLP-68とLP-74出土土器の接合関係が見られ、LP-70は単独でⅣ群c類の時期の可能性もある。

他のものについてはⅣ群b類の時期のものである。

土壌の周辺からは多数の同時期の焼土が検出され、埋葬の儀礼に火が用いられている可能性がある。今年度調査区の北側の境界に近いLP-75、77と同様な土壌が未発掘区に分布が続いていると推察される。

検出された遺物では、LP-74、77のように礫が検出される例と、LP-75のように一括土器が埋められている場合と、その他のように土器が数点入れられるものがあった。 (倉橋)

LP-65 (図Ⅲ-11、表Ⅲ-10、図版Ⅲ-10)

位置：E82c,F82d

規模：1.00/0.72×0.89/0.70×0.74m

調査：E82c,F82dの包含層調査中、Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みを検出した。土層観察用の面を残して半截したところ、確認面から30cmほど掘り込むピットと確認した。覆土は埋め戻し状の土である。南側で検出された、LP-71と対をなす。西側には、LP-66と67の対がある。

遺物：Ⅳ群b類土器1点が出土した。

時期：埋め戻された覆土中からⅣ群b類土器が出土していることから、縄文時代後期手稲・鮭潤式の時期である。

LP-66 (図Ⅲ-11、表Ⅲ-10、図版Ⅲ-10)

位置：E82b,F82a

規模：0.96/0.70×0.94/0.54×0.55m

調査：E82b,F82aの包含層調査中、Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みを検出した。土層観察用の面を残して半截したところ、確認面から30cmほど掘り込むピットと確認した。覆土は埋め戻し状の土である。南側で検出された、LP-67と対をなす。東側には、LP-65と71の対がある。

遺物：土器15点が出土した。その内訳はⅣ群b類7点、Ⅴ群c類8点である。

時期：覆土の上部からはⅤ群c類が出土しているが、埋め戻された覆土中からⅣ群b類土器のみ出土していることから、縄文時代後期手稲・鮭潤式の時期である。

LP-67 (図Ⅲ-11、15、表Ⅲ-5、10、図版Ⅲ-10、16)

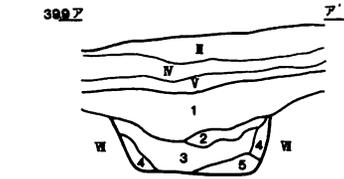
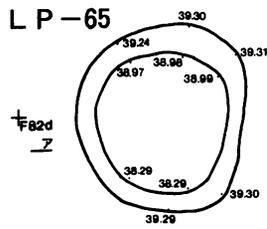
位置：F82a・b

規模：0.80/0.56×0.63/0.50×0.16m

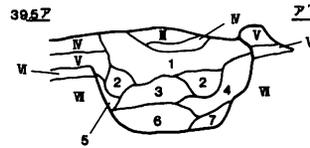
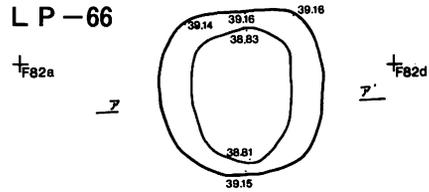
調査：E82b,F82aの包含層調査中、Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みを検出した。土層観察用の面を残して半截したところ、確認面から15cmほど掘り込むピットと確認した。覆土は埋め戻し状の土である。北側で検出された、LP-65と対をなす。東側には、LP-65と71の対がある。

遺物：Ⅳ群b類土器1点が出土した。

III 遺構とその遺物

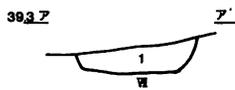
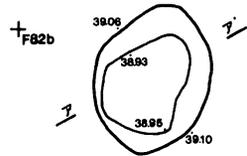


- L P 65
- 1 暗黄褐色土 (VI>V)
 - 2 黄褐色土 (VII>V)
 - 3 暗褐色土 (V>>VII)
 - 4 暗黄褐色土 (VII>VI)
 - 5 暗黄褐色土 (VII>V・VI)



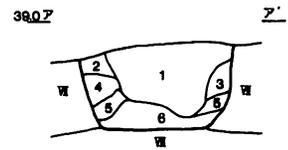
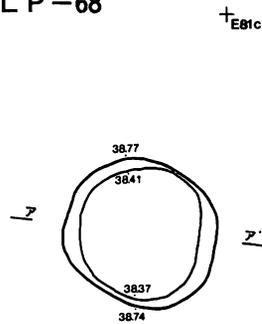
- L P 66
- 1 暗黄褐色土 (V>VII)
 - 2 黄褐色土 (VII+V)
 - 3 暗褐色土 (V>>VII)
 - 4 暗黄褐色土 (V>>VII・VII)
 - 5 黄褐色土 (VII>VI)
 - 6 黒褐色土 (V>>VII)
 - 7 黄褐色土 (VII>V)

L P -67



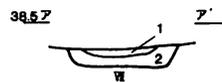
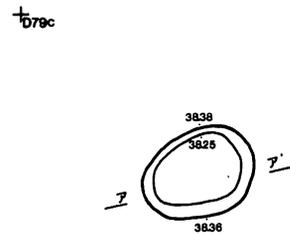
- L P 67
- 1 暗褐色土 (V>>VII)

L P -68



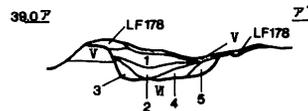
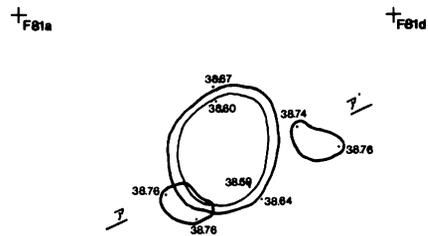
- L P 68
- 1 暗褐色土 (V+VII・VII)
 - 2 暗黄褐色土 (V>VII)
 - 3 黄褐色土 (VII>V)
 - 4 黄褐色土 (VII>V)
 - 5 黒褐色土 (V>VI)
 - 6 黄褐色土 (VII>>V)

L P -69



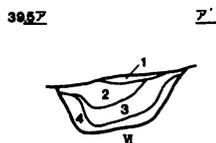
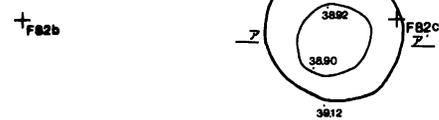
- L P 69
- 1 黒褐色土 (V>>VII)
 - 2 黄褐色土 (VII>V)

L P -70



- L P 70
- 1 橙褐色焼土
 - 2 黒色土 (V)
 - 3 黒褐色土 (V>>VI)
 - 4 暗褐色土 (V>VI)
 - 5 黒色土 (V>>VI)

L P -71



- L P 71
- 1 黒褐色土 (V>VI・VII、炭化材含む)
 - 2 暗黄褐色土 (VI+V・VII)
 - 3 暗黄褐色土 (VI>V・VII)
 - 4 黄褐色土 (VI>>V・VII)

図 III -11 L P -65~71

Ⅲ 遺構とその遺物

時期：埋め戻された覆土中からⅣ群b類土器が出土していることから、縄文時代後期手稲・鮎澗式の時期である。

L P -68 (図Ⅲ-11、14、表Ⅲ-5、10、図版Ⅲ-10、16)

位置：E81a・b

規模：0.83/0.68×0.74/0.68×0.46m

調査：E81a・bの包含層調査中、Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みを検出した。土層観察用の面を残して半載したところ、確認面から30cmほど掘り込むピットと確認した。覆土は埋め戻し状の土である。南側で検出された、LP-70と対をなす。東側には、LP-66と67の対、西側にはLP-72と73の対がある。

遺物：土器14点が出土した。その内訳はⅣ群b類12点、Ⅴ群c類2点である。図Ⅲ-14-1に掲載した土器はLP-68出土土器とLP-74出土土器が接合している。LP-68とLP-74がほぼ同時期のものと考えられる。

時期：覆土の上部からはⅤ群c類が出土しているが、埋め戻された覆土中からⅣ群b類土器のみが出土していることから、縄文時代後期手稲・鮎澗式の時期である。

L P -69 (図Ⅲ-11、表Ⅲ-10、図版Ⅲ-11)

位置：D79c

規模：0.60/0.48×0.45/0.35×0.12m

調査：D79cの包含層調査中、Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みを検出した。土層観察用の面を残して半載したところ、確認面から10cmほど掘り込むピットと確認した。覆土は埋め戻し状の土である。他の4対と同方向のピットは検出できなかったが、北西側で検出された、LP-76と対をなす可能性はある。東側には、LP-66と67の対、西側にはLP-72と73の対がある。

遺物：遺物は出土していない。

時期：縄文時代後期手稲・鮎澗式の時期である。

L P -70 (図Ⅲ-11、14、表Ⅲ-5、10、図版Ⅲ-11、16)

位置：F81a

規模：0.70/0.60×0.58/0.50×0.18m

調査：F81aの包含層調査中、Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みを検出した。土層観察用の面を残して半載したところ、確認面から10cmほど掘り込むピットと確認した。覆土は埋め戻し状の土である。南西側で検出されたLP-68と対をなす。東側には、LP-66と67の対、西側にはLP-72と73の対がある。

遺物：土器1点が出土した。その内訳はⅣ群c類1点である。出土した土器は図Ⅲ-14-2のように復元された。

時期：現場の調査の時点では遺構の位置からLP-68と対をなすと考え、縄文時代後期中葉手稲・鮎澗式の時期としたが、出土土器の時期、接合関係から縄文時代後期後葉堂林式の時期の可能性もある。

L P -71 (図Ⅲ-11、表Ⅲ-10、図版Ⅲ-11)

位置：F82b・c

規模：0.74/0.36×0.71/0.42×0.27m

調査：F81aの包含層調査中、Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みを検出した。土層観察用の面を残して半載したところ、確認面から10cmほど掘り込むピットと確認した。覆土は埋め戻し状の土である。北東側で検出されたLP-65と対をなす。西側にはLP-66と67の対がある。

遺物：Ⅳ群b類土器1点が出土した。

時期：埋め戻された覆土中からⅣ群b類土器が出土していることから、縄文時代後期手稲・鮎澗式の時期である。

L P -72 (図Ⅲ-12、表Ⅲ-10、図版Ⅲ-12)

位置：D81b

規模：0.90/0.70×0.83/0.52×0.45m

調査：D81bの包含層調査中、Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みを検出した。土層観察用の面を残して半載したところ、確認面から30cmほど掘り込むピットと確認した。覆土は埋め戻し状の土であり、土壌墓

ではないかと考える。北東側で検出されたLP-73と対をなす。H-24と26の間がある。

遺物：Ⅳ群b類土器2点が出土した。H-26に掲載している図Ⅲ-8-4はH-26の覆土上～下から出土した土器と接合した。H-26とLP-72はほぼ同時期のものとする。

時期：埋め戻された覆土中からⅣ群b類土器が出土していることから、縄文時代後期手稲・鮎澗式の時期である。

LP-73 (図Ⅲ-12、表Ⅲ-10、図版Ⅲ-12)

位置：E80d,E81a 規模：0.66/0.54×0.64/0.54×0.30m

調査：E80d,E81aの包含層調査中、Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みを検出した。土層観察用の面を残して半截したところ、Ⅶ層を30cmほど掘り込むピットと確認した。覆土は埋め戻し状の土である。北東側で検出されたLP-72と対をなす。H-24と26の間がある。

遺物：遺物は出土しなかった。

時期：縄文時代後期手稲・鮎澗式の時期である。

LP-74 (図Ⅲ-12、14、15、表Ⅲ-4、8、10、図版Ⅲ-13、16、17)

位置：C75a 規模：0.87/0.80×0.86/0.74×0.24m

調査：E80d,E81aの包含層調査中、Ⅵ層上面で橙褐色焼土を検出した。土層観察用の面を残して半截したところ、焼土の下に確認面から30cmほど掘り込むピットと確認した。覆土は埋め戻し状の土である。焼土はピットの時期とほぼ同時期のものであろう。他のピットと離れて1基で検出された。

遺物：土器3点、石器等4点、総数7点が出土した。その内訳は、Ⅳ群b類2点、Ⅴ群c類1点、礫4点である。図Ⅲ-14-1に掲載した土器はLP-68出土土器とLP-74出土土器が接合している。LP-68とLP-74がほぼ同時期のものと考えられる。

時期：埋め戻された覆土中からⅣ群b類土器が出土していることから、縄文時代後期手稲・鮎澗式の時期である。

LP-75 (図Ⅲ-12、14、表Ⅲ-6、10、図版Ⅲ-14、16)

位置：B83c・d,B84a・b 規模：1.88/1.32×1.58/1.10×0.62m

調査：B83c・d,B84a・bの包含層調査中、Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みを検出した。土層観察用の面を残して半截したところ、確認面から60cmほど掘り込むピットと確認した。覆土は埋め戻し状の土である。覆土の下層には、Ⅳ群b類の深鉢の一括土器が検出された。

遺物：土器32点が出土した。すべてⅣ群b類である。

時期：埋め戻された覆土中からⅣ群b類土器が出土していることから、縄文時代後期手稲・鮎澗式の時期である。

LP-76 (図Ⅲ-13、15、表Ⅲ-6、10、図版Ⅲ-15、16)

位置：C78c,C79b,D78d,D79a 規模：1.22/1.00×0.68/0.54×0.26m

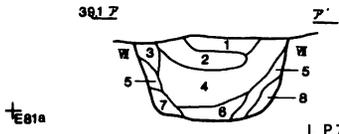
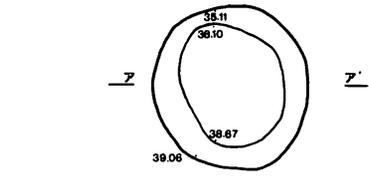
調査：C78c,C79b,D78d,D79aの包含層調査中、Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みを検出した。土層観察用の面を残して半截したところ、確認面から30cmほど掘り込むピットと確認した。覆土は埋め戻し状の土である。ピットの北東の角覆土中には、Ⅳ群b類が1点検出された。

遺物：土器1点、石器等9点、総数10点が出土した。その内訳は、Ⅳ群b類1点、礫9点である。

時期：埋め戻された覆土中からⅣ群b類土器が出土していることから、縄文時代後期手稲・鮎澗式の時期である。

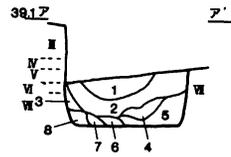
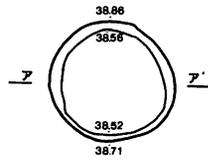
III 遺構とその遺物

LP-72



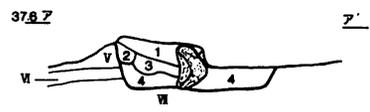
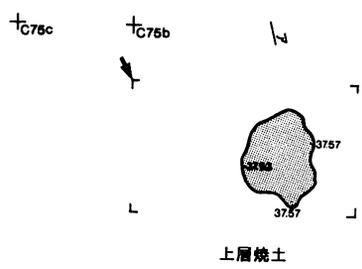
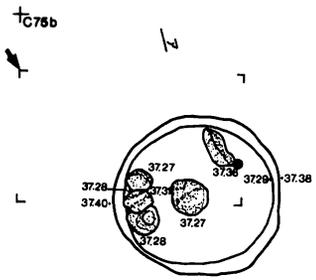
- L P 72
- 1 暗黄褐色土 (V>VI・VII)
 - 2 黄褐色土 (VII>V)
 - 3 黒色土 (V)
 - 4 黒褐色土 (V>VII)
 - 5 暗褐色土 (VI>V)
 - 6 黒褐色土 (V>VII)
 - 7 黄色土 (VII)
 - 8 黄褐色土 (VII>V)

LP-73



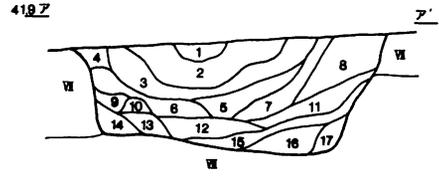
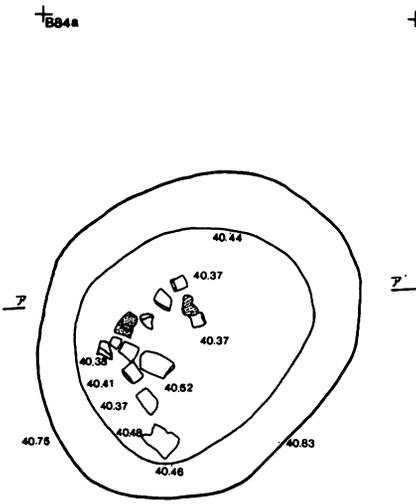
- L P 73
- 1 暗黄褐色土 (VII>V・VII)
 - 2 黒褐色土 (V>VII)
 - 3 黄褐色土 (VII>V)
 - 4 暗褐色土 (VI>V・VII・VII)
 - 5 暗黄褐色土 (VI>V)
 - 6 黒褐色土 (V>VI)
 - 7 暗黄褐色土 (VI>VII)
 - 8 黄褐色土 (VII>VI)

LP-74



- L P 74
- 1 橙褐色焼土
 - 2 暗橙褐色焼土
 - 3 黒褐色土 (V、焼土粒まじる)
 - 4 暗褐色土 (VI>V)

LP-75



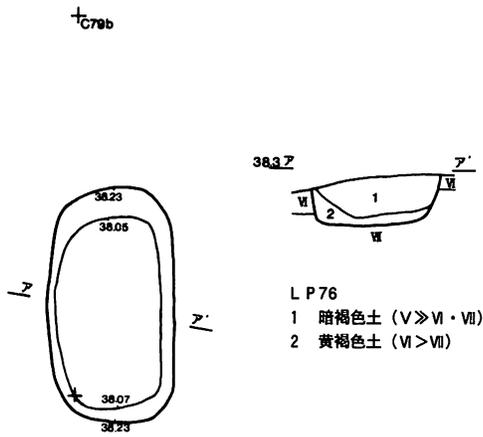
- L P 75
- 1 黒褐色土 (V>VII)
 - 2 黄褐色土 (VII>V)
 - 3 黒褐色土 (V>VI・VII)
 - 4 黄褐色土 (VI>VII)
 - 5 暗黄褐色土 (V>VI)
 - 6 暗褐色土 (VI>V)
 - 7 黄褐色土 (VII>VI)
 - 8 暗褐色土 (VI)
 - 9 黄褐色土 (VII>VI・V)
 - 10 黄褐色土 (VII>VI・V)
 - 11 黄褐色土 (VII>V)
 - 12 黄褐色土 (VII>VI)
 - 13 暗褐色土 (VI>VII)
 - 14 暗黄褐色土 (VII+V)
 - 15 暗褐色土 (V>VII)
 - 16 黄褐色土 (VII)
 - 17 黄褐色土 (VII>VII)

図 III-12 LP 72~75

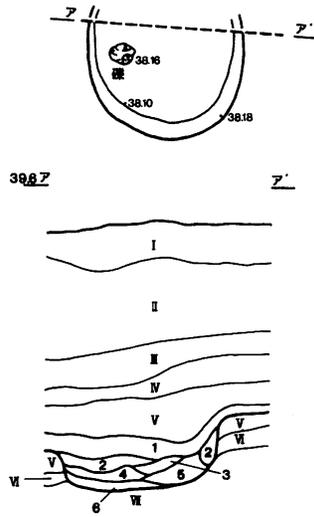
LP-76

LP-77 ⁺A80b

⁺A80c

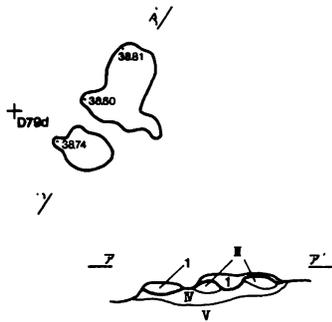


LP 76
 1 暗褐色土 (V>>VI・VII)
 2 黄褐色土 (VI>VII)



LP 77
 1 黒色土 (V>>VII)
 2 黄褐色土 (VII>V)
 3 黒色土 (V>>VII)
 4 暗褐色土 (V+VI・VII)
 5 暗黄褐色土 (VI>V)

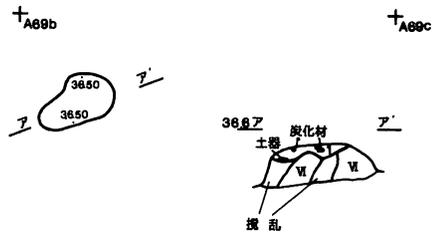
UF-72



⁺D80a

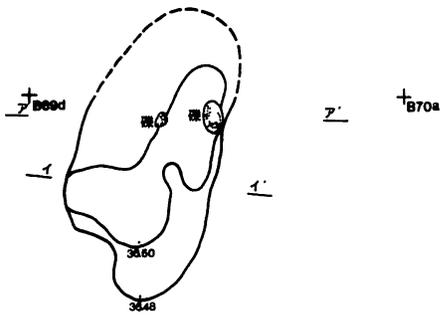
UF 72
 1 暗橙褐色焼土

UF-73



UF 73
 1 暗橙褐色焼土

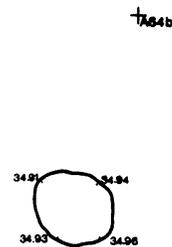
UF-74



⁺B70a

UF 74
 1 黒色土 (III>IV、炭化材含む)
 2 橙褐色焼土
 3 橙褐色土 (IV>V・VII)
 4 橙褐色土 (V>IV)
 5 暗橙褐色土 (V>IV・VII)
 6 暗橙褐色土 (V>IV)
 7 暗黄橙褐色土 (V>IV・VII)
 8 暗黄橙褐色土 (V>VI・VII)
 9 橙褐色焼土
 10 暗褐色土 (V>VI)

UF-75



⁺B64a

図 III-13 LP-76・77、UF-72~75

Ⅲ 遺構とその遺物

LP-77 (図Ⅲ-13、表Ⅲ-10、図版Ⅲ-12)

位置：C78c,C79b,D78d,D79a

規模：(1.22)/(0.68)×0.82/0.74×0.26m

調査：C78c,C79b,D78d,D79aの包含層調査中、Ⅵ層上面で黒色土の落ち込みを検出した。土層観察用の面を残して半截したところ、確認面から30cmほど掘り込むピットと確認した。覆土は埋め戻し状の土である。

遺物：土器1点、石器等9点、総数10点が出土した。その内訳は、Ⅳ群b類1点、礫9点である。

時期：埋め戻された覆土中からⅣ群b類土器が出土していることから、縄文時代後期手稲・鮎潤式の時期である。(倉橋)

LP出土の遺物

LP出土の土器

LP出土の土器は総数80点で、その内訳はⅣ群b類59点、Ⅳ群c類1点、Ⅴ群c類20点である。LP-65墳底から出土したⅣ群b類1点とLP-71Ⅴ層から出土した1点以外は全て覆土出土の土器である。

復元個体は3個体で、Ⅳ群b類2個体、Ⅳ群c類1個体である。

図Ⅲ-14-1はLP-68出土の土器8点とLP-74出土の土器1点、その他にD81c区Ⅴ層1点、E81a区Ⅴ層1点、E81b区Ⅴ層4点の計15点が接合した。Ⅳ群b類の深鉢。2は、LP-70出土の土器3点、Zo74cⅢ層1点、Zo75bⅢ層1点、Zo75bⅤ層2点、A74dⅢ層2点、A74dⅤ層1点、A75bⅢ層1点、B73dⅢ層1点、B74cⅢ層1点、B74cⅤ層41点、B74dⅢ層1点、B74dⅤ層2点、B79dⅤ層1点、C74bⅢ層2点、C74dⅤ層1点、C75aⅤ層2点、C75aⅤ層2点、C76dⅤ層1点、C77dⅢ層1点、E79aⅤ層2点、E82bⅤ層1点、表採1点の計66点が接合したⅣ群c類の深鉢。LP-70は遺構の位置からLP-68と対をなし、その周囲のⅣ群b類の住居跡の土壇墓と考えたが、図Ⅲ-14-1のLP-68とLP-74の接合により対の関係が見られるため、単独でⅣ群c類の時期のもの可能性もある。3はLP-75覆土下出土のⅣ群b類24点。その他にB83bⅤ層1点、B83dⅤ層3点、B84aⅤ層5点、B84bⅤ層4点、C80dⅤ層1点、C83aⅤ層3点、C83bⅤ層2点、C83cⅢ層1点、C83dⅤ層5点、C84aⅤ層2点、D83dⅢ層1点、D84aⅤ層1点、E80dⅢ層6点、計59点が接合した。

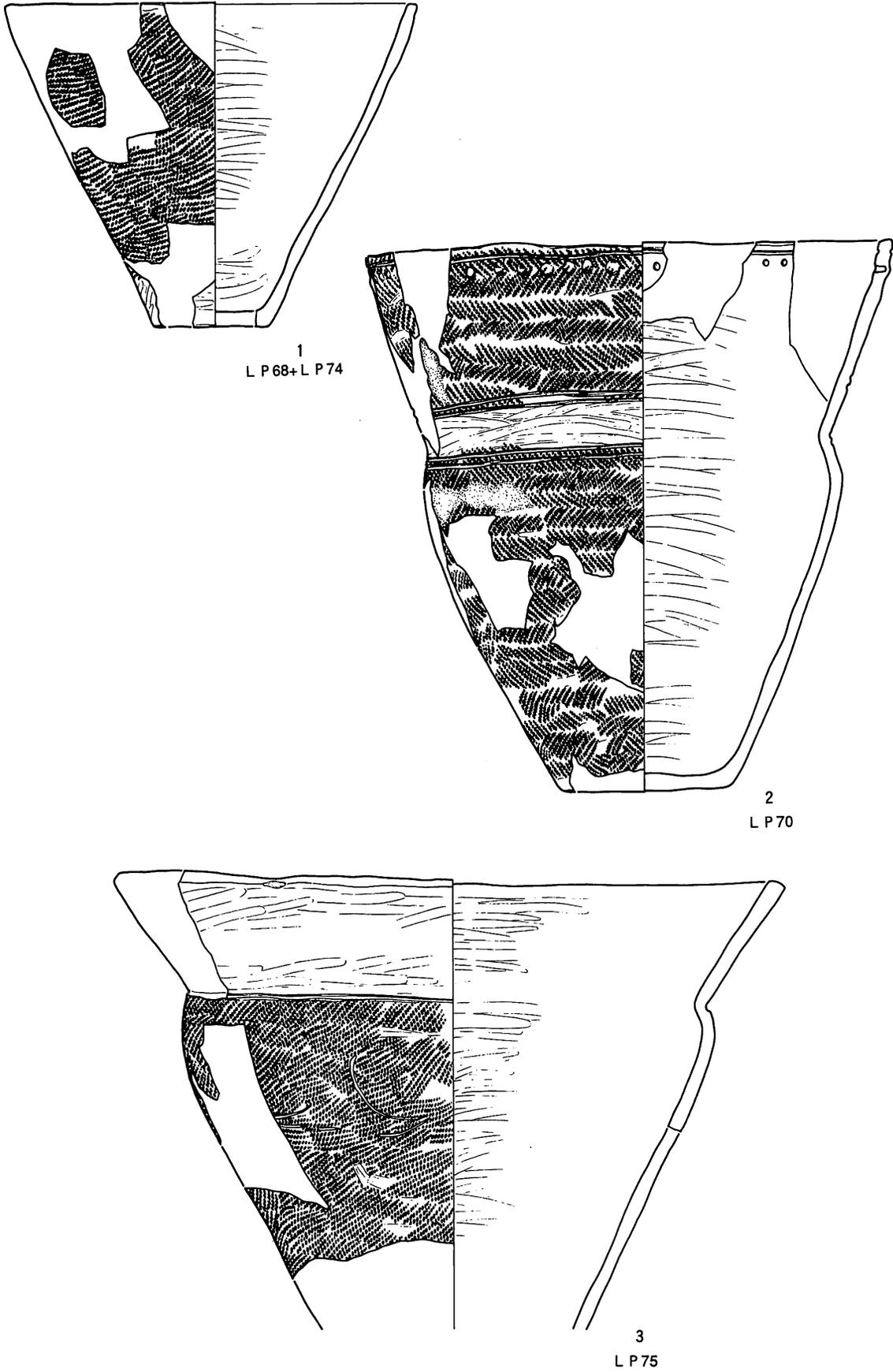
図Ⅲ-15-1はLP-67出土のⅣ群b類の深鉢。胴部。2はLP-76出土のⅣ群b類の深鉢、口縁部。

H-26出土の土器に掲載している図Ⅲ-8-4はH-26とLP-72出土の土器が接合した。また、図Ⅲ-8-7はH-26とLP-76出土の土器が接合した。LP-72、LP-76のそれぞれは埋め戻し状の覆土で、土壇墓と考えられ、H-26に対応するものである可能性がある。

図Ⅲ-14-1のLP-68とLP-74の接合は、位置と大小の対によるピットの組み合わせのほかに、ピットの組み合わせが同時のものがある可能性を表わすと考えられる。(倉橋)

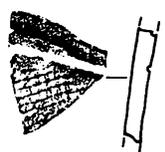
LP出土の石器

LP出土の石器は4点で、すべてLP-74から出土した。図Ⅲ-15-1、2はLP-74出土の台石。石質は砂岩。(倉橋)

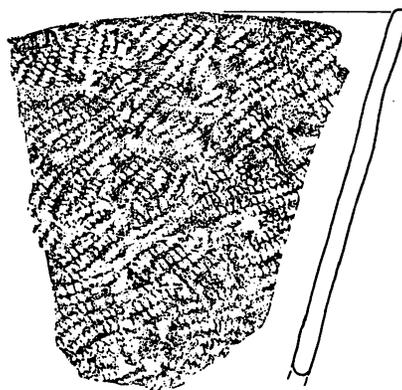


図Ⅲ-14 LP出土の遺物(1)

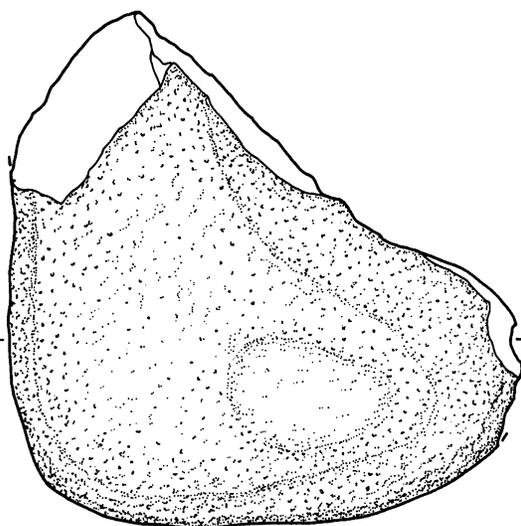
Ⅲ 遺構とその遺物



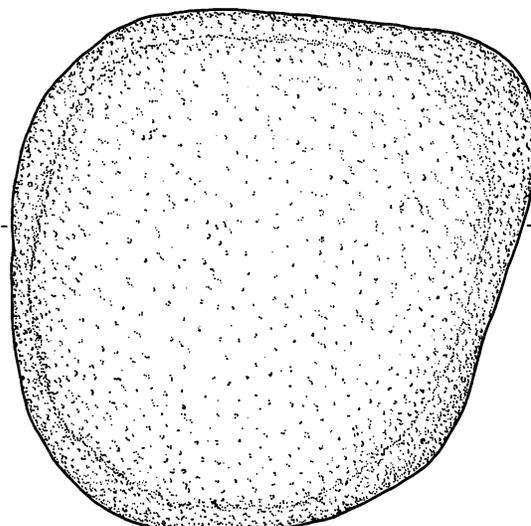
1
LP-67



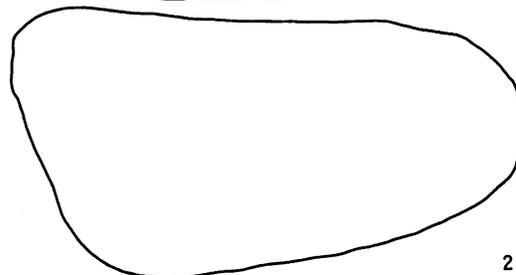
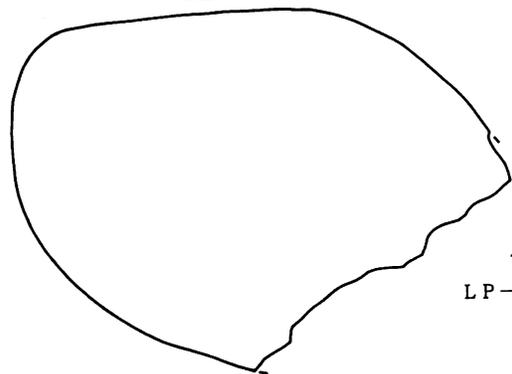
2
LP-76



1
LP-74



2
LP-74



図Ⅲ-15 LP出土の遺物(2)

4. 焼土

Ⅲ層から検出された焼土(UF)は4基で、統縄文時代～擦文文化期、V、Ⅵ層から検出された焼土(LF)は78基で、そのほとんどは縄文時代後期と晩期のものである。

UFは4基とも伴出土器、周辺の土器の出土に乏しく、時期を確定することができなかった。しかし、Ta-cのⅣ層に近い位置で検出されていることから、統縄文時代のものである可能性の方が高いと考える。新しくなっても擦文文化期より新しくなることはない。すべて焼土の発達が悪く、暗橙褐色のものが多く、UF-73、74は炭化材がからんでいた。UF-75は現場ではLFと考えていたが、整理作業で、平面図、セクション写真等の検討からUFにいれるべきと判断した。

LFは、LF-87、179、190、193、194、195、196、198、200、205、219、223、224、233、234、240、241は周辺に土器が出土しており、焼土の時期を捉えられる。そのうちLF-190、193、198、205、223は伴出土器からV群c類縄文晩期タンネットウL式の時期のもので、焼土の周辺には台石、石皿などの礫石器を伴い、屋外炉の役割を持っていた可能性がある。LP-70の上部のLF-178とLP-74の上部焼土は、その土壌の形成された時期とほぼ同時期の縄文後期中葉のものと考えられる。LF-184ははっきり焼けている焼土で、焼土がレンズ状に堆積していた。昨年の調査で検出されていた、焼土の詰まっているピットの可能性もあるが、焼土がその場で焼かれ、保存の状態のよかったものとする。周辺には深さ10cm～20cm程の柱穴状の小ピットが検出された。(倉橋)

LFの遺物

LF出土の土器(図Ⅲ-27～29)

LFから出土した土器は1002点、V群c類が396点と多く、Ⅳ群b類254点、Ⅳ群c類154点の順となる。掲載した土器は、復元個体3個、拓本39点である。

LF出土のⅠ群b類土器(図Ⅲ-28-11、12)

LF出土のⅠ群b類土器は45点出土し、すべてLF-224からのものである。拓本2点を掲載した。現場での調査中には、昨年度にも出土していた統縄文時代のⅥ群b類赤穴式ではないかと考えていたが、復元作業によりボウル形の器形を呈するようになったので、Ⅰ群b類土器と確認された。これまでのキウス7の調査ではⅠ群b類のうち、東釧路Ⅳ式はほとんど出土していなかった。図Ⅲ-28-11と12は同一個体。

LF出土のⅢ群b類土器(図Ⅲ-27-17、図Ⅲ-28-6)

LF出土のⅢ群b類土器は2点出土し、LF192とLF212からのものである。

LF出土のⅣ群b類土器(図Ⅲ-27-1、5～9、18 図Ⅲ-28-1～5、7～9、図Ⅲ-29-1、8)

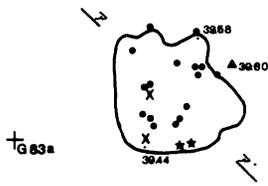
LF出土のⅣ群b類土器は254点出土し、復元個体1個体、拓本16点を掲載した。

復元個体の図-27-1は口唇に刻みが入り、鈍潤式である。LF-190付近のV層出土のものと、C81b区のV層出土のものが接合した。LF-190はV群c類の時期のものであり、焼土の時期に直接関連するものではない。拓本のは、手稻式と考えられるもの(図Ⅲ-27-5、6、7、8、9、18、図Ⅲ-28-4、5、7、8、9、10、図Ⅲ-29-1)が多い。

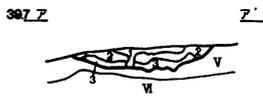
III 遺構とその遺物

LF-87

+F83b

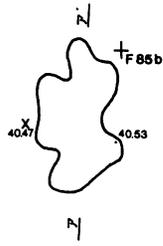


+G83a

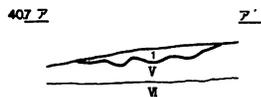


- LF 87
 1 暗褐色土 (V、焼土粒混じる)
 2 橙褐色焼土
 3 明褐色焼土

LF-176

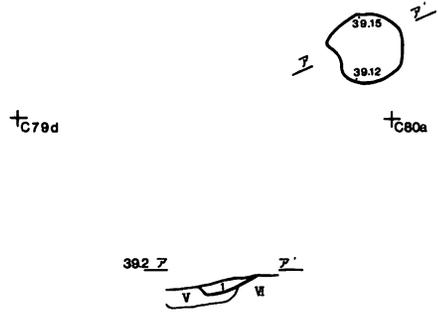


+G85a



- LF 176
 1 橙褐色焼土

LF-177



+C79d

+C80a

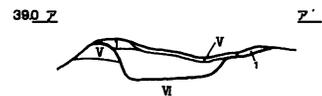
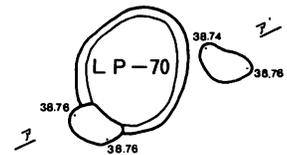


- LF 177
 1 橙褐色焼土

LF-178

+F81a

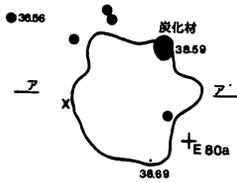
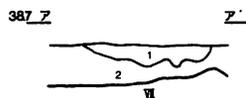
+F81d



- LF 178
 1 暗橙褐色焼土

LF-179

+D80b



- LF 179
 1 橙褐色焼土
 2 黒褐色土 (V+VI・VII)

LF-180

+F83b

N



N

+G83a

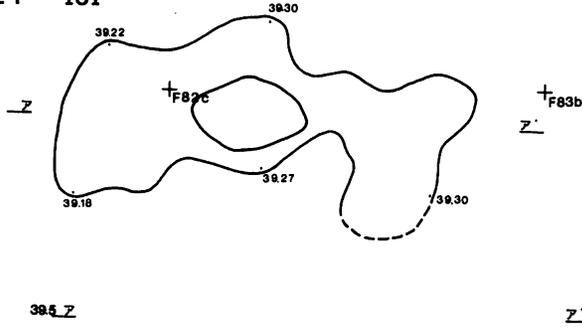


- LF 180
 1 暗橙褐色土 (V>VI、焼土粒混じる)

図 III-16 LF-87・176~180

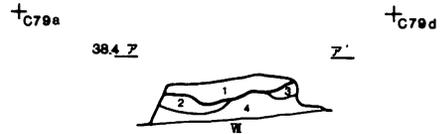
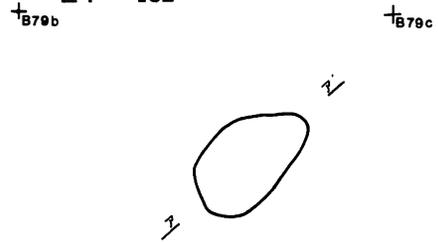
III 遺構とその遺物

LF-181



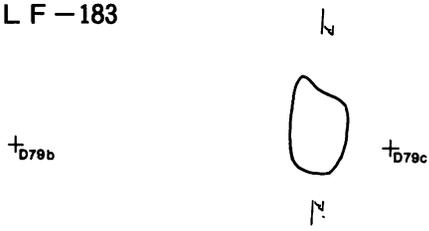
- LF181
 1 黒褐色土 (V>VI、炭化材含む)
 2 橙褐色焼土

LF-182



- LF182
 1 暗橙褐色焼土
 2 暗褐色土 (VI>V)
 3 黒褐色土 (V>VII)
 4 暗褐色土 (VI>V)

LF-183



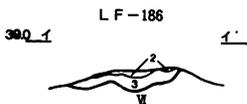
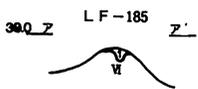
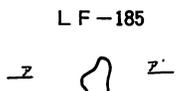
- LF183
 1 暗褐色焼土

LF-184

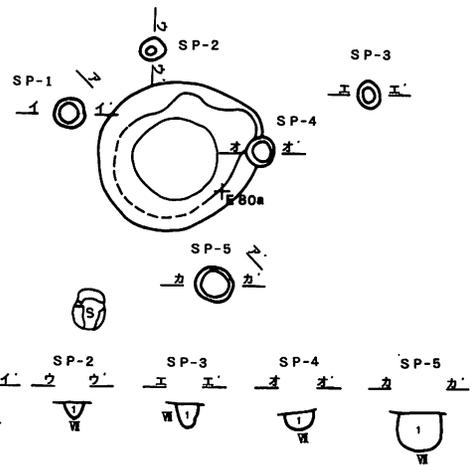
LF-185・186

+F81b

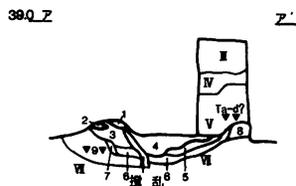
+F81c



- LF185・186
 1 暗橙褐色焼土
 2 暗褐色土 (V>VI、焼土粒混じる)
 3 橙褐色焼土



- LF184SP
 1 暗褐色土 (V>VII)



- LF184
 1 橙褐色焼土
 2 暗褐色焼土
 3 暗褐色土 (V、焼土粒ごく少量混じる)
 4 暗橙褐色土 (V、焼土粒少量混じる)
 5 黒褐色土 (V>VI)
 6 暗橙褐色焼土
 7 暗黄橙褐色焼土
 8 黄褐色土 (V>VII)
 9 暗黄橙褐色焼土

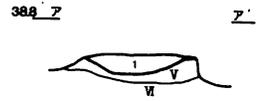
図III-17 LF-181~186

III 遺構とその遺物

LF-187 +F81a

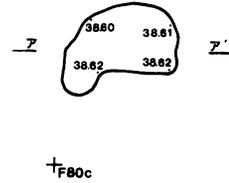
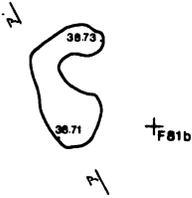


LF-188 +F80d



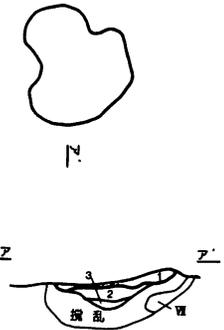
- LF 187
 1 橙褐色焼土
 2 暗褐色土 (V>VI)

- LF 188
 1 暗橙褐色焼土



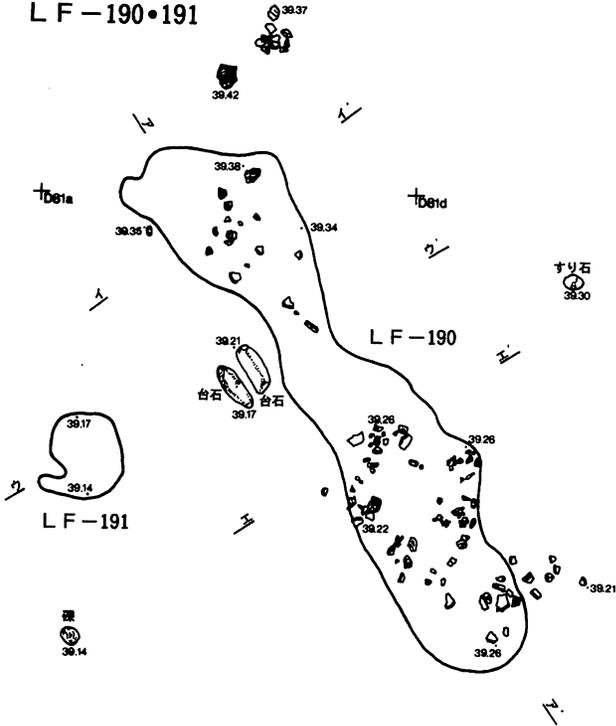
LF-189

+D78c +D78b



- LF 189
 1 暗橙褐色焼土
 2 橙褐色焼土
 3 暗橙褐色焼土
 4 黒褐色土 (V>VII・VIII)

LF-190・191



- LF 190・191
 1 橙褐色焼土
 2 明橙褐色焼土
 3 黒色土 (V、焼土粒混じる)
 4 暗褐色焼土

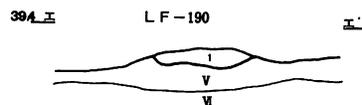
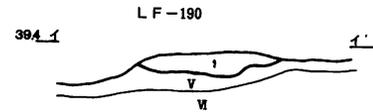
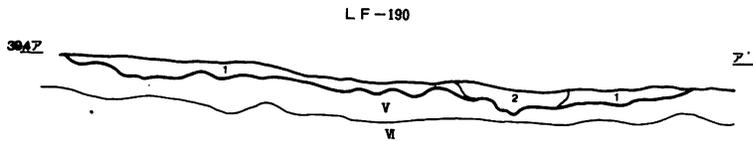
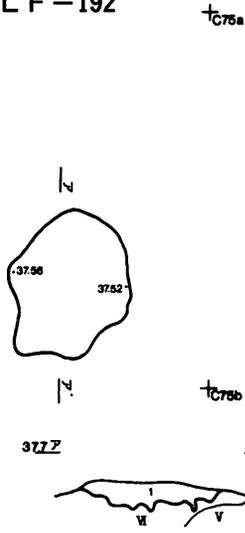


図 III-18 LF-187~191

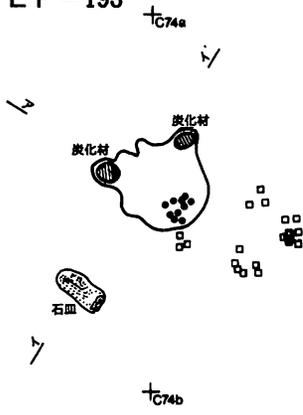
III 遺構とその遺物

L F - 192

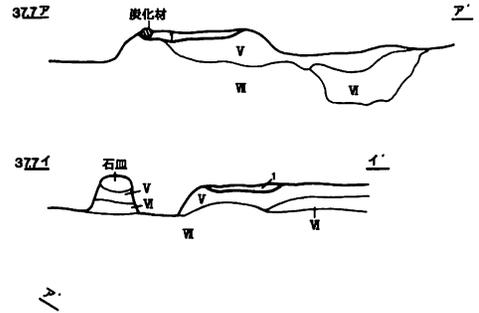


L F 192
1 明褐色焼土

L F - 193



L F 193
1 明褐色焼土

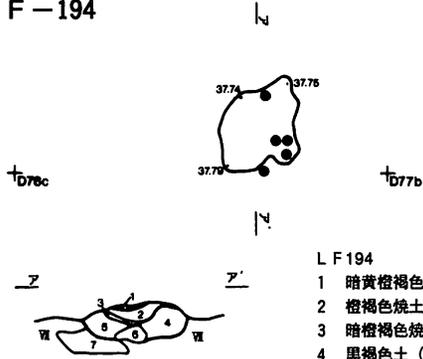


L F - 195



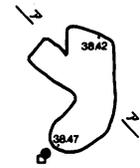
L F 195
1 暗橙褐色焼土

L F - 194

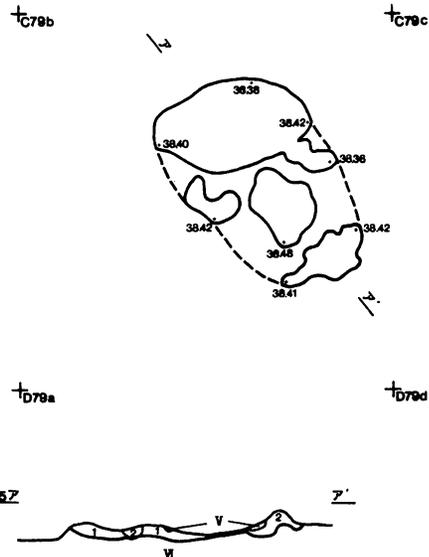


L F 194
1 暗黄橙褐色焼土
2 橙褐色焼土
3 暗橙褐色焼土
4 黒褐色土 (IV>>V)
5 暗褐色土 (VI>>V)
6 暗褐色土 (IV>VI)
7 暗黄褐色土 (VII>>V)

+D78d +D79a

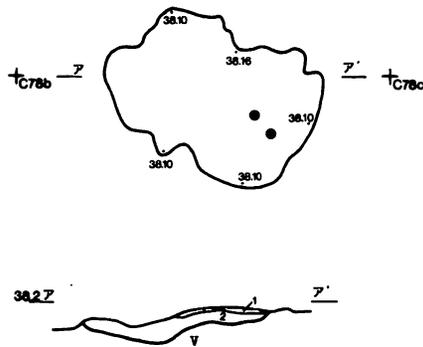


L F - 197



L F 197
1 暗橙褐色焼土
2 橙褐色焼土

L F - 196

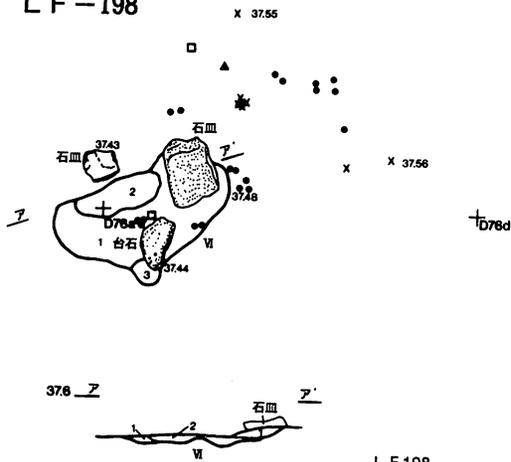


L F 196
1 暗褐色焼土
2 橙褐色焼土

図 III - 19 L F - 192 ~ 197

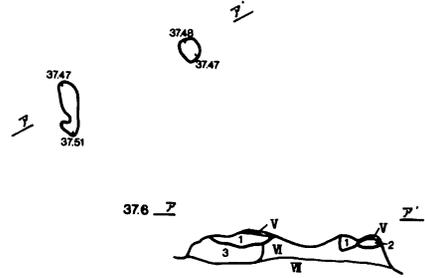
III 遺構とその遺物

L F - 198



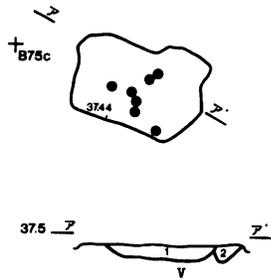
- L F 198
 1 暗褐色土 (V>>VI)
 2 明橙褐色焼土
 3 暗褐色焼土

+C75a L F - 199



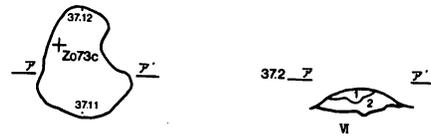
- L F 199
 1 橙褐色焼土
 2 暗橙褐色焼土
 3 暗褐色土 (木の根などによる攪乱、V+VI)

L F - 200



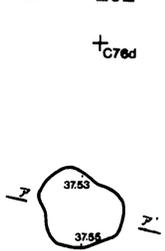
- L F 200
 1 橙褐色焼土
 2 明橙褐色焼土

L F - 201



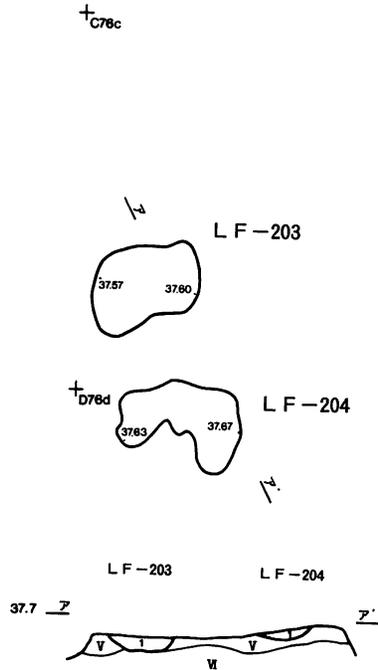
- L F 201
 1 黄褐色土 (VI、焼土がごく少量混じる)
 2 橙褐色焼土

L F - 202



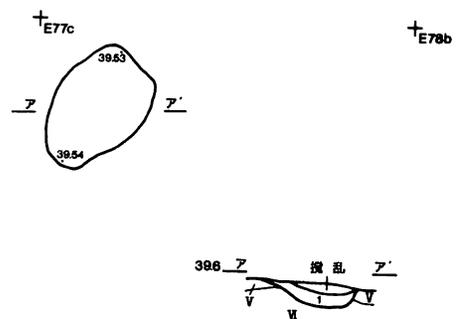
- L F 202
 1 暗橙褐色焼土

L F - 203・204



- L F 203・204
 1 暗橙褐色焼土

L F - 208

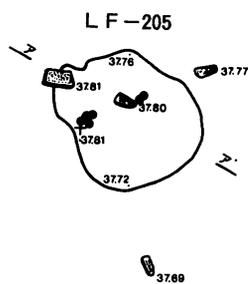


- L F 208
 1 橙褐色焼土

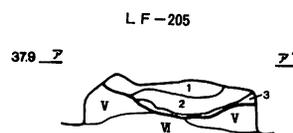
図 III - 20 L F - 198 ~ 204・208

LF-205・206・207

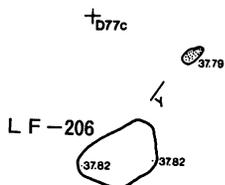
III 遺構とその遺物



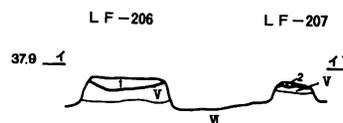
D77d



- LF 205
 1 暗橙褐色焼土
 2 橙焼土
 3 暗橙褐色焼土



D77c



- LF 206・207
 1 橙褐色焼土
 2 暗橙褐色焼土

LF-207



E77a

E77d

LF-221

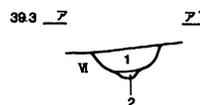
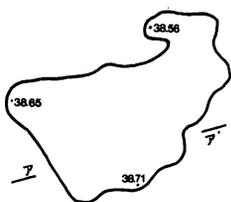
LF-220

E80c

E81b



D81a



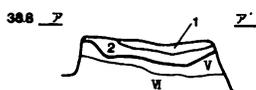
- LF 221
 1 暗橙褐色焼土
 2 橙褐色焼土

F80d

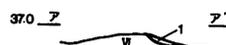
F81a

LF-222

F71d



- LF 220
 1 暗橙褐色焼土
 2 橙褐色焼土



- LF 222
 1 橙褐色焼土

図 III-21 LF-205~207・220~222

III 遺構とその遺物

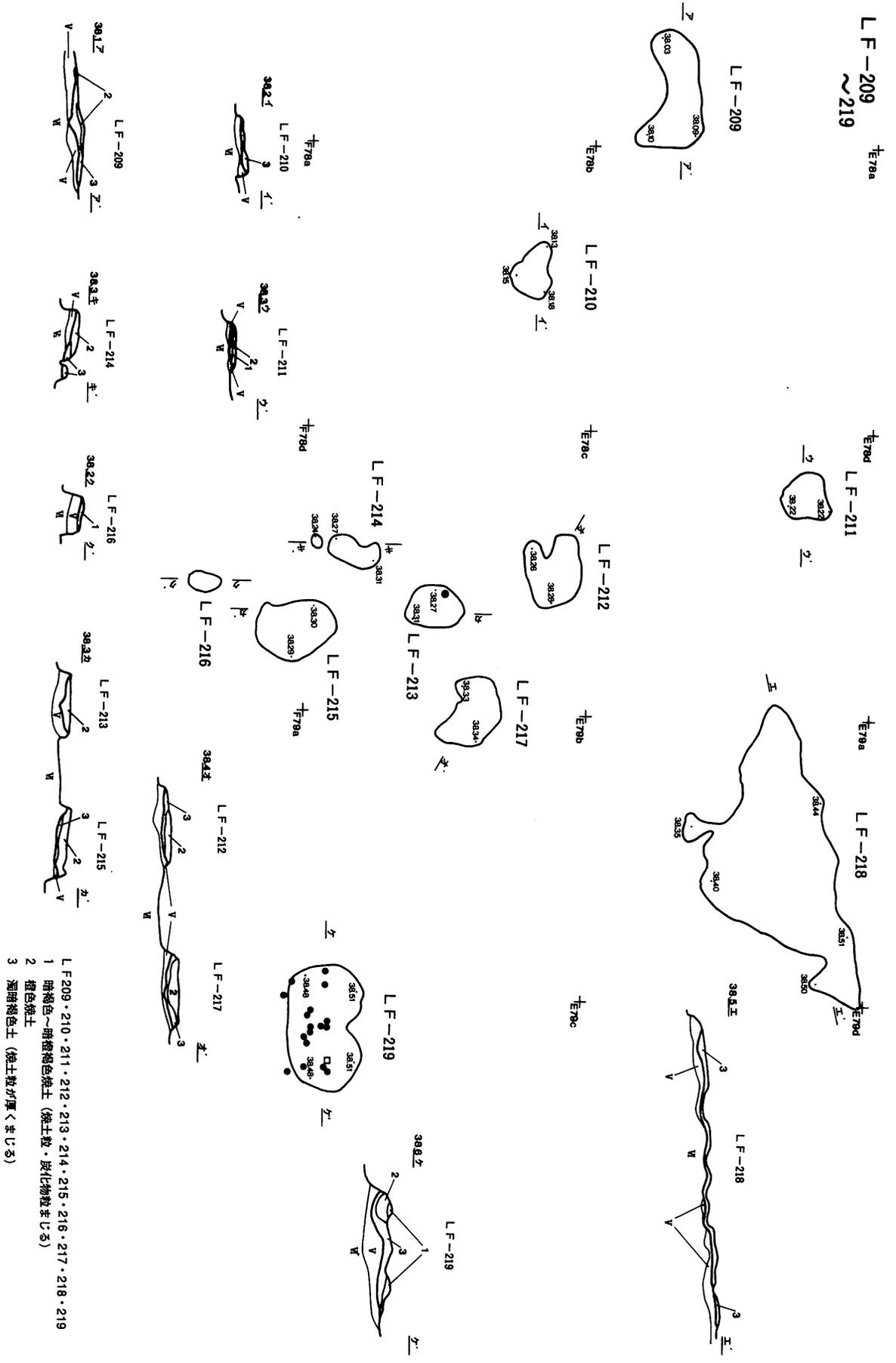
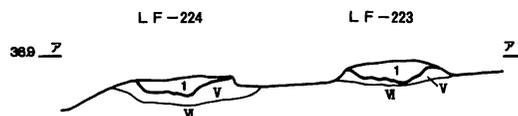
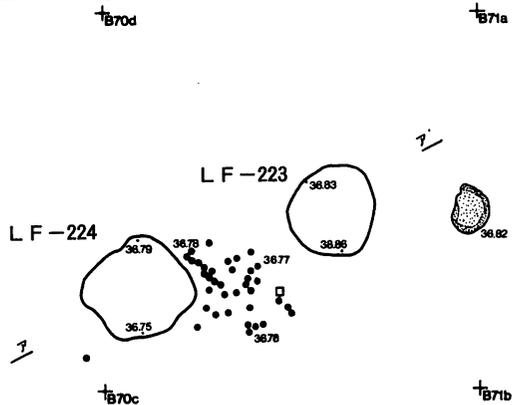


図 III-22 LF-209~219

LF 209・210・211・212・213・214・215・216・217・218・219
 1 暗褐色~暗黒褐色雑土 (雑土粒・炭化物がまじる)
 2 棕色雑土
 3 濁暗褐色土 (雑土粒が厚くまじる)

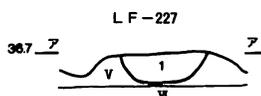
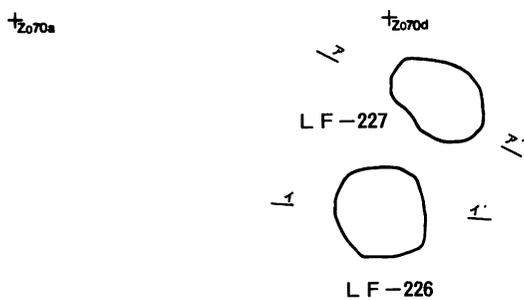
III 遺構とその遺物

L F - 223 ・ 224



L F 223 ・ 224
1 明橙色焼土

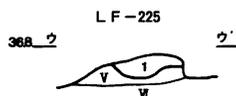
L F - 225 ・ 226 ・ 227



L F 227
1 黄橙褐色焼土

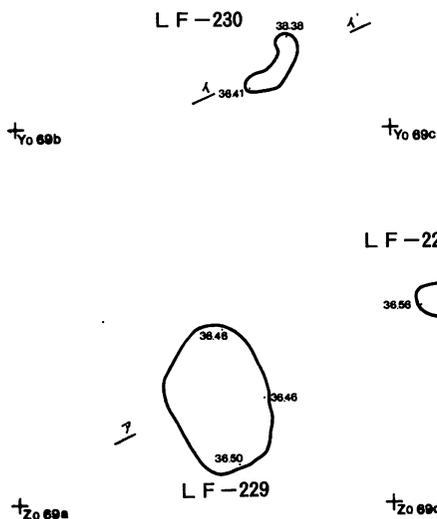


L F 226
1 暗橙褐色焼土
2 橙褐色焼土

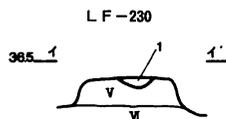


L F 225
1 橙褐色焼土

L F - 228 ・ 229 ・ 230



L F 228 ・ 229
1 暗橙褐色焼土
2 橙褐色焼土
3 暗黄橙褐色焼土



L F 230
1 橙褐色焼土

図 III - 23 L F - 223 ~ 230

III 遺構とその遺物

LF-231・232

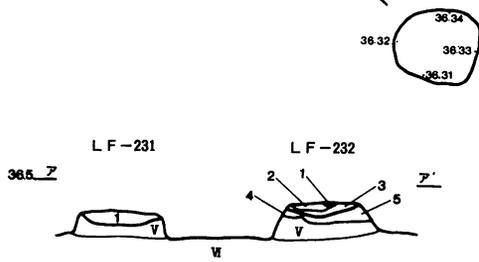
±Z068b

LF-231

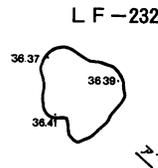
±Z068c

LF-233

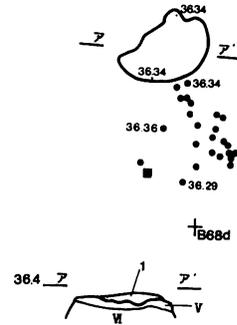
±A68c



- LF231・232
 1 橙褐色焼土
 2 黒褐色土 (焼土粒混じる)
 3 暗橙褐色焼土
 4 黒褐色土 (V>VI)
 5 暗黄褐色土 (V>VI、焼土粒混じる)

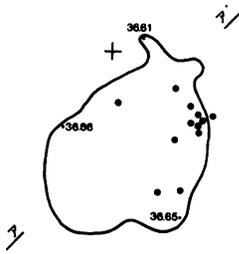


±A68d

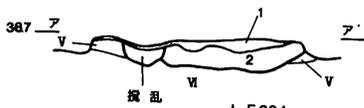


±B68d

LF-234



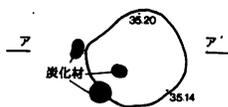
±Z067d



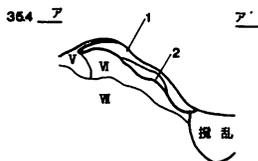
- LF234
 1 暗橙褐色焼土 (炭化材少量まじる)
 2 橙褐色焼土

LF-239

±B66d



±B66a

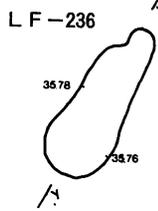


- LF239
 1 暗橙褐色焼土
 2 橙褐色焼土

±A65b

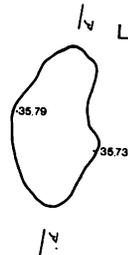
LF-235・236

±A66a

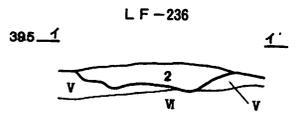
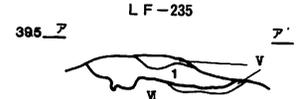


LF-236

±A66d



LF-235



LF233

- 1 橙褐色焼土

LF235・236

- 1 明橙褐色焼土
 2 橙褐色焼土

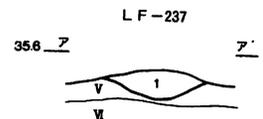
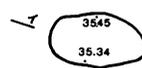
LF-237・238

LF-237

±A65a



LF-238



- LF237
 1 明橙褐色焼土



- LF238
 1 明橙褐色焼土

図III-24 LF-231~239

III 遺構とその遺物

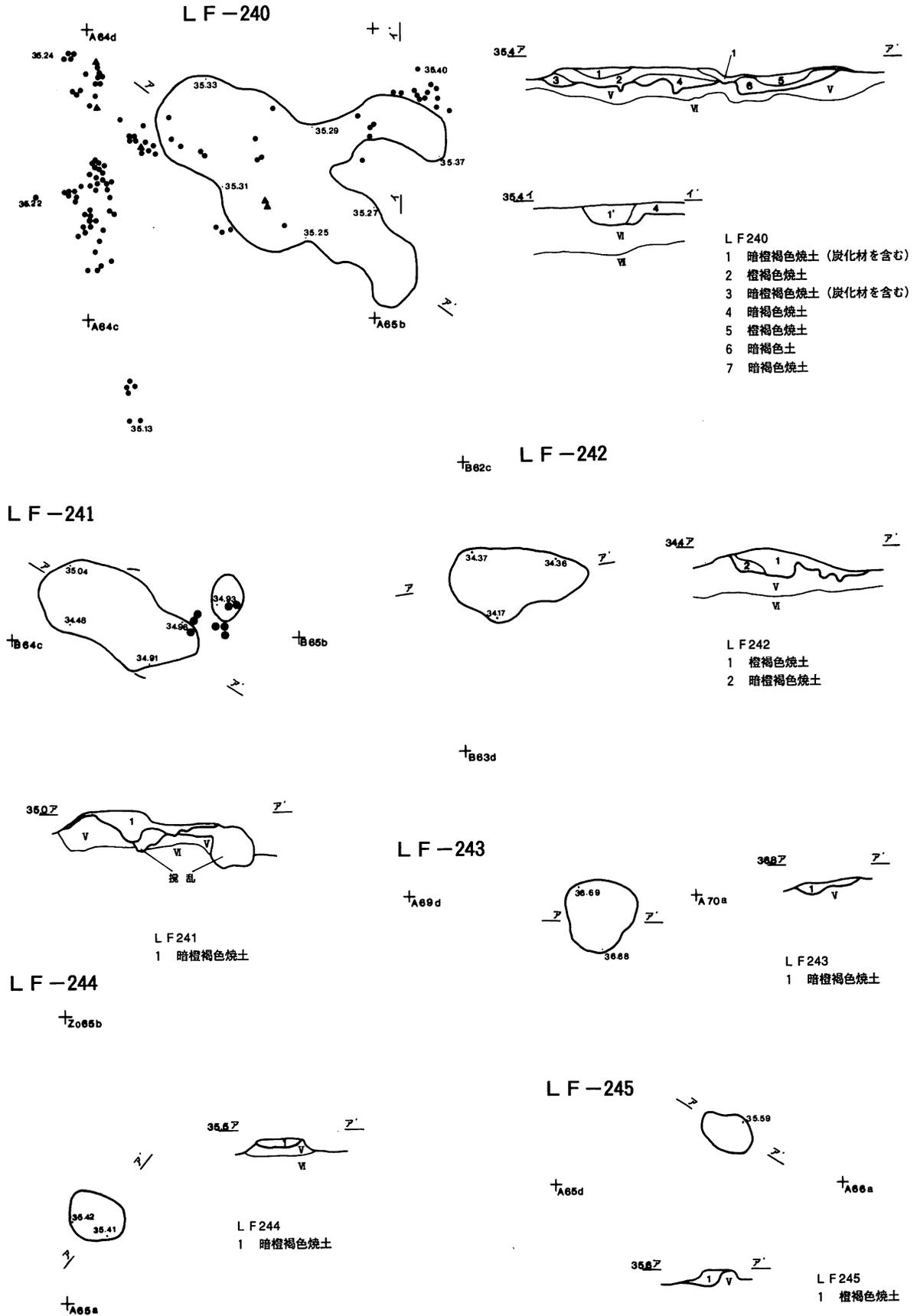


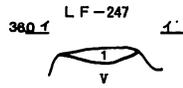
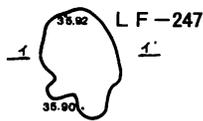
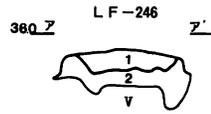
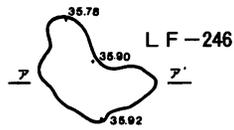
図 III - 25 L F - 240 ~ 245

III 遺構とその遺物

LF-246・247・248・250

±Zo66c

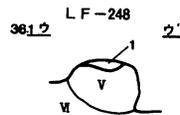
+



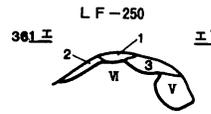
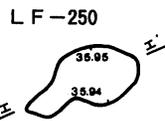
LF 246・247
1 橙褐色焼土
2 黒褐色土 (V>VI)

±Zo66d

LF-248 ±Zo67a



LF 248
1 暗橙褐色焼土



LF 250
1 明橙褐色焼土
2 橙褐色焼土
3 暗橙褐色焼土

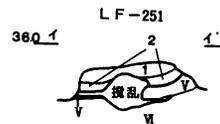
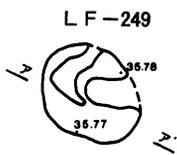
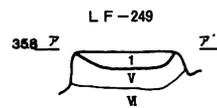
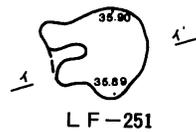
±Zo66c

±Zo67b

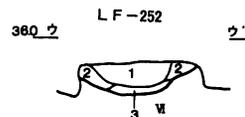
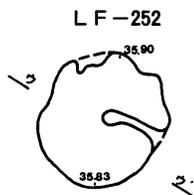
LF-249・251・252

±Zo66a

±Zo66d



±Zo66b



LF 249・251・252
1 橙褐色焼土
2 暗橙褐色焼土
3 明橙褐色焼土

図III-26 LF-246~252

LF出土のⅣ群c類土器（図Ⅲ-27-2、10～11、19～20 図Ⅲ-29-4）

LF出土のⅣ群c類土器は154点出土し、復元個体1個体、拓本5点を掲載した。
復元個体の図Ⅲ-27-2は内側から外側への突瘤文が施された堂林式のものである。

LF出土のⅤ群a類土器（図Ⅲ-29-10）

LF出土のⅤ群a類土器は2点出土し、拓本1点を掲載した。

LF出土のⅤ群c類土器（図Ⅲ-27-4、12～16、図Ⅲ-29-2、3、5～7、9）

LF出土のⅤ群c類土器は396点出土し、拓本12点を掲載した。出土の点数が多かったが復元個体として掲載できるまで接合されるものはなかった。口唇上に刻み目を持つもの、縄線文を施すものが見られた。

LF出土のⅥ群a類土器（図Ⅲ-27-3）

LF出土のⅥ群a類土器は6点出土し、復元個体1個体を掲載した。

図Ⅲ-27-3は恵山式である。LF-240焼土上、焼土中、付近のⅤ層とA64区出土のものが接合した。
(倉橋)

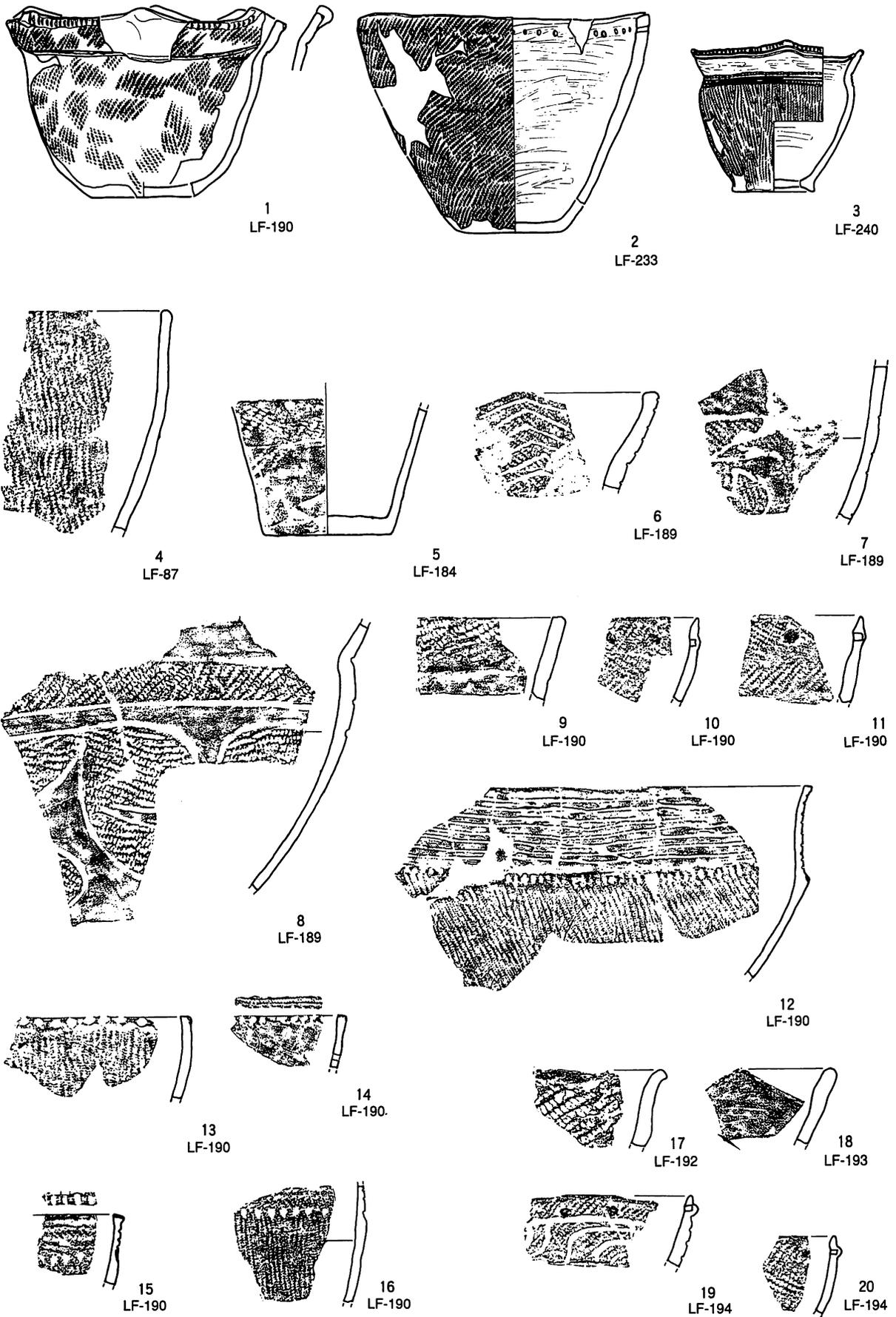
LF出土の石器（図Ⅲ-30、31）

図Ⅲ-30-1はLF-182出土。たたき石。石質は砂岩。図Ⅲ-30-2～6はLF-190出土。2は石鏃。石質は黒曜石。3はスクレイパー。石質は黒曜石。4はたたき石。石質は砂岩。5は台石。石質は砂岩。6は台石。石質は安山岩。図Ⅲ-31-1はLF-198出土。石皿。石質は砂岩。図Ⅲ-31-2はLF-205出土。石斧。石質は泥岩。図Ⅲ-31-3、4はLF-236出土。玉。石質はカンラン岩。図Ⅲ-31-5はLF-238出土。スクレイパー。石質は黒曜石。図Ⅲ-31-6はLF-240出土。玉。石質はカンラン岩。図Ⅲ-31-7はLF-248出土。石鏃。石質は黒曜石。

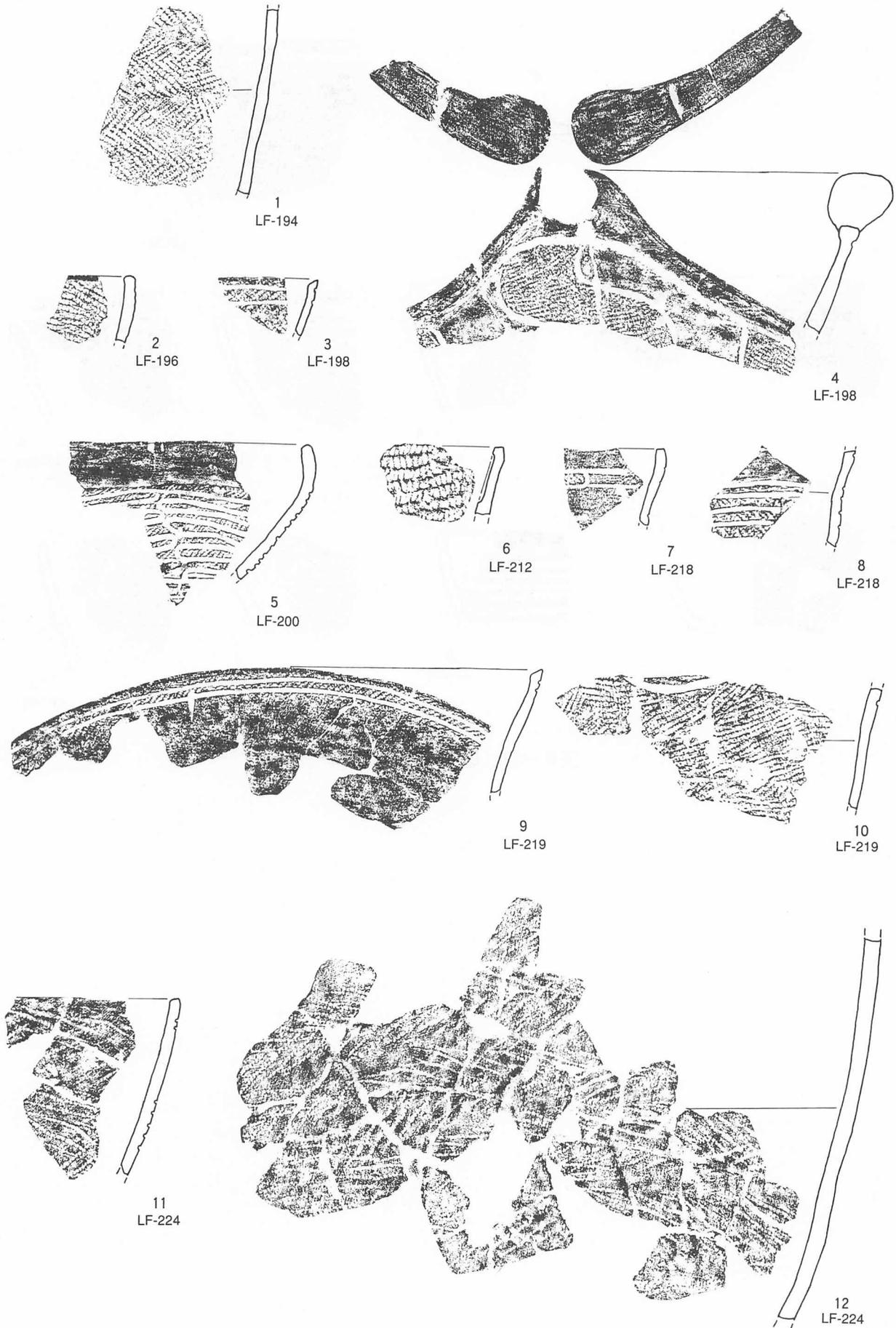
LF-190出土の台石（図Ⅲ-30-5、6）は、図Ⅲ-18に見られるように斜めに立つように出土した。LF-190をはさむ包含層には、たたき石、すり石が検出されており、LF-190の屋外炉の可能性は強い。図Ⅲ-31-3、4の玉は焼土の中層から出土した。焼土の中層から出土したため、その下位に土壌がないか精査したが、確認できなかった。焼土の時期が縄文晩期タンネトウL式の時期であるので、それと同時期か、それよりも少し古い縄文時代後期～晩期のものとする。

焼土から出土した玉はカンラン岩製で、包含層から出土したものはヒスイ製である。形態も石材も違い、時期差が考えられる。
(倉橋)

Ⅲ 遺構とその遺物

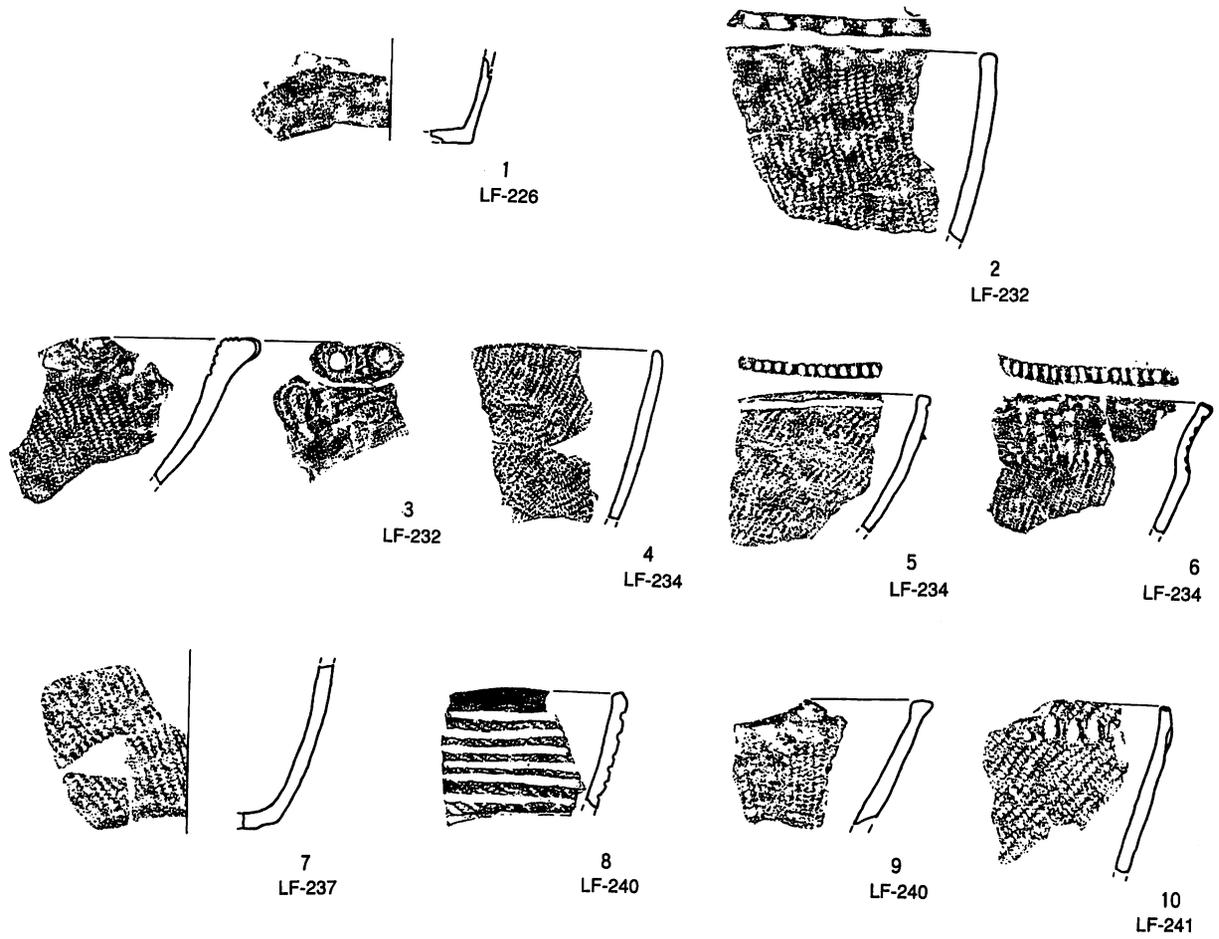


図Ⅲ-27 LF出土の土器(1)

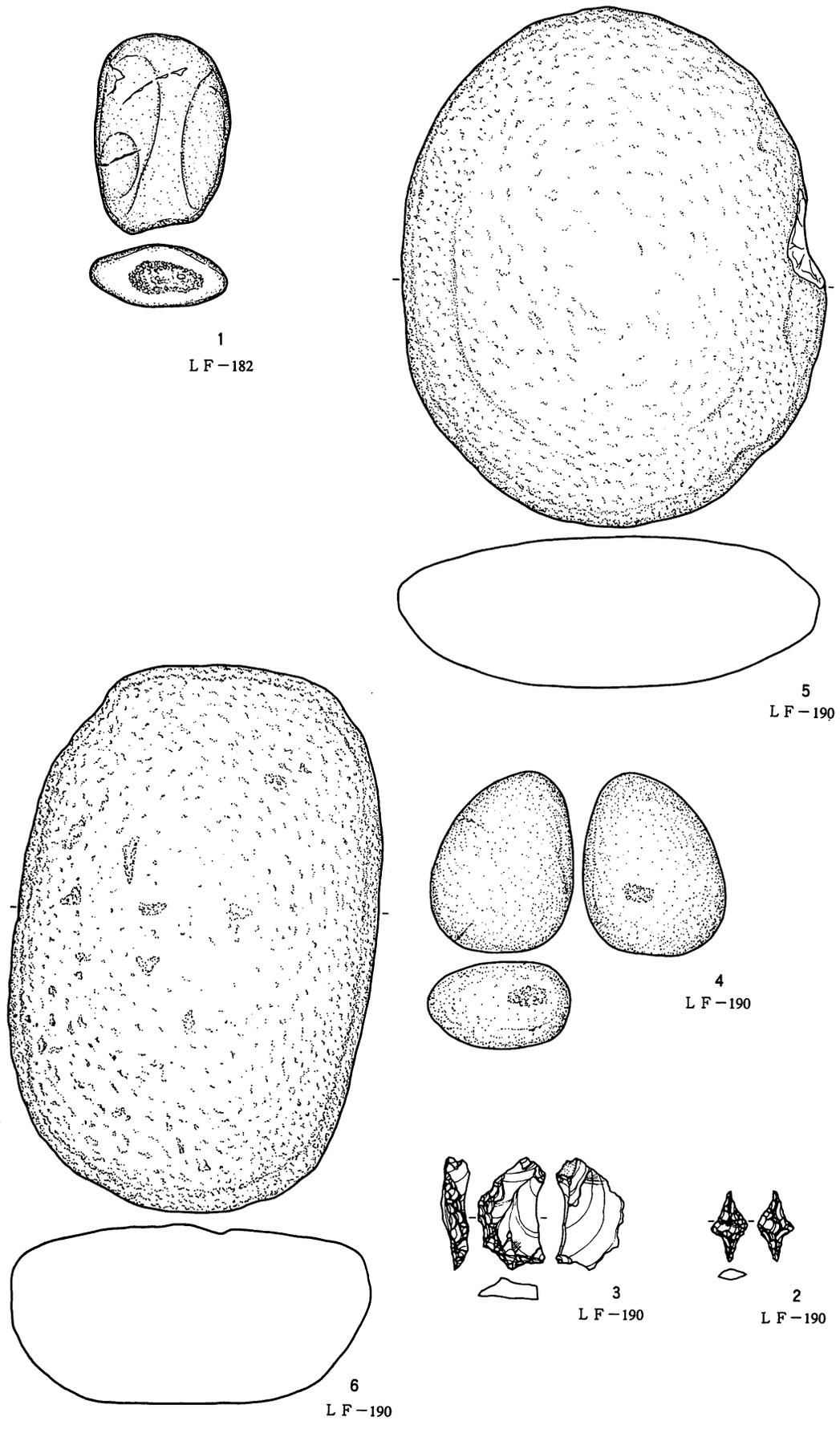


図Ⅲ-28 LF出土の土器(2)

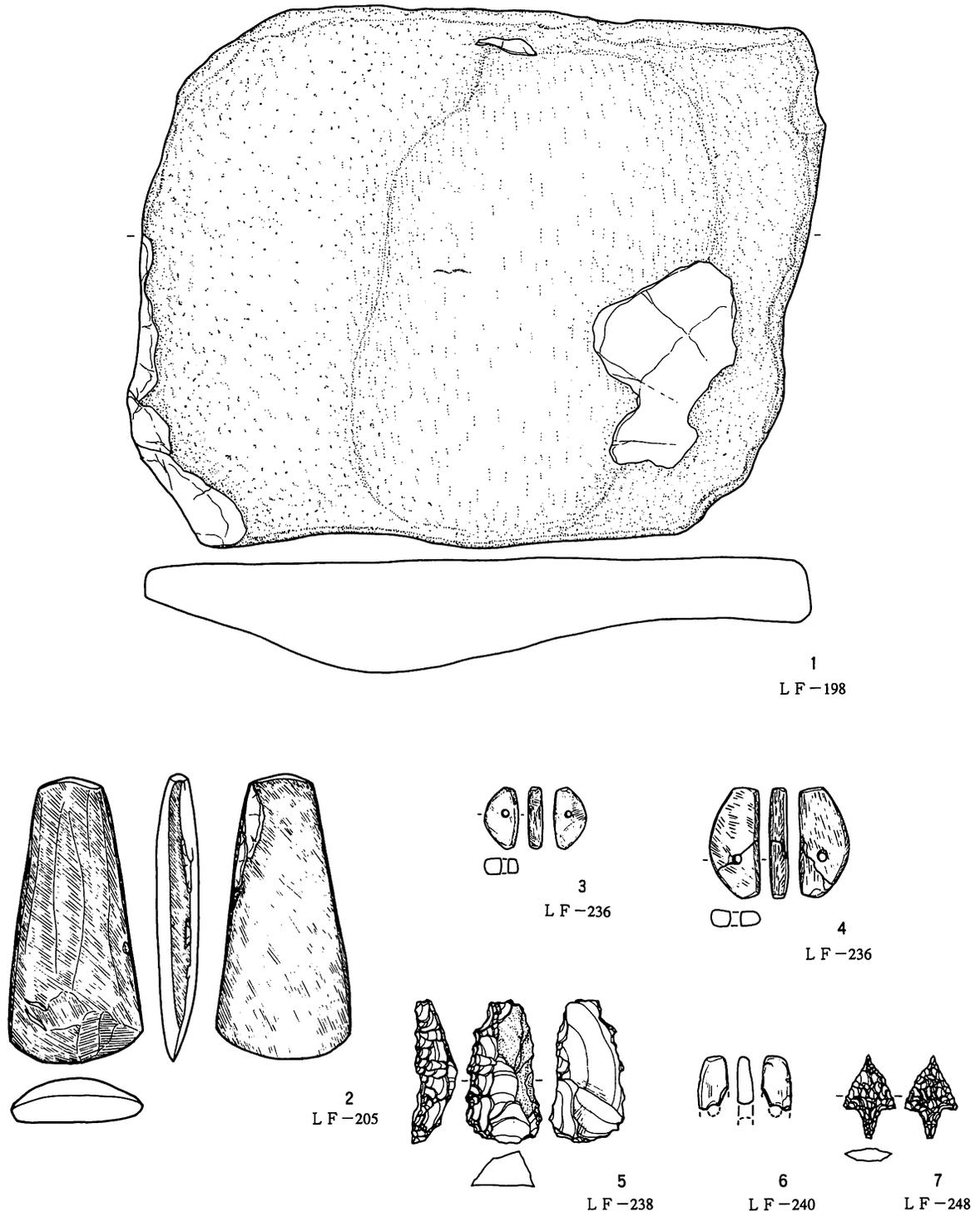
III 遺構とその遺物



図Ⅲ-29 LF出土の土器(3)



図III-30 LF出土の石器(1)



図Ⅲ-31 LF出土の石器(2)・玉

III 遺構とその遺物

表Ⅲ-3 遺構掲載土器・土製品一覧(1)

図番号	出土遺構 包含層名		層位	遺物 番号	点数	分類	器形	部位	文 様 等					
図Ⅲ-3-1	H	24	床直上	4	3	Ⅳb	深鉢	口頸～胴	文様帯の上部を欠く。3条の横沈線に、○C、又は の縦の沈線で区画。ヘラ状工具で調整後、ミガキ。内面ミガキ。器面は黄褐色、内面は暗褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は良好。					
	E	81								d	V	14	2	
図Ⅲ-3-2	H	24	床直上	1		Ⅳb	深鉢	口頸～底	頸部に2本の横沈線。頸部の下に7本の横沈線。縦の○Cの区画。地文LR横回転斜行縄文。部分的に磨消されている。内面はミガキ。平底。器面は暗褐色を呈す。石英、角閃石を含む。					
	H	24								床直上	3			
図Ⅲ-6-1	H	25				Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は少し丸みを帯びた角形。地文LR横回転斜行縄文。7条の横沈線に縦に3条の沈線の区画が残存。器面は暗褐色を呈す。長石、石英、角閃石を含む。焼成は中程度。					
	E	81								d	V	14	1	
図Ⅲ-6-2	H	25	床面	17	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇はやや丸みを帯びた角形。口唇より1.5cm程が横ナデ。ヘラ状工具で横沈線状の区画。1対の補修孔。地文LR横回転斜行縄文。部分的に磨消されている。内面はミガキ。器面は黄褐色、内面は暗褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。					
	E	81								d	V	2	1	
図Ⅲ-6-3	H	25	床面	11	1	Ⅳb	深鉢	胴～底	横沈線が1条残存。地文LR横回転斜行縄文。部分的に磨消されている。一部炭化物が付着する。地文の切れ目に沈線状のヘラ調整。内面はミガキ。一部炭化物が付着する。平底。器面は暗褐色、内面は黒褐色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成はやや悪。					
	H	25								床面	13	2		
	H	24								床直上	1	3		
	H	24								床直上	3	4		
図Ⅲ-8-1	H	26	覆土下	13	2	Ⅳb	深鉢	口縁～底	口唇は角形。真っ直ぐ立ち上がる。6条の横沈線に、○Cの縦の区画、角形工具による刺突文が交互に入る。頸部は少しくびれる。地文LR施文後、13条の横沈線と○Cの縦の区画、角形工具による刺突文が交互に入る。 口縁部のパターンと反対になっている。胴部の下部は部分的に磨消。内面はミガキ。器面は黄褐色、内面は暗褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。口径26.5cm。器高32.1cm。底径9.2cm。					
	H	26								覆土下	7	6		
	H	26								覆土中		22		
	H	26								覆土上	12	11		
	H	26								覆土下	6	11		
図Ⅲ-8-2	H	26	覆土上	12	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。真っ直ぐ立ち上がる。地文RL横回転斜行縄文。器面は黄褐色を呈す。内面はミガキ。砂礫、角閃石を含む。焼成は良好。					
	H	26								覆土中	14	1		
	E	81								a	V	15	1	
	H	26								覆土下	5			
	H	26								覆土上	12			
図Ⅲ-8-4	H	26	覆土中	1		Ⅳb	深鉢	胴～底	地文LR横回転斜行縄文。○Cの沈線が11段残存する。地文LR横回転斜行縄文。部分的に磨消されている。残存部下部1/3は無文、ミガキ。内面はナデとミガキ。底面はミガキ。平底。全面が残存する。器面は黄褐色を呈す。砂礫、角閃石を含む。焼成は良好。					
	H	26								覆土下	5			
	H	26								覆土上	12			
図Ⅲ-8-5	H	26	覆土下	4		Ⅳb	深鉢	胴～底	地文LR+RL横回転斜行縄文。部分的に磨消されている。残存部1/2は粗いミガキ。一部が黒ずんで2次的な焼成を受けた可能性がある。内面はナデ。一部に炭化物が付着する。底部は平底。全面が残存する。器面は黄褐色、内面は茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。					
	H	26								覆土上	12			
	LF	190								焼土上	7			
図Ⅲ-8-6	E	80	風倒	7	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。8条の横沈線。○Cの縦の区画。LR横回転斜行縄文。文様帯の間はミガキ、内面はミガキ。一部に炭化物が付着する。砂礫、角閃石を含む。焼成は中程度。図Ⅲ-8-7と同一個体。					
	E	83								a	V	20	1	
図Ⅲ-8-7	H	26	覆土中	11	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。ゆるやかな山形の突起。8条の横沈線。LR横回転斜行縄文。○Cの縦の区画。文様帯の間はミガキ。その下に4条の横沈線。内面はナデとミガキ。器面は暗褐色、内面は黄褐色を呈す。砂礫、角閃石を含む。焼成は中程度。図Ⅲ-8-6と同一個体。					
	LP	76								覆土上	2	1		
図Ⅲ-10-1	C	79	a	V	39	2	Ⅳb	壺	口縁～胴	口唇は丸みを帯びる。頸部はミガキ。LR横回転斜行縄文。内面はミガキ。器面は灰色を呈す。口径10.5cm。器高23.0cm。底径9.0cm。				
	C	79									a	V	42	1
	C	79									a	V	50	26
	D	77									c	Ⅲ	10	1

Ⅲ 遺構とその遺物

表Ⅲ-4 遺構掲載土器・土製品一覧(2)

図番号	出土遺構 包含層名	層位	遺物 番号	点数	分類	器形	部位	文 様 等						
図Ⅲ-14-1	LP	68	覆土上	2	8	Ⅳb	深鉢	口縁～底	口唇は角形。平縁。底部からゆるやかな開きで立ち上がる。地文LR横回転斜行縄文。内面はミガキ。底部付近は無文。器面の胴部上半は黒褐色、炭化物が部分的に付着する。胴部下半は暗黄褐色を呈す。小礫、角閃石を含む。口径28.0cm。器高21.6cm。底径8.0cm。					
	LP	74	覆土	4	1									
	E	81	a	V	15					1				
	D	81	c	V	16					1				
	E	81	b	V	11					1				
	E	81	b	V	12					2				
	E	81	b	V	19					1				
図Ⅲ-14-2	LP	70	覆土	1	3	Ⅳc	深鉢	口縁～胴	口唇は角形。口唇の下に1条の横沈線。内側から外側への突瘤文。LR+RL横回転斜行縄文。頸部は2条の横沈線の間に無文、横ミガキ。底部は欠損。口径35.8cm。器高36.8cm。底径11.6cm。					
	Zo	74	c	Ⅲ	5					1				
	Zo	75	b	Ⅲ	1					1				
	Zo	75	b	V	2					2				
	A	74	d	Ⅲ	8					2				
	A	74	d	V	20					1				
	A	75	b	Ⅲ	16					1				
	B	73	d	Ⅲ	3					1				
	B	74	c	V	9					29				
	B	74	c	V	18					11				
	B	74	c	Ⅲ	17					1				
	B	74	d	V	2					1				
	B	74	d	Ⅲ	13					1				
	B	74	d	V	19					1				
	B	79	d	V	8					1				
	C	74	b	Ⅲ	2					2				
	C	74	d	V	6					1				
	C	75	a	V	12					2				
	C	76	d	V	2					1				
	C	77	d	Ⅲ	2					1				
	E	79	a	V	4					1				
	E	79	a	V	3					1				
	E	82	b	V	5					1				
	表	採18	風倒木痕		1									
	図Ⅲ-14-3	LP	75	覆土下							Ⅳb	深鉢	口縁～胴	口唇は角形。口縁～頸部は横ミガキ。地文はLR横回転斜行縄文。内面はミガキ。器面は黄褐色を呈す。焼成は中程度。口径45.5cm。器高(30.8)cm。
		B	83	d	V					5				
B		83	b	V	4	1								
B		84	a	V	1	5								
B		84	b	V	2	4								
C		80	d	V	1	1								
C		83	c	Ⅲ	6	1								
C		83	a	V	3	3								
C		83	d	V	1	5								
C		83	b	V	4	2								
C		84	a	V	4	2								
D		83	d	Ⅲ	6	1								
D		84	a	V	1	1								
E	80	d	Ⅲ	14	6									
図Ⅲ-15-1	LP	67	覆土	1	1	Ⅳb	深鉢	口縁	1条の横沈線。地文LR横回転斜行縄文。内面はミガキ。器面は黄褐色を呈す。砂礫、角閃石、繊維を含む。					
図Ⅲ-15-2	LP	76	覆土	1	4	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。LR横回転斜行縄文。器面は上部は黒褐色、下部は茶褐色。内面はミガキ、茶褐色を呈す。砂礫を含む。焼成は中程度。					
図Ⅲ-27-1	LF	190	V	1	14	Ⅳb	鉢	口縁～底	緩やかな波状口縁で、6ヶ所の突起部を持つ。口唇全体に刻み目が入る。頸部にへら状の工具による沈線が施される。地文LR横回転斜行縄文。底部は平底で、わずかに残存する。砂礫、石英、角閃石を含む。焼成は中程度。口径21.3cm。器高13.8cm。					
	C	81	b	V	14					3				
図Ⅲ-27-2	LF	233		1	19	Ⅳc	鉢	口縁～底	平縁。切り出しナイフ形。内側から外側への突瘤文。LR横回転斜行縄文。底部は欠損。内面はミガキ。口径21.3cm。器高15.8cm。					
	A	68	b	Ⅲ	1					21				
	A	68	c	Ⅲ	11					17				
図Ⅲ-27-3	LF	240	焼土中	4	1	Ⅳa	深鉢～鉢	口縁～底	口唇は角形。真っ直ぐ外側に立ち上がる。口唇上の外側に縦の刻み目がある。4ヶ所の緩やかな山形の突起を持つ。口縁部に2条の横沈線。頸部に押し引きによる4条の横沈線。内面にも1条横沈線。RL斜回転縄文が縦走する。上げ底。口径12.5cm。器高11.8cm。底径6.0cm。					
	LF	240	V	2	1									
	LF	240	V	6	2									
	LF	240	焼土上	7	2									
	A	64	b	Ⅲ	4					2				
	A	64	c	Ⅲ	2					2				
A	64	d	Ⅲ	3	9									

表Ⅲ-5 遺構掲載土器・土製品一覧(3)

図番号	出土遺構 包含層名		層位	遺物 番号	点数	分類	器形	部位	文 様 等
図Ⅲ-27-4	LF	87	焼土中	5	1	Vc	深鉢	口縁	口唇は切り出しナイフ形で、少し丸みを帯びる。少し内傾する。地文LR斜回転。縄文が縦走る。器面は黄褐色を呈す。砂礫が混じる。
	LF	87	焼土上	4	1				
図Ⅲ-27-5	LF	184		2	14	Ⅳb	深鉢	底部	地文LR横回転斜行縄文。部分的に磨消されている。残存部の下部1/2は無文。内面はナデ。部分的に炭化物が付着する。平底。器面は黄褐色、内面は黒褐色を呈す。砂礫を含む。
図Ⅲ-27-6	LF	189	Ⅲ風倒	3	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。ゆるやかな山形の突起。RL横回転斜行縄文。6条の横沈線。器面は茶褐色を呈す。砂礫、石英、角閃石を含む。
図Ⅲ-27-7	LF	189	Ⅲ風倒	3	2	Ⅳb	深鉢	胴部	RL横回転斜行縄文。沈線による渦巻き状の文様。器面は黄褐色を呈す。内面は黒ずんでいる。砂礫を含む。角閃石を含む。
図Ⅲ-27-8	LF	189	焼土中	2	1	Ⅳb	深鉢	胴部	ミガキによる無文帯。RL横回転斜行縄文。沈線による文様。磨消。器面は茶褐色を呈す。砂礫、石英、角閃石を含む。
	C	79	a	V	11	1			
	C	79	b	V	31	1			
図Ⅲ-27-9	LF	190	V	7	1	Ⅳb	深鉢	口縁	角形。LR横回転斜行縄文。1条の横沈線。その下は無文帯。部分的に磨消されている。器面は黄褐色を呈す。砂礫、石英、角閃石が混じる。
図Ⅲ-27-10	LF	190	焼土中	2	2	Ⅳc	深鉢	口縁	切り出しナイフ形。内側から外側に突縮文。LR+RL横回転斜行縄文。内面はミガキ。器面は黄褐色を呈す。砂、角閃石が混じる。
図Ⅲ-27-11	LF	190	焼土上	4	1	Ⅳc	深鉢	口縁	切り出しナイフ形。内側から外側に突縮文。地文RLとLR横回転斜行縄文。部分的に磨消。器面は茶褐色を呈す。長石、角閃石を含む。
図Ⅲ-27-12	LF	190	V	2	2	Vc	深鉢	口縁	角形。9条の横沈線。頸部に段が付き、縦の刻みが入る。地文RL斜回転。縄文が縦走る。器面は茶褐色を呈す。石英、角閃石を含む。内面は黒ずんでおり、部分的に炭化物が付着する。
	LF	190	焼土上	3	1				
	D	80	d	Ⅲ	9	1			
	D	81	a	V	15	4			
図Ⅲ-27-13	LF	190	焼土中	4	1	Vc	深鉢	口縁	角形。口唇上の外側に丸い刻み目がある。RL斜回転。縄文が縦走る。器面は黄褐色を呈す。石英、角閃石が混じる。
	LF	240	焼土中	10	1				
図Ⅲ-27-14	LF	190	焼土上	5	1	Vc	深鉢	口縁	角形。口唇上の外側にLRの圧痕。口唇上にLR縄線が2条走る。補修孔が1つ残る。LR斜回転。縄文が縦走る。部分的に磨消されている。器面は黄褐色を呈す。石英、角閃石が混じる。
図Ⅲ-27-15	LF	190	焼土中	1	1	Vc	深鉢	口縁	角形。外反する。LR横回転斜行縄文。器面は茶褐色、内面は褐色を呈す。砂礫、長石、角閃石を含む。図Ⅲ-27-16と同一個体
図Ⅲ-27-16	LF	190	焼土上面	1	1	Vc	深鉢	胴部	少し丸みを帯びる。真っ直ぐに立ち上がる。緩やかな山形の突起で、無文。外面、内面ともにミガキ。器面は茶褐色、内面は褐色を呈す。長石、角閃石を含む。図Ⅲ-27-15と同一個体
図Ⅲ-27-17	C	81	b	V	7	Ⅲb	深鉢	口縁	角形。口唇上に刻み目。2条のRLの縄線文。その下に絞くり文。その下に縄の端部の圧痕。地文RL斜回転。縄文が縦走る。器面は黒褐色を呈す。砂、石英が混じる。
図Ⅲ-27-18	LF	193	焼土上	7	1	Ⅳb	深鉢	口縁	2条の縄線文。その下から下の縄線文にかかるように縄の端部の圧痕。地文RL斜回転。縄文が縦走る。器面は黒褐色を呈す。砂、石英が混じる。
図Ⅲ-27-19	LF	194	焼土上	4	1	Ⅳc	深鉢	口縁	先細り気味。真っ直ぐ立ち上がる。内側から外側への突縮文。LR横回転斜行縄文施文後に沈線により区画。内面は粗いミガキ。器面は黄褐色を呈す。石英、角閃石が混じる。焼成は中程度。
	D	77	b	V	8	1			
図Ⅲ-27-20	LF	194	焼土上		1	Ⅳc	深鉢	口縁	先細り気味。真っ直ぐ立ち上がる。内側から外側への突縮文。LRとRL横回転斜行縄文。器面は黄褐色を呈す。内面はナデ。砂礫、石英、角閃石が混じる。
図Ⅲ-28-1	LF	194	焼土上	5	1	Ⅳb	深鉢	底部	地文LR+RL横回転斜行縄文により羽状縄文を構成する。内面は粗いミガキ。器面は黄褐色を呈す。砂礫、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅲ-28-2	LF	196	焼土中	2	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は少し丸みを帯びる角形。少し内傾する。RL横回転斜行縄文。内面はミガキ。器面は黄褐色を呈す。砂礫、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅲ-28-3	LF	198	V	7	2	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は切り出しナイフ形。少し内傾する。LR横回転斜行縄文。2条の横沈線。部分的に炭化物が付着する。内面はミガキ。器面は暗茶褐色を呈す。小礫を含む。焼成は中程度。
図Ⅲ-28-4	LF	198	V	5	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は丸みを持つT字状。2つの大きな突起を持つ。LR横回転斜行縄文。沈線施文後、磨消。内面は粗いミガキ。器面は黄褐色～暗茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は良好。
	C	75	c	V	1	1			
	D	82	d	V	4	1			
	D	83	a	Ⅲ	5	1			
図Ⅲ-28-5	LF	200	焼土中	4	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は少し丸みを帯びる。内傾する。ミガキによる無文帯。11条の沈線が残存する。〇〇の縦の区画。LR横沈線斜行縄文。内面はミガキ。器面は茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は良好。
	B	75	d	V	21	1			
	耕	作土		10	1				

III 遺構とその遺物

表Ⅲ-6 遺構掲載土器・土製品一覧(4)

図番号	出土遺構 包含層名		層位	遺物 番号	点数	分類	器形	部位	文 様 等	
図Ⅲ-28-6	LF	212		焼土中	1	1	Ⅲb	深鉢	口縁	LR横回転斜行縄文。内面は粗いミガキ。部分的に剝離。器面は黄褐色を呈す。小礫を含む。焼成はやや悪。
図Ⅲ-28-7	LF	218		V	1	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は丸みを帯びる角形。少し内傾する。2条の横沈線。ㄣ状の縦の沈線で区画。RL横回転斜行縄文。磨消。内面はミガキ。器面は橙褐色、内面は橙褐色～黄灰褐色を呈す。小礫、角閃石を含む。焼成は良好。
図Ⅲ-28-8	LF	218		V	1	1	Ⅳb	深鉢	胴	頸部には横沈線が1条残存する。その下はミガキにより無文。RL横回転斜行縄文。4条の横沈線が残存。ㄣが1つ残存。内面は粗いミガキ。器面は暗黄褐色、内面は黄灰褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は良好。
図Ⅲ-28-9	LF	219		焼土上	6	4	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は切り出しナイフ形。少し内傾する。LR横回転斜行縄文。2条の沈線施文後、磨消。その下はミガキにより無文。内面はミガキ。器面は茶褐色、内面は茶褐色から暗茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は良好。
	E	79	c	Ⅲ	2	2				
	F	79	a	Ⅲ	1	1				
	F	79	d	Ⅲ	3	2				
図Ⅲ-28-10	LF	219		焼土上	3	1	Ⅳb	深鉢	胴	沈線が残存。沈線の周辺のみミガキ。LR横回転斜行縄文。内面はミガキ。器面は橙褐色、内面は暗茶褐色を呈す。小礫、角閃石を含む。焼成は中程度。
	E	79	b	V	12	5				
図Ⅲ-28-11	LF	224		V	3	3	Ⅰb4	深鉢	口縁	口唇はやや丸みを持った角形。真っ直ぐに立ち上がる。LR燃糸文。内面は粗いミガキ。器面は橙褐色、内面は暗茶褐色～黄灰褐色を呈す。長石、石英、角閃石を含む。焼成は中程度。図Ⅲ-28-12と同一個体。
	B	70	a	Ⅲ	6	1				
図Ⅲ-28-12	LF	224		V	2	7	Ⅰb4	深鉢	胴	LR燃糸文。内面は粗いミガキ。器面は橙褐色、内面は暗茶褐色～黄灰褐色を呈す。長石、石英、角閃石を含む。焼成は中程度。図Ⅲ-28-11と同一個体。
	表	採			21					
	B	69	a	Ⅲ	4	1				
	B	70	d	Ⅲ	4	3				
図Ⅲ-29-1	LF	226		焼土中	1	1	Ⅳb	深鉢	底	平底。ミガキにより無文。内面はミガキ。炭化物が付着する。器面は暗黄褐色、内面は黒褐色を呈す。長石、石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
	LF	232		焼土上	1	2	Vc	深鉢	口縁	
図Ⅲ-29-2	LF	232		焼土上	1	2	Vc	深鉢	口縁	口唇は少し丸みを帯びる角形。少し内傾する。口唇上に指の大きさの刻み目がある。RL斜回転、縄文が縦走する。内面は粗いミガキ。器面は黄褐色を呈す。小礫、長石を含む。焼成は中程度。
図Ⅲ-29-3	LF	232		焼土上	1	1	Vc	深鉢 又は鉢	口縁	口唇上に2つの穴を持つ突起。LRの圧痕。RL斜回転縄文が縦走する。内面はミガキ。小礫、長石を含む。焼成は良好。
図Ⅲ-29-4	LF	234		焼土中	2	1	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は丸みを帯びる。真っ直ぐに立ち上がる。LRとRL横回転斜行縄文。内面はミガキ。器面は黄褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は良好。
	LF	234		焼土上	1	1				
図Ⅲ-29-5	LF	234		焼土中	2	1	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。少し内傾する。口唇上に小さな棒状の刻み。LR横回転斜行縄文。内面は粗いミガキ。器面は黄褐色を呈す。焼成は良好。
図Ⅲ-29-6	LF	234		焼土上	1	1	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。少し外反する。三角形の刻み目。LR斜回転、縄文が縦走する。内面は粗いミガキ。器面は茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。
	B	65	d	V	5	1				
図Ⅲ-29-7	B	65	d	Ⅲ	2	1				
	LF	237		V	1	5	Vc	深鉢	底	地文RL斜回転。縄文が縦走する。内面はナデ。部分的に炭化物が付着する。底部は平底で、上げ底。部分的に剝離している。内面は黄褐色を呈す。器面は黄褐色、内面は黄褐色～暗茶褐色を呈す。小礫を含む。焼成は中程度。
	LF	240		V	2	1				
	LF	240		V	6	2				
	LF	240		焼土上	7	2				
A	64	b	Ⅲ	4	2					
図Ⅲ-29-8	A	64	c	Ⅲ	2	2				
	A	64	d	Ⅲ	3	9				
図Ⅲ-29-8	LF	240		V	1	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。少し内傾する。RL横回転斜行縄文後に6条の横沈線。部分的に磨消。内面はミガキ。器面は黄褐色、内面は黄灰色を呈す。石英、角閃石を含む。
図Ⅲ-29-9	LF	240		V	2	1	Vc	深鉢	口縁	口唇は少し丸い膨らみを持つ。RL斜回転、縄文が縦走する。内面はナデ。器面は黄褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅲ-29-10	LF	241		焼土中	11	2	Va	深鉢	口縁	口唇は角形。少し内傾する。口唇上に刻み目を持つ。口縁にやや大きめの爪形の刻み目がある。LR斜回転、縄文が縦走する。部分的に炭化物が付着する。内面はナデ。器面は暗茶褐色を呈す。焼成は中程度。

Ⅲ 遺構とその遺物

表Ⅲ-7 住居跡出土石器掲載一覧

図番号	遺構名		層位	分類	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	材質
図Ⅲ-3-3	H	24	V	石鏃	33.5	21.4	6.6	2.22	黒曜石
図Ⅲ-3-4	H	24	床直上	石皿	178.0	120.0	18.0	900.00	砂岩
図Ⅲ-6-4	H	25	床直上	スクレイパー	31.9	90.0	7.5	16.70	黒曜石
図Ⅲ-6-5	H	25	覆土壁	スクレイパー	37.6	28.3	9.4	9.20	黒曜石
図Ⅲ-8-8	H	26	覆土中	石鏃	29.0	16.0	2.9	0.70	黒曜石
図Ⅲ-8-9	H	26	覆土中	つまみ付きナイフ	124.1	34.6	11.5	49.90	黒曜石

表Ⅲ-8 土壌出土石器掲載一覧

図番号	遺構名		層位	分類	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	材質
図Ⅲ-15-1	LP	74	覆土4	台石	160.0	196.0	140.0	7000.00	安山岩
図Ⅲ-15-2	LP	74	覆土4	台石	203.0	192.0	80.0	7000.00	安山岩

表Ⅲ-9 焼土出土石器掲載一覧

図番号	遺構名		層位	分類	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	材質
図Ⅲ-30-1	LF	182	焼土脇	たたき石	94.6	67.3	31.4	310.00	砂岩
図Ⅲ-30-2	LF	190	V	石鏃	22.8	12.4	4.0	0.70	黒曜石
図Ⅲ-30-3	LF	190	焼土上面	スクレイパー	37.3	20.6	7.5	6.00	黒曜石
図Ⅲ-30-4	LF	190	V	たたき石	69.9	89.5	43.9	404.60	砂岩
図Ⅲ-30-5	LF	190	V	台石	255.0	210.0	75.0	6000.00	安山岩
図Ⅲ-30-6	LF	190	V	台石	270.0	179.0	88.0	6100.00	安山岩
図Ⅲ-31-1	LF	198	V	石皿	256.0	319.0	53.0	6000.00	砂岩
図Ⅲ-31-2	LF	205	V	石斧	90.0	42.6	12.7	79.40	泥岩
図Ⅲ-31-3	LF	236	V	玉	19.5	10.6	4.5	1.70	カンラン岩
図Ⅲ-31-4	LF	236	V	玉	35.4	15.2	5.3	5.50	カンラン岩
図Ⅲ-31-5	LF	238	焼土中	スクレイパー	45.9	23.0	12.5	11.50	黒曜石
図Ⅲ-31-6	LF	240	焼土中	玉	16.7	9.3	4.3	1.40	ヒスイ
図Ⅲ-31-7	LF	248	焼土上面	石鏃	26.5	16.5	4.3	1.10	黒曜石

Ⅳ 包含層の遺物

1. 概要

包含層の土器は、現場での分類は昨年度報告の北埋調報105集キウス7(3)との継続性を持たせるため、当センター2部2課の鎌田望と、キウス5BC地区の現場の内業を行っていた中田裕香に協力をあおいた。また、現場期間中の札幌での土器の整理作業、及び11月からの冬期間の整理作業を同じく鎌田が担当し、土器の接合、復元、拓本の抽出、拓本の図版の作成までは鎌田により行われた。復元個体の図版、土器の分布図、掲載土器一覧、事実記載の文章の作成は、倉橋が行ない、土器全体の最終的な統括、チェックは倉橋が行った。

これまでのキウス7の調査でほとんど検出されていなかった縄文時代早期Ⅰ群b4類、またⅦ群の北大Ⅲ式、または十勝茂寄Ⅰ式、擦文文化期後期に属する土器が遺構に伴わず、包含層から出土した。

74点出土したB-70周辺では羽状縄文を構成する土器が多数出土しており、その部分はTa-cのⅣ層がほとんど検出されておらず、昨年までの調査で、Ⅵ群b類の統縄文時代の赤穴式が出土していたことから、これらの土器のまとまりもその時期のものかと考えていたが、整理作業における接合作業で器形がボウル形を呈し、縄文時代早期後葉のⅠ群b4類の東釧路Ⅳ式の特徴を確認したため、その時期のものとした。

Ⅶ群の北大Ⅲ式、または十勝茂寄Ⅰ式とした土器については、現場にて大沼氏に遺物を実見していただき、口頭でご教示いただいたものである。

十勝茂寄Ⅰ式の名称は、鈴木編(1996)所収の大沼忠春氏論文により十勝茂寄式をⅠ～Ⅳ期に細分されたものによる。大沼氏はⅠ～Ⅳ期の年代を6世紀後葉から7世紀中葉頃までと考えられている。

北大Ⅲ式の所属の年代、時期については、統縄文時代、擦文文化期の論があるが、ここでは大沼氏(1989)等の論に倣い、Ⅶ群の擦文文化期とした。

包含層の石器は、器種は昨年調査したキウス7遺跡(3)とほぼ同様である。新たに検出された器種は石錘で、長軸、短軸ともに打ち欠く、縄文時代前期に特徴的な形態をしているが、キウス7遺跡の出土土器にはそれに対応する時期の土器の出土はない。キウス川の対岸のキウス5遺跡のB地区からは当該期の遺構、遺物が多量に出土している。

黒曜石の棒状原石は、今年度調査、昨年度調査ともに出土している。千歳市ママチ遺跡など他の遺跡の例からは土壌などの遺構から検出されるものが多いようであるが、兩年とも包含層からの出土であった。

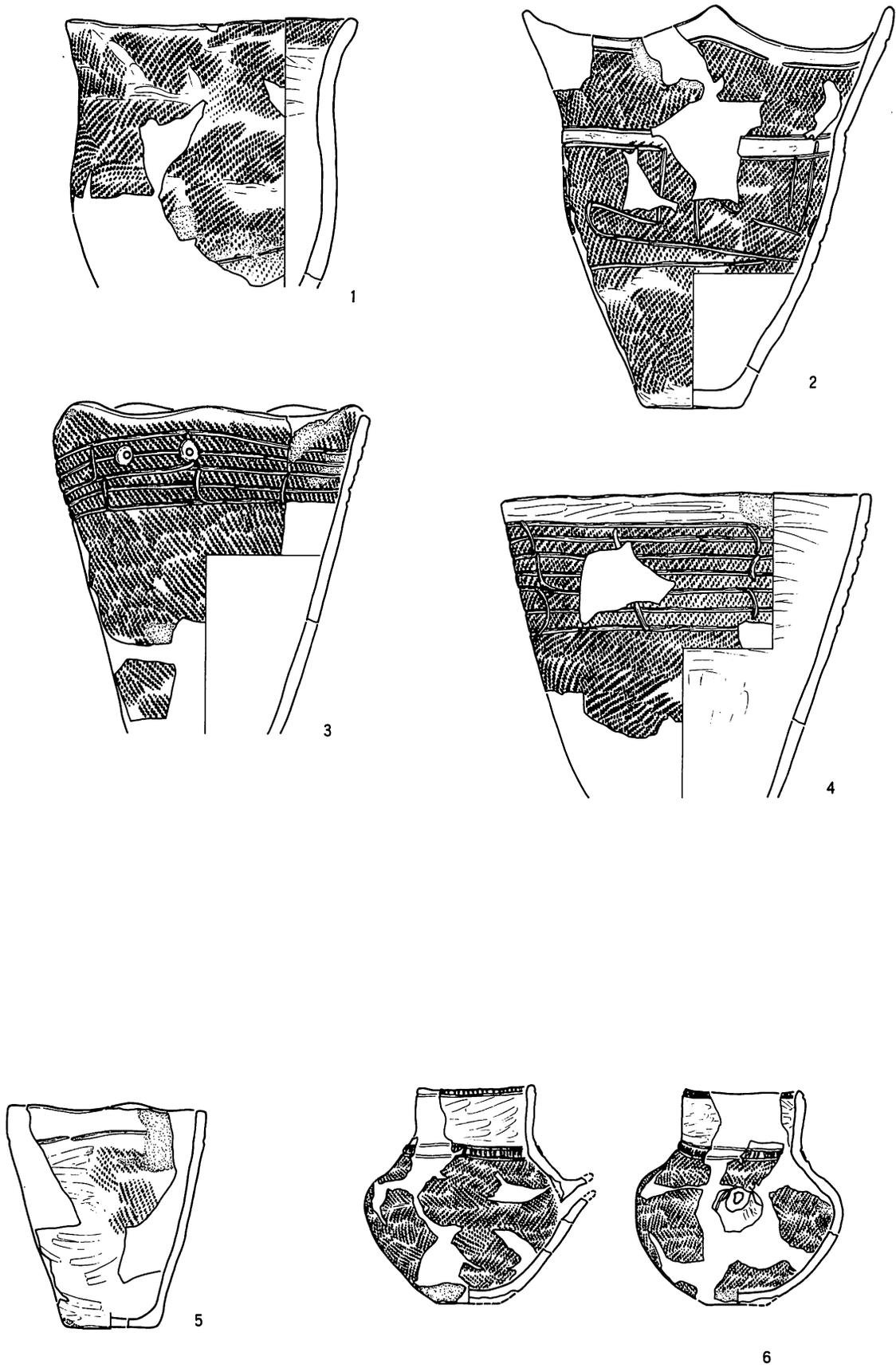
図Ⅳ-27-5に掲載したE77cのⅤ層から出土した異形石器は、周辺から土器が出土していなかったが、オロンガネ状土製品が出土していることから縄文後期中葉Ⅳ群b類の時期のものと考えられる。

報告書に先だって北海道新聞に掲載されている夕刊コラム『北の発掘最前線(102)』96・7・26付において吉田裕吏洋が公表している。

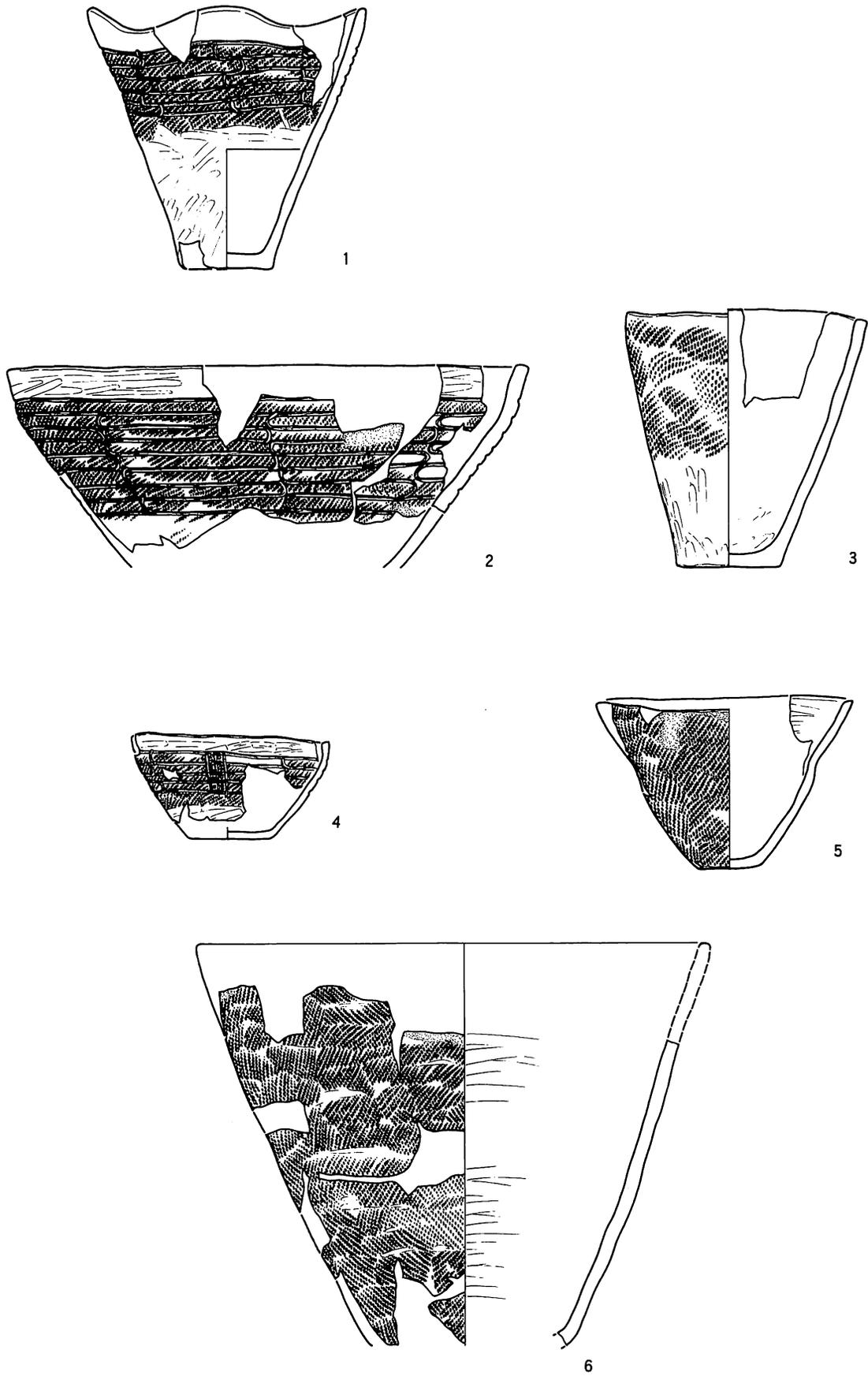
『北の発掘最前線』では、三日月形石器のイメージを継承したものであるとされているが、あの形自体にモチーフがあり、意図的に左右対称形で、黒曜石の通称花十勝と呼ばれる赤い部分の多い石を選び、剝片石器の製作技術の全てをそこに生かしきっている。なにより押圧剝離と思われる技法により薄く作り出されている点を強調しておきたい。同時期の異形石器は小樽市忍路土場遺跡などでも出土しているが、同じような形態を持ったものは見つけられていない。

図Ⅳ-27-6のB-64-aⅤ層出土の玉は、ヒスイ製である。包含層から出土したものはその1点で、他にLF-236から2点(図Ⅲ-31-3、4)、LF-240から1点(図Ⅲ-31-6)出土している。LFから出土した玉はす

Ⅳ 包含層の遺物

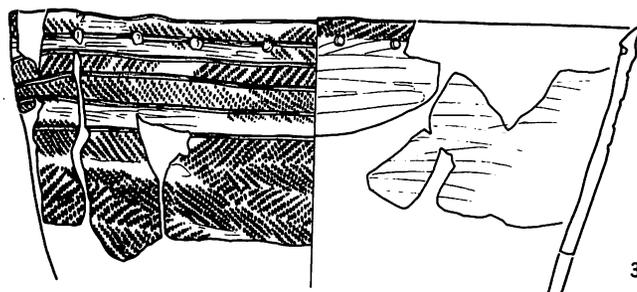
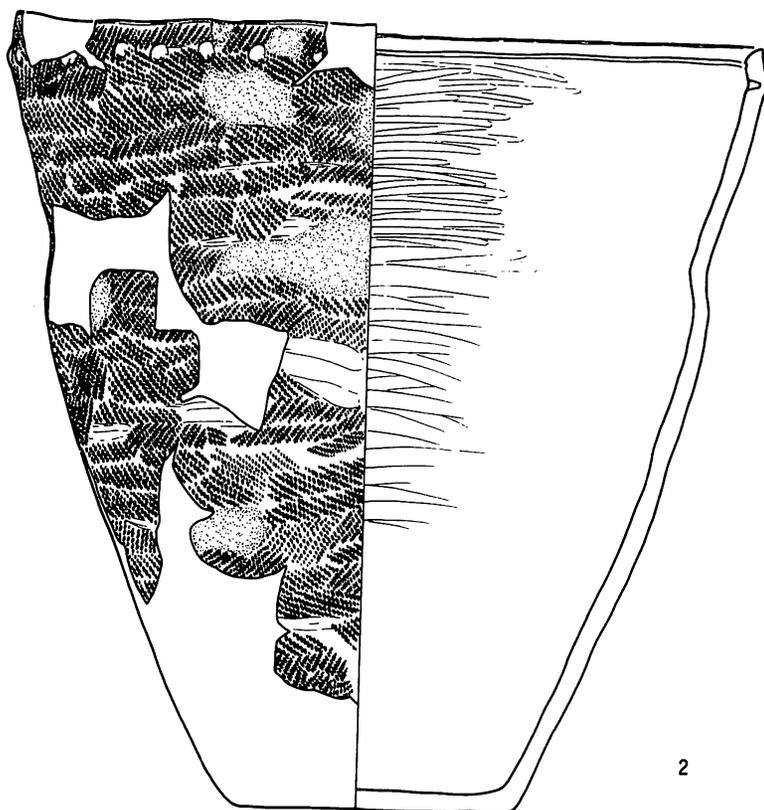
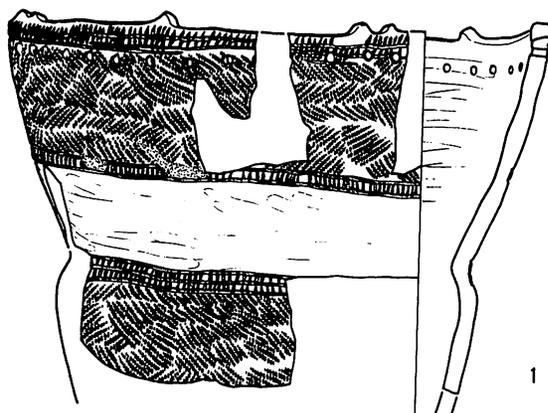


図Ⅳ-1 包含層出土の土器(1)

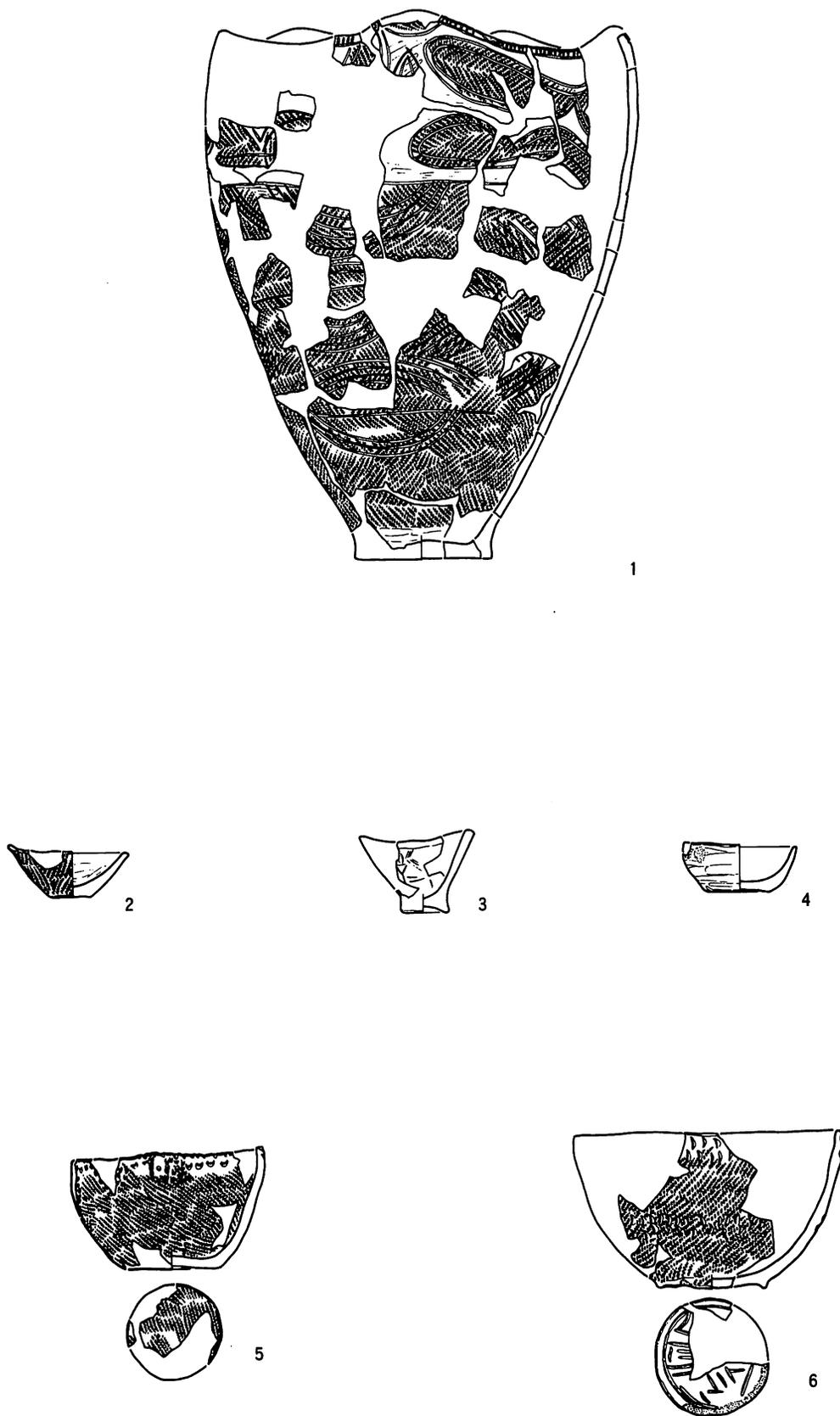


図Ⅳ-2 包含層出土の土器(2)

IV 包含層の遺物

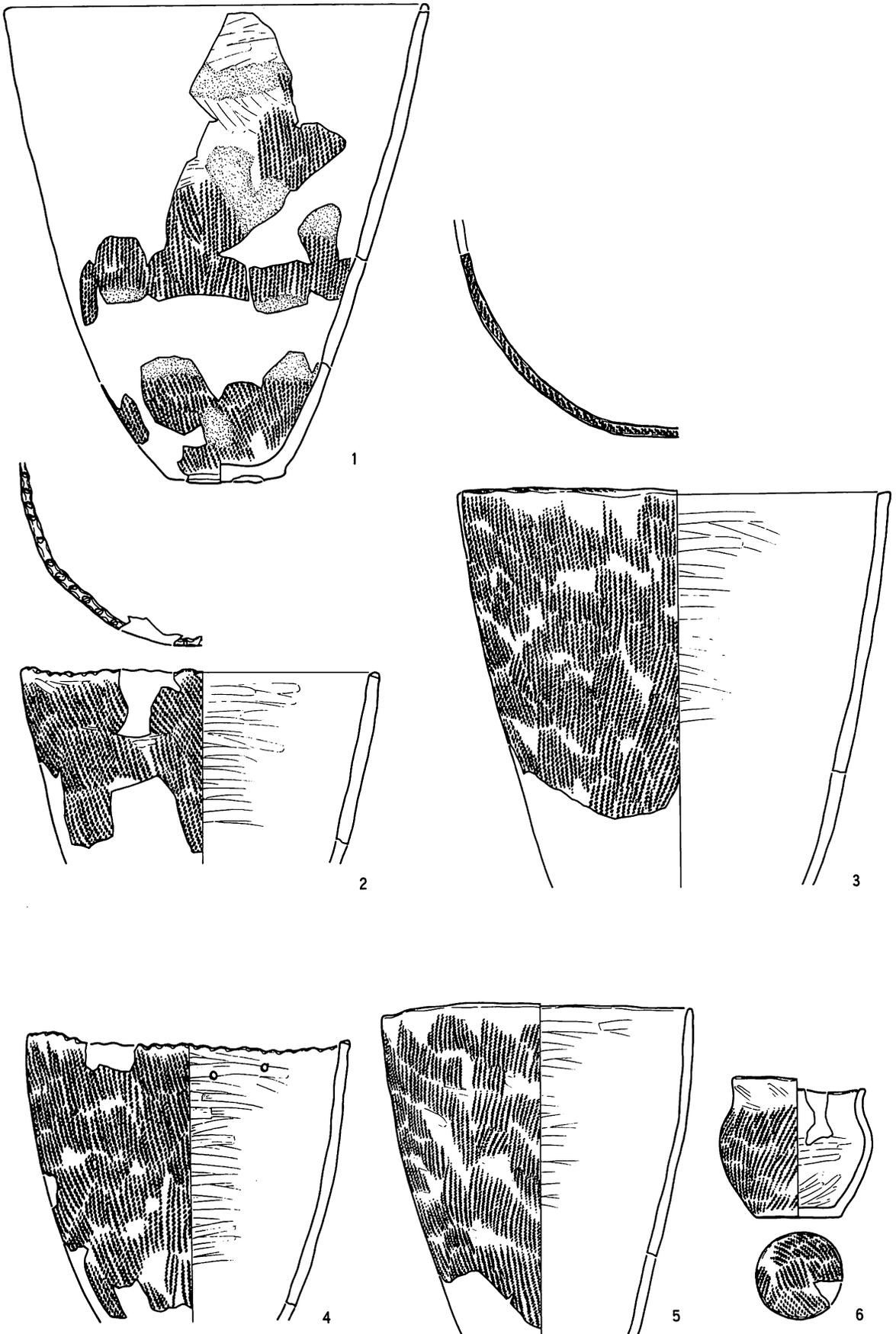


図IV-3 包含層出土の土器(3)

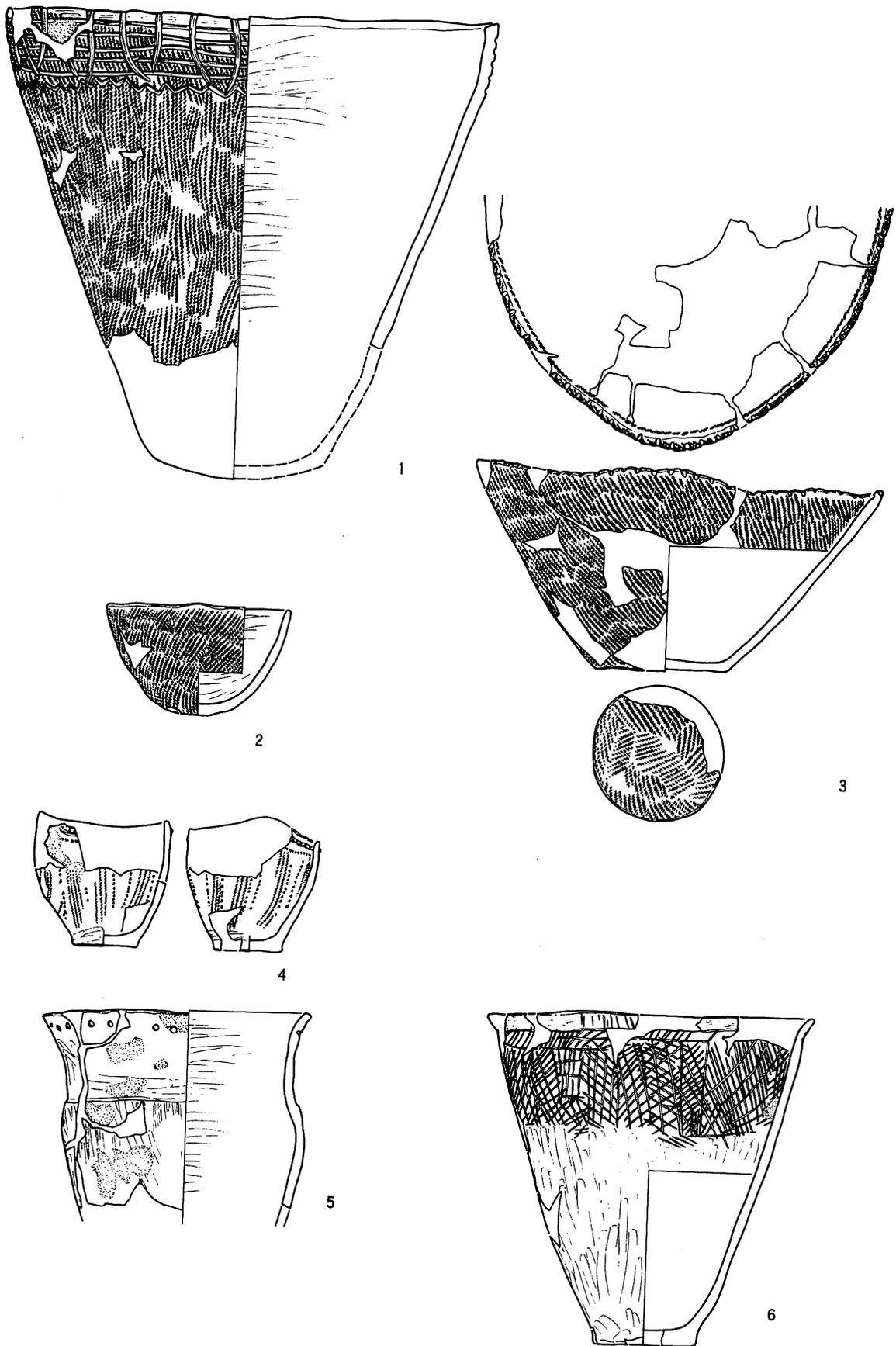


図IV-4 包含層出土の土器(4)

Ⅳ 包含層の遺物

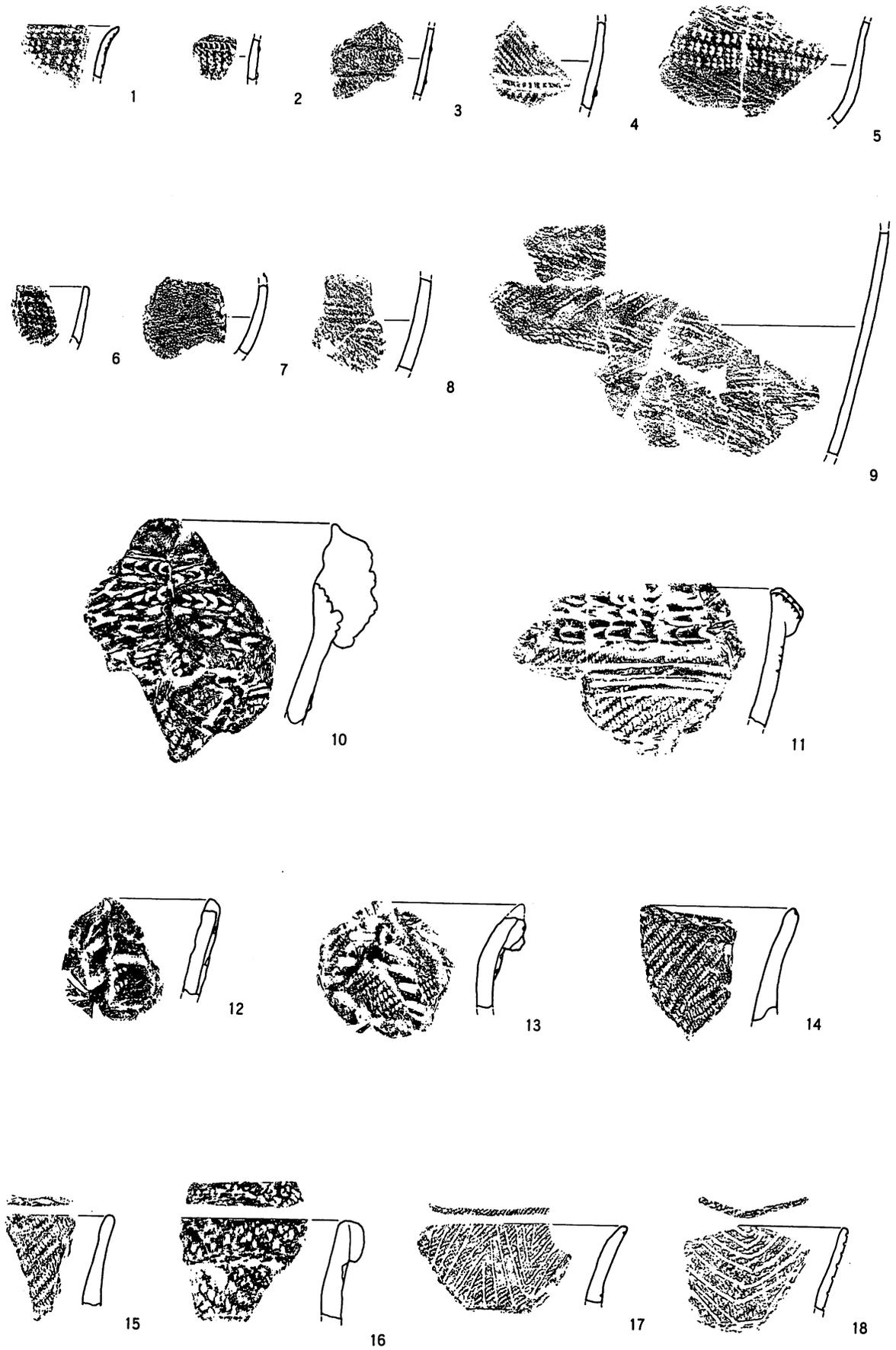


図Ⅳ-5 包含層出土の土器(5)

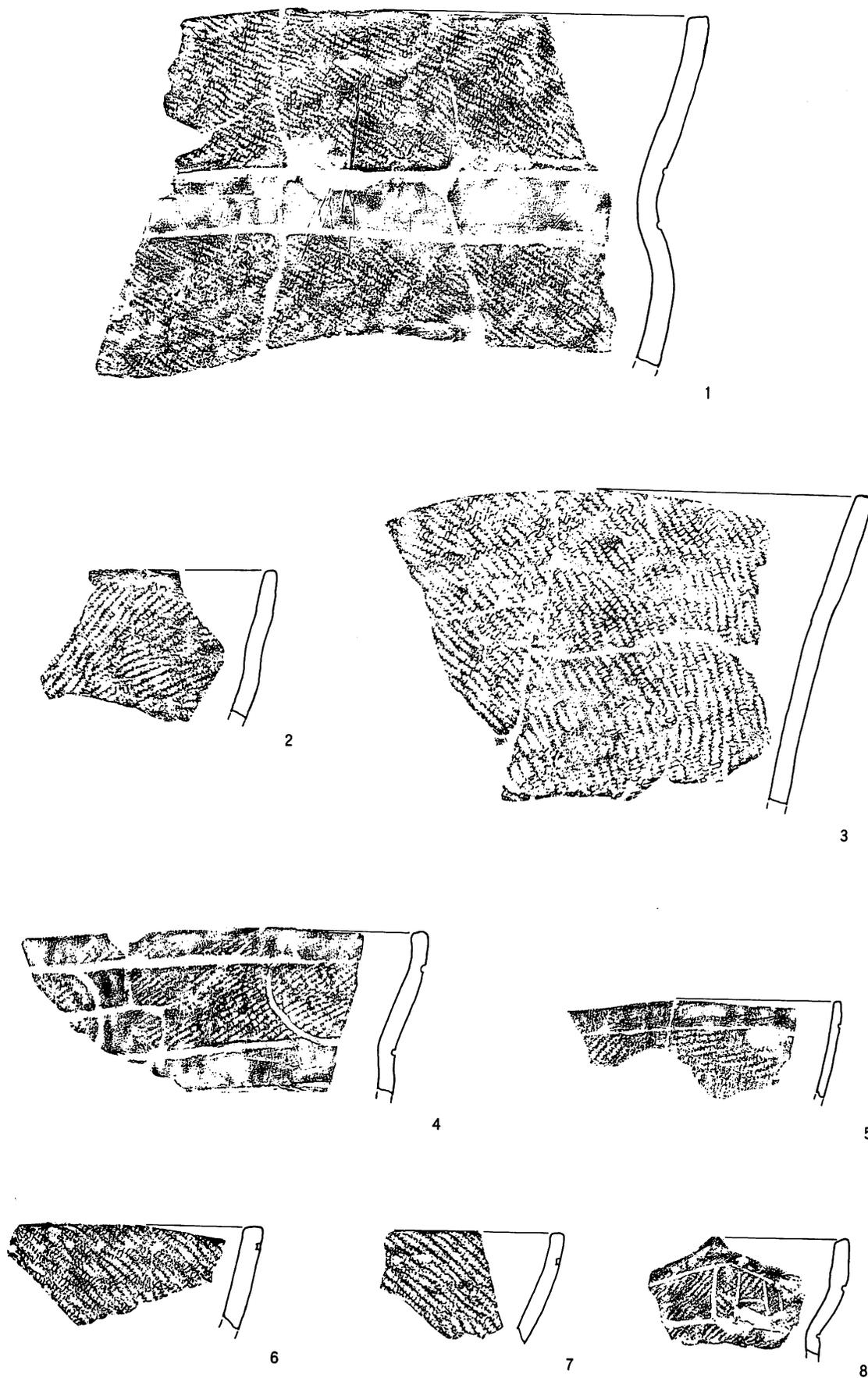


図Ⅳ-6 包含層出土の土器(6)

Ⅳ 包含層の遺物

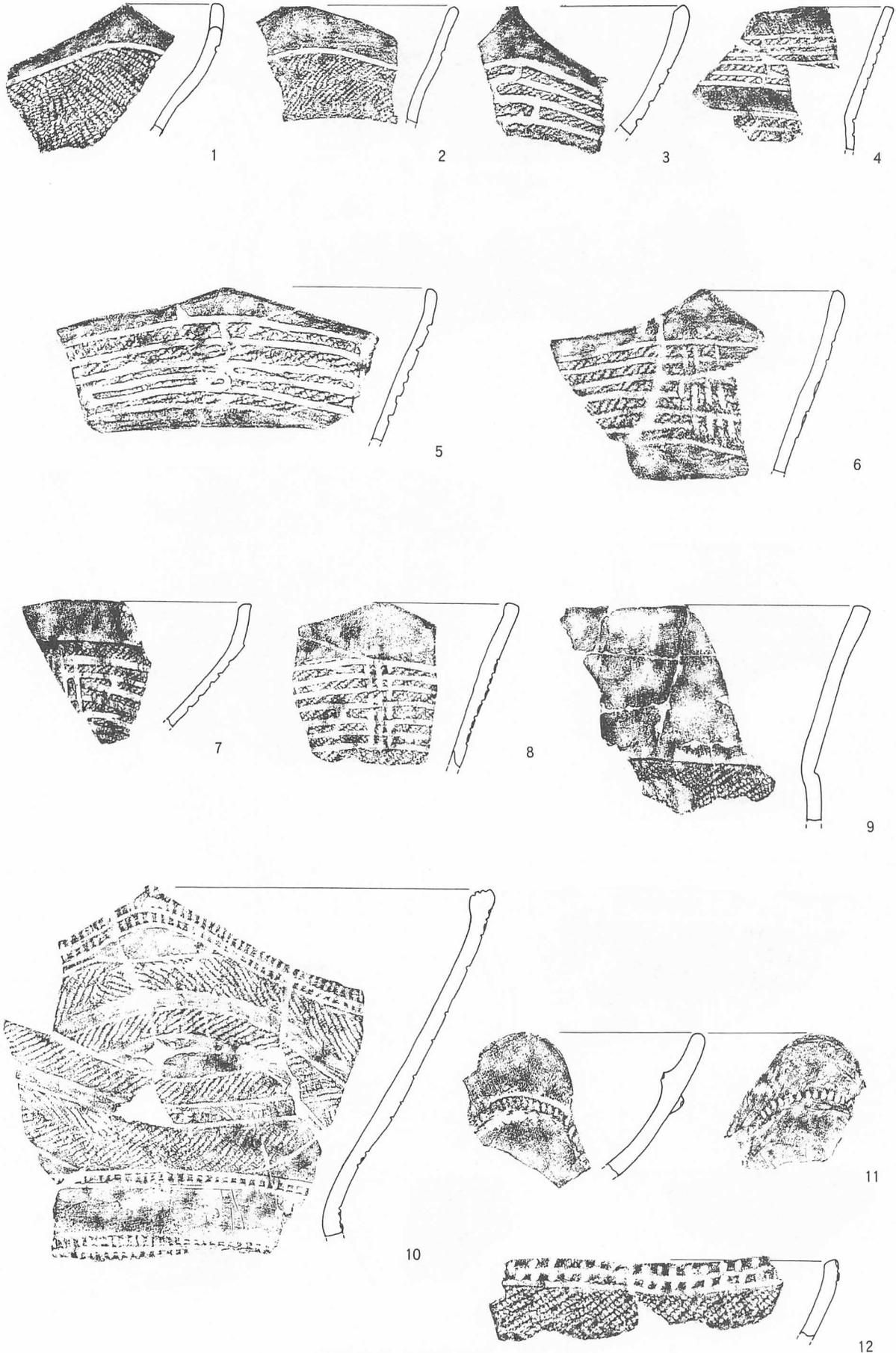


図Ⅳ-7 包含層出土の土器(7)

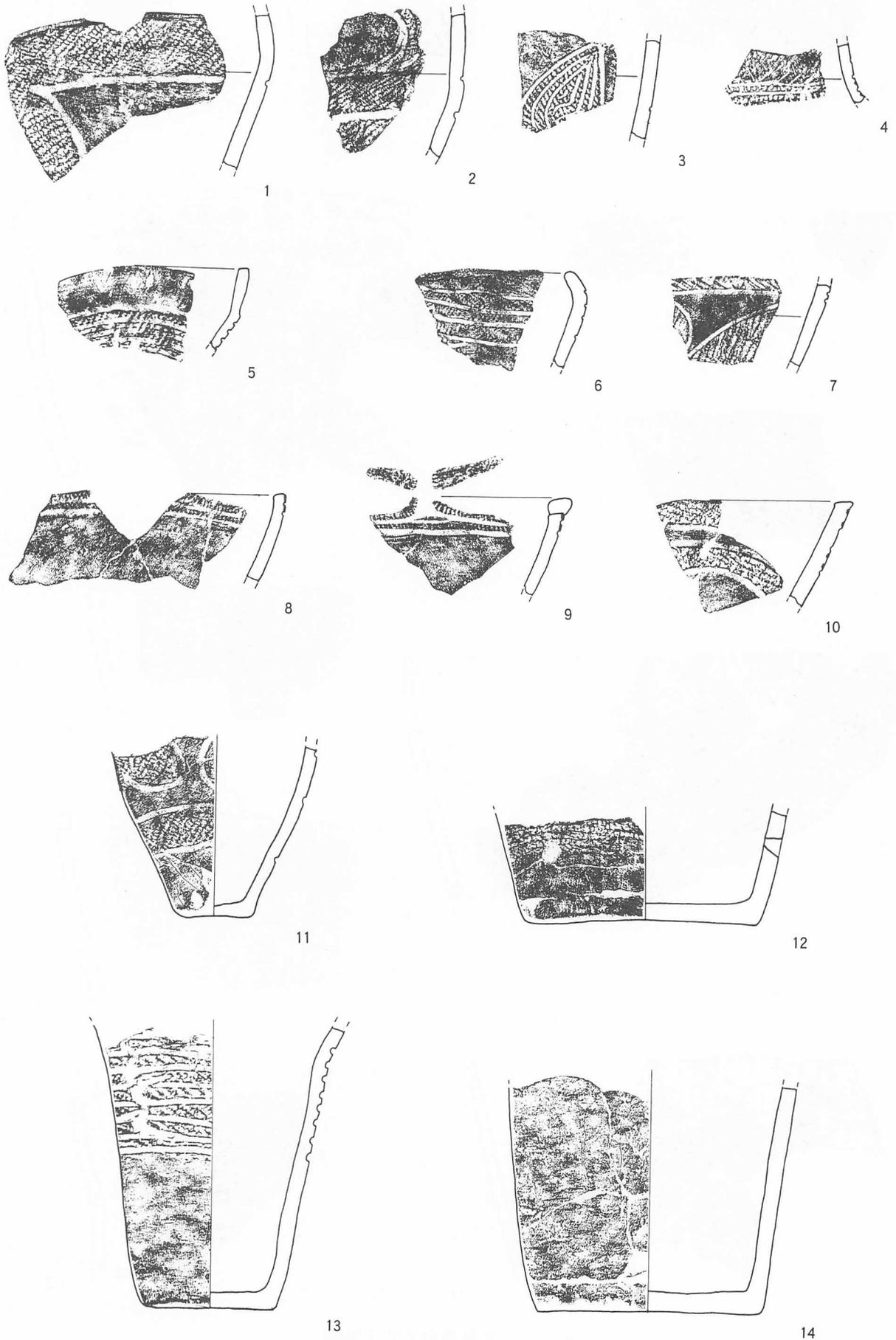


図IV-8 包含層出土の土器(8)

Ⅳ 包含層の遺物

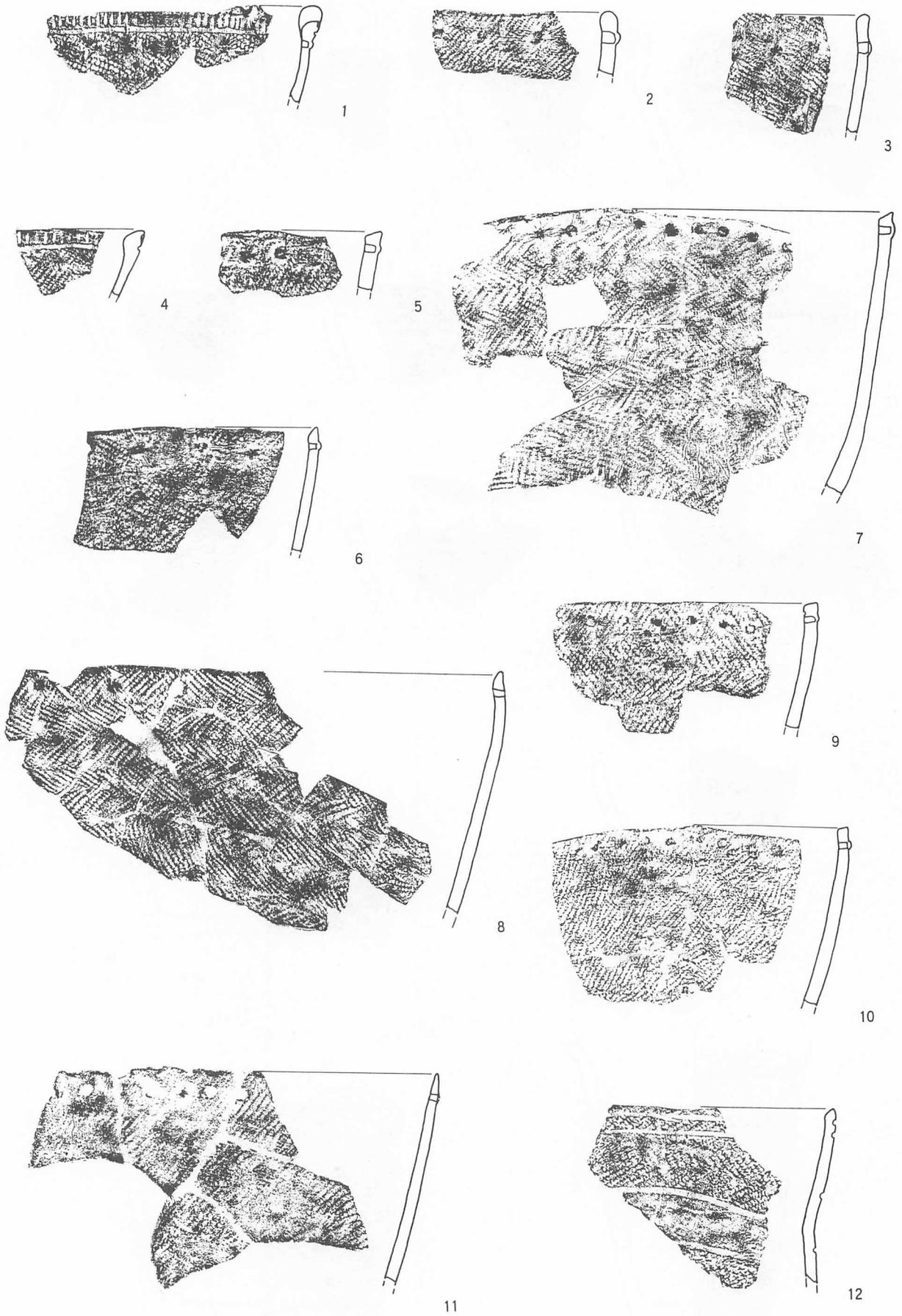


図Ⅳ—9 包含層出土の土器(9)



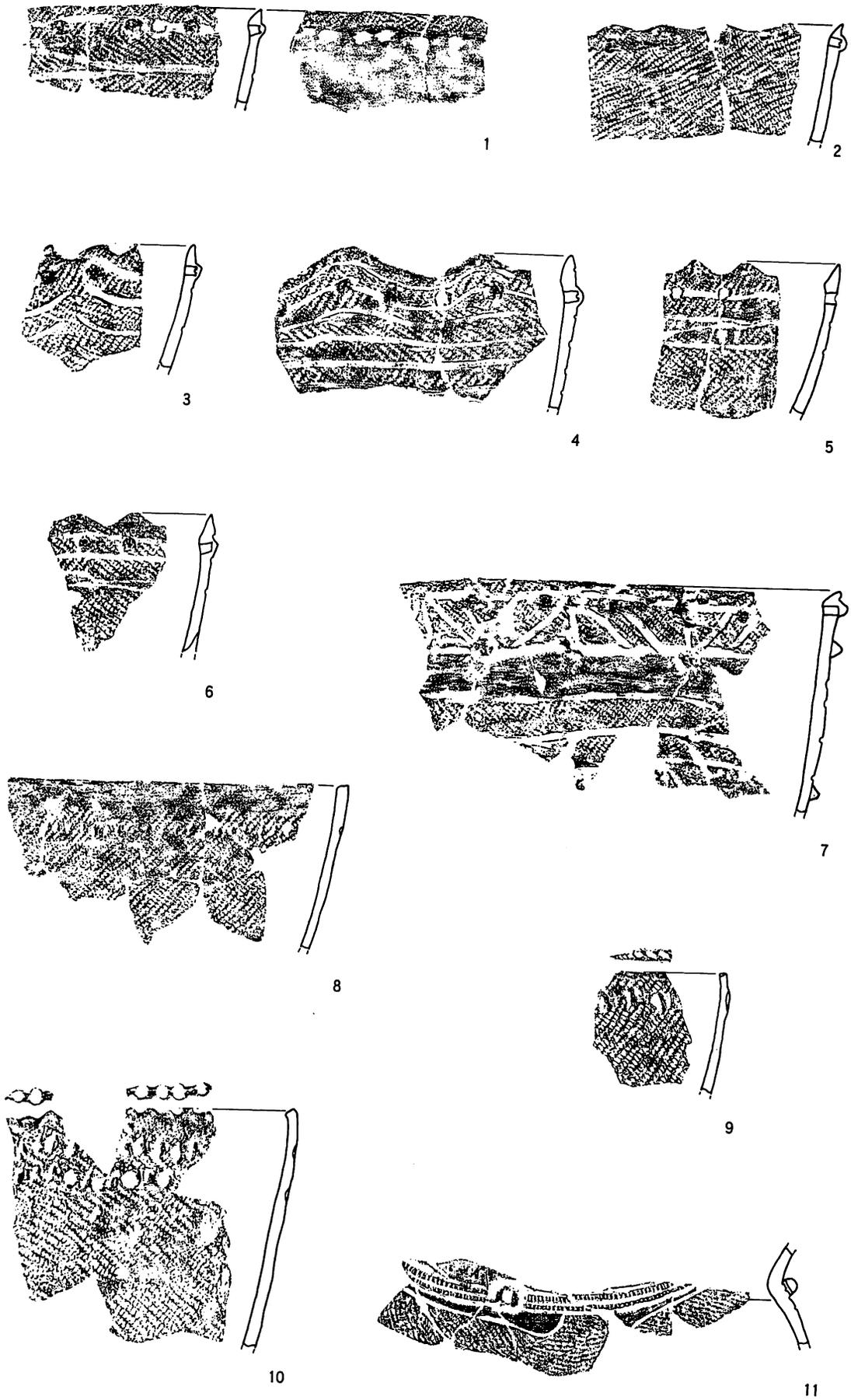
図IV-10 包含層出土の土器(10)

IV 包含層の遺物



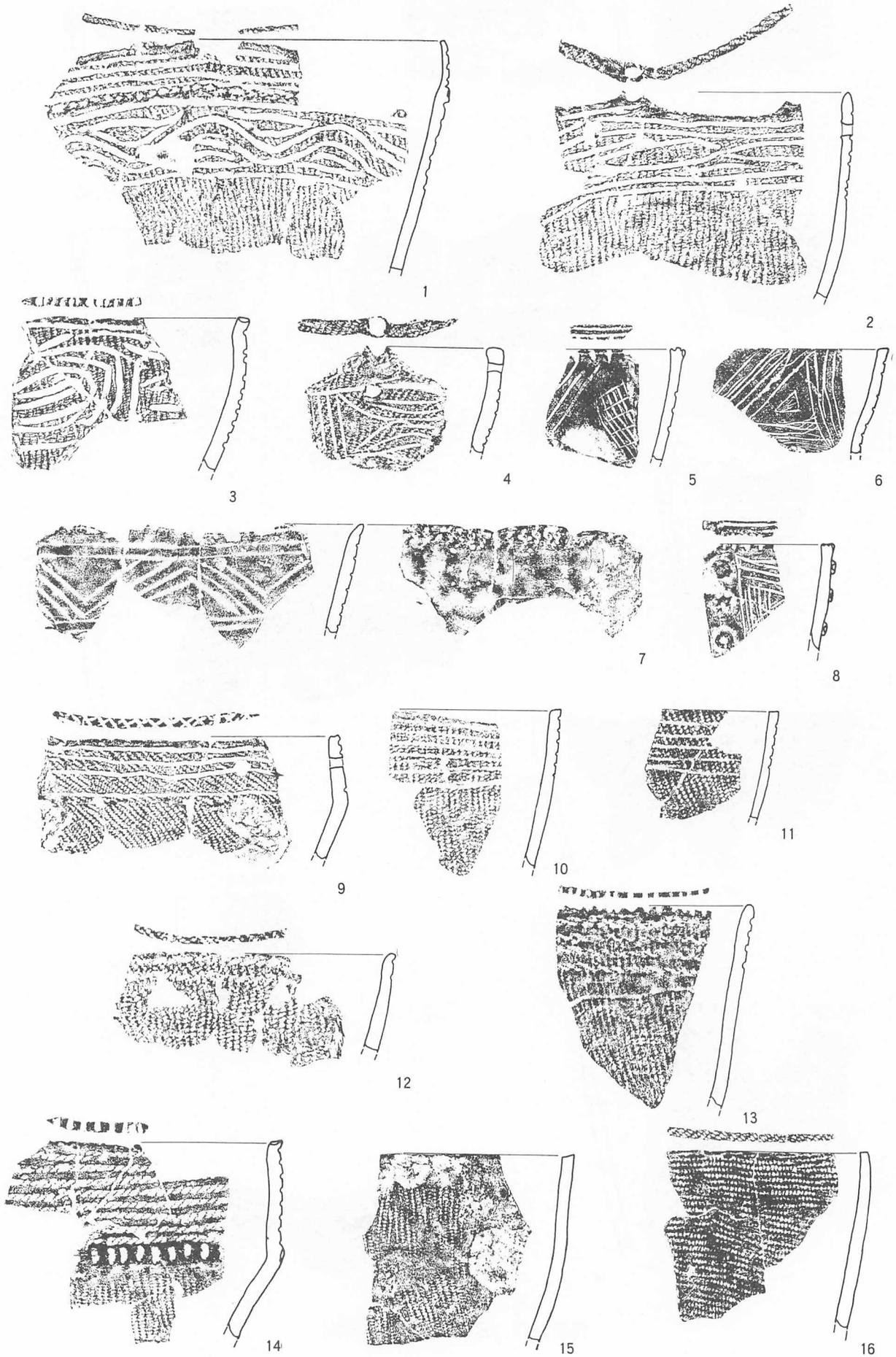
図IV-11 包含層出土の土器(11)

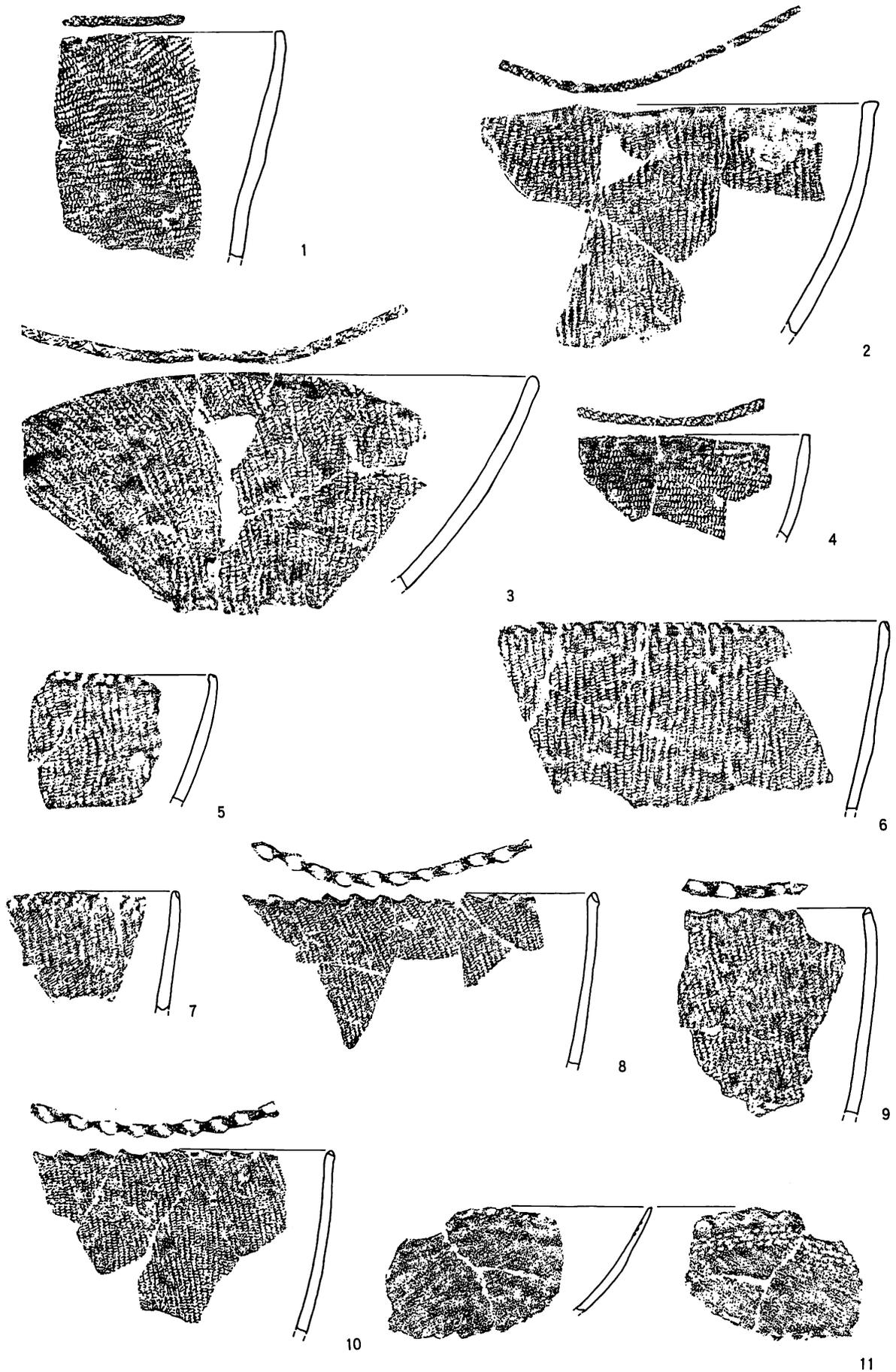
Ⅳ 包含層の遺物



図Ⅳ-12 包含層出土の土器(12)

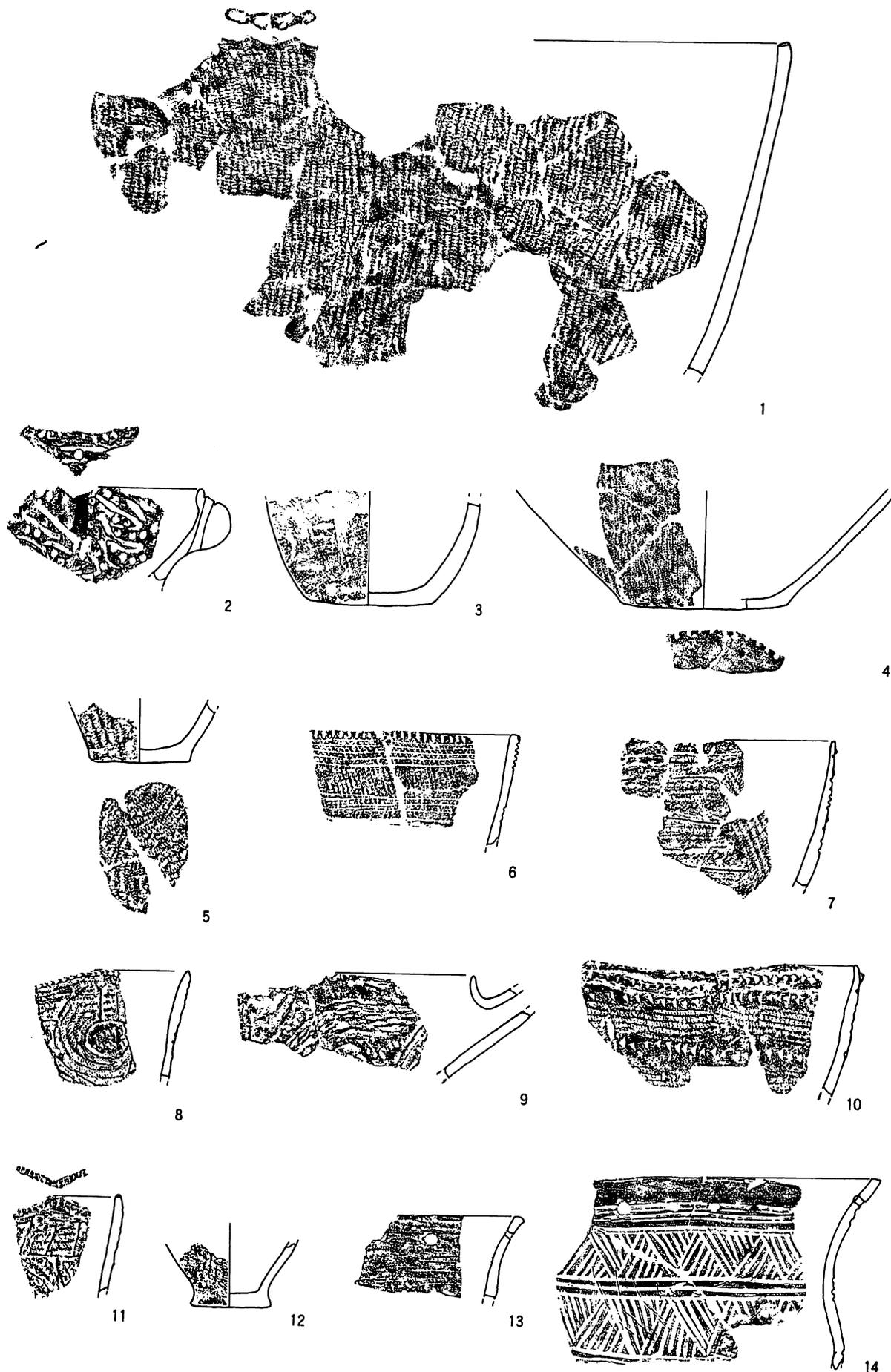
IV 包含層の遺物





図IV-14 包含層出土の土器(14)

IV 包含層の遺物



図IV-15 包含層出土の土器(15)



図IV-16 包含層出土の土製品

べてカンラン岩製で、形態もヒスイ製のものとは異なる。

ヒスイ製の玉については、京都大学原子炉研究所薬科哲男氏に分析を依頼中である。（倉橋）

参考文献 大沼忠春1989「北海道の文化」金子裕之編『古代史復元9 古代の都と村』所収
大沼忠春1996「北海道の古代社会と文化一七～九世紀一」鈴木靖民編『古代蝦夷の世界と交流・古代王権と交流1』所収

2. 土器・土製品等

土器

包含層から出土した土器は28744点で、V群c類が11825点と多く、IV群b類9919点、IV群c類2874点の順となる。掲載した土器は、復元個体33個、拓本116点、土製品は5点である。土器の個別の文様等は表IV-1～9までに記載してある。

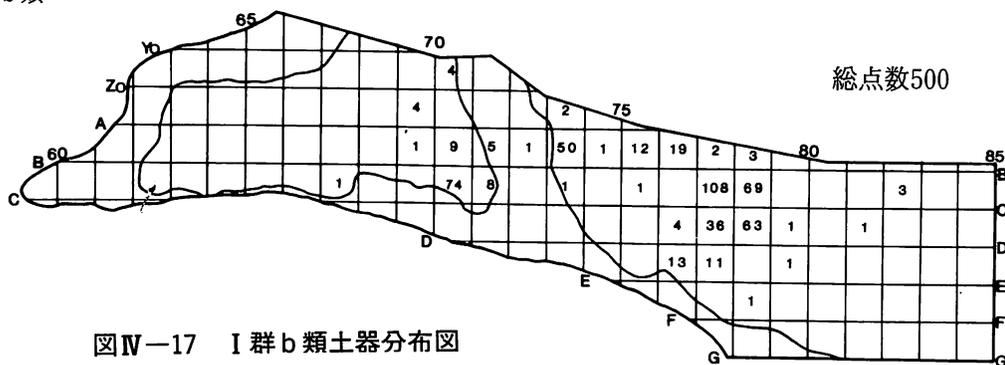
縄文時代早期のI群b類～縄文時代晩期のV群c類の一部までは、本来Ta-cのIV層より下位から検出されなければならないが、多くの遺物がIII層からも検出している。原因は風倒木等による自然による攪乱が大きい。風倒木等のあるグリット以外はIV層はほとんど攪乱を受けていない。そのため、どれくらいの遺物が攪乱によりもともと包含されていた位置から動かされているかを表わすため、点数の多い群について分布図は敢てIII層、V層を分けて作成した。

I群b類土器（図IV-7-1～9 図IV-17 表IV-4）

包含層出土のI群b類土器は500点出土し、拓本9点を掲載した。現場での調査の印象ではほとんど出土していないように感じられていたため、500点の出土は意外な感がある。

Ⅳ 包含層と遺物

I 群b類



図Ⅳ-17 I 群b類土器分布図

Ⅲ・Ⅴ層

分布はYo～Eライン、67～82ラインの中に収まり、B70区74点、A73区50点、B77区108点、B78区69点、C77区36点、C78区63点にまとまった出土が見られた。

図Ⅳ-7-1～6まではI群b2類、図Ⅳ-7-7～9はI群b4類とした。I群b-2類はコッタロ式、I群b-4類は東釧路Ⅳ式に相当する。

Ⅲ群b類土器 (図Ⅳ-1-1、図Ⅳ-7-10～15 図Ⅳ-18 表Ⅳ-1 表Ⅳ-4)

包含層出土のⅢ群b類土器は399点出土し、復元個体1個体、拓本6点を掲載した。

図Ⅳ-1-1はA65aⅤ層2点、A65cⅤ層12点、B65dⅤ層1点の計15点が接合した。

拓本の中では図Ⅳ-7-10がA67cⅢ層1点、B70aⅢ層1点が接合し、3グリット、約15m離れたものが接合している。

Ⅳ群a類土器 (図Ⅳ-7-16 表Ⅳ-4)

包含層出土のⅣ群a類土器は79点出土し、拓本1点を掲載した。

分布はZo70区Ⅴ層1点、A78区Ⅴ層10点、C76区Ⅴ層1点、D76区Ⅴ層3点、D77区Ⅲ層20点、D77区Ⅴ層4点、E78区Ⅴ層39点、D77区、E78区で多く出土した。

掲載した1点は図Ⅳ-7-16で余市式に相当する。

Ⅳ群b類土器 (図Ⅳ-1-2～6、図Ⅳ-2-1～6、図Ⅳ-4-1、図Ⅳ-7-17、18、図Ⅳ-8-1～8、図Ⅳ-9-1～12、図Ⅳ-10-1～14 図Ⅳ-18 表Ⅳ-1、2 表Ⅳ-4～6)

包含層出土のⅣ群b類土器は9919点出土し、復元個体12個体、拓本34点を掲載した。掲載するにあたり、時期の古いものから新しいものへという流れにしようと考えていたが、スペース等の点から前後するものができてしまった。文中で説明を補足したい。

復元個体の図Ⅳ-1-2、拓本の図Ⅳ-7-17、18は、今回の調査のⅣ群b類の中で一番古手で、ウサクマイC式、もしくは船泊上層式の時期に相当する。

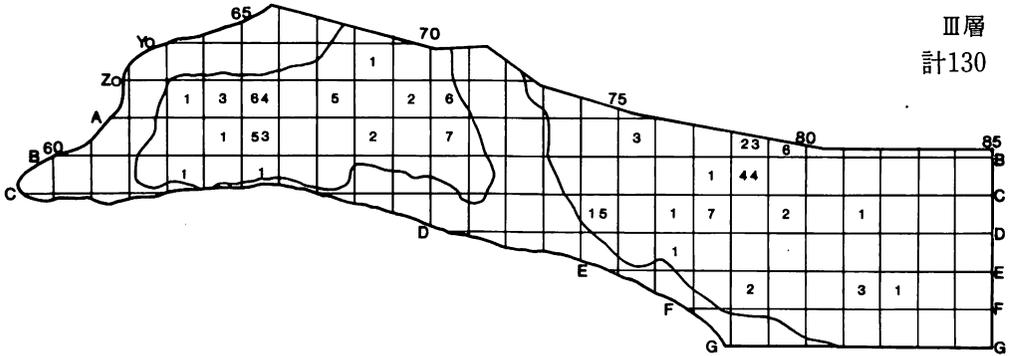
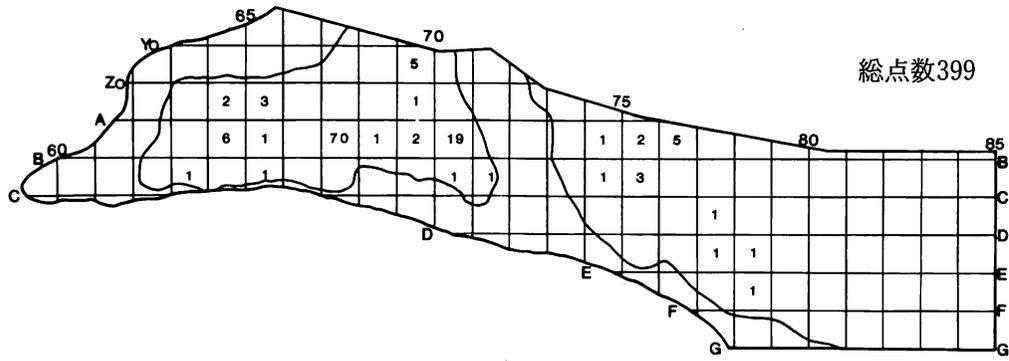
復元個体の図Ⅳ-1-3、4、図Ⅳ-2-1、2と、拓本の図Ⅳ-9-3～8、図Ⅳ-10-13は、横沈線を縦の沈線、S字状、またはCの沈線で区画するもので、手稻式である。当時期の土器を層位的に編年することのできた北埋調報53集小樽市忍路土場遺跡のⅢ期、Ⅳ期に相当する。

図Ⅳ-9-10～12、図Ⅳ-10-4、5、8、9は、刻み目を持つもの。鮎潤式に相当する。

図Ⅳ-4-1は鮎潤式の一番新しい時期のもの。これで突瘤文があれば堂林式、もしくはエリモB式とされるものであろう。

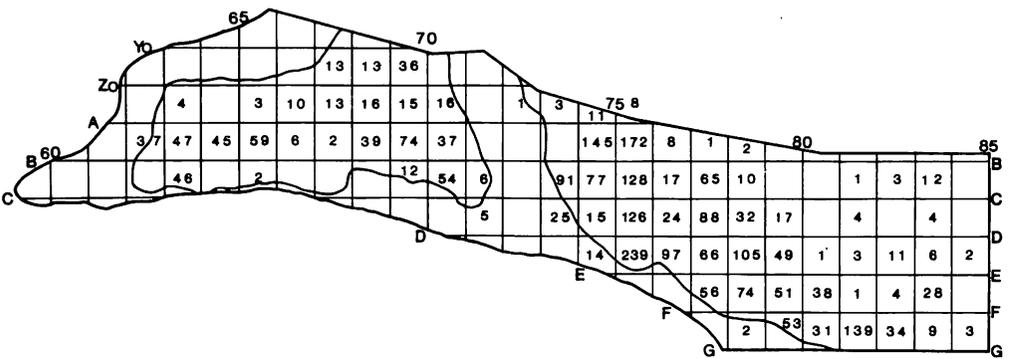
Ⅲ群b類

Ⅳ 包含層の遺物

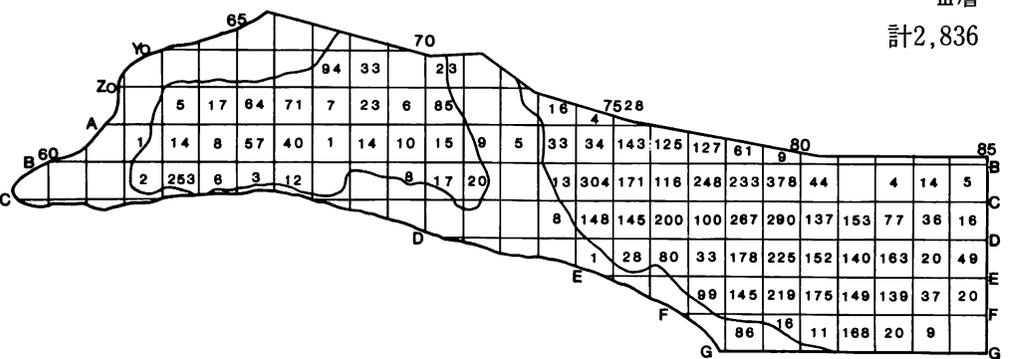


V層
計266
総点数9,919

Ⅳ群b類



Ⅲ層
計2,836

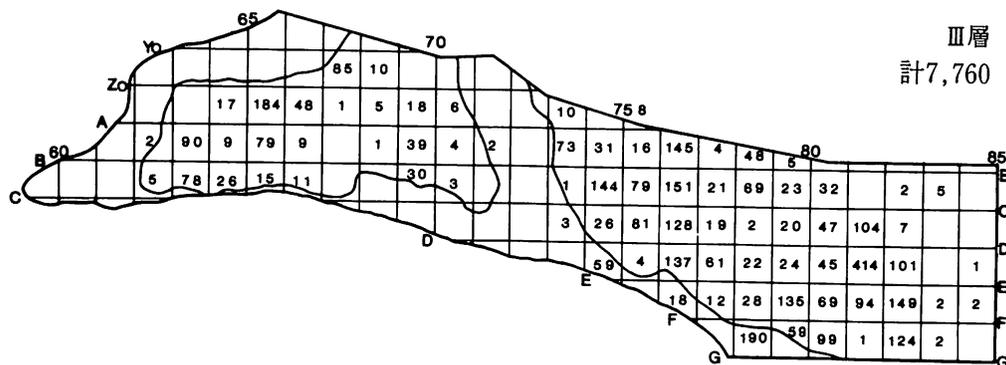
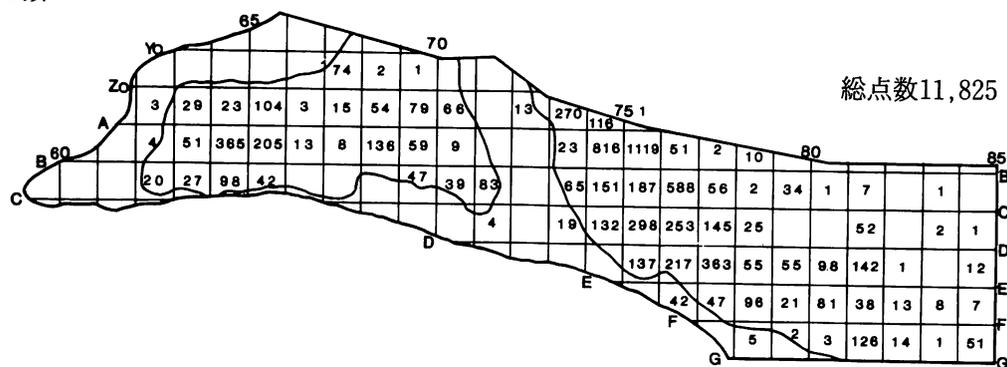


V層
計6,986

図Ⅳ—18 Ⅲ群b類・Ⅳ群b類土器分布図

IV 包含層の遺物

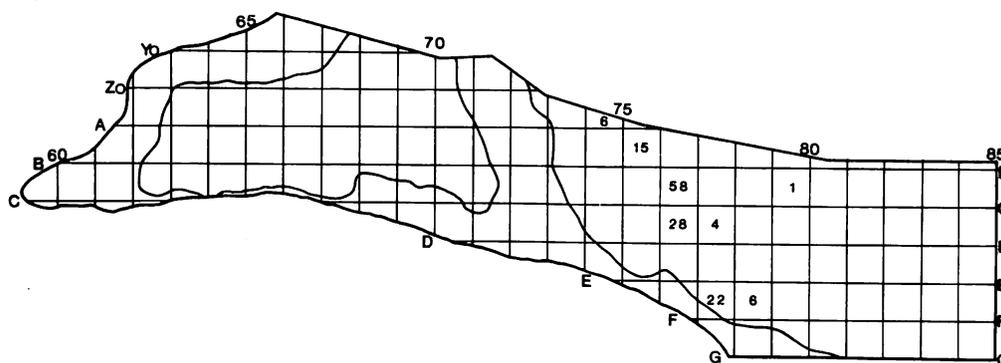
V群c類



V層
計3,939

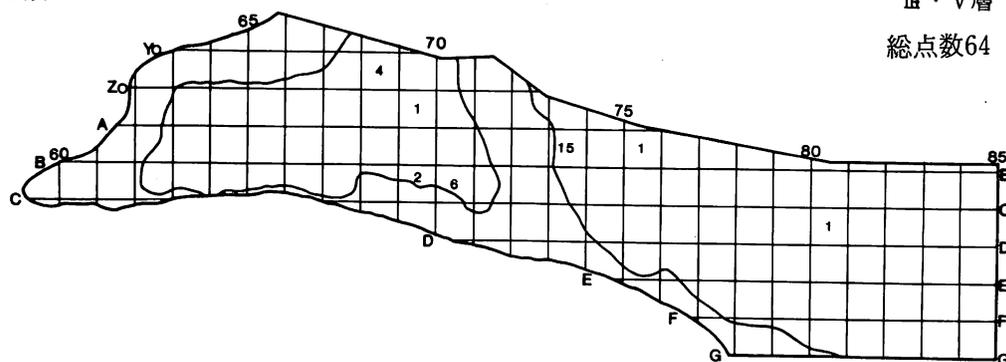
VI群a類

総点数140



VI群b類

III・V層
総点数64

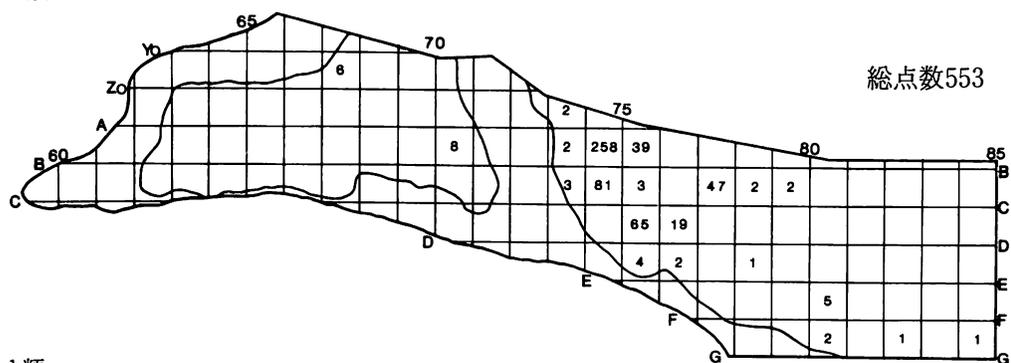


III・V層

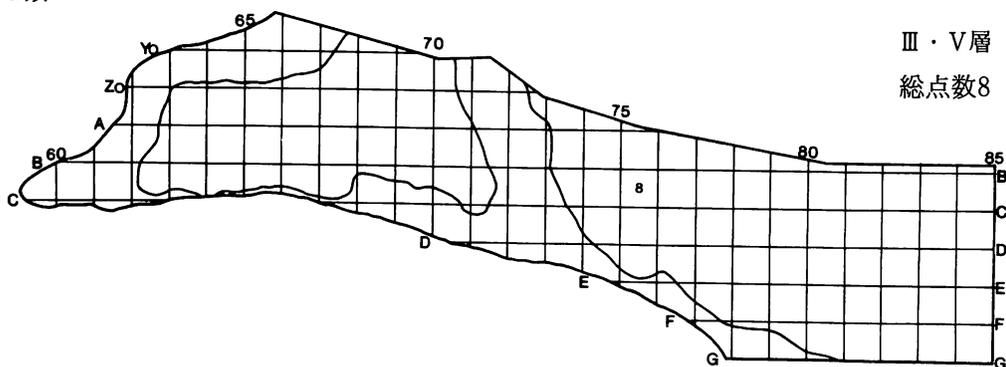
図IV-20 V群c類・VI群a類・VI群b類土器分布図

IV 包含層の遺物

VI群c類

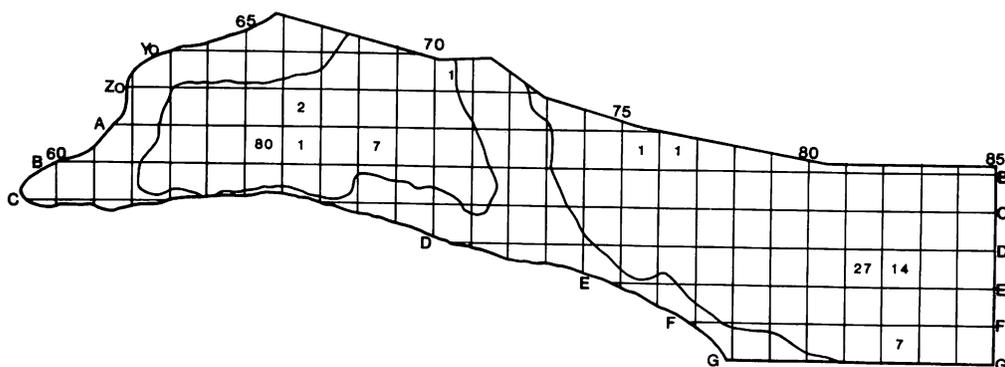


VI群d類



Ⅲ層
総点数141

Ⅶ群



図Ⅳ-21 VI群c類・VI群d類・Ⅶ群土器分布図

Ⅳ群c類土器 (図Ⅳ-3-1~3、図Ⅳ-11-1~11 図Ⅳ-19 表Ⅳ-6、7)

包含層出土のⅣ群c類土器は2874点出土し、復元個体3個体、拓本11点を掲載した。

分布はYo~Gライン、63~85まで今年度調査区内に広範囲に見られた。本来Ⅳ群c類はⅤ層に包含されるべきものであるが、Ta-cのⅣ層より上位の包含層Ⅲ層からも多く出土しており、Ⅴ層から1522点、Ⅲ層から1339点と均衡している。昨年度の調査でも同様の傾向が見られており、キウス7遺跡の特徴と言える

A75区Ⅲ層237点、D80区Ⅴ層169点、D77区Ⅴ層150点、E81区Ⅴ層150点、D81区145点、D77区Ⅲ層126点、A68区Ⅲ層111点は、1グリットから100点以上出土した。

Ⅴ群a類土器 (図Ⅳ-4-6、図Ⅳ-12-1~10)・**Ⅴ群b類土器** (図Ⅳ-12-11 図Ⅳ-19 表Ⅳ-3、7)

包含層出土のⅤ群a類土器は100点出土し、復元個体1個体、拓本10点を掲載した。包含層出土のⅤ群b類土器は50点出土し、拓本1点を掲載した。

分布はⅤ群a類土器がZo~Bライン62~65ラインとA75区、B76区から出土している。

復元個体の図Ⅳ-4-5、6、拓本の図Ⅳ-12-9、10は爪形文が施されるもの。

図Ⅳ-12-11は頸部に突起を持ち、貼付帯に刻み目を持つ。

Ⅴ群c類土器(図Ⅳ-4-4、5、図Ⅳ-5-3、5 図Ⅳ-6-1~3、図Ⅳ-13-1~16、図Ⅳ-14-1~11、図Ⅳ-15-1~4 図Ⅳ-20)・**Ⅵ群a類土器** (図Ⅳ-5-1、2、4、6 図Ⅳ-20 表Ⅳ-3、7~9)

包含層出土のⅤ群c類土器は11825点出土し、拓本12点を、包含層出土のⅥ群a類土器は140点出土し、復元個体4個体を掲載した。Ⅴ群c類土器~Ⅵ群a類土器は縄文時代晩期から続縄文時代初頭にわたる土器群であるが、多くの点が共通し、区分しがたい。北海道教育委員会文化課主査大沼忠春氏に、現場にて口頭で以下の3点についてご教示を受けた。1、Ⅴ群c類は口唇が真っ直ぐ立ち上がるのに対して、Ⅵ群a類は外反する。2、Ⅴ群c類は丸底であるのに対して、Ⅵ群a類は平底、さらに上げ底風になる。3、Ⅴ群c類は地文の縄文が比較的細かめ、Ⅵ群a類は比較的粗めである。

その観点から口縁部、底部において、若干の遺物に対して分類が可能であったが、胴部破片等では、完全に分類することは難しかった。そのため観察によりⅤ群c類、Ⅵ群a類と分類が不可能であったほとんどのはⅤ群c類として報告している。

Ⅴ群c類はタンネトウL式、Ⅵ群a類は大狩部式にはほぼ相当する。

図Ⅳ-5-1は、底部の形態から、図Ⅳ-5-6は口唇の形と、底部の形態からⅥ群a類とした。

これらの土器群は、千歳市ママチ遺跡等の同時期の遺跡との比較が必要かと考えるが今回は検討する時間が少なく、事実の確認に留まっている。

図Ⅳ-15-6は恵山式のもの。拓本にはその1点を抽出した。LF-240から出土した図Ⅲ-27-3は1個体に復元された。Ⅵ群a類の中でも恵山式は少ない。

Ⅵ群b類土器 (図Ⅳ-20)

包含層出土のⅥ群b類土器は64点が出土した。Ⅵ群b類として報告した天王山・赤穴式の遺物は今年度はまとまった状態でほとんど出土していない。

Ⅵ群c類土器 (図Ⅳ-15-5~10 図Ⅳ-21 表Ⅳ-9)

Ⅳ 包含層と遺物

包含層出土のⅥ群c類土器は553点出土し、拓本6点を掲載した。掲載したものはすべて後北C2D式である。

Ⅵ群d類土器 (図Ⅳ-15-11~12 図Ⅳ-21 表Ⅳ-9)

包含層出土のⅥ群d類土器は8点出土し、拓本2点を掲載した。掲載したものはすべて北大Ⅰ式である。

Ⅶ群土器 (図Ⅳ-6-5、6、図Ⅳ-15-13、14 表Ⅳ-9)

包含層出土のⅦ群土器は141点出土し、復元個体2個体、拓本2点を掲載した。大沼氏の現場での口頭によるご教示によると、復元個体の図Ⅳ-6-5、拓本の図Ⅳ-15-13、14はともに十勝茂寄Ⅰ式に相当するとのことである。類例は『苫小牧市史』上巻1975 p.278に掲載されている厚賀町(現門別町)賀張遺跡出土の土器に近いとのことであった。

図Ⅳ-6-6は、擦文文化期の後期の土器と考える。擦文文化期の時期区別は前述大沼(1989)の前・中・後の3時期区分によった。

土製品等 (図Ⅳ-16 表Ⅳ-9)

図Ⅳ-16-1~3は、オロンガネ状土製品。1は表面が沈線による区画内に竹管状工具による刺突。裏面は丁寧に磨かれている。2はRL縄文と沈線が施されている。裏面は丁寧なナデ。3は沈線のみ。裏面はナデ。4は2つに分かれた突起を持つ。上部は欠損。全面にナデ。5は焼成粘土塊。

3. 石器・石製品等

石鏃(Ⅰ群A類) [図Ⅳ-22-1~40、図Ⅳ-28、表Ⅳ-11、図版Ⅳ-19]

Ⅲ層から79点、Ⅴ層から102点、計182点が出土している。このうち40点を図示した。

分布はⅢ層、Ⅴ層ともに調査区全域にむらなく出土する。1グリットから10点を越えるところはない。Ⅲ層ではA68区5点、A74区6点、A75区6点、C75区6点が、Ⅴ層ではA67区7点、B76区6点、B78区6点が比較的多く出土しているグリットである。

図Ⅳ-22-1~図Ⅳ-22-18はⅢ層出土。石質は1は片岩。その他はすべて黒曜石である。図Ⅳ-22-1は平基。図Ⅳ-22-2~5は凹基。図Ⅳ-22-6~8は木の葉形のもの。図Ⅳ-22-11~12は菱形のもの。図Ⅳ-22-13~18は有茎鏃。図Ⅳ-22-19~40はⅤ層出土。石質は27がメノウ質頁岩で、それ以外が黒曜石である。図Ⅳ-22-19、20は長身のもの。図Ⅳ-22-21~23は凹基。図Ⅳ-22-24は薄身で柳葉形となるもの。図Ⅳ-22-25~28は菱形のもの。図Ⅳ-22-29~40は有茎鏃。

石槍または両面加工のナイフ(Ⅰ群B類) [図Ⅳ-22-41~44、図Ⅳ-28、表Ⅳ-11、図版Ⅳ-19]

5点が出土している。5点全てを図示した。

分布はまとまりがなく、点々と出土している。

図Ⅳ-22-41、42は石槍。Ⅴ層出土。石質はともに黒曜石。図Ⅳ-22-43~45は両面加工のナイフ。Ⅴ層出土。石質は43、45が頁岩、44は黒曜石。

図Ⅳ-22-45は、長さ13.4cm、幅5.3cmの大型のもので、写真図版Ⅰ-6のように単独で包含層から出土した。

石錐（Ⅱ群A類）[図Ⅳ-22-45～50、図Ⅳ-29、表Ⅳ-11、図版Ⅳ-19]

Ⅲ層4点、Ⅴ層3点、計7点が出土している。このうち5点を図示した。

分布はまとまりがなく、点々と出土している。

図Ⅳ-22-46～47はⅢ層出土。石質はともに頁岩。図Ⅳ-22-48～50はⅤ層出土。石質は図Ⅳ-22-48、50が黒曜石。49が頁岩。

つまみ付きナイフ（Ⅲ群A類）[図Ⅳ-23-1～10、図Ⅳ-29、表Ⅳ-11、12 図版Ⅳ-20]

Ⅲ層4点、Ⅴ層7点、計11点が出土している。このうち10点を図示した。

分布は、Ⅲ層はまとまりがなく、Ⅴ層は77～81ラインにかけて1～2点が出土する。

図Ⅳ-23-1～4はⅢ層出土。石質は1、3が黒曜石、2が頁岩。4がメノウ質頁岩。図Ⅳ-23-1は表面が全面加工、裏面が周縁加工されているもの。図Ⅳ-23-2は表面が全面加工のもの。図Ⅳ-23-3、4は両面加工されたもの。図Ⅳ-23-5～10はⅤ層出土。5～8が頁岩。9、10が黒曜石。

図Ⅳ-23-4は、つまみ部を粗く作り出し、刃部も不整いである。図Ⅳ-23-8は、上下が欠損。つまみ部、もしくは錐が作出したものである。図Ⅳ-23-9はフレイクにつまみ部と、表面左側に刃部を作り出す。調整等は簡略化されているが、計画的に作成されたものと考え、つまみ付きナイフに分類した。

図Ⅳ-23-10は、つまみ部が錐状に作り出されており、錐として使われていた可能性がある。

スクレイパー（Ⅲ群B類）[図Ⅳ-23-11～24・図Ⅳ-24-1～15、図Ⅳ-30、表Ⅳ-12 図版Ⅳ-20]

Ⅲ層57点、Ⅴ層66点、計123点が出土している。このうち40点を図示した。

分布はⅢ層は、①Zo64～66、A65付近、②Yo～Bライン、68～72ライン、③A～Eライン、73～78ライン、④A～Fライン、80～84ライン、Ⅴ層はほぼ全域に出土し、Zo-68区13点、B-78区1点が1グリットから10点以上出土した。

図Ⅳ-23-11～24はⅢ層出土。石質は、18、22、24が頁岩で、その他が黒曜石である。図Ⅳ-23-11～16は円形のもの。図Ⅳ-23-17、19は側縁に刃部をもつ。図Ⅳ-23-18は表面を全面調整し、下端部に刃部をもつ。図Ⅳ-23-20、21は素材の形状を変えず、フレイクに刃部を設けたもの。図Ⅳ-23-22は両面調整のもの。図Ⅳ-23-23、24は横長の形態になるもの。図Ⅳ-24-1～15はⅤ層出土のもの。図Ⅳ-24-1、2は円形のもの。内腕する刃部が作り出されている。図Ⅳ-24-3～8は側縁に刃部をもつ。図Ⅳ-24-9、10は尖頭部を持つもの。図Ⅳ-24-11は表面に原石面を残す。裏面は全面加工。図Ⅳ-24-12、13は両面調整のもの。図Ⅳ-24-14、15は素材の形状を変えず、フレイクに刃部を設けたもの。

図Ⅳ-23-11～16は主に表面下方に刃部を作出している。11、13のように刃部が円形に調整されているものと、14、16のように円形を基準に刃部が外腕するものの2種類が見られた。

図Ⅳ-23-17～21は、刃部が表面側面に作り出されているもの。17、18は表面両側面に刃部を持ち、裏面の上部、下部の一部を調整しているもの。19～21はフレイクの表面左側面に刃部を作り出すもの。

図Ⅳ-23-23、24は、横幅のあるフレイク素材の、幅のある面（表面上部、下部）に刃部を作り出すもの。

楔形石器（Ⅲ群C類）[図Ⅳ-24-16～17、図Ⅳ-30、表Ⅳ-12、図版Ⅳ-20]

8点が出土している。このうち2点を図示した。

Ⅳ 包含層と遺物

分布は、Ⅲ層①A64区1点、A67区1点、②Zo～Dライン、74～77ライン、③C84区1点、F82区2点、と散漫ながら3つのまとまりがある。Ⅴ層は①B63区1点、Zo67区2点、②B78区1点、C77区1点、C78区1点、③D～Fライン、80～84ラインの3つのまとまりがある。

図Ⅳ-24-16はⅢ層出土。図Ⅳ-24-17はⅤ層出土。

棒状原石 [図Ⅳ-24-19、表Ⅳ-12 図版Ⅳ-20]

3点が出土している。このうち1点を図示した。分布はB79区Ⅴ層1点、C78区Ⅴ層1点、C79区Ⅴ層1点と、包含層の出土ながら集中して出土している。図示したものはC79区Ⅴ層出土。

石斧 (Ⅳ群A類) [図Ⅳ-25-1～5、図Ⅳ-30、表Ⅳ-12、図版Ⅳ-21]

Ⅲ層30点、Ⅴ層41点、計71点が出土している。このうち5点を図示した。図Ⅳ-25-1はⅣ層出土。図Ⅳ-25-2～5はⅤ層出土。図Ⅳ-25-1は刃部が一部欠損。敲打による調整の後、全面に磨製されている。石質は片岩。図Ⅳ-25-2は擦切技法により作成されている。全面に磨製されている。石質は蛇紋岩。図Ⅳ-25-3は擦切技法により作成された可能性がある。全面に磨製されている。石質は泥岩。図Ⅳ-25-4は刃部のみ磨製され、その他の部分は敲打により調整されている。石質は泥岩。図Ⅳ-25-5は刃部付近のみ磨製されている。

たたき石 (Ⅴ群A類) [図Ⅳ-25-6～8、図Ⅳ-26-1～4、図Ⅳ-31、表Ⅳ-12 図版Ⅳ-21]

Ⅲ層21点、Ⅴ層26点、表採1点、計48点が出土している。このうち7点を図示した。図Ⅳ-25-6～8はⅢ層出土。図Ⅳ-25-6は上下に敲打痕がある。石質は砂岩。図Ⅳ-25-7は中央に敲打痕がある。石質は閃緑岩。図Ⅳ-25-8は2対の凹みが2組ある。石質は珪岩である。図Ⅳ-26-1～4はⅤ層出土。図Ⅳ-26-1は砥石が破損品を転用したもの。石質は砂岩。図Ⅳ-26-2は下に敲打痕がある。石質は珪岩。図Ⅳ-26-3～4は2対の凹みがある、凹み石である。石質は砂岩。

すり石 (Ⅵ群A類) [図Ⅳ-26-5～9、図Ⅳ-32、表Ⅳ-12、図版Ⅳ-22]

Ⅲ層21点、Ⅴ層24点、計45点が出土している。このうち5点を図示した。図Ⅳ-26-5、6はⅢ層出土。図Ⅳ-26-5は敲打によりすり面を調整している。石質は砂岩。図Ⅳ-26-7～9はⅤ層出土。図Ⅳ-26-7はほぼ全面にすり面がある。石質は閃緑岩。図Ⅳ-26-9は上下にすり面がある。石質は片麻岩。

台石・石皿 (Ⅶ群A類) [図Ⅳ-32]

台石30点、石皿27点が出土している。破片が多く、完形で出土したものは少ない。包含層出土のもの図示していない。

砥石 (Ⅷ群B類) [図Ⅳ-27-1、2、図Ⅳ-33、表Ⅳ-12、図版Ⅳ-22]

Ⅲ層23点、Ⅴ層7点、計23点が出土している。このうち2点を図示した。

分布はⅢ層では①A65区、A68区、②A～Cライン、75～80ライン、Ⅴ層では①B75・76、②B78区、B79区、C79区のまとまりが見られた。

図Ⅳ-27-1はⅢ層出土。いわゆる四面砥石である。石質は砂岩である。図Ⅳ-27-2はⅤ層出土。手持ちの砥石と考えられる。石質は砂岩である。

石錘（Ⅸ群A類）〔図Ⅳ-27-3、4、表Ⅳ-12、図版Ⅳ-22〕

2点が出土している。2点とも図示した。図Ⅳ-27-3はⅢ層出土。中央部がわずかに凹んでいる。石質は片岩。図Ⅳ-27-4は長軸、短軸ともに打ち欠かされている。石質は安山岩。

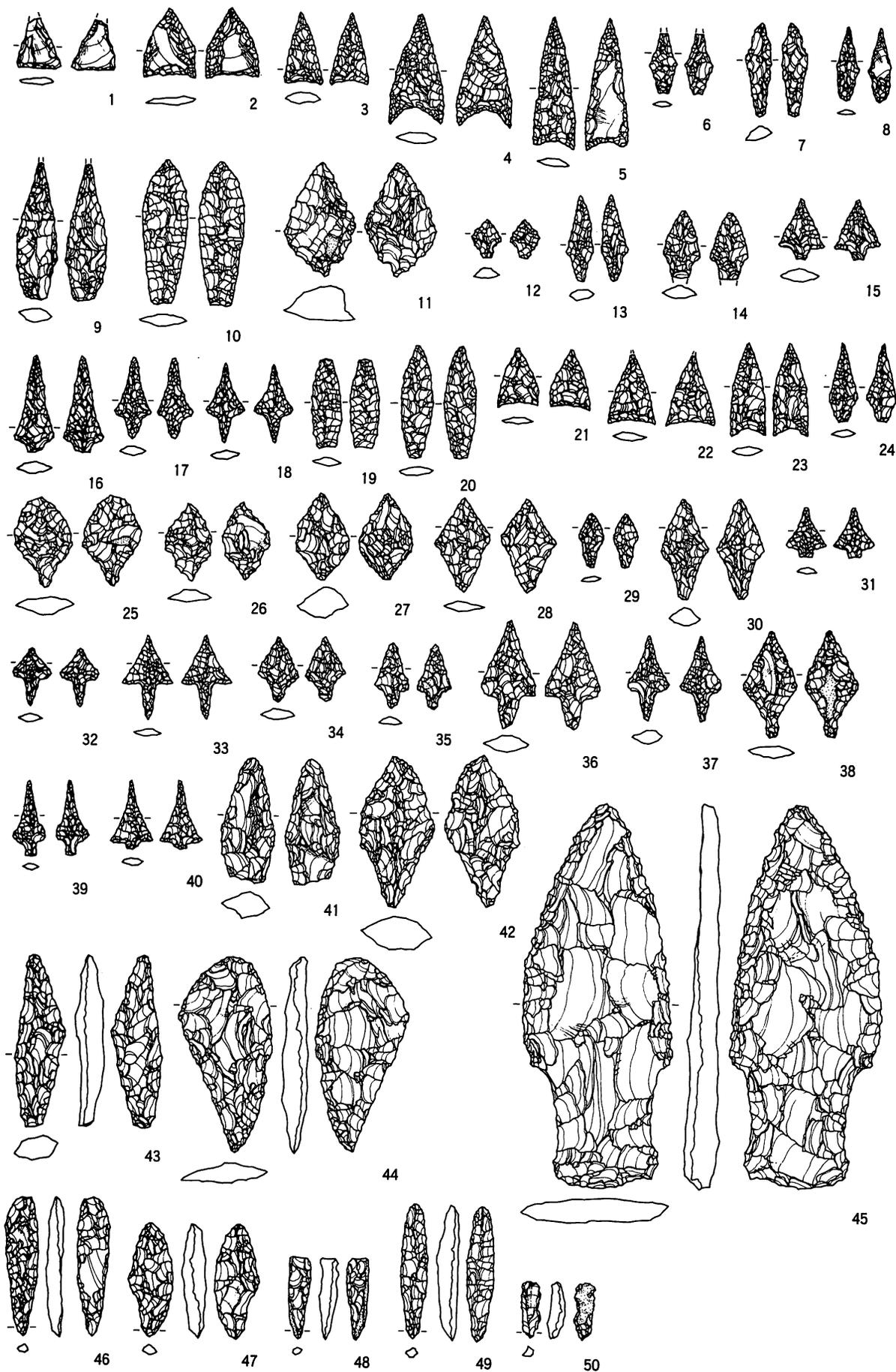
異形石器〔図Ⅳ-24-18、図Ⅳ-27-5、表Ⅳ-12、図版Ⅳ-20、23〕

9点が出土している。このうち2点を図示した。ともにⅤ層出土。図Ⅳ-27-5は周辺よりオロシガネ状土製品が出土していたので、縄文時代後期中葉のものとする。いわゆる花十勝の赤い色の部分が多くなるよう意図的に作られている（口絵カラー参照）。左右対象形を意図していたと思われるので、左側の欠損部分にも石鏃様のものがあったと考える。

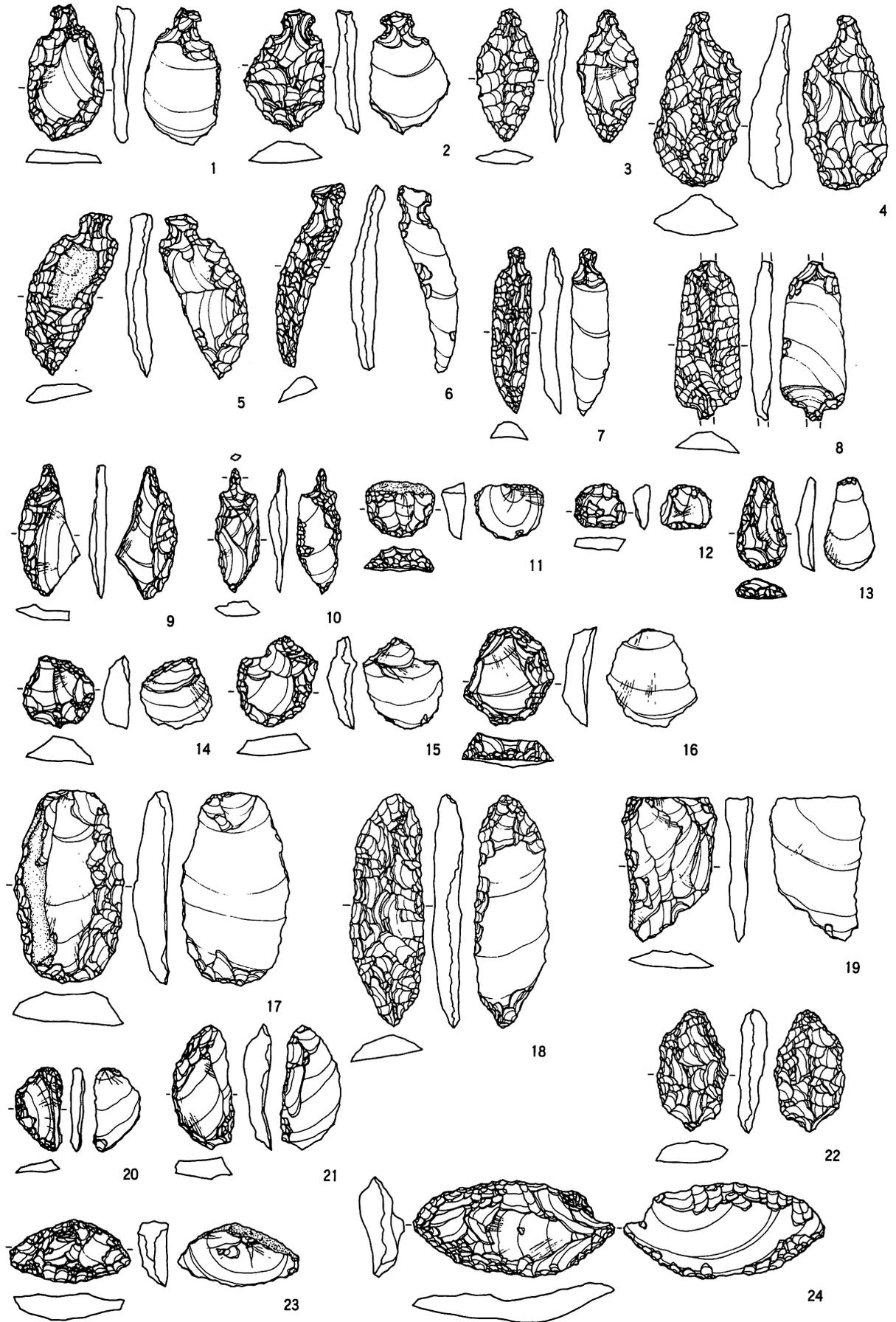
石製品〔図Ⅳ-27-5、表Ⅳ-12、図版Ⅳ-23〕

8点が出土している。このうち1点を図示した。図Ⅳ-27-5がⅤ層出土。図の表面から裏面にかけて穿孔している。石質はヒスイ。この資料は京都大学原子炉研究所の藁科哲男氏に原産地分析の依頼を行っている。（倉橋）

IV 包含層の遺物

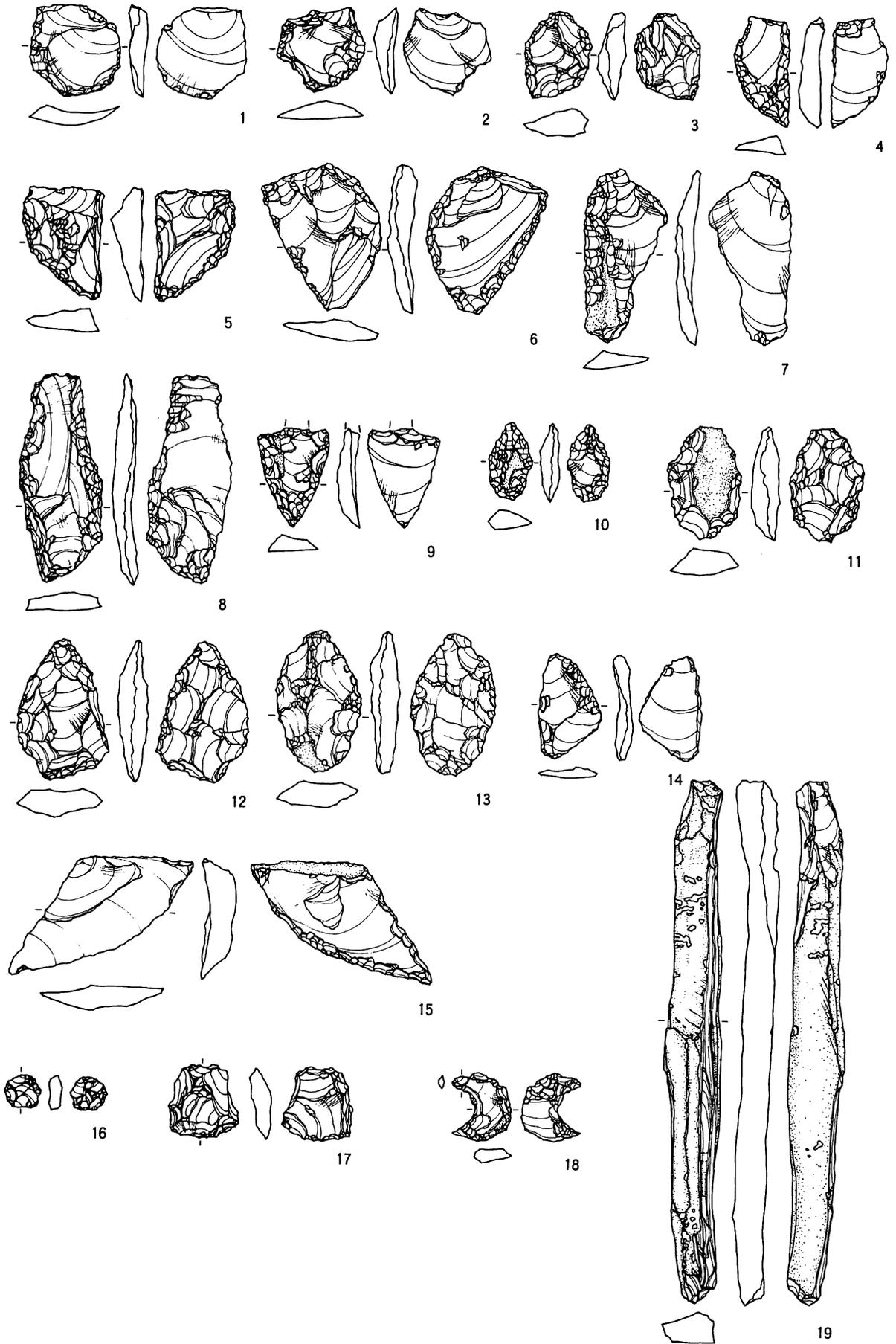


図IV-22 包含層出土の石器(1)

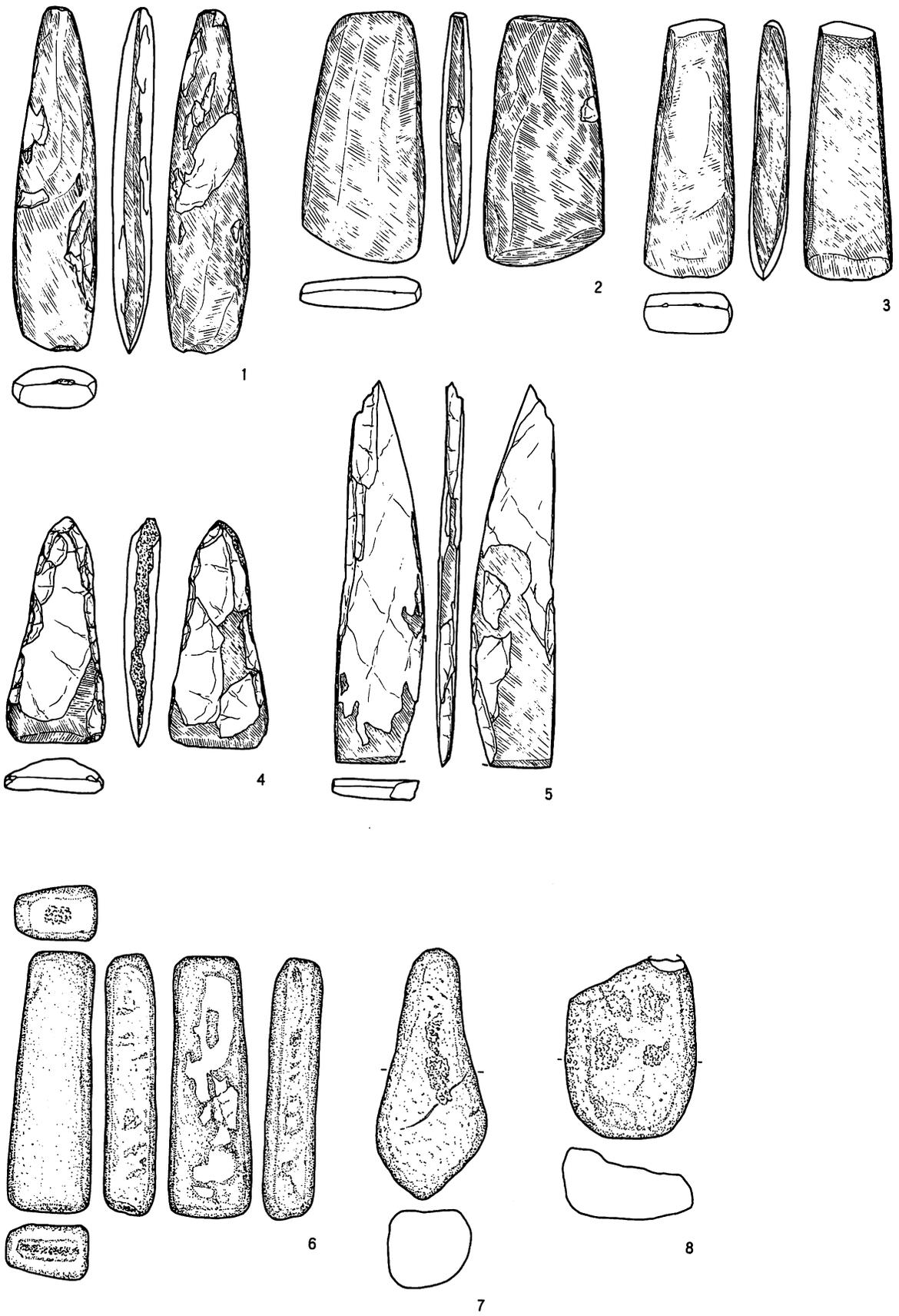


図IV-23 包含層出土の石器(2)

IV 包含層の遺物

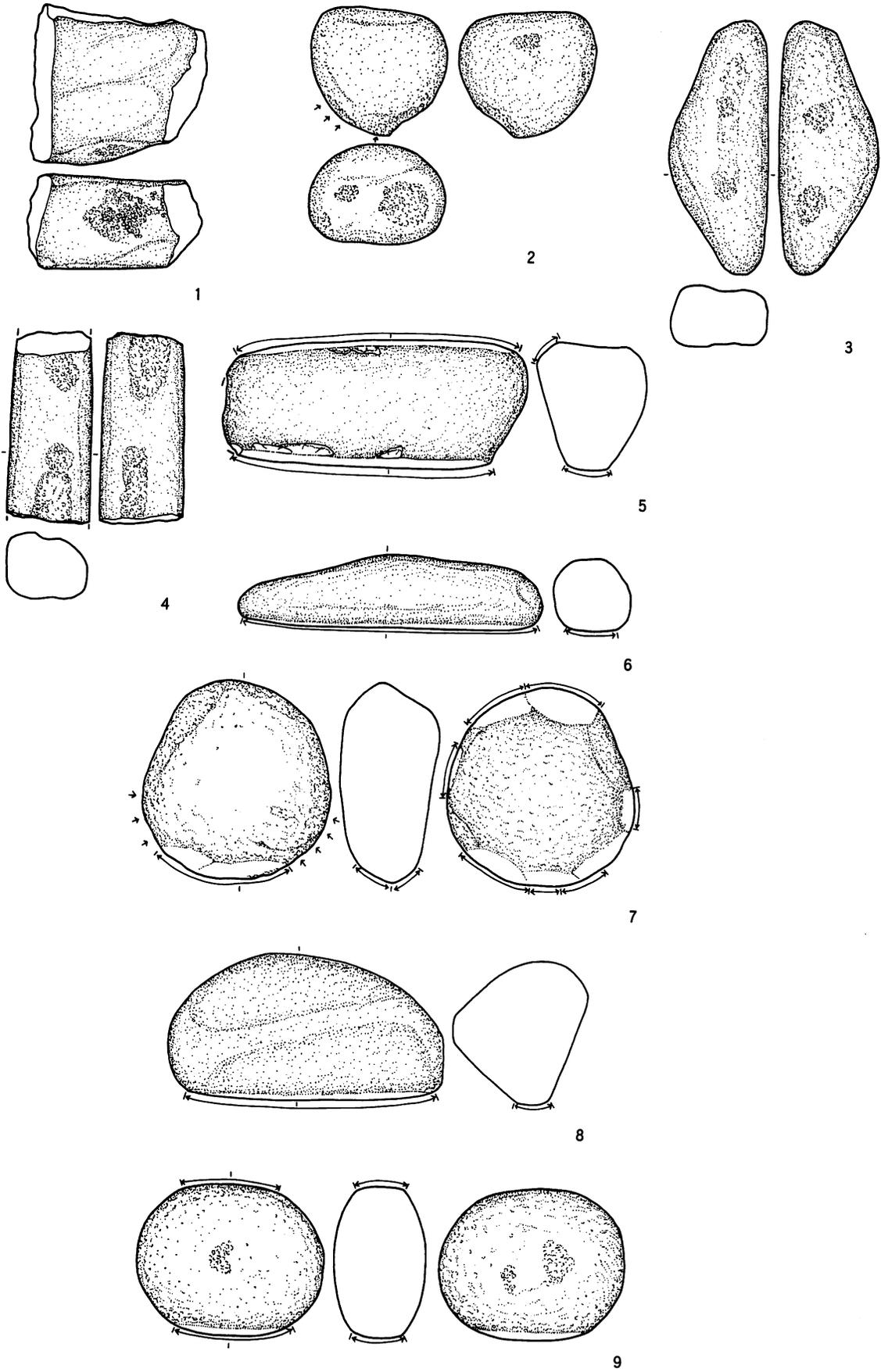


図IV-24 包含層出土の石器(3)

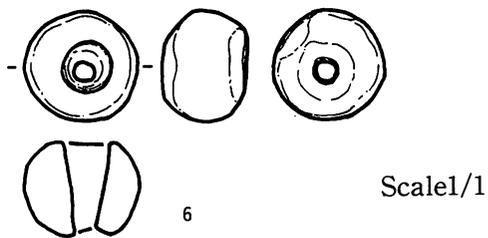
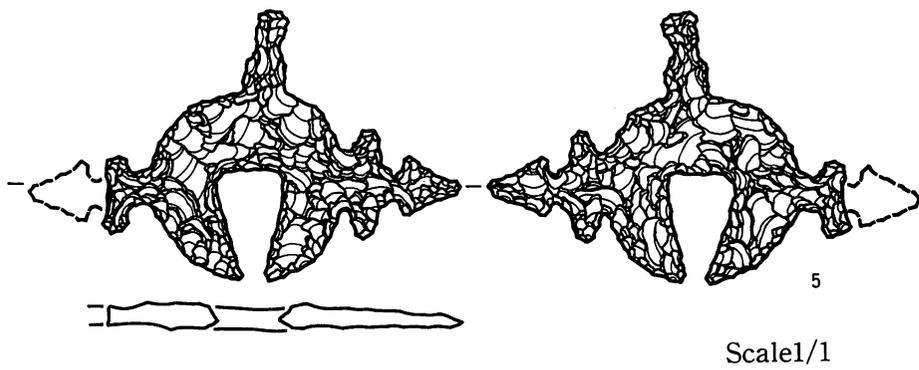
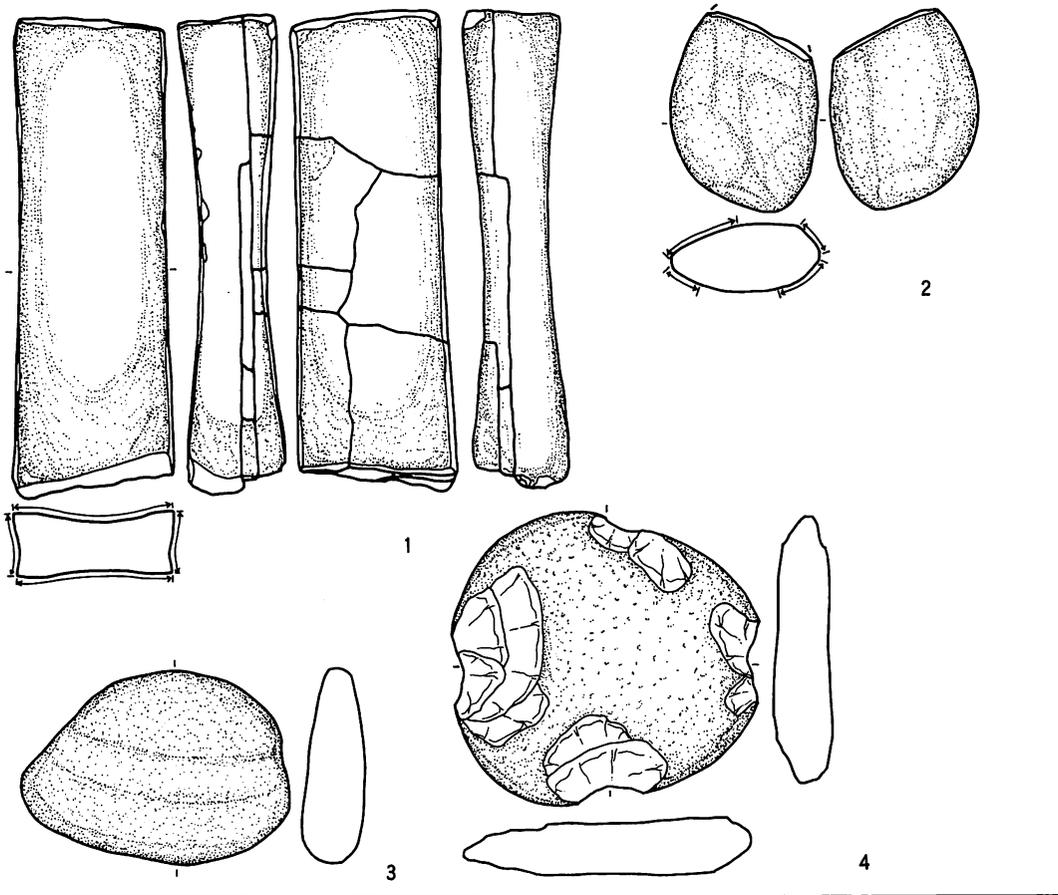


図IV-25 包含層出土の石器(4)

IV 包含層の遺物



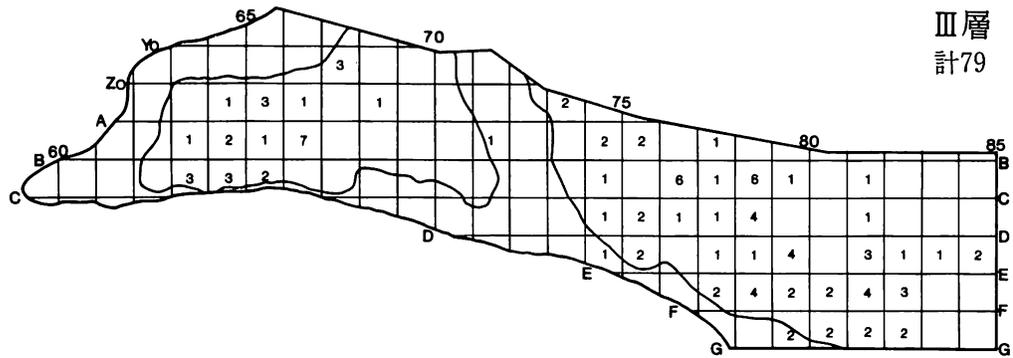
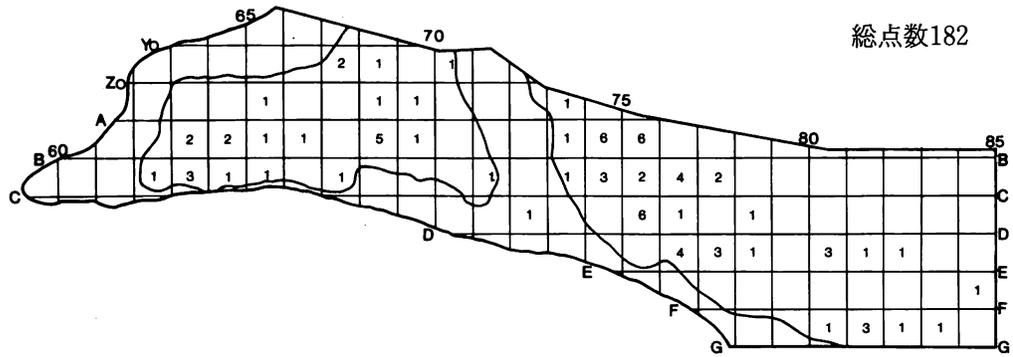
図IV-26 包含層出土の石器(5)



図IV-27 包含層出土の石器(6)・石製品

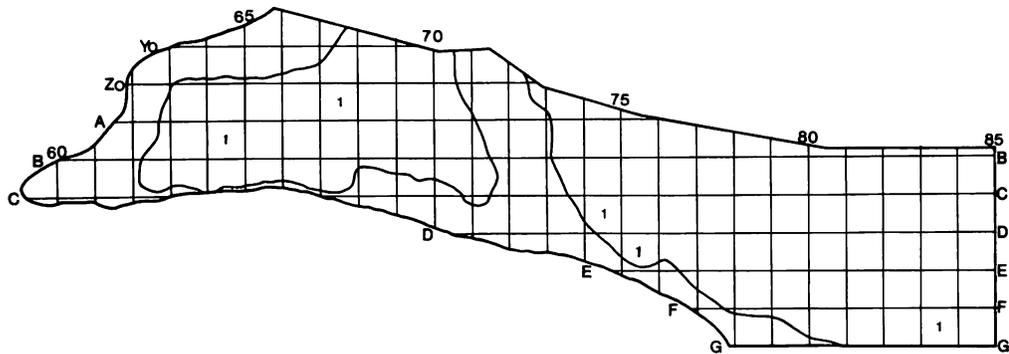
IV 包含層の遺物

石鏃



石槍・両面加工のナイフ

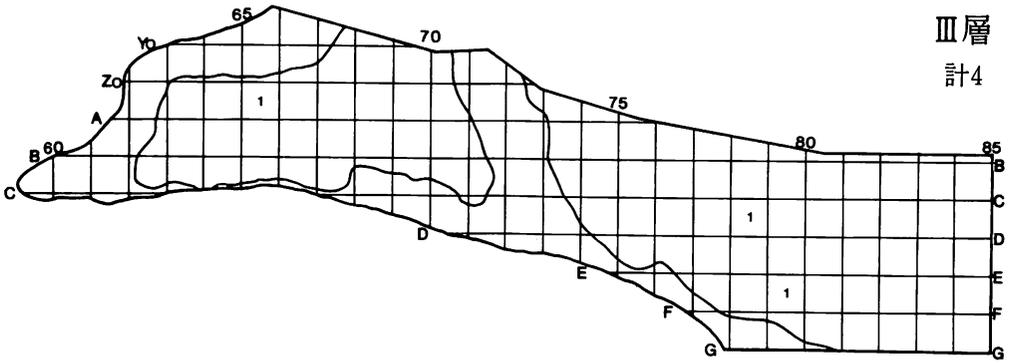
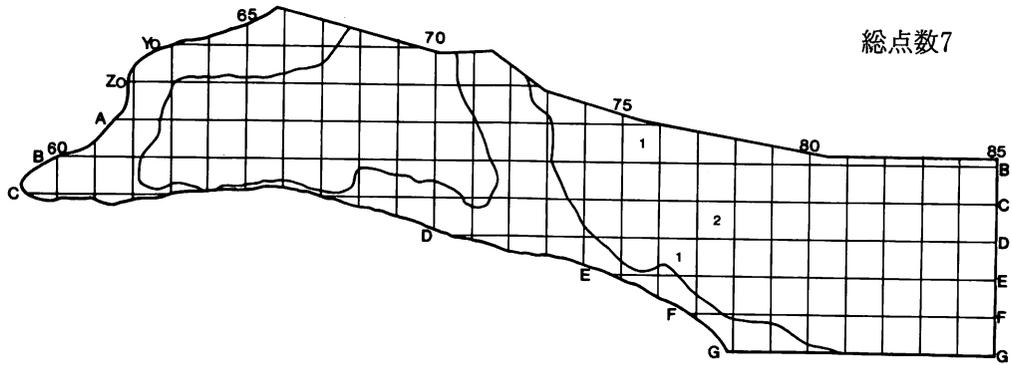
V層
計102
総点数 5



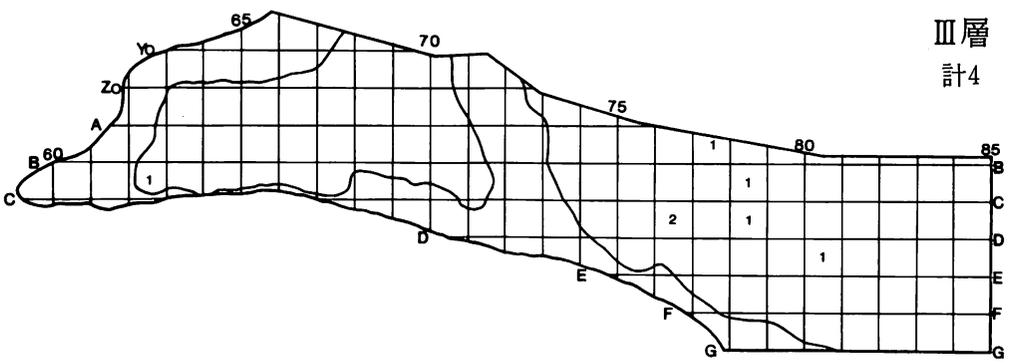
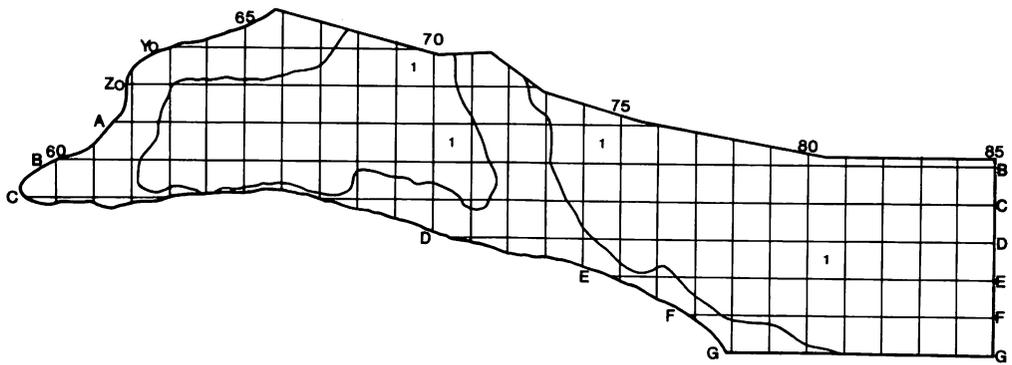
V層

図IV-28 包含層石器点数図(1) 石鏃Ⅲ・Ⅴ層 石槍・両面加工のナイフ V層

石錐



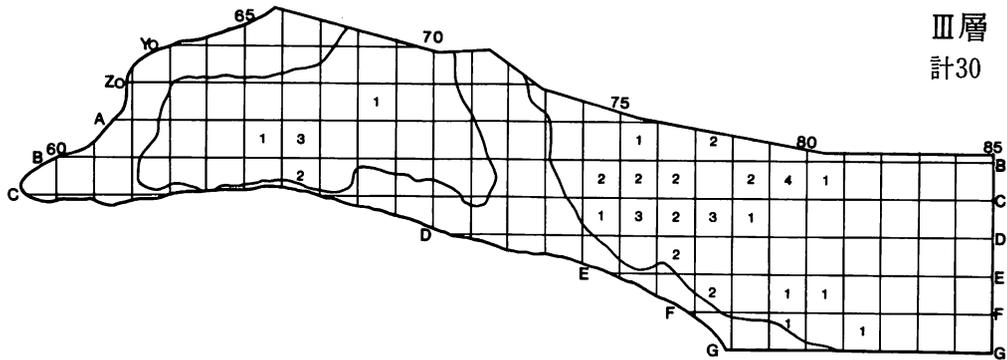
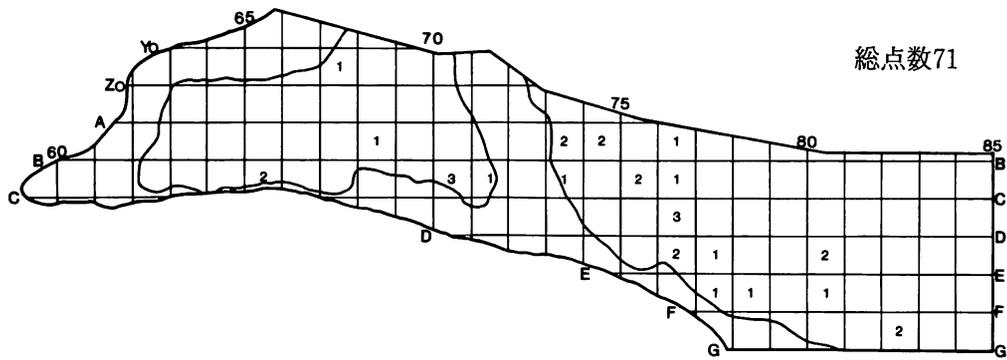
つまみ付きナイフ



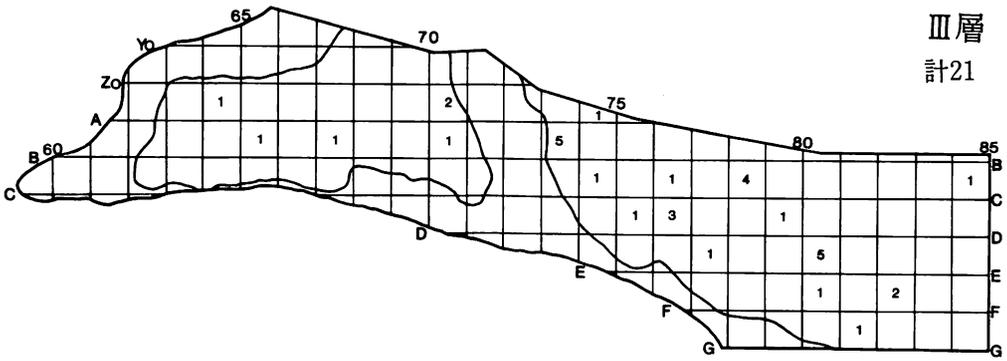
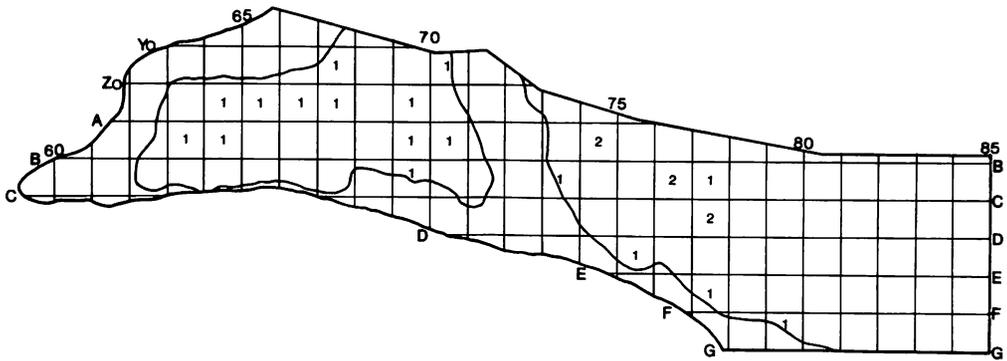
V層
計7

図IV-29 包含層石器点数図(2) 石錐・つまみ付きナイフ III・V層

石斧



たたき石



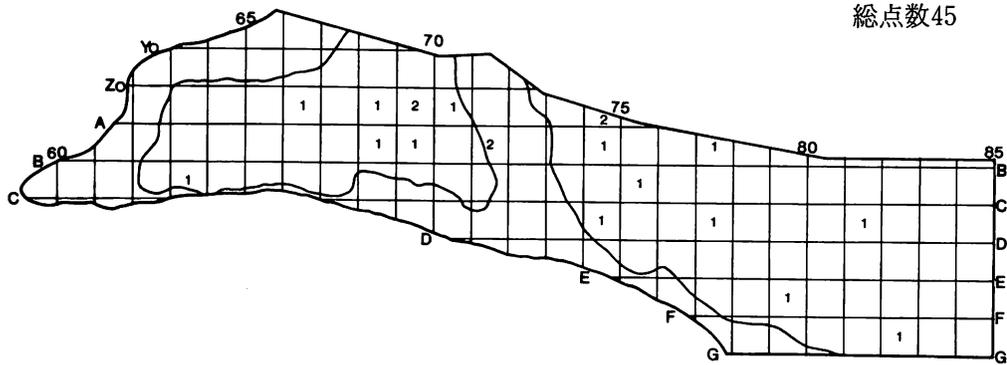
Ⅴ層
計26

図IV-31 包含層石器点数図(4) 石斧・たたき石 Ⅲ・Ⅴ層

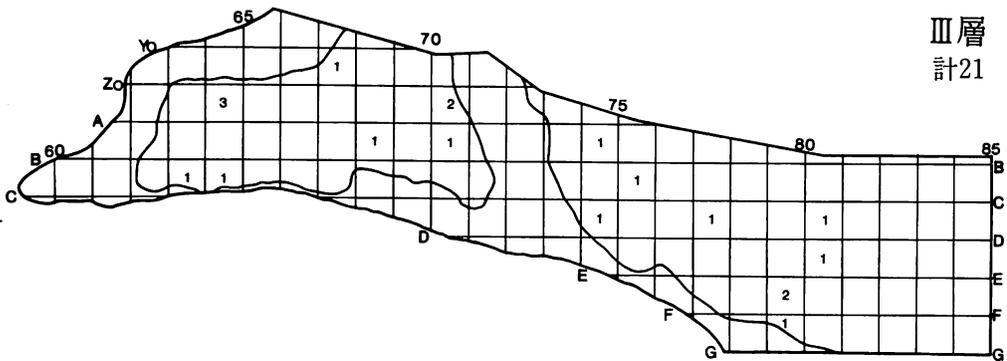
Ⅳ 包含層の遺物

すり石

総点数45



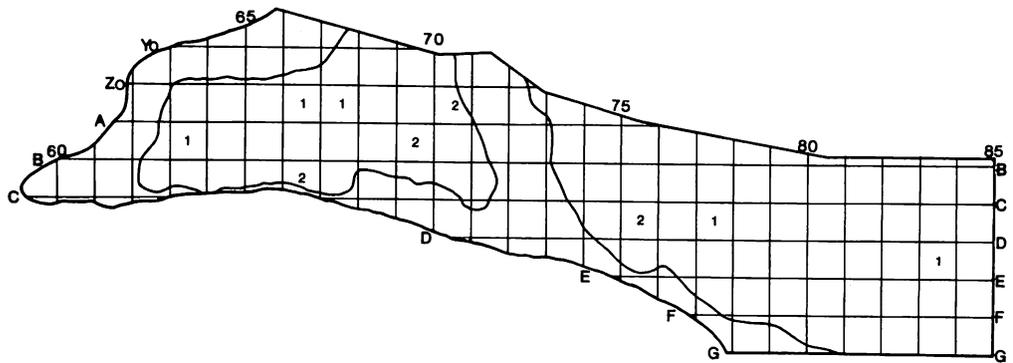
Ⅲ層
計21



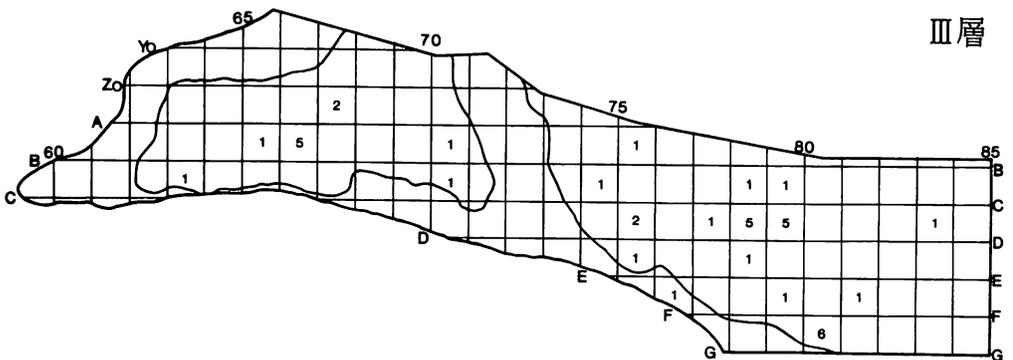
Ⅴ層
計24

総点数57

台石・石皿



Ⅲ層

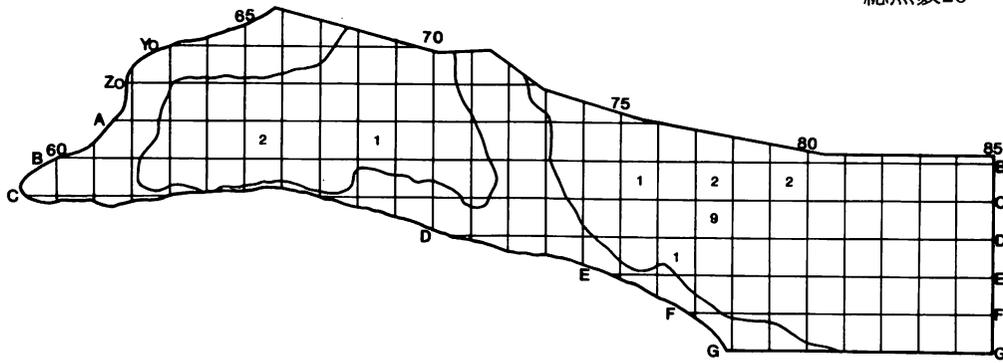


Ⅴ層

図Ⅳ—32 包含層石器点数図(5) すり石・台石・石皿 Ⅲ・Ⅴ層

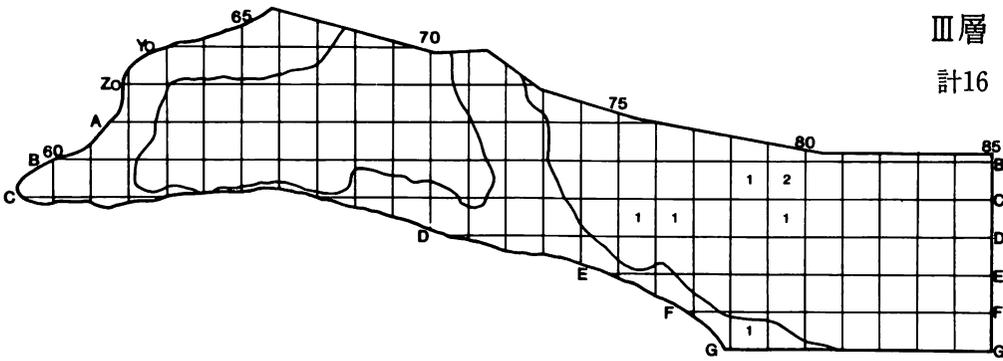
砥石

総点数23



III層

計16



V層

計7

図IV-33 包含層石器点数図(6) 砥石 III・V層

Ⅳ 包含層の遺物

表Ⅳ-1 包含層掲載土器一覽(1)

図番号	調査区			層位	遺物番号	点数	分類	器形	部位	文 様 等
図Ⅳ-1-1	A	45	a	V	2	2	Ⅲb	深鉢	口縁～胴	口径19.6cm。器高18.0cm。口唇は丸みを帯びる。少し外反する。地文LR横回転斜行縄文。口唇内面から4cm程にLR横回転斜行縄文。その下はナデ。底部は欠損。器面は暗黄褐色を呈す。
	A	65	c	V	15	10				
	A	45	c	V	2	2				
	B	65	d	V	5	1				
図Ⅳ-1-2	Yo	67	c	Ⅲ	3	5	Ⅳb	深鉢	口縁～底	口径35.0cm。器高25.8cm。底径6.6cm。口唇は少し丸みを持つ。4つの山形の突起を持つ。口縁部にくびれを持つ器形。地文LR横回転斜行縄文。一部に磨消。胴部に沈線で文様を区画。底部は平底でわずかに上げ底。
	Yo	67	c	V	5	41				
	Yo	67	d	V	6	34				
	Yo	68	b	V	9	5				
図Ⅳ-1-3	B	75	a	Ⅲ	1	1	Ⅳb	深鉢	口縁～胴	口径21.3cm。器高22.3cm。口唇は丸みを帯びる。5つの緩やかな高まりを持つ波状口縁。補修孔が1対残る。5条の横沈線を3本にまたがり縦の沈線が区切る。RL横回転斜行縄文。底部は欠損。
	B	75	a	V	8	13				
図Ⅳ-1-4	A	74	a	Ⅲ	15	2	Ⅳb	深鉢	口縁～胴	口径24.9cm。器高20.3cm。口唇は丸みを帯びる角形。平縁。真っ直ぐ立ち上がる。補修孔が1個残る。文様帯の上部のみ横ミガキ。磨消。7条の横沈線。3本にまたがり○()状の沈線で区画。地文LR横回転斜行縄文。一部に斜回転縦走気味の部分がある。内面はへら状工具による横ミガキ。部分的に炭化物が付着する。底部は欠損。器面は橙褐色を呈す。
	A	76	c	V	6	3				
	A	77	a	Ⅲ	3	1				
	A	77	b	V	1	3				
	A	77	a	V	4	1				
	B	73	a	V	3	1				
	B	77	c	Ⅲ	15	1				
	B	77	d	Ⅲ	11	1				
	B	77	a	Ⅲ	12	1				
	B	77	a	V	17	4				
	B	77	c	V	18	1				
	B	78	a	Ⅲ	8	3				
	B	78	d	V	10	6				
	C	76	c	V	1	1				
C	77	d	V	10	3					
C	77	a	V	1	3					
C	77	b	V	9	1					
D	76	a	V	24	1					
図Ⅳ-1-5	A	74	b	Ⅲ	13	1	Ⅳb	深鉢	口縁～底	口径13.5cm。器高15.0cm。底径6.3cm。角形。多少内傾する。緩やかな波状の口縁。口唇から下2cm程はミガキ。1条の横沈線。地文RL横回転斜行縄文。部分的に斜回転。縄文が縦走気味のところがある。胴半部～底部にかけてはミガキ。無文。底部は欠損。内面はへら状工具による調整。
	A	74	b	Ⅲ	9	6				
図Ⅳ-1-6	E	79	a	Ⅲ	8	2	Ⅳb	注口	口縁～底	口径7.6cm。器高14.7cm。底径4.0cm。口唇に縦の刻み目が入り、少し丸みを帯びる。頸部までは横ミガキ。頸部に横沈線の間に縦の刻みが入る。LRとRL横回転斜行縄文で羽状縄文を構成する。
	E	79	c	Ⅲ	6	3				
	E	79	a	V	4	5				
	E	79	d	V	3	17				
図Ⅳ-2-1	E	78	c	Ⅲ	19	3	Ⅳb	深鉢	口縁～底	口径19.0cm。器高17.5cm。底径6.2cm。口唇は丸みを持つ。緩やかな4つの山形の突起を持つ。地文LR横回転斜行縄文。一部に磨消。6条の横沈線を2本またぐように○()状の縦の沈線で文様を区画。胴下半部は横ミガキ。底部は平底。わずかに中央部が上げ底気味。内面はミガキ。器面は暗黄褐色～灰褐色、内面は茶褐色～暗茶褐色を呈す。
	E	78	d	V	34	3				
	E	78	c	Ⅲ	5	3				
	F	78	c	V	31	5				
	F	78	d	Ⅲ	22	3				
	F	78	a	Ⅲ	12	1				
	F	78	c	Ⅲ	9	1				
図Ⅳ-2-2	Zo	70	a	V	9	3	Ⅳb	深鉢	口縁～胴	口径35.5cm。器高(13.5)cm。口唇は角形。口唇から2cm程は横ミガキ。無文。地文LR横回転斜行縄文。9条の横沈線を2本またぐように○()状の縦の沈線で区画。底部付近に磨消。ミガキ。底部は欠損。器面は橙褐色～黒褐色、内面は暗茶褐色を呈す。
	Zo	70	b	Ⅲ	2	2				
	Zo	70	b	V	6	1				
	Zo	70	b	V	10	3				
	Zo	70	c	V	8	1				
	Zo	70	d	V	11	1				
	A	69	a	Ⅲ	2	1				
	A	70	c	Ⅲ	3	1				
	A	70	d	Ⅲ	5	1				
	B	69	d	Ⅲ	2	7				
	B	69	d	V	6	1				
	B	70	a	Ⅲ	6	1				
	B	71	c	Ⅲ	3	1				
C	69	d	Ⅲ	2	1					
図Ⅳ-2-3	B	63	a	V	1	32	Ⅳb	深鉢	口縁～底	口径16.5cm。器高17.2cm。底径7.2cm。口唇上はナデ。地文LR横回転斜行縄文。胴下半部はミガキ。底部は平底。内面は粗くミガキ。
	B	63	a	V	11	13				
	B	63	c	V	1	1				
図Ⅳ-2-4	E	81	c	V	18	1	Ⅳb	浅鉢	口縁～底	口径13.5cm。地文LR横回転斜行縄文。5条の横沈線を2本またぐように○()状の縦の沈線で区画。横沈線を全て縦の直線で区画。その中に管状の刺突具による施文。内面はミガキ。底部は平底。器面は橙褐色～黒褐色、内面は暗茶褐色を呈す。
	E	82	a	V	1	1				
	E	82	a	V	1	1				
	F	81	a	Ⅲ	20	1				
	F	81	b	Ⅲ	20	1				
	F	81	d	V	5	4				
図Ⅳ-2-5	B	76	c	V	5	1	Ⅳb	鉢	口縁～底	口径17.5cm。器高11.4cm。底径4.4cm。口唇は角形。口縁部～胴部にかけて少しくびれる形。地文LR横回転斜行縄文。一部に斜回転縦走気味の部分がある。内面はミガキ。底部は平底。器面は橙褐色～褐色、内面は橙褐色～暗褐色。
	E	78	a	Ⅲ	11	1				
	E	78	a	Ⅲ	8	1				
	E	78	b	Ⅲ	10	1				
	E	78	a	V	29	5				
	F	79	a	Ⅲ	1	2				
	F	79	a	V	4	1				
	F	79	d	V	2	1				

Ⅳ 包含層の遺物

表Ⅳ-2 包含層掲載土器一覽(2)

図番号	調査区	層位	遺物番号	点数	分類	器形	部位	文様等	
図Ⅳ-2-6	B	77	c	V	6	N b	深鉢	胴	底径13.5cm。地文LR横回転斜行縄文。一部に斜回転、縄文が縦走気味の部分がある。内面はナデ。底部は平底。器面は黄褐色～黄灰色、内面は黄褐色～暗茶褐色。
	B	79	b	V	5				
	B	79	c	V	6				
	B	80	d	V	6				
	B	80	c	V	4				
	B	80	b	V	11				
	B	80	b	V	3				
	C	76	c	V	1				
	C	77	b	Ⅲ	6				
	C	78	c	V	17				
	C	80	a	V	6				
	C	80	a	V	3				
	C	81	d	V	27				
	D	76	d	Ⅲ	29				
	D	76	a	V	35				
	D	76	a	V	22				
	D	77	a	Ⅲ	9				
D	77	a	V	13					
D	77	a	V	5					
図Ⅳ-3-1	Zo	69	b	Ⅲ	7	N c	深鉢	口縁～胴	口唇は角形。2ヶ所の小突起が4ヶ所あり、その間に1つの突起が埋める。刻み目の下に沈線の区画が2条巡り、内面から外面への突瘤文が施される。頸部は少しくびれる。地文はLRとRL横回転斜行縄文。部分的に羽状縄文を構成。頸部付近はミガキによる無文帯。底部は欠損。器面は黄褐色～暗茶褐色、内面は黄褐色～茶褐色。
	A	62	d	Ⅲ	6				
	A	68	d	Ⅲ	6				
	A	68	c	Ⅲ	4				
	A	68	d	Ⅲ	6				
	A	69	a	Ⅲ	3				
	A	69	b	Ⅲ	1				
	A	69	b	Ⅲ	1				
	A	69	b	Ⅲ	1				
	A	69	b	V	7				
	A	69	b	V	1				
	B	75	b	Ⅲ	6				
	B	75	c	Ⅲ	4				
	B	75	d	V	15				
	B	76	c	V	5				
	C	76	b	Ⅲ	6				
	C	76	c	V	1				
	C	76	a	V	4				
	C	77	a	Ⅲ	4				
	C	78	d	Ⅲ	13				
	C	78	a	V	8				
	D	76	d	Ⅲ	29				
	D	76	a	V	18				
	D	76	a	V	24				
	D	76	a	V	24				
	D	80	a	V	8				
	E	78	a	Ⅲ	14				
E	78	d	V	29					
図Ⅳ-3-2	E	78	a	V	29	N c	深鉢	口縁～胴	口径39.5cm。器高41.5cm。口唇は切り出しナイフ形。少し内傾する。口縁部～胴部までは少しくびれる。内側から外側への突瘤文。地文LRとRL横回転斜行縄文。部分的に羽状縄文を構成。底部は平底。内面はヘラ状工具による調整。器面は赤褐色を呈す。
	E	78	d	Ⅲ	2				
	E	78	a	Ⅲ	11				
	E	78	c	Ⅲ	9				
	E	78	c	V	30				
	E	78	d	V	34				
	E	78	b	Ⅲ	10				
	E	78	c	V	31				
	E	78	c	Ⅲ	5				
	E	78	c	V	15				
	E	79	b	V	13				
	E	79	c	Ⅲ	6				
	E	79	c	V	1				
	E	79	c	Ⅲ	5				
図Ⅳ-3-3	F	78	c	Ⅲ	5	N c	深鉢	口縁～胴	口径34.0cm。器高19.2cm。口唇は切り出しナイフ形。真っ直ぐ立ち上がる。口唇内面にもLR横回転斜行縄文。5条の横沈線。内側から外側への突瘤文。地文LRとRL横回転斜行縄文。部分的に羽状縄文を構成。内面はミガキ。底部は欠損。器面は黄褐色～黄灰色。角閃石を含む。
	F	78	c	V	31				
	F	78	d	V	4				
	E	80	a	Ⅲ	11				
	E	80	b	V	4				
	E	80	c	V	10				
	E	80	d	Ⅲ	3				
	E	80	d	V	5				
	E	81	a	V	15				
	E	82	d	V	2				
	F	82	a	V	16				
	F	82	b	Ⅲ	7				
F	82	b	V	10					
F	82	c	V	9					
F	82	d	V	6					

IV 包含層の遺物

表IV-3 包含層掲載土器一覧(3)

図番号	調査区	層位	遺物番号	点数	分類	器形	部位	文 様 等		
図IV-4-1	Zo	75	c	Ⅲ	1	Vb	深鉢	口縁～底	口径27.3cm。器高14.0cm。底径8.7cm。口唇は丸みを帯びる。内傾する。口唇外面には縦の刻みと沈線。地文LR+RL横回転斜行縄文。部分的に羽状縄文を構成。孤状の沈線で文様帯を区画。底部は欠損。器面は黄褐色～黄灰色、内面は黄褐色を呈す。	
	A	74	d	Ⅲ	15					
	A	75	c	Ⅲ	9					
	A	75	d	V	4					
	A	76	a	V	4					
	A	76	a	V	9					
	A	76	a	V	11					
	A	76	b	V	5					
	A	78	c	Ⅲ	9					
	A	78	a	V	75					
	B	71	a	V	8					
	B	73	a	Ⅲ	6					
	B	76	a	Ⅲ	1					
	B	76	a	V	1					
	B	77	c	Ⅲ	15					
	B	77	d	Ⅲ	10					
	B	77	a	Ⅲ	10					
	B	77	d	V	16					
	B	78	a	Ⅲ	10					
	B	78	a	V	7					
	B	78	a	V	8					
	B	78	a	V	17					
	B	78	a	V	14					
	B	78	c	V	10					
	B	78	d	V	7					
	B	79	b	Ⅲ	4					
	B	79	a	V	8					
	B	79	b	V	5					
	C	78	c	V	2					
	C	78	d	V	15					
D	75	a	V	5						
D	81	a	V	18						
D	81	a	V	1						
D	81	a	V	1						
E	78	c	V	18						
不	明			30						
図IV-4-2	D	76	d	V	2	V	ミニチュア	口縁～底	口径7.6cm。器高3.3cm。底径2.6cm。口唇は丸みを帯びる。地文はLR横回転斜行縄文。内面はナデ。器面は黄褐色、内面は黄褐色～黄灰色。角閃石を多く含む。	
図IV-4-3	B	65	c	V	1	V	ミニチュア	口縁～底	口径7.2cm。器高5.1cm。底径3.0cm。口唇は丸みを帯びる。器面、内面はナデ。器面は黄褐色を呈す。	
図IV-4-4	未注記	A	70	d	Ⅲ	6	Vc	ミニチュア	口縁～底	口径7.2cm。器高3.1cm。底径4.1cm。口唇は先細り。器面、内面ともにミガキ。器面は橙褐色を呈す。
図IV-4-5	表	採		21f	3	Vc	浅鉢	口縁～底	口径12.3cm。器高7.5cm。底径6.0cm。口唇は角形。縦の刻み目を持つ。爪形文がめぐる。縦に管状工具による刺突文。地文RL横回転斜行縄文。内面はミガキ。底部は平底。底面にもRL横回転斜行縄文。器面は黄褐色～黒褐色を呈す。	
	B	70	d	Ⅲ	3					
	B	70	d	Ⅲ	6					
	B	70	d	Ⅲ	4					
図IV-4-6	Zo	64	c	Ⅲ	3	Va	浅鉢	口縁～底	口径(17.0)cm。器高9.8cm。底径7.0cm。口唇は丸みをもち、少し先細り。わずかに内傾する。縦の爪形文が2条巡る。地文LR横回転斜行縄文。胴部中段に2条の縦の爪形文が巡る。上げ底。底面外側にヘラ状工具による沈線。器面は暗褐色、内面は橙褐色を呈す。	
	Zo	65	b	Ⅲ	3					
	A	62	c	Ⅲ	1					
	A	63	b	Ⅲ	10					
	A	63	c	V	3					
図IV-5-1	A	75	b	Ⅲ	5	Vc・Ma	深鉢	胴～底	器高33.0cm。底径8.3cm。地文RL斜回転。縄文が縦走気味。内面はナデ。底部は上げ底。	
	A	76	c	Ⅲ	2					
	A	78	b	Ⅲ	9					
	B	74	c	Ⅲ	17					
	B	74	b	Ⅲ	16					
	B	74	d	Ⅲ	13					
	B	74	d	V	12					
	B	75	c	Ⅲ	4					
	B	75	a	Ⅲ	1					
	B	76	c	Ⅲ	14					
	B	76	c	Ⅲ	11					
	B	77	a	Ⅲ	12					
	C	74	d	Ⅲ	7					
	F	78	d	V	4					
図IV-5-2	B	74	c	Ⅲ	17	Vc・Ma	深鉢	口縁～胴	口径25.3cm。器高13.2cm。口唇は丸みを帯びる。口唇上に半截竹管状の工具による刺突文有。補修孔が1つ残る。地文RL斜回転。縄文が縦走気味。内面はナデ。器面は黄褐色～黒褐色、内面は黄褐色を呈す。	
	B	74	c	V	17					
	B	76	c	Ⅲ	12					
	B	76	c	Ⅲ	10					
	B	76	c	Ⅲ	19					
	B	76	c	Ⅲ	11					
	C	74	d	Ⅲ	7					
F	76	d	V	4						
図IV-5-3	A	75	bc	Ⅲ	14	Vc	深鉢	口縁～胴	口径30.4cm。器高27.5cm。口唇は角形。平縁で、口唇上にRLの圧痕がある。地文RL斜回転、縄文が縦走気味。内面はナデ。底部は欠損。	
	A	75	c	Ⅲ	6					
	A	75	c	Ⅲ	14					
	A	75	c	Ⅲ	3					
	A	75	c	Ⅲ	9					
	B	76	a	Ⅲ	1					
	B	75	d	Ⅲ	5					

表Ⅳ-4 包含層掲載土器一覽(4)

図番号	調査区	層位	遺物番号	点数	分類	器形	部位	文様等		
図Ⅳ-5-4	A	74	c	Ⅲ	11	Vc・Ⅴa	深鉢	口縁～胴	口径22.8cm。器高20.2cm。口唇は角形。口唇上に指頭の圧痕による小さな刻み目が全体に巡る。補修孔が1対残る。地文RL斜回転、縄文が縦走気味。内面はへら調整。底部は欠損。器面は黄褐色～黒褐色。	
	A	75	b	Ⅲ	1					5
	A	75	b	Ⅲ	5					3
	A	75	a	Ⅲ	4					1
	A	75	b	Ⅲ	16					1
	A	76	a	Ⅲ	14					1
	B	74	d	V	12					25
	B	74	d	Ⅲ	13					3
	B	74	c	Ⅲ	17					1
	B	75	a	Ⅲ	1					1
未注			記							
図Ⅳ-5-5	C	76	a	Ⅲ	5	Vc	深鉢	口縁～胴	口径22.0cm。器高23.0cm。口唇は丸みを帯びている。地文RL斜回転、縄文が縦走気味。内面はナデ。底部は欠損。器面は赤褐色～黒褐色、内面は橙褐色～黒褐色を呈す。	
	C	76	b	Ⅲ	10					18
	C	76	c	Ⅲ	6					19
	C	76	c	Ⅲ	13					24
図Ⅳ-5-6	A	69	c	Ⅲ	2	Vc・Ⅴa	鉢・壺	口縁～底	口径10.7cm。器高9.8cm。底径6.0cm。口唇は丸みを帯びる。外反する。地文RL斜回転、縄文が縦走気味。内面はナデ。全面に炭化物が付着する。底部は平底。底面にLRの縄文。底面に炭化物が付着。器面は暗橙褐色～暗茶褐色を呈す。	
	A	69	c	Ⅲ	2					5
	A	69	d	Ⅲ	4					1
	A	69	c	Ⅲ	2					2
	B	69	d	Ⅲ	1					1
	B	69	d	Ⅲ	2					2
図Ⅳ-6-1	—	拵		V	1	Vc	深鉢	口縁～胴	口径33.0cm。器高31.5cm。口唇は角形。わずかに内傾する。5条の横沈線を縦の沈線で区画。その下に鉤歯状の沈線が施される。地文RL斜回転、縄文が縦走気味。内面はナデ。底部は欠損。器面は橙褐色～灰褐色、内面は黄灰色～黒褐色を呈す。	
	Zo	65	c	V	1					60
	A	66	a	V	1					1
図Ⅳ-6-2	D	76	d	Ⅲ	29	Vc	鉢	口縁～底	口径12.7cm。器高7.6cm。底径4.5cm。口唇は丸みを帯びる。真っ直ぐ立ち上がる。地文LR斜回転、縄文が縦走気味。内面はナデ。器面は黄褐色～茶褐色を呈す。	
図Ⅳ-6-3	A	75	b	Ⅲ	1	Vc	浅鉢	口縁～底	口径28.2cm。器高13.8cm。底径9.1cm。口唇は角形。真っ直ぐ立ち上がる。口唇上に縦の刻み目。その内側にRL縄文。地文RL横回転斜行縄文。内面はナデ。部分的に炭化物が付着する。底部は平底。RLの縄文が施される。器面は橙褐色～黄灰色、内面は橙褐色～茶褐色を呈す。	
	A	75	a	Ⅲ	2					2
	A	75	a	Ⅲ	4					8
	A	75	b	Ⅲ	5					1
	A	75	d	Ⅲ	8					1
	A	75	c	Ⅲ	9					1
	A	75	b	Ⅲ	15					5
	A	75	b	Ⅲ	16					6
	D	81	d	風倒	1					1
図Ⅳ-6-4	C	75	d	Ⅲ	7	Ⅵ	鉢	口縁～底	口径9.3cm。器高9.8cm。底径7.0cm。口唇は丸みを帯びる。真っ直ぐ立ち上がる。細い貼付帯に縦の刻み目が施されている。地文RL斜回転、帯縄文が縦走気味。その間に小さな三角形の列点文が施される。部分的にタール状の付着物がある。内面はミガキ。底部は少し張り出し、上げ底気味。器面は茶褐色～黒褐色。内面は黄褐色～黒褐色を呈す。	
	C	75	c	Ⅲ	5					1
図Ⅳ-6-5	Zo	66	c	Ⅲ	9	Ⅶ	深鉢	口縁～胴	口径18.5cm。器高(14.6)cm。口唇は丸みを持つ角型。少し外反する。口縁に外側から内側への円形刺突文。頸部にはへら調整後、ミガキ。頸部は段状になる。縦位にへら調整、ミガキ。内面は横位にへら調整後、ミガキ。底部は欠損。器面は黄褐色を呈す。焼成は中程度。角閃石を含む。	
	A	65	c	Ⅲ	1					58
図Ⅳ-6-6	A	66	a	V	7	Ⅶ	深鉢	口縁～底	口径22.5cm。器高22.8cm。底径7.1cm。口唇は丸みを帯びる。外反する。口縁の姿勢点に幅1mm、深さ1mmの横走沈線。その下に幅1mm、深さ1mmの針葉樹状の文様。ただし、規則的ではない。胴部はへら調整後、ミガキ。内面は粗いミガキ。わずかに炭化物が付着する。器面は上部が黒褐色、下部が赤褐色。底部は平底。わずかに張り出す。焼成は良好。長石、石英、角閃石を含む。	
	D	81	d	風倒	1a					1
	D	82	b	Ⅲ	6					6
図Ⅳ-7-1	D	82	b	Ⅲ	6a	3				
	A	70	b	Ⅲ	7	1	I b-2	深鉢	口縁	口唇は先細り。外反する。2つが対になった縄端の圧痕文が4列、器面を横環する。内面はナデ。器面は黄褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-7-2	C	83	d	Ⅲ	5	1	I b-2	深鉢	胴	貼付帯が横環する。その上にへら状工具による刻み目。その下にRの側面圧痕。内面はナデ。器面は赤褐色、内面は茶褐色を呈す。砂を含む。焼成はやや悪。
図Ⅳ-7-3	D	76	d	Ⅲ	29	1	I b-2	深鉢	胴	RLの短縄文。微隆起線文が横環、2列が残存。内面はナデ。器面は赤褐色、内面は黄褐色を呈す。砂を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-7-4	A	69	d	Ⅲ	4	1	I b-2	深鉢	胴	貼付帯が1列残存、横環する。その上に刻み目。その上にRLの横回転斜行縄文。下にLR横回転斜行縄文。羽状縄文を構成。内面はナデ。部分的に炭化物が付着する。器面は黄褐色、内面は暗黄褐色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-7-5	A	70	b	Ⅲ	7	1	I b-4	深鉢	胴	上部RLの燃糸文か。2対3列の縄端の圧痕文が横環する。下段LRの燃糸文。内面はナデ。部分的に炭化物が付着する。器面は橙褐色、内面は黒褐色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
	A	70	c	V	9	1				
図Ⅳ-7-6	A	77	a	Ⅲ	7	1	I b-4	深鉢	口縁	口唇は丸みをもつ角形。2列の縄端の圧痕文。その下にRLの燃糸文。ほぼ全面に炭化物が付着する。内面はナデ。器面は黒褐色、内面は暗茶褐色を呈す。焼成は中程度。
図Ⅳ-7-7	A	76	b	V	5	1	I b-4	深鉢	胴	LR+RL燃糸文。羽状縄文を構成。内面はナデ。器面は橙褐色、内面は暗褐色を呈す。砂を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-7-8	A	76	b	V	5	2	I b-4	深鉢	胴	LR燃糸文。羽状縄文を構成。内面はナデ。器面は橙褐色を呈す。砂を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-7-9	A	73	d	V	6	11	I b-4	深鉢	胴	LR燃糸文。羽状縄文を構成。内面はナデ。器面は橙褐色、内面は暗茶褐色を呈す。砂を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-7-10	A	67	c	Ⅲ	1	1	Ⅲb-1	深鉢	口縁	突起部分には半載竹管による刻み目。LR横回転斜行縄文施文後、逆三角形の貼付に半載竹管による刻み目。内面はナデ。器面は黄褐色を呈す。砂を含む。焼成は中程度。
	B	70	a	Ⅲ	6	1				
図Ⅳ-7-11	Zo	70	c	V	8	1	Ⅲb-1	深鉢	口縁	口縁部には半載竹管による刻み目。LR横回転斜行縄文施文後、4条の横沈線。内面は丁寧なナデ。器面は黄褐色を呈す。焼成は中程度。
	A	70	a	Ⅲ	3	1				

Ⅳ 包含層の遺物

表Ⅳ-5 包含層掲載土器一覽(5)

図番号	調査区			層位	遺物番号	点数	分類	器形	部位	文 様 等
	A	65	c							
図Ⅳ-7-12	A	65	c	V	16	1	Ⅲb-2	深鉢	口縁	LR横回転斜行縄文施文後に、貼付部分に棒状工具による刻み目。横沈線。内面はナデ。器面は黄褐色を呈す。砂を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-7-13	A	65	b	V	7	1	Ⅲb-2	深鉢	口縁	LR横回転斜行縄文施文後、貼付。貼付上に棒状工具による刻み目。内面はナデ。器面は黄褐色を呈す。砂を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-7-14	Zo	66	c	Ⅲ	9	1	Ⅲb-2	深鉢	口縁	口唇は角形。口唇上にLRの絡糸体圧痕。LR横回転斜行縄文。内面はナデ。器面は黄褐色を呈す。砂、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-7-15	A	45	c	V	2	1	Ⅲb-2	深鉢	口縁	口唇は角形。口唇上にLRの絡糸体圧痕。LR横回転斜行縄文。内面は丁寧なナデ。器面は暗茶褐色を呈す。砂、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-7-16	Zo	70	b	V	10	1	Ⅳa	深鉢	口縁	口唇は角形。RLR横回転斜行縄文。口唇上、貼付部分にもRLR横回転斜行縄文。内面はナデ。器面は黄褐色～黄灰色、内面は黄褐色を呈す。砂、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-7-17	Zo	68	d	V	6	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。わずかに外反する。口唇上にLR横回転の圧痕。部分的に炭化物が付着する。地文LR横回転斜行縄文、山形の沈線。部分的に磨消。内面はナデ。器面は黄褐色～暗茶褐色を呈す。小礫、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-7-18	排 土				6	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は丸みを持つ角形。一部口唇上にLR横回転の圧痕。LR横回転斜行縄文施文後、V状の沈線。内面は丁寧なナデ。器面は黄褐色、内面は黄灰色を呈す。黒雲母を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-8-1	C	80	c	V	4	5	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。真っ直ぐに立ち上がる。頸部は少しくびれる。RL横回転斜行縄文。横沈線の下はミガキによる無文帯。その下の横沈線の下はRL横回転斜行縄文。内面はミガキ。器面は黄茶褐色を呈す。角閃石を多く含む。焼成は中程度。一部の破片に2次的に焼成を受けたと考えられる劣化が見られた。
図Ⅳ-8-2	A	74	b	V	18	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は丸みを持った角形。LR横回転斜行縄文。部分的に炭化物が付着する。内面はミガキ。器面は茶褐色～黒褐色、内面は黄灰色を呈す。長石、石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-8-3	C	80	d	V	1	4	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。RL横回転斜行縄文。内面は丁寧なミガキ。器面は黄褐色、内面は橙褐色～暗茶褐色を呈す。長石、石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-8-4	F	80	d	V	5	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。口唇から2cmほどは粗いミガキ、LR横回転斜行縄文施文後、上下を横沈線で区画。2つの沈線を縦のカーブを持つ沈線が区画。部分的に磨消。その下がミガキ。内面はナデ。器面は橙褐色～黒褐色、黄褐色～黄灰色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-8-5	F	80	d	V	9	3				
図Ⅳ-8-5	A	74	c	Ⅲ	14	2	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。真っ直ぐ立ち上がる。口唇から2cm程はミガキ。1条の横沈線。その下にLR横回転斜行縄文。補修孔が1つ残る。部分的に炭化物が付着する。内面はナデ。器面は暗茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-8-6	B	79	b	V	5	2	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。口唇から1cm程に外から内側への円形の刺突文。地文RL横回転斜行縄文。部分的に炭化物が付着する。内面は粗いミガキ。器面は暗茶褐色、内面は橙褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。図Ⅳ-8-7と同一個体。
図Ⅳ-8-7	D	76	d	V	3	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。口唇から1cm程に外から内側への円形の刺突文。地文RL横回転斜行縄文。部分的に炭化物が付着する。内面はミガキ。器面は暗茶褐色、内面は褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。図Ⅳ-8-6と同一個体。
図Ⅳ-8-8	D	77	b	Ⅲ	12	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は丸みを持った角形。小さな山形の突起を持つ。LR+RL横回転斜行縄文施文後、横沈線と縦沈線で文様帯を構成。部分的にミガキ。一部剝離する。内面は粗いミガキ。器面は橙褐色を呈す。小礫を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-9-1	A	67	d	Ⅲ	3	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。わずかに内傾する。ゆるやかな山形の突起。口唇から1cm程はミガキ。1条の横沈線。RL横回転斜行縄文。内面はミガキ。器面は黄褐色～黒褐色を呈す。小礫、石英、角閃石を含む。焼成は良好。
図Ⅳ-9-2	B	74	d	V	19	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は丸みを帯びる。口唇から2～3cm程はミガキ。その下にLR横回転斜行縄文。内面はミガキ。器面は黄褐色、内面は暗褐色～黒褐色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成はやや良。
図Ⅳ-9-3	C	76	c	V	1	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は丸みをもつ角形。ゆるやかな波状口縁。小さな山形の突起。口唇から1cm程はミガキ。LR横回転斜行縄文施文後に、横沈線。4条が残存。○の縦の区画。部分的に磨消。内面はミガキ。器面は黄褐色～黄灰色、内面は茶褐色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成はやや良。
図Ⅳ-9-4	C	83	a	V	3	2	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は丸みを帯びる角形。口唇から2cm程はミガキ。幅1.5mm程の6条の横沈線に○の縦の区画。ミガキによる無文帯。LR横回転斜行縄文施文後に横沈線。2条残存。内面はミガキ。器面は黄褐色、内面は茶褐色を呈す。小礫、長石、石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-9-5	A	65	d	Ⅲ	10	3	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は丸みを持つ角形。ゆるやかな波状口縁。口唇から5mm～1cm程はミガキ。LR横回転斜行縄文施文後、6条の横沈線。○の縦の区画。その下にミガキによる無文帯。内面は丁寧なミガキ。器面は黄灰色、内面は茶褐色～暗茶褐色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-9-6	A	67	b	V	7	1				
図Ⅳ-9-6	C	78	c	V	17	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は丸みを持つ角形。口唇から1cm～3cm程はミガキによる無文帯。LR横回転斜行縄文施文後、磨消。7条の横沈線。3～4本の○の縦区画。その下はミガキによる無文帯。内面は丁寧なミガキ。器面は赤褐色～黄褐色、内面は暗茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-9-6	C	79	b	V	1	2				
図Ⅳ-9-6	D	78	d	V	6	1				

表Ⅳ-6 包含層掲載土器一覽(6)

図番号	調査区	層位	遺物番号	点数	分類	器形	部位	文 様 等	
図Ⅳ-9-7	C 74	a	Ⅲ	5	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。口唇から2cm程はミガキによる無文帯。LR横回転斜行縄文施文後に、横沈線。5条が残存。3本の縦の区画が残存。内面は丁寧なミガキ。器面は黄褐色～暗茶褐色、内面は黄灰色を呈す。角閃石を含む。焼成は良好。
	C 74 B 73	a d	V	1	3				
図Ⅳ-9-8	B 73	d	V	4	2	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。口唇から2cm～3cm程はミガキによる無文帯。LR横回転斜行縄文施文後、横沈線。7条が残存する。3列の刻みによる縦の区画。部分的に磨消。内面はミガキ。部分的に炭化物が付着する。器面は橙褐色、内面は暗茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。
	D 82 D 82 D 82 D 82	a c c d	V V V V	1 8 11 4	1 6 1 1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。頸部まではミガキによる無文帯。頸部に横沈線によりわずかに段。LR横回転斜行縄文。内面は丁寧なミガキ。器面は茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は良好。
図Ⅳ-9-9	D 82 D 82 D 82 D 82	a c c d	V V V V	1 8 11 4	1 6 1 1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。頸部まではミガキによる無文帯。頸部に横沈線によりわずかに段。LR横回転斜行縄文。内面は丁寧なミガキ。器面は茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は良好。
	Zo 60 Zo 66 F 66	d d c	V V Ⅲ	6 6 1	1 5	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は切り出しナイフ形。ゆるやかな山形の突起。刻み目と沈線の文様構成が2段。LR+RL横回転斜行縄文施文後、沈線で区画。部分的に磨消。その下に沈線に挟まれた縦の刻み。ミガキによる無文帯。刻み目と沈線の文様構成が2段が残存。内面はナデ。部分的に炭化物が付着する。器面は黄褐色、内面は黄灰色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-9-10	Zo 60 F 66	d c	V Ⅲ	6 1	5	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は切り出しナイフ形。ゆるやかな山形の突起。刻み目と沈線の文様構成が2段。LR+RL横回転斜行縄文施文後、沈線で区画。部分的に磨消。その下に沈線に挟まれた縦の刻み。ミガキによる無文帯。刻み目と沈線の文様構成が2段が残存。内面はナデ。部分的に炭化物が付着する。器面は黄褐色、内面は黄灰色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-9-11	B 77	b	V	19	1	Ⅳb	深鉢	口縁	大きめの丸い突起の部分、貼付の上に縦の刻み。その他の部分はミガキ。内面にも縦の刻み。他は丁寧なミガキ。器面は茶褐色、内面は暗茶褐色を呈す。砂礫、石英を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-9-12	E 80 E 80 E 80	a a a	V V V	7 8 9	1 1 1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。わずかに内傾する。刻みと沈線の文様が2段。LR横回転斜行縄文。内面は丁寧なナデ。器面は橙褐色、内面は黄褐色～橙褐色を呈す。小礫、角閃石を含む。焼成は中程度。
	B 77	a	Ⅲ	9	2	Ⅳb	深鉢	胴	LR横回転斜行縄文。沈線による文様。部分的に磨消。部分的に炭化物が付着する。内面はミガキ。器面は赤褐色～黒褐色、内面は赤褐色を呈す。砂礫、石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
	E 77	c	V	9	1	Ⅳb	深鉢	胴	沈線による文様。部分的にミガキ。LR横回転斜行縄文。内面はミガキ。器面は茶褐色～橙褐色を呈し、砂礫、長石、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-10-1	B 77	a	Ⅲ	9	2	Ⅳb	深鉢	胴	LR横回転斜行縄文。沈線による文様。部分的に磨消。部分的に炭化物が付着する。内面はミガキ。器面は赤褐色～黒褐色、内面は赤褐色を呈す。砂礫、石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-10-2	E 77	c	V	9	1	Ⅳb	深鉢	胴	沈線による文様。部分的にミガキ。LR横回転斜行縄文。内面はミガキ。器面は茶褐色～橙褐色を呈し、砂礫、長石、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-10-3	Yo 70	c	V	3	1	Ⅳb	深鉢	胴	沈線による文様。文様の内部には刻み。部分的にミガキ。内面は粗いミガキ。器面は茶褐色、内面は黒褐色を呈す。砂礫、長石、角閃石を含む。部分的に炭化物が付着する。焼成は中程度。
図Ⅳ-10-4	D 75	a	Ⅲ	2	2	Ⅳb	注口	胴	LR横回転斜行縄文。沈線と刺突文が2段施文される。部分的に磨消。内面はミガキ。器面は茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は良好。
図Ⅳ-10-5	C 79	a	V	48	2	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。口唇から2cm程はミガキ。LR横回転斜行縄文施文後施された横沈線が4条残存する。○Cの縦の区画。内面はミガキ。器面は橙褐色～茶褐色、内面は茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は良好。
	D 78	c	Ⅲ	1	1				
図Ⅳ-10-6	B 64	d	V	5	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は丸みを帯び、内傾する。上部はミガキ。下部はLR横回転斜行縄文施文後、横沈線が4条施す。内面はミガキ。器面は褐色を呈す。砂礫、角閃石を含む。焼成は良好。
図Ⅳ-10-7	D 77	a	V	5	1	Ⅳb	深鉢	胴	沈線による文様。部分的にミガキ。LR横回転斜行縄文。部分的に磨消。上部に斜めの刻み。内面はミガキ。器面は茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は良好。
図Ⅳ-10-8	E 79 E 79 E 79 E 79	c c d d	Ⅲ V Ⅲ V	6 10 3 3	1 1 1 1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。わずかに内傾する。横沈線の上下に。縦の刻み目が2段巡る。その下はミガキ。内面はミガキ。器面は茶褐色を呈す。焼成は良好。
	F 79	a	Ⅲ	1	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。2つの小さな丸い突起を持つ。口唇外側から2つの突起まで縦の刻み目。沈線を2条施文した中に縦の刻み目。その下はミガキ。内面はミガキ。器面は暗茶褐色、内面は茶褐色～黄灰色を呈す。角閃石を含む。焼成は良好。
	F 79	d	V	2	1				
	C 73	d	V	2	1	Ⅳb	深鉢	口縁	口唇は角形。真っ直ぐに外側に立ち上がる。RL横回転斜行縄文施文後に円形の刺突を2列。沈線。ミガキの無文帯。上のパターンの繰り返す。内面はミガキ。器面は褐色、内面は暗茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は良好。
図Ⅳ-10-10	C 75	a	Ⅲ	4	1				
	Zo 65 B 66 B 66	c b d	V V V	2 2 7	1 1 1	Ⅳb	深鉢	底	LR横回転斜行縄文。沈線による文様。部分的にミガキ、磨消。内面はミガキ。平底。半分程残存する。器面は橙褐色、内面は暗茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は良好。
	D 82 D 82 D 83	c c b	Ⅲ V V	5 8 1	4 8 1	Ⅳb	深鉢	底	LR横回転斜行縄文。部分的にミガキ、磨消。補修孔が1つ残存。内面はミガキ。平底。底部は2/3が残存。器面は褐色～茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-10-11	Zo 65 B 66 B 66	c b d	V V V	2 2 7	1 1 1	Ⅳb	深鉢	底	LR横回転斜行縄文。沈線による文様。部分的にミガキ、磨消。内面はミガキ。平底。半分程残存する。器面は橙褐色、内面は暗茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は良好。
図Ⅳ-10-12	D 82 D 82 D 83	c c b	Ⅲ V V	5 8 1	4 8 1	Ⅳb	深鉢	底	LR横回転斜行縄文。部分的にミガキ、磨消。補修孔が1つ残存。内面はミガキ。平底。底部は2/3が残存。器面は褐色～茶褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。
	D 82	d	V	9	8	Ⅳb	深鉢	底	RL横回転斜行縄文。7条の横沈線が残存。○Cの縦の区画。その下はミガキ。部分的にRL横回転斜行縄文が残る。内面はミガキ、底面はナデ。底部は全面残存。部分的に炭化物が付着する。器面は黄褐色～黒褐色を呈す。砂、小礫、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-10-13	E 82	d	V	2	1				
	D 81 排土	a	V	18 15	14 1	Ⅳb	深鉢	底	器面、内面とも粗いミガキ。平底。底部は2/3が残存。器面は黄褐色～黄灰色を呈す。砂、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-11-1	A 69	a	Ⅲ	3	2	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は丸みを持つ切り出しナイフ形。丸く膨らみを持つ小さな突起を持つ。口唇外側に縦の刻み目。RL横回転斜行縄文。内側から外側への突縮文。内面はミガキ。器面は黄褐色、内面は黒褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。
	C 76	c	V	1	1				
図Ⅳ-11-2	B 79	c	Ⅲ	1	2	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は角形。内傾する。内側から外側への突縮文。LR横回転斜行縄文。内面はミガキ。器面は黄灰色を呈す。角閃石を含む。焼成は良好。
図Ⅳ-11-3	B 76	c	V	5	1	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は切り出しナイフ形。真っ直ぐに立ち上がる。RL横回転斜行縄文。内側から外側への突縮文。部分的に2段になる。内面はナデ。器面は褐色を呈す。小礫、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-11-4	D 76	a	V	32	1	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は切り出しナイフ形。真っ直ぐ外側に立ち上がる。口唇外側に刻み目を持つ。横沈線。LR横回転斜行縄文。内側から外側への突縮文。内面はミガキ。小礫を含む。焼成は中程度。

Ⅳ 包含層の遺物

表Ⅳ-7 包含層掲載土器一覽(7)

図番号	調査区			層位	遺物番号	点数	分類	器形	部位	文様等
図Ⅳ-11-5	A	78	c	V	7	1	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は切り出しナイフ形。真っ直ぐ外側に立ち上がる。内側から外側への突縮文。LR横回転斜行縄文。内面はミガキ。部分的に炭化物が付着する。器面は褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-11-6	C	76	c	V	16	1	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は切り出しナイフ形。内傾する。LR+RL横回転斜行縄文。内側から外側への突縮文。部分的に炭化物が付着する。内面はヘラ状工具による丁寧なナデ。器面は暗褐色～黒褐色、内面は黄灰色～暗茶褐色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-11-7	E	76	a	V	3	1	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は切り出しナイフ形。真っ直ぐに立ち上がる。内側から外側への突縮文。LR+RL横回転斜行縄文。内面はミガキ。器面は黄褐色～黄灰色、内面は褐色～黒褐色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
	C	76	c	Ⅲ	6	3				
	C	76	c	V	16	6				
図Ⅳ-11-8	D	80	c	V	10	1	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は切り出しナイフ形。わずかに内傾する。内側から外側への突縮文。LRとRL横回転斜行縄文。内面はミガキ。器面は橙褐色、内面は黄褐色～茶褐色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成はやや良。
	D	81	a	V	15	2				
	E	80	d	Ⅲ	3	1				
	E	80	d	V	5	1				
	E	80	d	V	6	1				
図Ⅳ-11-9	Zo	70	c	V	8	1	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は切り出しナイフ形。わずかに内傾する。内側から外側への突縮文。LR+RL横回転斜行縄文。内面はナデとミガキ。器面は橙褐色、内面は黄褐色、内面は黄褐色～褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。
	Zo	70	c	Ⅲ	3	1				
	Zo	70	d	V	11	1				
図Ⅳ-11-10	B	75	a	V	8	6	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は角形。真っ直ぐに立ち上がる。内側から外側への突縮文。LR横回転斜行縄文。内面はヘラ状工具による丁寧なナデ。器面は橙褐色、内面は暗褐色を呈す。小礫、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-11-11	C	77	a	Ⅲ	4	3	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は先細り。真っ直ぐ外側に立ち上がる。内側から外側への突縮文。LR横回転斜行縄文。内面はナデ。器面は橙褐色、内面は黄褐色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
	D	77	d	Ⅲ	11	2				
図Ⅳ-11-12	D	76	a	V	13	2	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は切り出しナイフ形。2条の横沈線。LR+RL横回転斜行縄文。1条の横沈線。無文帯。部分的に炭化物が付着する。内面はミガキ。器面は暗褐色を呈す。焼成は中程度。
	D	76	a	V	15	1				
	D	76	a	V	21	1				
図Ⅳ-12-1	D	76	c	Ⅲ	12	1	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は切り出しナイフ形。わずかに内傾する。口唇内面にもLR横回転斜行縄文が施文されている。内側から外側への突縮文。RL横回転斜行縄文。1条の横沈線。LR横回転斜行縄文。部分的に炭化物が付着する。内面は丁寧なナデ。器面は褐色～暗茶褐色、内面は黒褐色を呈す。砂、角閃石を含む。焼成は中程度。
	D	77	b	V	8	1				
図Ⅳ-12-2	C	76	b	Ⅲ	10	1	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は切り出しナイフ形。真っ直ぐに立ち上がる。口縁は小さな波状口縁。内側から外側への突縮文が小さな突起の一つおきに施される。LR横回転斜行縄文。部分的に炭化物が付着する。内面はミガキ。部分的に炭化物が付着する。器面は黄褐色～橙褐色、内面は茶褐色を呈す。砂礫を含む。焼成は中程度。
	C	76	b	V	15	1				
図Ⅳ-12-3	E	78	a	V	29	1	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は丸みを持つ。小さな波状口縁。真っ直ぐ立ち上がる。内側から外側への突縮文。ゆるやかな山形の3条の横沈線が残存。LR+RL横回転斜行縄文。内面は丁寧なナデ。器面は黄褐色～暗茶褐色、内面は黄褐色を呈す。部分的に炭化物が付着する。角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-12-4	F	78	a	Ⅲ	3	1	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は先細り。緩やかな山形の波状口縁。わずかに内傾する。内側から外側への突縮文。6条の横沈線が残存。RL+LR横回転斜行縄文。内面は丁寧なナデ。器面は黄褐色～黒褐色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
	F	78	d	V	4	1				
図Ⅳ-12-5	B	71	a	Ⅲ	1	4	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は先細り。わずかに内傾する。内側から外側への突縮文。3条の横沈線。RL+LR横回転斜行縄文。内面は丁寧なナデ。器面は黄褐色を呈す。小礫、石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-12-6	D	76	c	Ⅲ	12	1	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は先細り。わずかに内傾する。内側から外側への突縮文。3条の横沈線。RL横回転斜行縄文。内面は丁寧なナデ。器面は黄灰色、内面は黄褐色を呈す。小礫、石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-12-7	B	70	d	Ⅲ	4	1	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は先細り。真っ直ぐ立ち上がる。内側から外側への突縮文。部分的に縮は貼付。縦、横沈線。RL横回転斜行縄文。無文帯。3条の横沈線。RL横回転斜行縄文。内面は丁寧なナデとミガキ。器面は黄褐色～黄灰色、内面は赤褐色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
	B表	70採	d	Ⅲ	3	3				
図Ⅳ-12-8	C	77	a	V	1	8	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は角形。真っ直ぐに立ち上がる。口唇より1.5cm程下に爪形文。LR横回転斜行縄文。部分的に炭化物が付着する。内面は丁寧なナデ。部分的に炭化物が付着する。器面は暗褐色～黒褐色、内面は黒褐色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
	C	77	b	Ⅲ	5	1				
図Ⅳ-12-9	B	65	a	Ⅲ	3	1	V	深鉢	口縁	口唇は角形。わずかに内傾する。口唇上に刻み目。口唇より1cm程下に爪形文。LR横回転斜行縄文。内面は丁寧なナデ。器面は黄褐色を呈す。小礫、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-12-10	A	63	c	V	4	1	Ⅳc	深鉢	口縁	口唇は角形。わずかに内傾する。口唇上に5mm程の刻み目。口唇より1cm程下に爪形文が2段巡る。補修孔が1対残る。RL横回転斜行縄文。一部磨消。部分的に炭化物が付着する。内面はミガキ。部分的に炭化物が付着し、2次的な焼成を受けたと考えられる。器面は黄褐色～黒褐色を呈す。小礫、石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
	B	63	d	V	5	2				
図Ⅳ-12-11	E	79	b	V	12	1	Ⅳc	壺	頸	頸部、ミガキによる無文帯。小さな円形の突起が2つ。2段の縦の刻み目が巡る。RL横回転斜行縄文。沈線による区画。部分的にミガキによる磨消。内面は丁寧なナデ。器面は茶褐色を呈す。小礫、角閃石を含む。焼成は中程度。
	E	79	c	Ⅲ	6	4				
	E	79	d	V	3	1				

表Ⅳ-8 包含層掲載土器一覽(8)

図番号	調査区	層位	遺物番号	点数	分類	器形	部位	文 様 等	
図Ⅳ-13-1	A 75	d	Ⅲ	7	8	Vc	深鉢	口縁	口唇は丸みを帯びる角形。口唇上にRLの圧痕。4条の横沈線の下に刻み目。その下に沈線による文様帯。RL斜回転、縄文は縦走気味。内面はナデ。部分的に炭化物が付着する。器面は黄褐色～茶褐色、内面は茶褐色～黒褐色を呈す。小礫を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-13-2	Zo 73	b	Ⅲ	1	6	Vc	深鉢	口縁	口唇は丸みをもつ角形。小さな山形の2個の突起。口唇上にRLの圧痕。沈線による文様帯。補修孔が1つ残る。RL斜回転。縄文が縦走気味。部分的に赤色顔料が付着する。内面は丁寧なナデ。器面は茶褐色を呈す。小礫、石英、角閃石を含む。焼成はやや良。
図Ⅳ-13-3	Zo 73	c	Ⅲ	4	1	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。わずかに内傾する。口唇上に刻み目。沈線による不規則な文様帯。RL斜回転。縄文が縦走気味。内面は丁寧なナデ。器面は茶褐色を呈す。砂礫を含む。焼成は中程度。
	B 76	c	Ⅲ	11	1				
	B 76	c	Ⅲ	12	1				
	B 76	c	Ⅲ	20	1				
図Ⅳ-13-4	Zo 65	b	Ⅲ	3	1	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。小さな2つの山形の突起。口唇上にLRの圧痕。沈線による文様帯。LR横回転斜行縄文。部分的に赤色顔料が付着する。補修孔が1つ残る。内面はナデ。器面は褐色を呈す。砂、石英を含む。焼成はやや悪。
図Ⅳ-13-5	A 64	a	Ⅲ	4	1	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。口唇外側に刻み目。口唇上に2条のRLの圧痕。沈線による文様帯。内面は丁寧なナデ。器面は暗茶褐色、内面は暗黄褐色を呈す。砂、石英を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-13-6	A 64	c	Ⅲ	2	2	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。わずかに内傾する。沈線による文様帯。内面は丁寧なナデ。器面は黄褐色～暗茶褐色、内面は暗茶褐色を呈す。砂、石英を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-13-7	A 65	a	Ⅲ	4	3	Vc	深鉢	口縁	口唇は先細り。少し外反する。2条の沈線の下に鉅歯状の沈線。その下に2条の沈線。内面に2段のLRの絡糸体圧痕。その下はナデ。部分的に炭化物が付着する。器面は橙褐色、内面は暗黄褐色～黒褐色を呈す。砂を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-13-8	A 64	c	Ⅲ	2	2	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。口唇外側に刻み目。口唇上に2条のLRの圧痕。ボタン状の貼付。縦と斜めに沈線による文様。内面はミガキ。器面は暗黄褐色を呈す。石英を含む。焼成はやや良。
図Ⅳ-13-9	C 74	a	Ⅲ	5	3	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。口唇上に刻み目。4条の横沈線。RL横回転斜行縄文。補修孔が1つ残る。部分的に炭化物が付着する。一部器面が剝離している。内面は丁寧なミガキ。器面は暗黄褐色～暗茶褐色、内面は橙褐色～茶褐色を呈す。焼成は中程度。
図Ⅳ-13-10	D 80	d	Ⅲ	9	3	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。5条のLRの縄線文。LR斜回転。縄文が縦走気味。部分的に炭化物が付着する。内面はミガキ。器面は暗茶褐色、内面は暗黄褐色～暗茶褐色を呈す。石英を含む。焼成は中程度。図Ⅳ-13-11と同一個体。
図Ⅳ-13-11	C 80	b	V	2	1	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。5条のLRの縄線文。LR斜回転。縄文が縦走気味。部分的に炭化物が付着する。内面はミガキ。器面は暗茶褐色を呈す。砂、石英を含む。焼成は中程度。図Ⅳ-13-10と同一個体。
	C 80	c	V	4	1				
図Ⅳ-13-12	Zo 73	c	Ⅲ	4	7	Vc	深鉢	口縁	口唇は丸みを帯びる角形。口唇上にRLの絡糸体圧痕。2条のRLの絡糸体圧痕の縄線文。LR斜回転。縄文が縦走気味。内面はナデ。器面は橙褐色～褐色、内面は茶褐色～暗茶褐色を呈す。焼成は中程度。
図Ⅳ-13-13	A 65	c	Ⅲ	5	2	Vc	深鉢	口縁	口唇は丸みを帯びる。口唇上に刻み目。4条のLRの縄線文。LR斜回転。縄文が縦走気味。内面は丁寧なナデ。部分的に炭化物が付着する。器面は黄褐色～暗黄褐色を呈す。小礫、石英を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-13-14	D 80	c	Ⅲ	3	1	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。真っ直ぐ立ち上がる。口唇上に刻み目。8条のRLの縄線文。頸部に細端圧痕。LR斜回転縄文が縦走する。部分的に炭化物が付着する。内面はミガキ。器面は橙褐色～暗茶褐色、内面は橙褐色～黄灰色を呈す。焼成はやや良。
	D 81	a	Ⅲ	10	1				
	D 81	b	V	1	1				
	D 81	c	Ⅲ	6	1				
	D 81	d	Ⅲ	2	1				
	D 81	d	風倒	1	1				
	D 82	b	V	1	1				
	D 82	b	V	1	1				
図Ⅳ-13-15	E 78	a	Ⅲ	8	2	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。真っ直ぐ立ち上がる。RL斜回転。縄文が縦走気味。部分的に炭化物が付着する。内面は丁寧なナデ。ほぼ全面に炭化物が付着する。器面は暗茶褐色～黒褐色、内面は暗黄褐色～黒褐色を呈す。石英を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-13-16	Zo 63	a	Ⅲ	1	2	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。わずかに内傾する。口唇上にRLの絡糸体圧痕。RL斜回転。縄文が横走する。部分的に炭化物が付着する。内面はナデ。器面は黄褐色～黒褐色、内面は暗黄褐色を呈す。小礫、石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
	Zo 63	b	Ⅲ	7	1				
図Ⅳ-14-1	D 76	a	V	24	2	Vc	深鉢	口縁	角形。少し内傾する。口唇上にRLの圧痕。LR横回転斜行縄文。部分的に横走気味。内面はナデ。器面は暗褐色、内面は橙褐色～黄灰色を呈す。小礫を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-14-2	C 76	c	Ⅲ	13	5	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。わずかに内傾する。口唇上にLRの絡糸体圧痕。極く小さな突起が一つ。LR斜回転。縄文が縦走気味。部分的に炭化物が付着する。内面はナデ。部分的に炭化物が付着する。器面は暗黄褐色、内面は黄褐色～暗茶褐色を呈す。小礫を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-14-3	B 75	a	Ⅲ	1	9	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。真っ直ぐ立ち上がる。口唇上にLRの絡糸体圧痕。LR斜回転。縄文が縦走気味。内面はナデ。部分的に炭化物が付着する。器面は橙褐色、内面は橙褐色～黒褐色を呈す。小礫を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-14-4	B 75	c	Ⅲ	10	1	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。少し内傾する。口唇上にRLの絡糸体圧痕。RL斜回転。縄文が横走する。内面はミガキ。器面は橙褐色を呈す。小礫を含む。焼成は良好。
	B 75	c	Ⅲ	12	1				
	C 75	d	Ⅲ	7	1				
図Ⅳ-14-5	A 75	c	Ⅲ	7	2	Vc	深鉢	口縁	口唇は先細り。わずかに内傾する。口唇上に刻み目。LR斜回転。縄文が縦走気味。内面は丁寧なナデ。器面は黄褐色を呈す。小礫を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-14-6	C 75	a	Ⅲ	3	4	Vc	深鉢	口縁	口唇は丸みをもつ角形。真っ直ぐ立ち上がる。口唇外側にLRの絡糸体圧痕。LR斜回転。縄文が縦走気味。部分的に炭化物が付着する。内面はナデ。器面は褐色～暗茶褐色、内面は暗黄褐色を呈す。焼成は中程度。
	C 75	a	Ⅲ	4	3				

Ⅳ 包含層の遺物

表Ⅳ-9 包含層掲載土器一覽(9)

図番号	調査区	層位	遺物番号	点数	分類	器形	部位	文 様 等	
図Ⅳ-14-7	Zo 73	c	Ⅲ	4	2	Vc	深鉢	口縁	口唇は丸みを持つ。わずかに内傾する。口唇外側にLRの絡糸体圧痕。LR斜回転。縄文が縦走気味。内面はナデ。器面は橙褐色を呈す。小礫を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-14-8	B 75 B 75 B 75	a b c	V Ⅲ Ⅲ V	20 6 4 16	1 1 3 1	Vc	深鉢	口縁	口唇は丸みを帯びる。わずかに内傾する。口唇上に刻み目。LR斜回転。縄文が縦走気味。部分的に炭化物が付着する。内面はミガキ。器面は暗茶褐色を呈す。焼成は中程度。
図Ⅳ-14-9	D 79	b	Ⅲ	8	2	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。わずかに内傾する。口唇上に刻み目。LR斜回転。縄文が縦走気味。内面はナデ。器面は暗茶褐色を呈す。小礫を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-14-10	B 75 B 75 B 75	c d d	V Ⅲ V	9 5 15	1 1 3	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。わずかに内傾する。口唇上に刻み目。LR斜回転。縄文が縦走気味。内面はミガキ。器面は橙褐色、内面は暗黄褐色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-14-11	B 64	d	Ⅲ	1	3	Vc	浅鉢	口縁	先細り。真っ直ぐ外側に立ち上がる。小さな波状口縁。粗いミガキ。内面はナデ。口唇から1cm程に3段の刺突。器面は橙褐色を呈す。角閃石を含む。焼成はやや悪。
図Ⅳ-15-1	Zo 69 Zo 69 Zo 69 Zo 70 Zo 70 Zo 70 Zo 70	c d b a d c	Ⅲ Ⅲ Ⅲ Ⅲ Ⅲ Ⅲ Ⅲ	3 3 2 2 1 4 3	2 1 2 18 2 1 2	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。真っ直ぐに立ち上がる。口唇上に指の大きさの刻み目。RL斜回転。縄文が縦走する。部分的に炭化物が付着する。内面はナデ。部分的に炭化物が付着する。器面は黄褐色、内面は茶褐色を呈す。小礫、長石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-15-2	D 78	d	Ⅲ	1	1	Vc	深鉢	口縁	口唇上に刻み目と沈線。径3mmほどの貫通孔がある。突起と沈線と円形の刺突により文様帯を形成。器面は黄褐色～褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-15-3	D 75	d	Ⅲ	1	9	Vc	深鉢	底	平底。LR斜回転。縄文が縦走する。一部剝離。部分的に炭化物が付着する。内面はハケ調整。部分的に炭化物が付着する。器面は暗褐色～黒褐色、内面は橙褐色～暗茶褐色を呈す。部分的に炭化物が付着する。焼成はやや悪。
図Ⅳ-15-4	A 64 A 64	a d	Ⅲ Ⅲ	1 3	3 1	Vc	深鉢	底	LR斜回転。縄文が縦走する。平底。底部の外側に縄端圧痕。底面にはLR縄文が磨消されている。部分的に炭化物が付着する。内面は粗いミガキ。器面は茶褐色～黒褐色、内面は暗茶褐色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-15-5	D 77 D 77	d d	Ⅲ Ⅲ	3 11	3 1	Vc	深鉢	底	LR斜回転。縄文が縦走する。平底。わずかに上げ底で張り出す。底面にLRが施文されている。内面はナデ。器面は橙褐色～黄灰色、内面は橙褐色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-15-6	Zo 64 Zo 64	c c	Ⅲ Ⅲ	3 3	2 2	Vc	深鉢	口縁	口唇は角形。真っ直ぐに立ち上がる。口唇外側に縦の刻み目。5条の横細沈線。2cmほどの間を置いて3条の横細沈線。RL斜回転。縄文が縦走する。部分的に炭化物が付着する。内面は粗いミガキ。部分的に炭化物が付着する。器面は茶褐色を呈す。石英、角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-15-7	C 76	b	Ⅲ	10	5	Vc	深鉢	口縁	口唇は先細り。わずかに内傾する。口唇上に小さな刻み。微隆起線文とRL縄文。小さな三角形列点文。ヘラ調整。粗いミガキ。器面は黄褐色、内面は暗茶褐色を呈す。焼成は中程度。
図Ⅳ-15-8	A 70	b	V	10	1	Vc	深鉢	口縁	口唇は切り出しナイフ形。口唇上に刻み目。微隆起線文とLRループ縄文。ミガキ部分に三角形列点文。内面はミガキ。器面は橙褐色～暗褐色、内面は橙褐色を呈す。焼成は中程度。
図Ⅳ-15-9	C 75	d	Ⅲ	7	1	Vc	注口	注口	注口部分。一部は欠損。胴部は微隆起線文と三角形の列点文。内面はナデ。器面は黒褐色、内面は暗黄褐色を呈す。小礫を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-15-10	C 76 E 80	b b	Ⅲ Ⅲ	10 2	2 1	Vc	深鉢	口縁	口唇は丸みを帯びる。真っ直ぐに立ち上がる。口唇上に刻み。口唇の下5mmほどのところに貼付。その上に刻み。三角形の列点文。LR帯縄文。内面はヘラ調整とナデ。器面は暗褐色を呈す。黒雲母を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-15-11	B 77	d	V	16	1	Vd	深鉢	口縁	口唇は先細り気味。口唇上に刻み目。少し内傾する。微隆起線文とLR縄文。三角列点文。内面はミガキ。器面は橙褐色、内面は黄灰色を呈す。角閃石を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-15-12	C 75	d	Ⅲ	7	1	Vd	深鉢	底	RL帯縄文が縦走する。平底。張り出す。内面はナデ。一部ミガキ。器面は暗茶褐色、内面は茶褐色を呈す。砂礫を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-15-13	C 75	d	Ⅲ	7	1	VII	甕	口縁	口唇は角形。真っ直ぐ外反しながら立ち上がる。円形刺突文。貫通している。横ハケ調整。ミガキ。内面はナデ。器面は黄褐色を呈す。小礫を含む。焼成は中程度。
図Ⅳ-15-14	Yo 70 Zo 68	b c	Ⅲ Ⅲ	1 1	1 3	VII	甕	口縁	口唇は角形。外反する。口唇から1cm程は幅4mm程の工具による調整後、ミガキ。同様の工具で3条の横沈線。一番上部の沈線の上に円形刺突文。貫通せず、内面に突瘤が残存。頸部に向かって三角形と逆三角形の沈線による文様帯を2段構成。部分的に炭化物が付着する。内面はナデ。部分的に炭化物が付着する。器面は茶褐色を呈す。焼成は中程度。
図Ⅳ-16-1	E 77	d	V	5	3		オロンガネ状土製品		表面に沈線と竹管状の工具による刺突。裏面はミガキ。
図Ⅳ-16-2	E 81	a	V	15	1		オロンガネ状土製品		RL縄文後に沈線。裏面にも沈線。
図Ⅳ-16-3	E 80	b	V	4	1		オロンガネ状土製品		表面に沈線。裏面はナデ。
図Ⅳ-16-4	B 76	a	V	7	1		土製品		2つの突起状の部分欠損。全面にナデ。
図Ⅳ-16-5	C 79	b	V	20	1		焼成粘土塊		

IV 包含層の遺物

表IV-10 包含層出土石器掲載一覧(1)

図番号	調	査	区	層位	分類	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	材質
IV-22-1	B	74	a	Ⅲ	石鏃	17.8	15.7	1.7	0.52	黒曜石
IV-22-2	A	68	b	Ⅲ	石鏃	23.0	19.2	2.7	0.98	黒曜石
IV-22-3	Z ₀	73	c	Ⅲ	石鏃	23.9	13.6	3.7	0.92	黒曜石
IV-22-4	D	76	d	Ⅲ	石鏃	38.9	20.0	4.7	2.34	黒曜石
IV-22-5	B	74	b	Ⅲ	石鏃	45.0	15.4	3.0	1.81	黒曜石
IV-22-6	B	77	a	Ⅲ	石鏃	19.0	7.0	2.8	0.41	黒曜石
IV-22-7	E	84	d	Ⅲ	石鏃	33.3	10.5	6.3	1.20	黒曜石
IV-22-8	B	76	b	Ⅲ	石鏃	25.5	8.5	2.7	0.37	黒曜石
IV-22-9	C	75	b	Ⅲ	石鏃	48.3	15.5	6.8	3.94	黒曜石
IV-22-10	A	69	b	Ⅲ	石鏃	50.4	17.0	4.0	3.38	黒曜石
IV-22-11	C	76	c	Ⅲ	石鏃	39.5	25.5	11.4	8.58	黒曜石
IV-22-12	B	76	b	Ⅲ	石鏃	13.9	11.2	3.8	0.47	黒曜石
IV-22-13	A	75	a	Ⅲ	石鏃	30.1	9.5	4.4	0.98	黒曜石
IV-22-14	B	64	a	Ⅲ	石鏃	23.2	13.2	3.7	1.07	黒曜石
IV-22-15	B	73	d	Ⅲ	石鏃	21.3	16.1	4.0	0.83	黒曜石
IV-22-16	Y ₀	67	b	Ⅲ	石鏃	33.8	15.0	4.1	1.34	黒曜石
IV-22-17	D	78	c	Ⅲ	石鏃	27.9	13.5	3.8	0.73	黒曜石
IV-22-18	A	74	a	Ⅲ	石鏃	27.0	14.0	3.5	0.71	黒曜石
IV-22-19	E	80	a	V	石鏃	31.6	12.0	3.5	0.93	黒曜石
IV-22-20	Z ₀	68	a	V	石鏃	38.5	11.4	2.7	0.98	黒曜石
IV-22-21	B	78	b	V	石鏃	19.2	14.5	2.2	0.60	黒曜石
IV-22-22	E	80	d	V	石鏃	24.5	17.9	4.1	1.05	黒曜石
IV-22-23	D	74	d	V	石鏃	32.8	13.6	4.1	1.29	黒曜石
IV-22-24	A	75	b	V	石鏃	27.1	10.5	2.4	0.57	黒曜石
IV-22-25	E	82	b	V	石鏃	32.0	22.0	8.3	3.29	黒曜石
IV-22-26	C	75	c	V	石鏃	26.6	17.0	6.2	1.66	黒曜石
IV-22-27	C	78	d	V	石鏃	29.5	19.0	10.8	4.34	メノウ質頁岩
IV-22-28	F	82	d	V	石鏃	32.8	19.9	4.7	2.03	黒曜石
IV-22-29	C	77	b	V	石鏃	19.6	9.7	4.1	0.42	黒曜石
IV-22-30	A	66	b	V	石鏃	35.2	17.7	6.6	2.80	黒曜石
IV-22-31	B	79	d	V	石鏃	17.5	14.8	3.0	0.46	黒曜石
IV-22-32	A	75	a	V	石鏃	19.9	13.7	3.6	0.50	黒曜石
IV-22-33	B	74	a	V	石鏃	30.0	18.2	3.7	0.84	黒曜石
IV-22-34	Y ₀	67	b	V	石鏃	22.7	14.5	4.2	0.87	黒曜石
IV-22-35	A	65	d	V	石鏃	22.8	12.4	3.0	0.66	黒曜石
IV-22-36	B	77	d	V	石鏃	38.1	20.0	6.0	2.28	黒曜石
IV-22-37	E	81	c	V	石鏃	29.8	15.4	6.2	1.26	黒曜石
IV-22-38	Z ₀	65	a	V	石鏃	36.9	19.2	3.9	2.11	黒曜石
IV-22-39	C	78	a	V	石鏃	26.7	12.6	4.2	0.58	黒曜石
IV-22-40	A	74	d	V	石鏃	23.6	14.8	2.8	0.61	黒曜石
IV-22-41	D	75	a	V	石槍	41.1	28.3	6.7	6.90	黒曜石
IV-22-42	A	64	d	V	石槍	53.4	27.8	11.5	13.93	黒曜石
IV-22-43	F	83	a	V	両面加工のナイフ	59.1	18.7	9.5	9.50	頁岩
IV-22-44	C	74	b	V	両面加工のナイフ	67.9	32.9	7.5	15.51	黒曜石
IV-22-45	Z ₀	70	a	Ⅲ	両面加工のナイフ	133.8	52.9	11.0	82.20	頁岩
IV-22-46	D	76	d	Ⅲ	石錐	48.9	13.2	7.0	3.70	頁岩
IV-22-47	C	77	c	Ⅲ	石錐	39.5	15.7	8.0	5.27	メノウ質頁岩
IV-22-48	C	78	a	V	石錐	28.6	8.2	6.2	1.37	黒曜石
IV-22-49	E	79	a	V	石錐	47.2	9.9	7.6	3.53	頁岩
IV-22-50	Z ₀	65	c	V	石錐	20.0	6.9	5.3	0.78	黒曜石
IV-23-1	A	70	a	Ⅲ	つまみ付きナイフ	47.7	27.0	7.4	10.35	黒曜石
IV-23-2	A	74	d	Ⅲ	つまみ付きナイフ	42.5	30.6	8.9	9.42	頁岩
IV-23-3	Y ₀	69	d	Ⅲ	つまみ付きナイフ	46.2	22.8	5.4	4.89	黒曜石
IV-23-4	D	80	a	Ⅲ	つまみ付きナイフ	60.5	39.5	12.9	26.80	メノウ質
IV-23-5	A	77	b	V	つまみ付きナイフ	60.5	20.9	7.2	12.42	頁岩
IV-23-6	D	80	c	V	つまみ付きナイフ	67.2	14.2	6.6	6.59	頁岩
IV-23-7	B	62	c	V	つまみ付きナイフ	58.4	14.3	7.4	7.13	頁岩

Ⅳ 包含層の遺物

表Ⅳ-11 包含層出土石器掲載一覧(2)

図番号	調	査	区	層位	分類	長さmm	幅mm	厚さmm	重さg	材質
N-23-8	B	78	b	V	つまみ付きナイフ	56.3	23.7	7.6	11.14	黒曜石
N-23-9	C	76	b	V	つまみ付きナイフ	47.2	23.6	6.1	4.24	黒曜石
N-23-10	C	76	b	V	つまみ付きナイフ	44.6	16.7	6.5	3.18	黒曜石
N-23-11	C	75	d	Ⅲ	スクレイパー	24.8	20.4	7.4	4.45	黒曜石
N-23-12	Y ₀	68	c	Ⅲ	スクレイパー	19.2	15.6	5.2	1.85	黒曜石
N-23-13	C	75	c	Ⅲ	スクレイパー	32.6	18.1	5.2	3.36	黒曜石
N-23-14	A	70	b	Ⅲ	スクレイパー	24.8	25.8	9.4	5.69	黒曜石
N-23-15	C	75	c	Ⅲ	スクレイパー	31.9	28.2	8.1	7.00	黒曜石
N-23-16	F	83	b	Ⅲ	スクレイパー	36.0	29.5	9.2	11.68	黒曜石
N-23-17	Z ₀	70	b	Ⅲ	スクレイパー	69.5	31.0	11.0	36.93	黒曜石
N-23-18	D	77	b	Ⅲ	スクレイパー	82.1	27.4	9.3	24.16	頁岩
N-23-19	D	76	d	Ⅲ	スクレイパー	51.6	34.5	6.5	14.23	黒曜石
N-23-20	B	75	b	Ⅲ	スクレイパー	30.8	17.7	5.0	2.17	黒曜石
N-23-21	B	71	c	Ⅲ	スクレイパー	45.5	22.0	11.1	8.58	黒曜石
N-23-22	Z ₀	65	c	Ⅲ	スクレイパー	43.8	26.7	10.2	11.09	頁岩
N-23-23	A	75	a	Ⅲ	スクレイパー	43.7	23.5	10.6	9.99	黒曜石
N-23-24	D	78	c	Ⅲ	スクレイパー	71.5	33.7	10.4	28.53	チャート
N-24-1	Z ₀	64	c	V	スクレイパー	38.8	34.0	6.6	6.23	黒曜石
N-24-2	D	79	c	V	スクレイパー	32.8	31.2	7.0	6.22	黒曜石
N-24-3	Z ₀	67	b	V	スクレイパー	33.0	25.0	8.9	6.66	黒曜石
N-24-4	Z ₀	68	a	V	スクレイパー	36.1	20.4	8.3	5.67	頁岩
N-24-5	F	83	d	V	スクレイパー	38.6	28.7	10.0	11.22	メノウ質頁岩
N-24-6	B	78	a	V	スクレイパー	51.9	37.3	8.0	16.71	黒曜石
N-24-7	D	79	c	V	スクレイパー	58.9	30.5	5.5	9.61	黒曜石
N-24-8	E	77	d	V	スクレイパー	73.9	30.0	7.5	16.45	黒曜石
N-24-9	C	74	c	V	スクレイパー	34.5	25.3	6.7	5.11	黒曜石
N-24-10	Z ₀	66	b	V	スクレイパー	27.0	15.9	6.5	2.45	黒曜石
N-24-11	Z ₀	65	c	V	スクレイパー	40.4	27.4	11.0	10.61	黒曜石
N-24-12	E	79	b	V	スクレイパー	48.2	31.6	10.0	15.28	黒曜石
N-24-13	E	77	d	V	スクレイパー	49.5	30.3	9.7	15.05	黒曜石
N-24-14	E	81	c	V	スクレイパー	38.3	23.7	6.3	3.53	頁岩
N-24-15	Z ₀	64	c	V	スクレイパー	77.0	36.2	10.9	17.58	黒曜石
N-24-16	C	75	a	Ⅲ	楔形石器	12.5	12.0	4.4	0.70	黒曜石
N-24-17	E	81	c	V	楔形石器	25.8	25.3	7.8	6.20	頁岩
N-24-18	Y ₀	67	d	V	異形石器	21.9	24.3	5.1	2.50	黒曜石
N-24-19	C	79	a	Ⅲ	棒状原石	185.0	19.8	11.0	55.21	黒曜石
N-25-1	B	71	a	Ⅲ	石斧	118.0	28.7	13.1	77.96	蛇紋岩
N-25-2	B	79	c	V	石斧	85.2	42.1	11.6	68.00	蛇紋岩
N-25-3	B	78	b	V	石斧	88.5	30.6	13.0	71.30	泥岩
N-25-4	C	74	d	V	石斧	77.3	33.8	10.6	41.04	泥岩
N-25-5	E	80	a	V	石斧	130.1	29.2	6.6	46.30	泥岩
N-25-6	Z ₀	64	a	Ⅲ	たたき石	133.7	42.5	27.9	290.00	砂岩
N-25-7	B	76	a	Ⅲ	たたき石	127.9	56.2	40.4	470.0	閃緑岩
N-25-8	F	79	d	Ⅲ	凹石	90.5	8.7	35.6	260.00	片麻岩
N-26-1	C	79	c	V	たたき石	87.8	75.6	47.8	340.50	砂岩
N-26-2	E	82	a	V	たたき石	60.9	67.0	48.0	320.00	珪岩
N-26-3	A	67	b	V	凹石	127.9	51.6	31.1	270.00	砂岩
N-26-4	E	81	a	V	凹石	94.4	41.8	32.6	228.20	砂岩
N-26-5	A	71	b	Ⅲ	すり石	150.7	67.0	56.1	820.00	砂岩
N-26-6	B	75	c	Ⅲ	すり石	155.0	40.5	37.1	350.00	砂岩
N-26-7	Z ₀	64	c	V	すり石	92.3	97.2	43.7	765.00	砂岩
N-26-8	C	77	c	V	すり石	141.3	75.4	70.5	910.00	砂岩
N-26-9	E	79	c	V	すり石	95.8	75.7	47.2	510.00	砂岩
N-27-1	B	79	b	Ⅲ	砥石	17.5	6.2	3.6	680.00	砂岩
N-27-2	C	75	d	V	砥石	72.6	59.2	27.2	145.77	砂岩
N-27-3	B	73	d	Ⅲ	石錘	106.0	74.3	26.5	345.00	片麻岩
N-27-4	B	76	a	V	石錘	128.8	113.0	29.3	480.00	安山岩
N-27-5	E	77	c	V	異形石器	35.0	46.8	34.5	2.8	黒曜石
N-27-6	B	64	a	V	玉	14.5	14.6	11.1	4.10	ヒスイ



E→W



工事用道路が今年度調査範囲(95年度撮影) W→E

調査前風景(1)



W→E



E→W

調査前風景(2)



東側 E→W

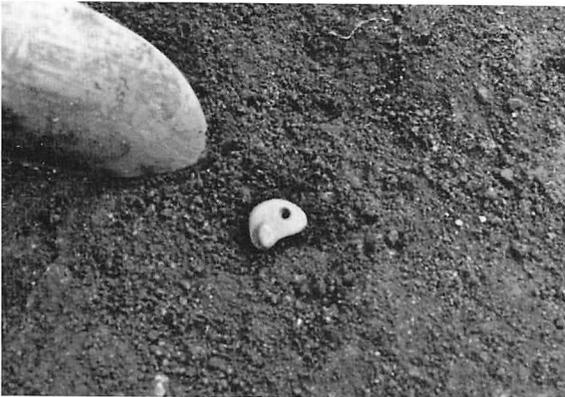


西側 W→E

火山灰除去作業



E→W



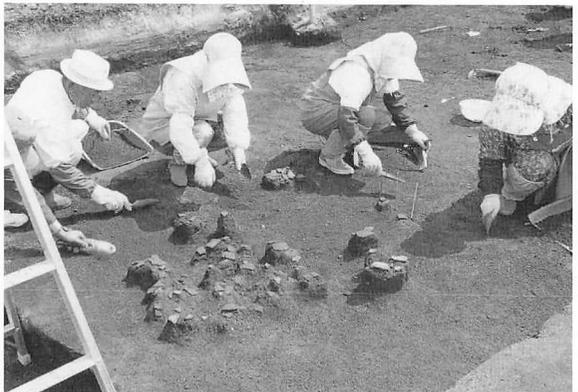
玉出土状況(Ⅲ層) N→S



土器出土状況(Ⅲ層) W→E



土器出土状況(Ⅲ層) E→W

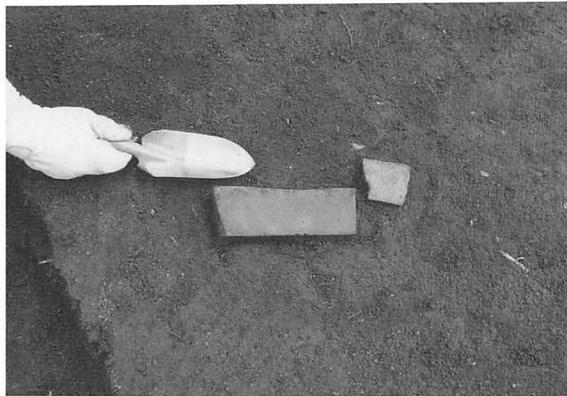


SW→NE

東側調査風景(1)



オロシガネ状土製品出土状況(V層) NE→SW



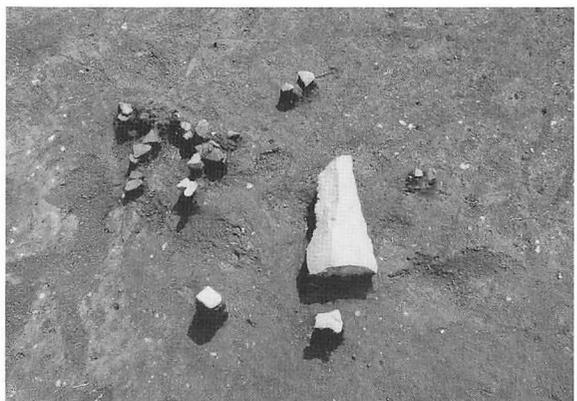
砥石出土状況(III層) SW→NE



E→W



土器出土状況(V層) N→S



遺物出土状況(V層) W→E



土器出土状況(V層) SW→NE

東側調査風景(2)



SW→NE



土器出土状況(Ⅲ層) NE→SW



骨片集中(Ⅲ層) N→S



両面加工のナイフ出土状況(Ⅲ層) N→S

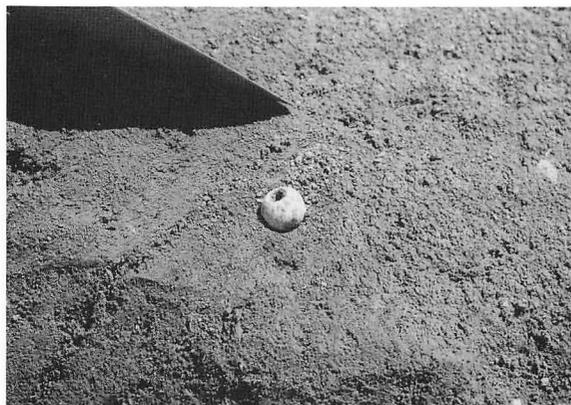


土器出土状況(Ⅴ層) NW→SE

西側調査風景(1)



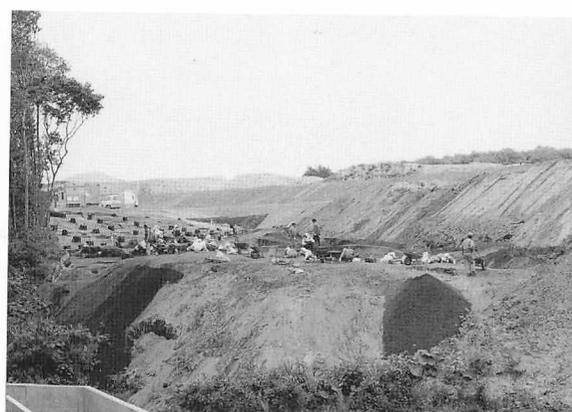
黒曜石集中(V層) S→N



玉出土状況(V層) N→S



遺物出土状況(V層) S→N



NW→SE



基本土層(65ライン) W→E

図版 III-3



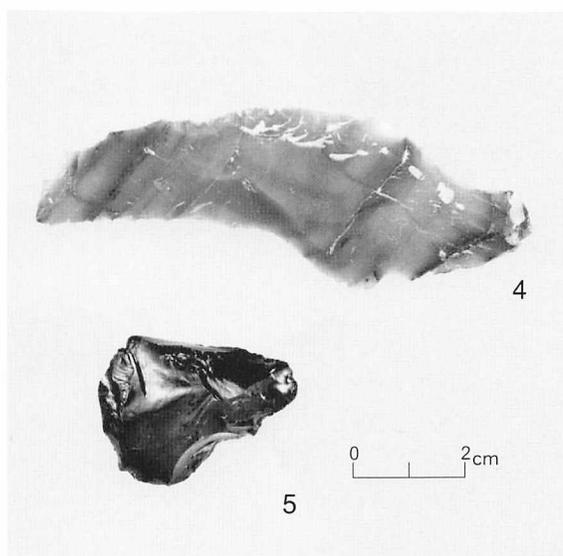
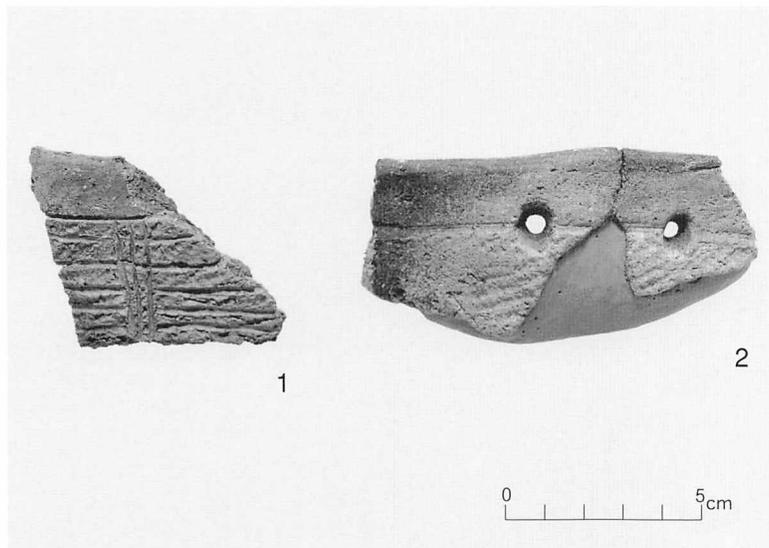
完堀 W→E



焼土検出状況 E→W



炭化材検出状況 NW→SE



H-25の遺物 図III-6



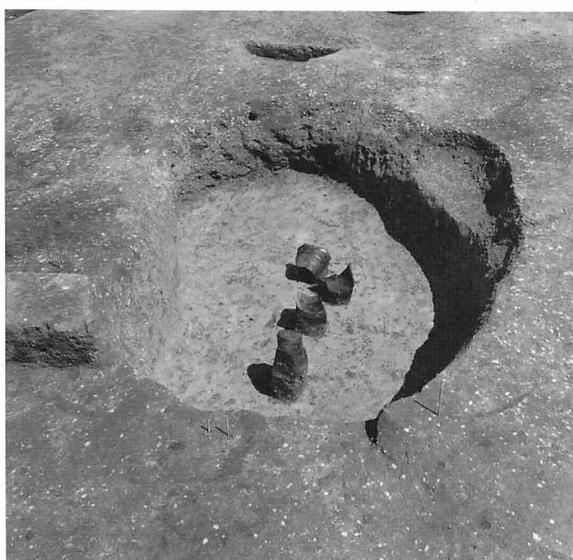
完堀 SE→NW



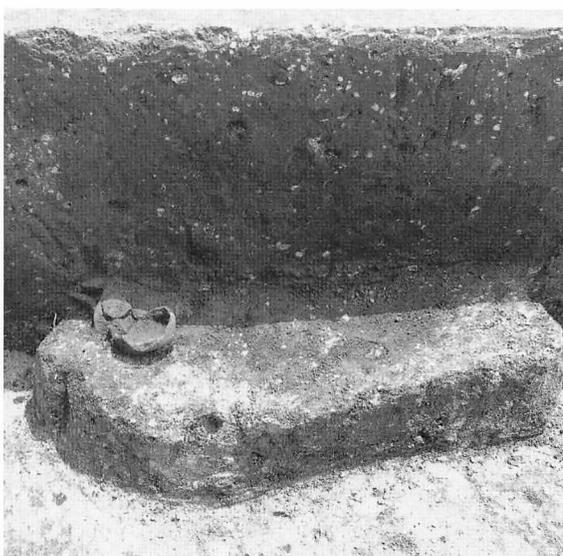
土層断面 W→E



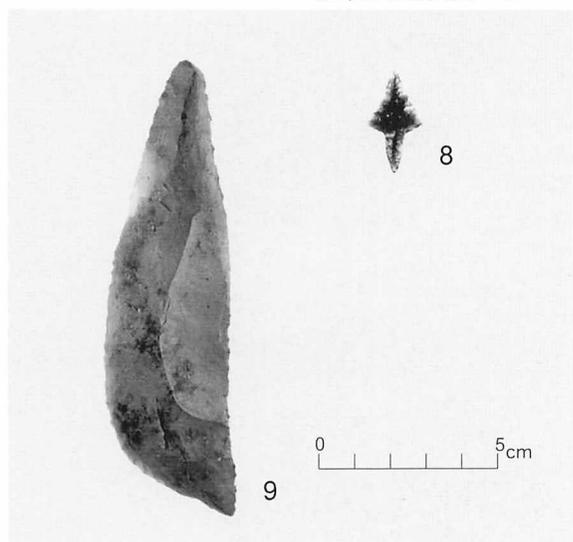
入口部分土層断面 SE→NW



遺物出土状況 S→N



焼土検出状況 W→E



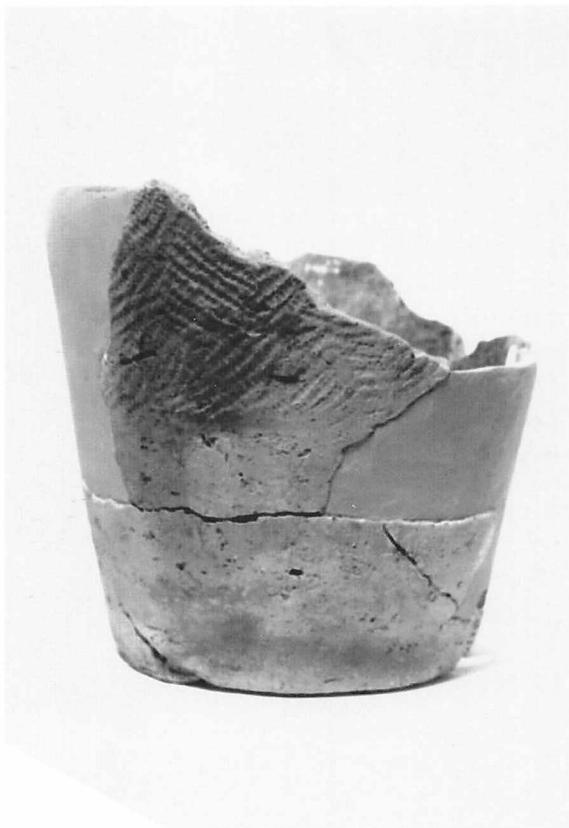
H-26の遺物(1) 図III-8



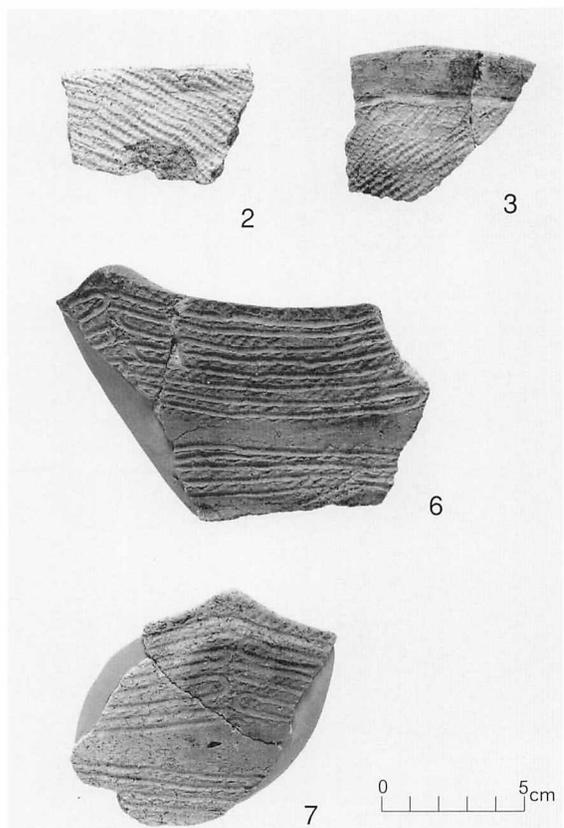
1



4



5



7

0 5cm

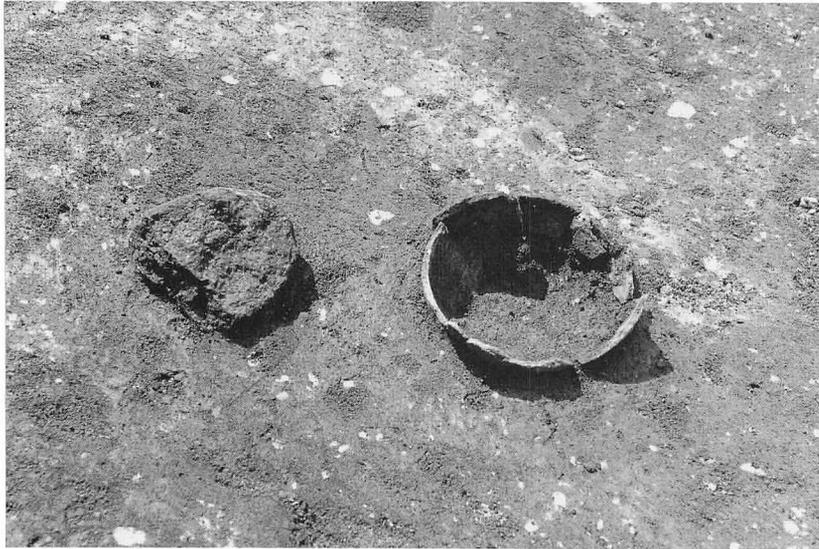
H-26の遺物(2) 図III-8



完掘SW→NE



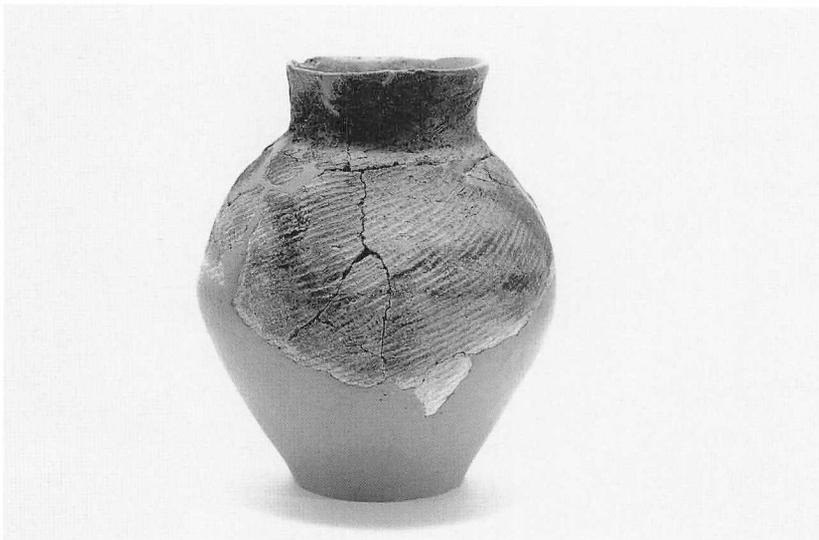
土層断面 S→N



遺物出土状況 NW→SE



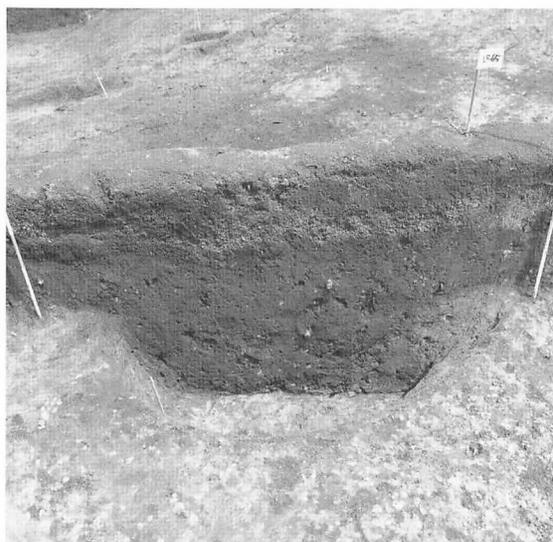
遺物断面 SE→NW



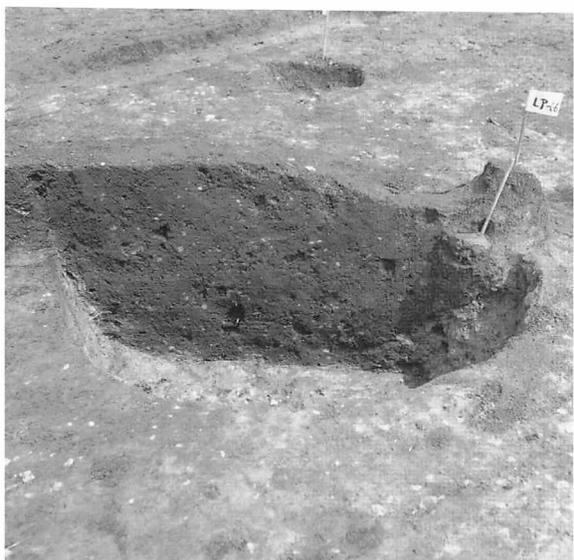
出土遺物



LP-65(左)・66(右)・67(奥)完掘 NE→SW



LP-65土層断面 NE→SW



LP-66土層断面 S→N



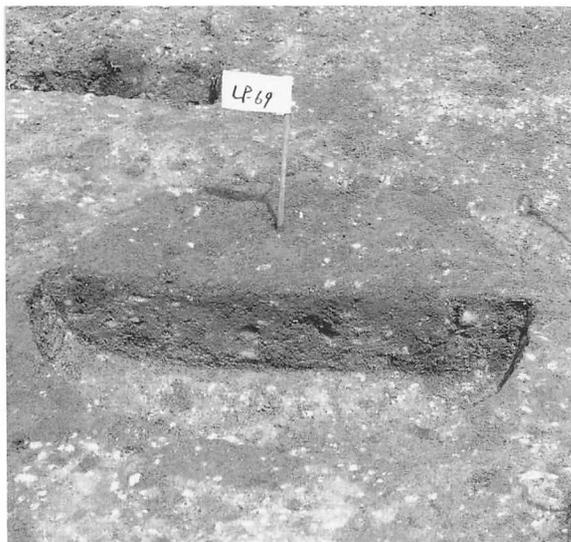
LP-67土層断面 SE→NW



LP-68土層断面 S→N



LP-68完掘 NW→SE



LP-69土層断面 S→N



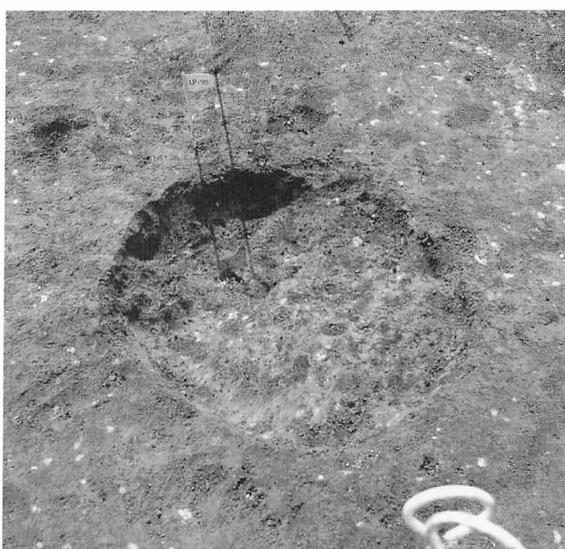
LP-69完堀 S→N



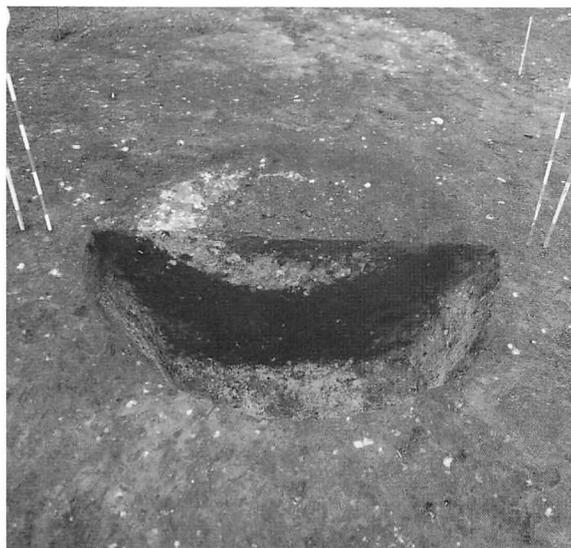
LP-71(前右)・LF-181(前左)土層断面・LP-66(奥右)・65(奥左)完堀 S→N



LP-71完堀 S→N



LP-70完堀 NE→SW



LP-72土層断面 S→N



LP-72完堀 N→S



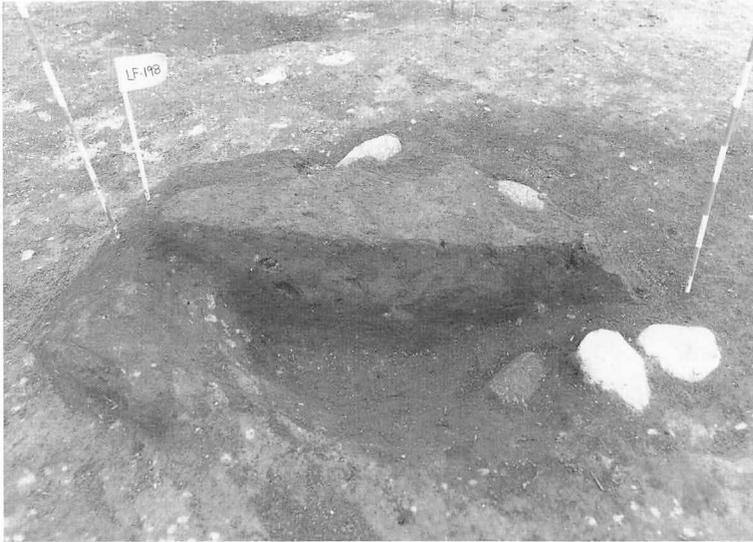
LP-73土層断面 S→N



LP-73完堀 N→S



LP-77土層断面・遺物出土状況 S→N



土層断面・遺物出土状況
(上面・LP-198) W→E



土層断面・遺物出土状況
W→E



完堀・遺物出土状況
NE→SW

LP-74



土層断面・遺物出土状況
S→N



遺物出土状況 N→S



完掘 N→S

LP-75

図版 IV-3



3



4



5



6

包含層の土器(3) 図IV-2



1



2

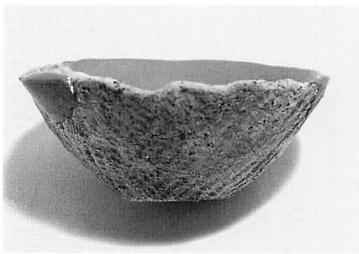


3

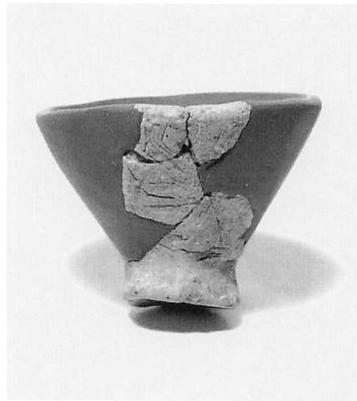
包含層の土器(4) 図IV-3



1



2



3



4



5



6

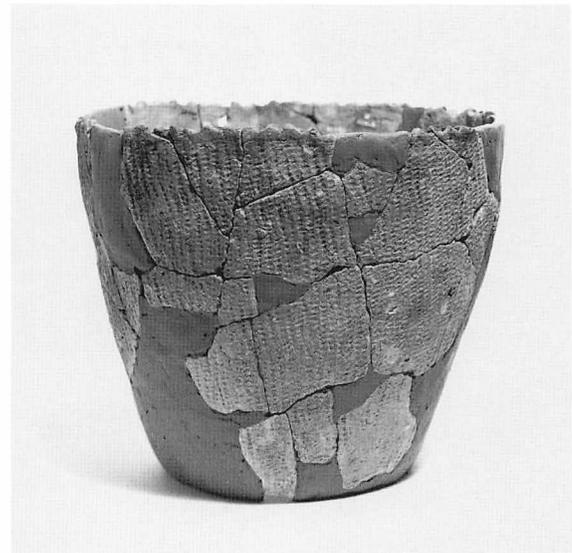
包含層の土器(5) 図IV-4



1



2



4



3



5

包含層の土器(6) 図IV-5



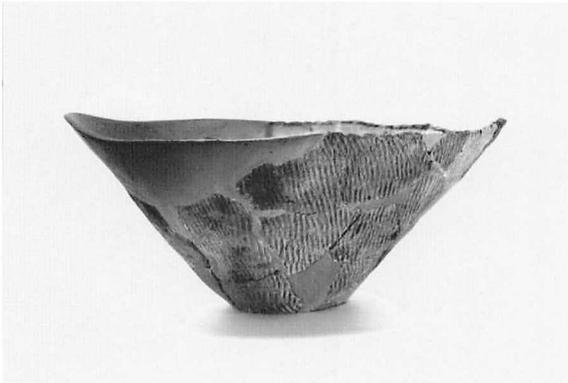
6



2



1



3



4

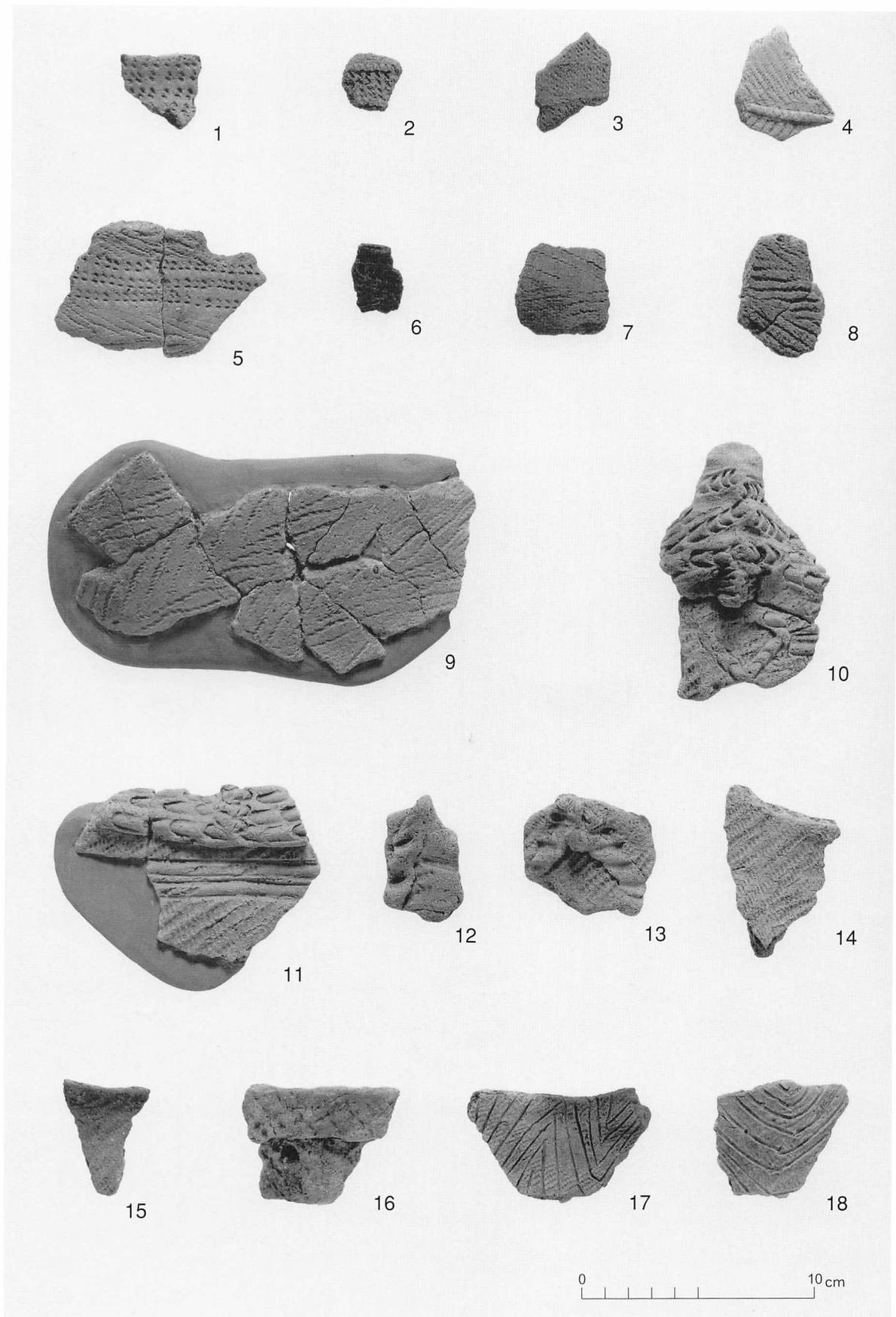


5

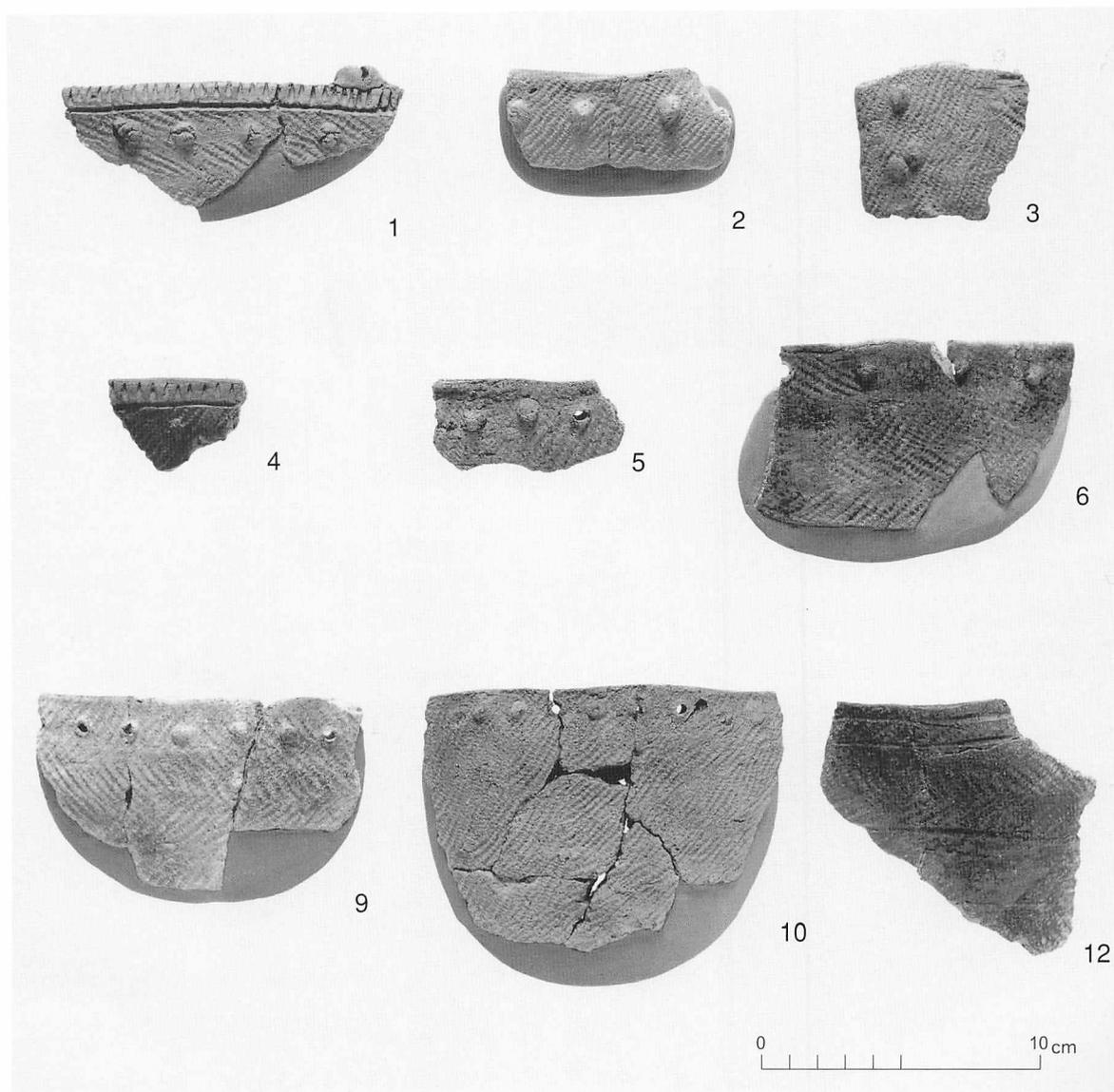
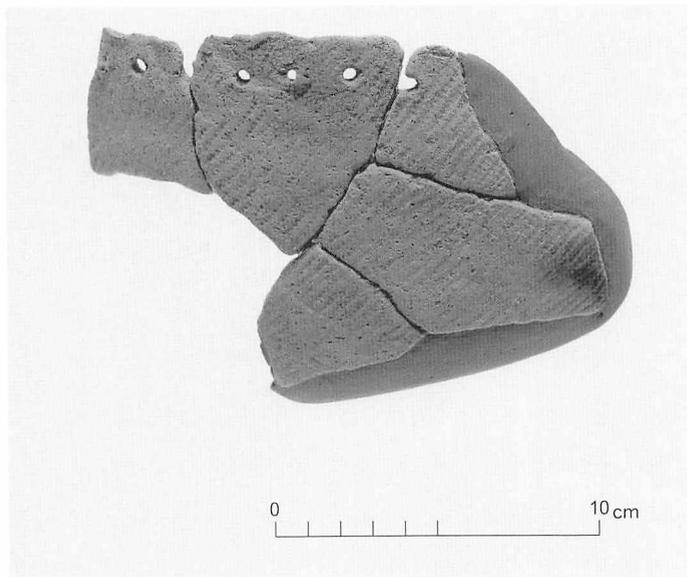


6

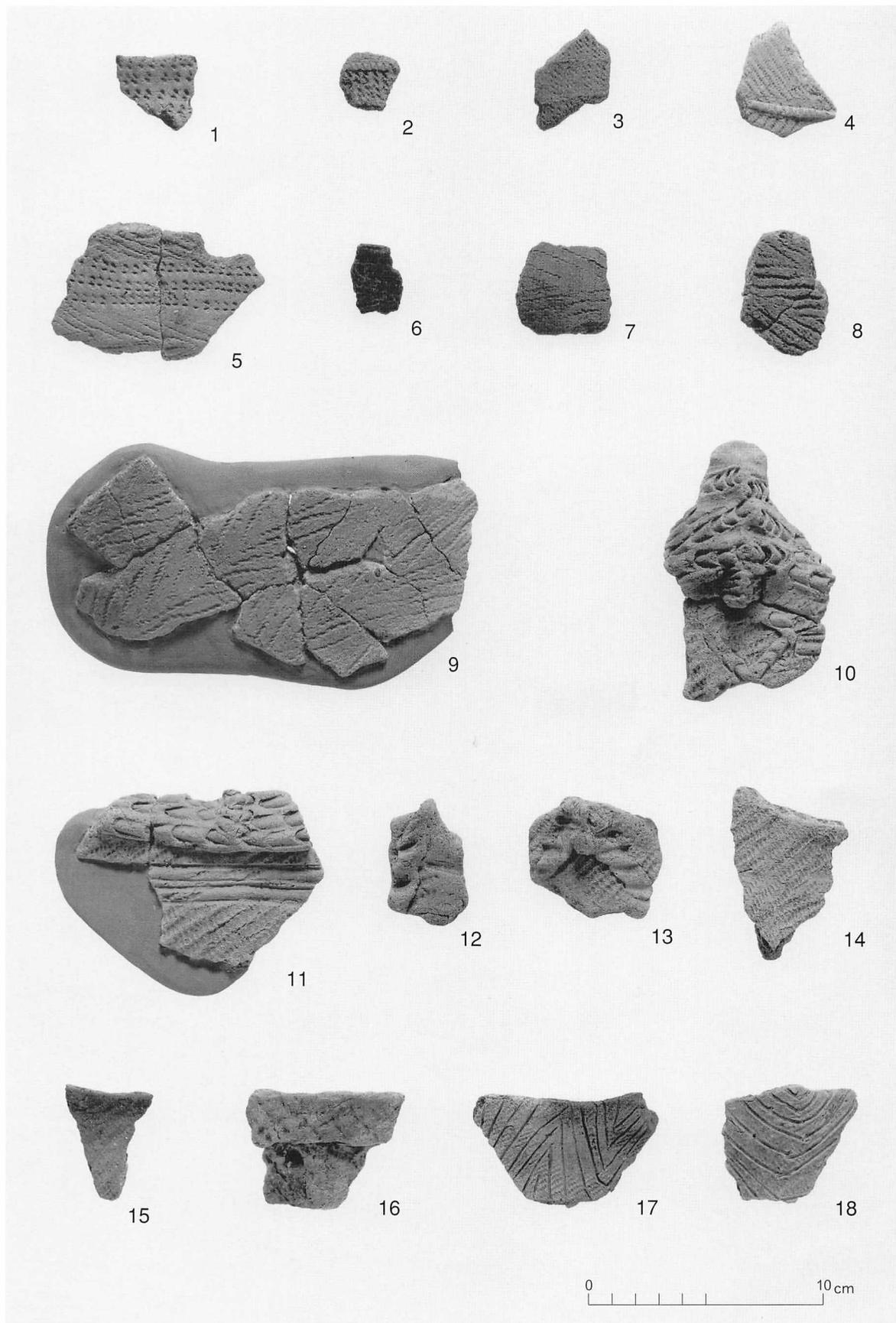
包含層の土器(7) 図IV-5-6



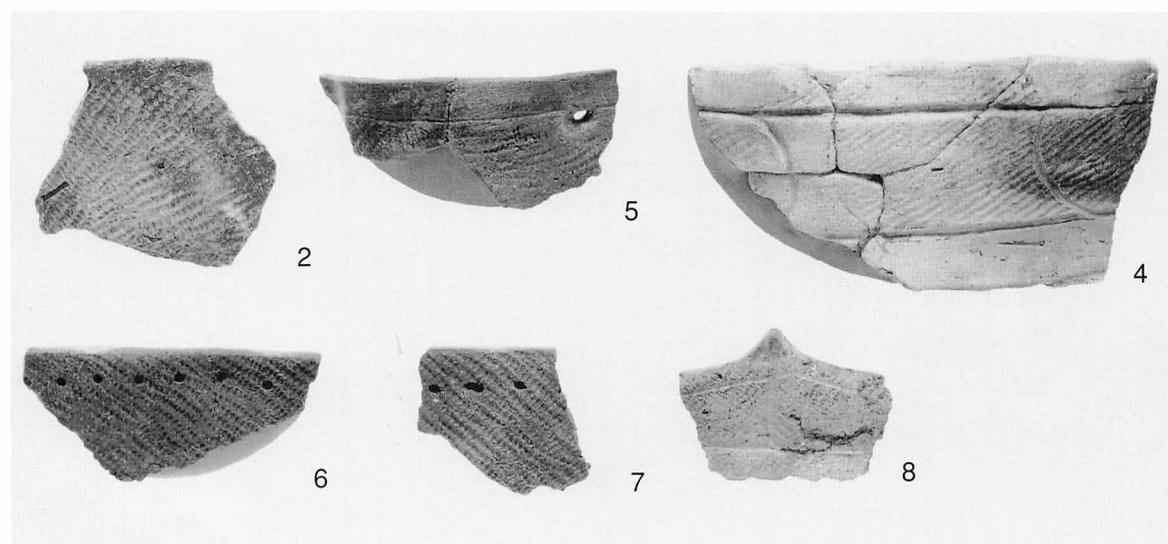
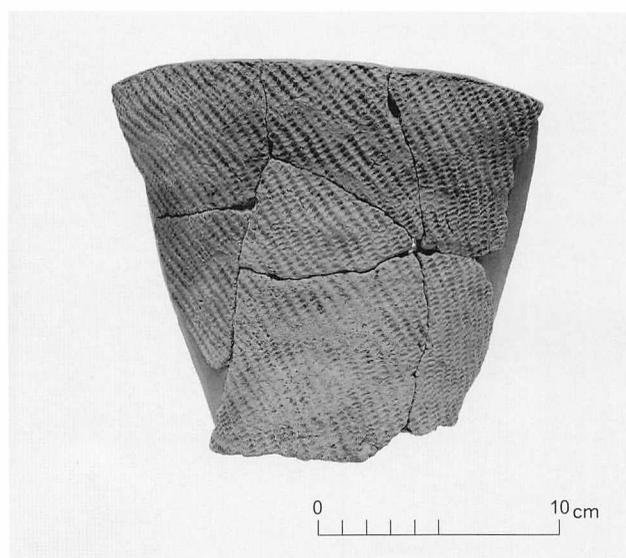
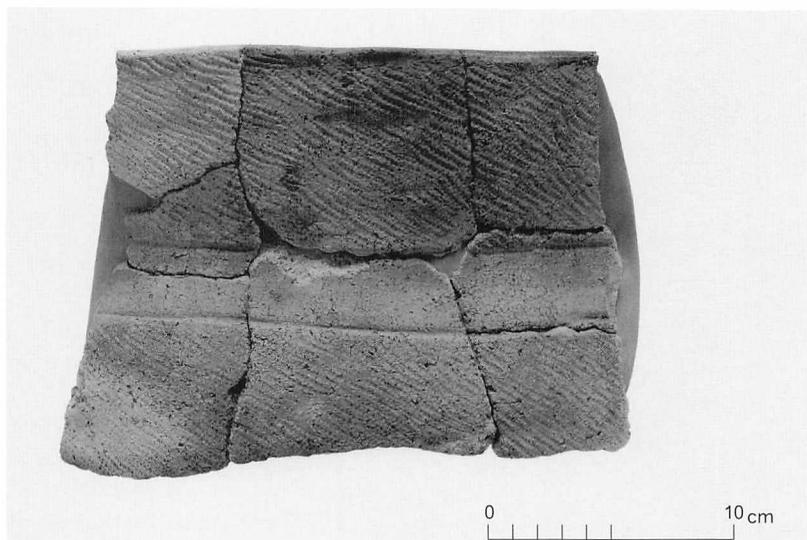
包含層の土器(8) 図IV-7



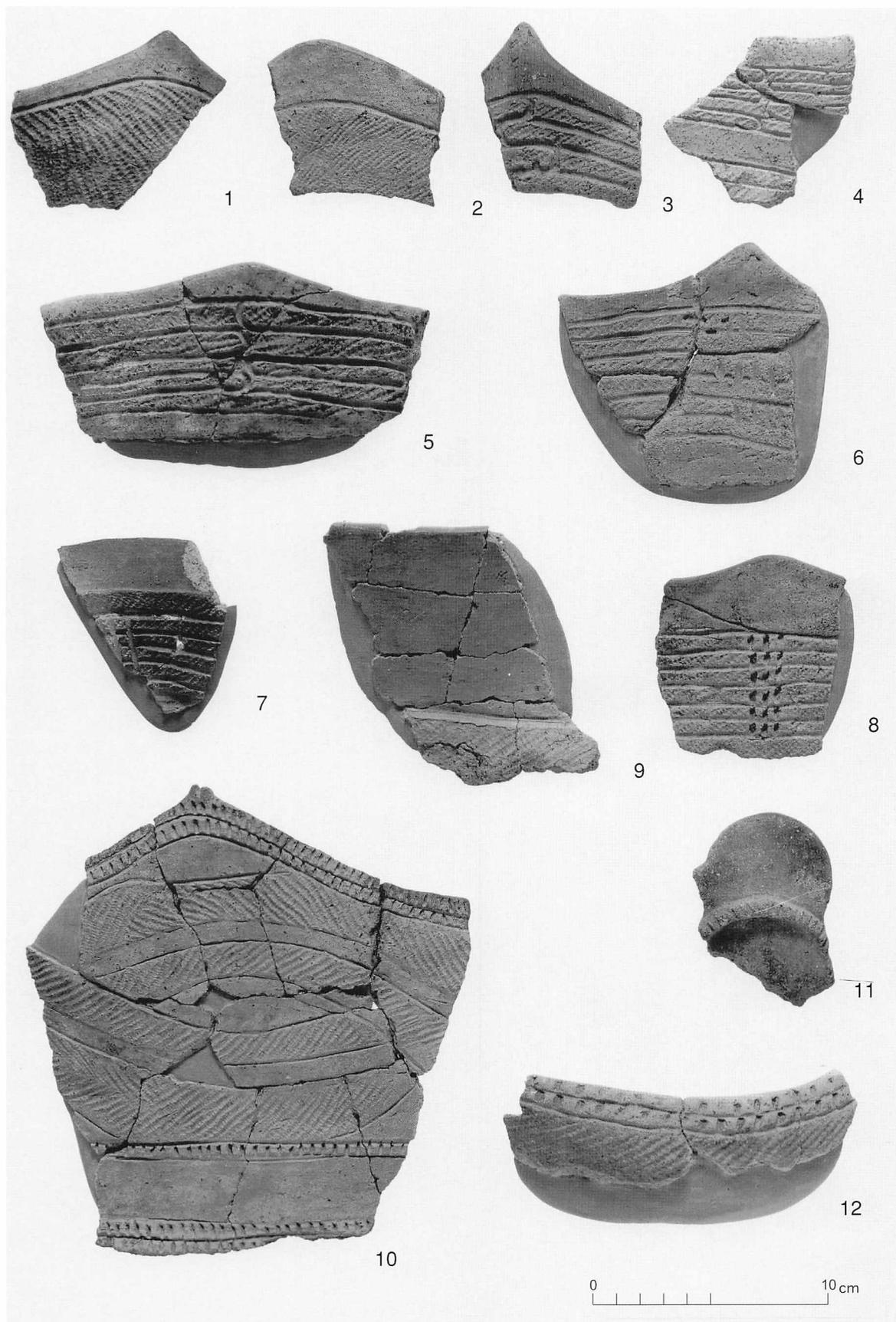
包含層の土器(13) 図IV-11



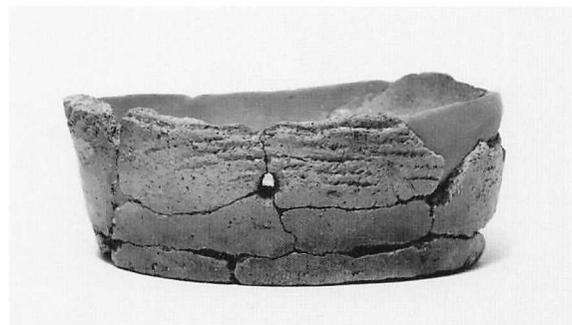
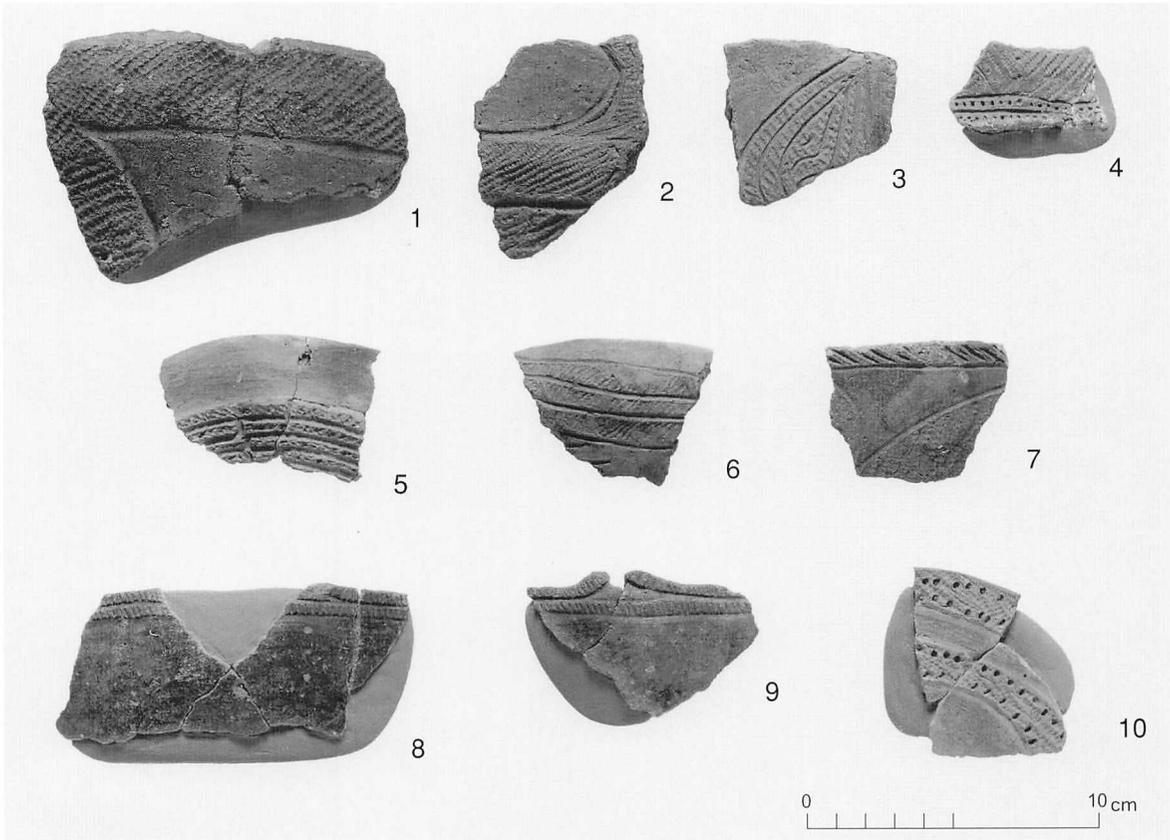
包含層の土器(8) 図IV-7



包含層の土器(9) 図IV-8



包含層の土器(10) 図IV-9



11

12

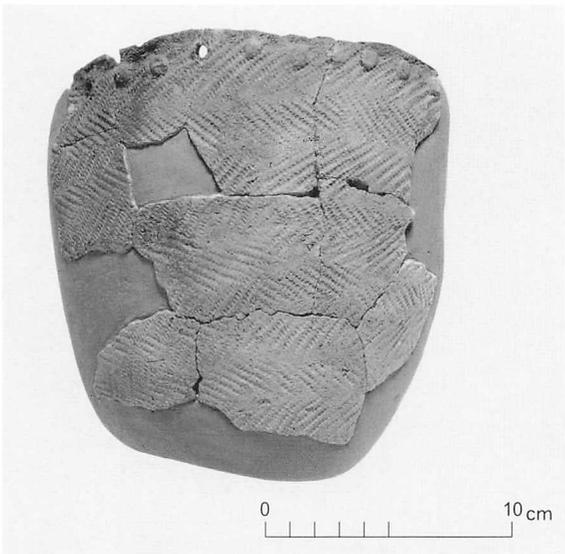
包含層の土器(11) 図IV-10



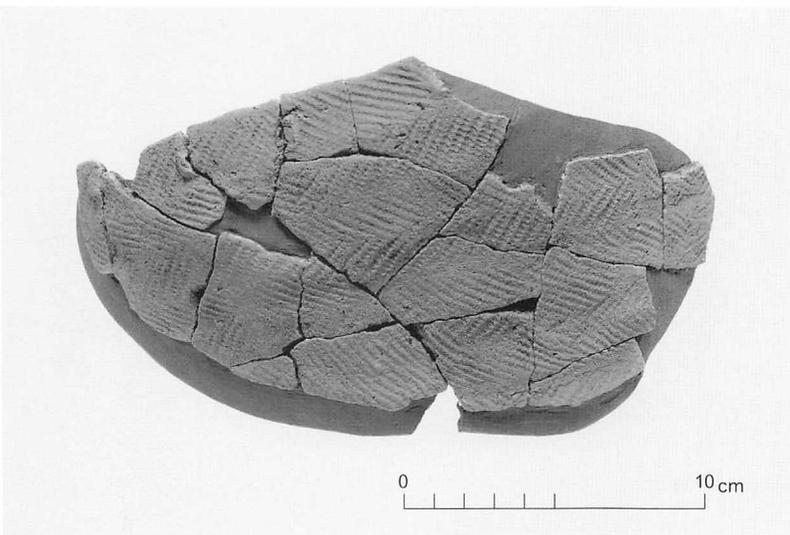
13



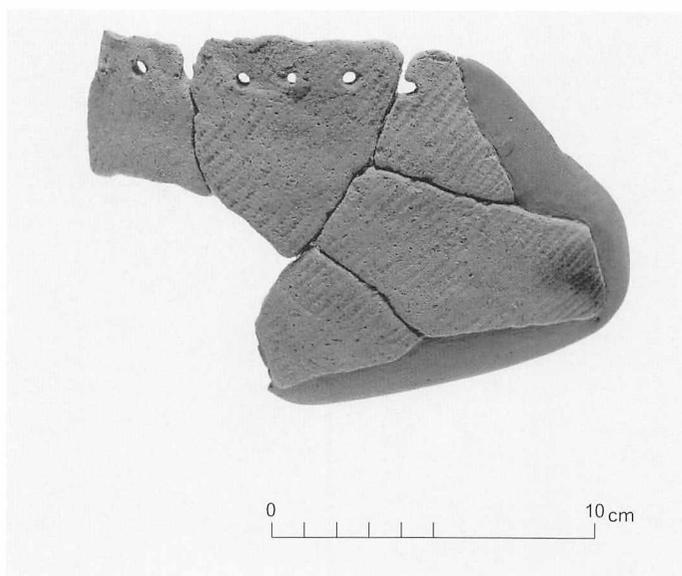
14



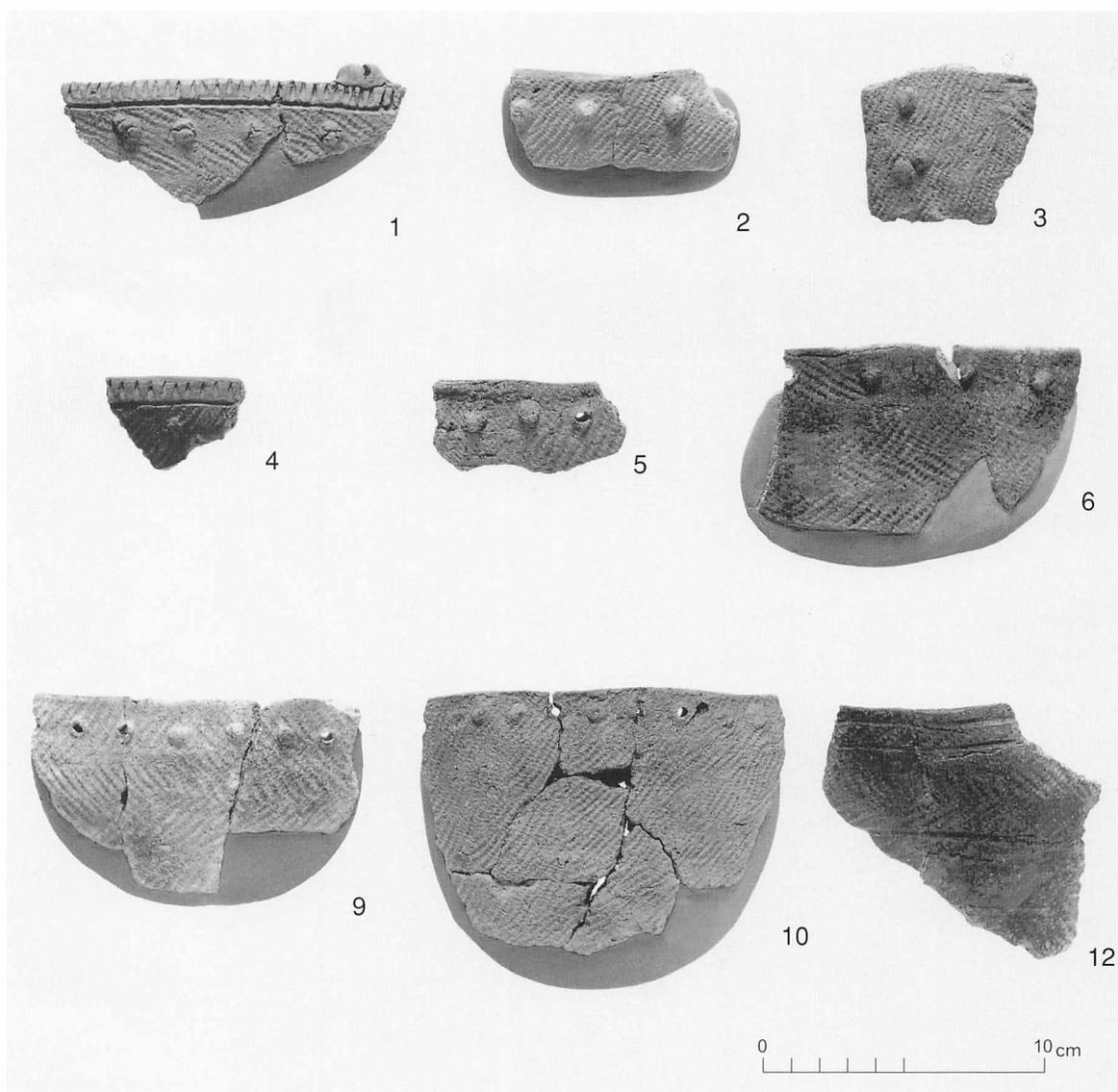
7



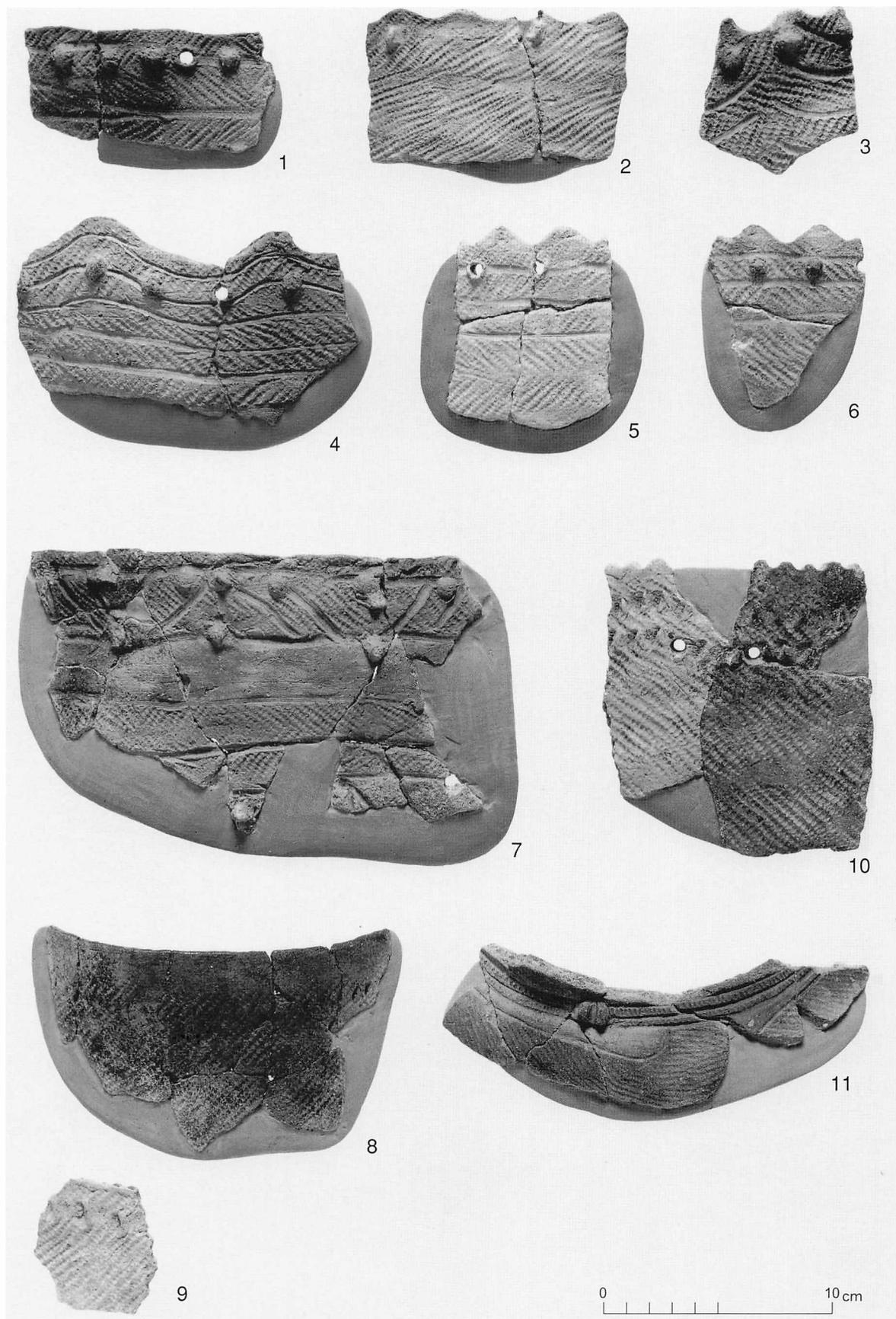
8



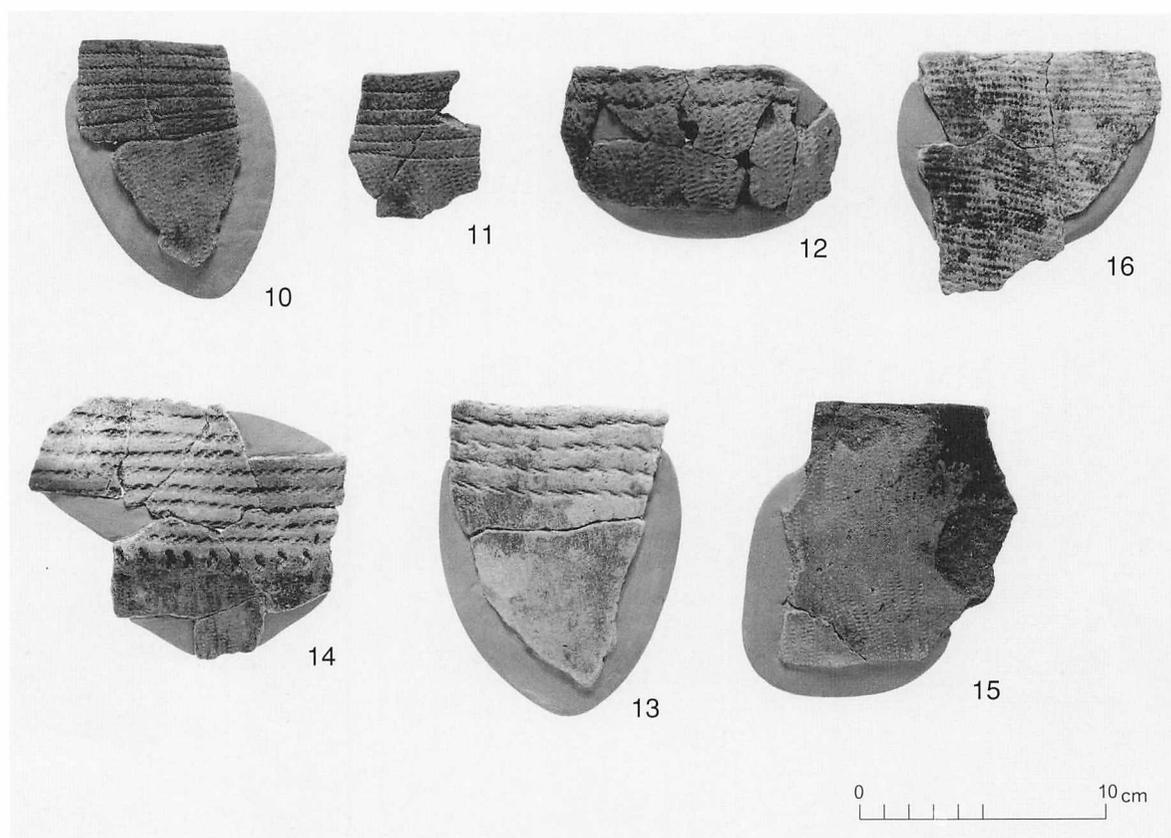
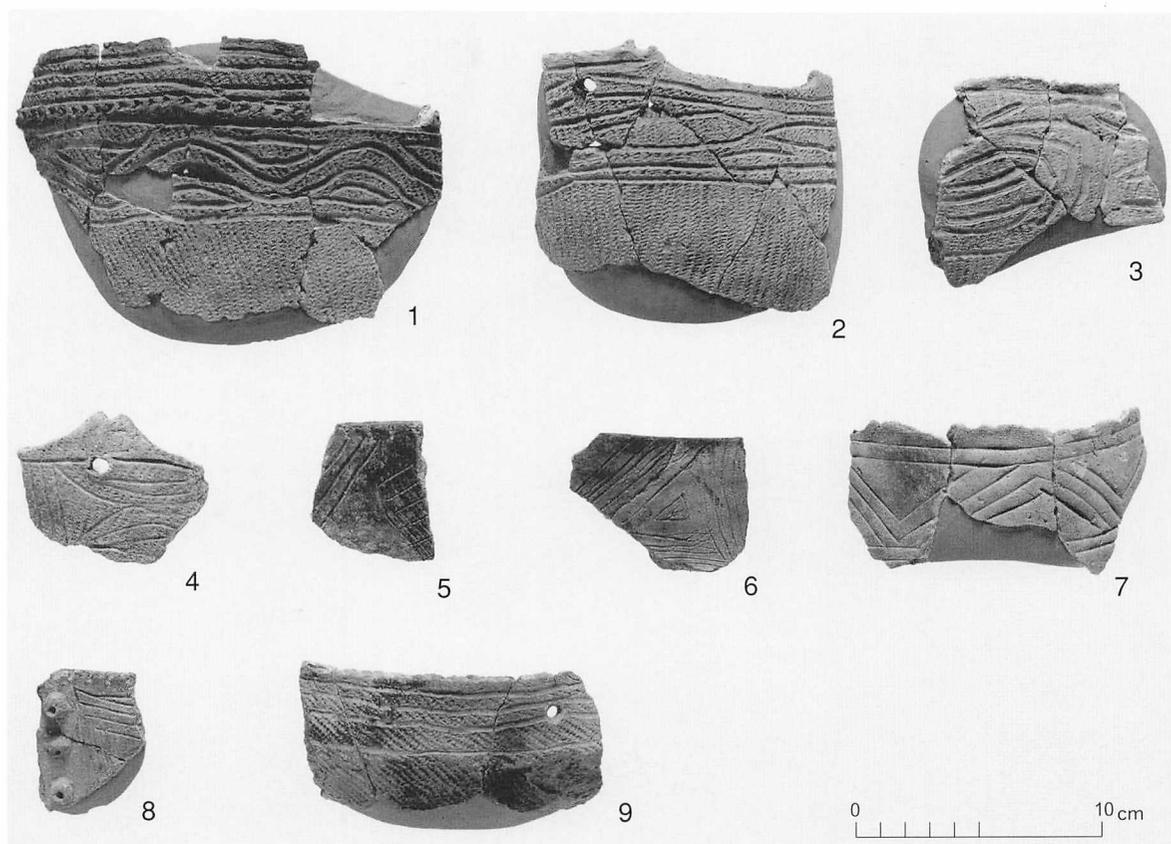
11



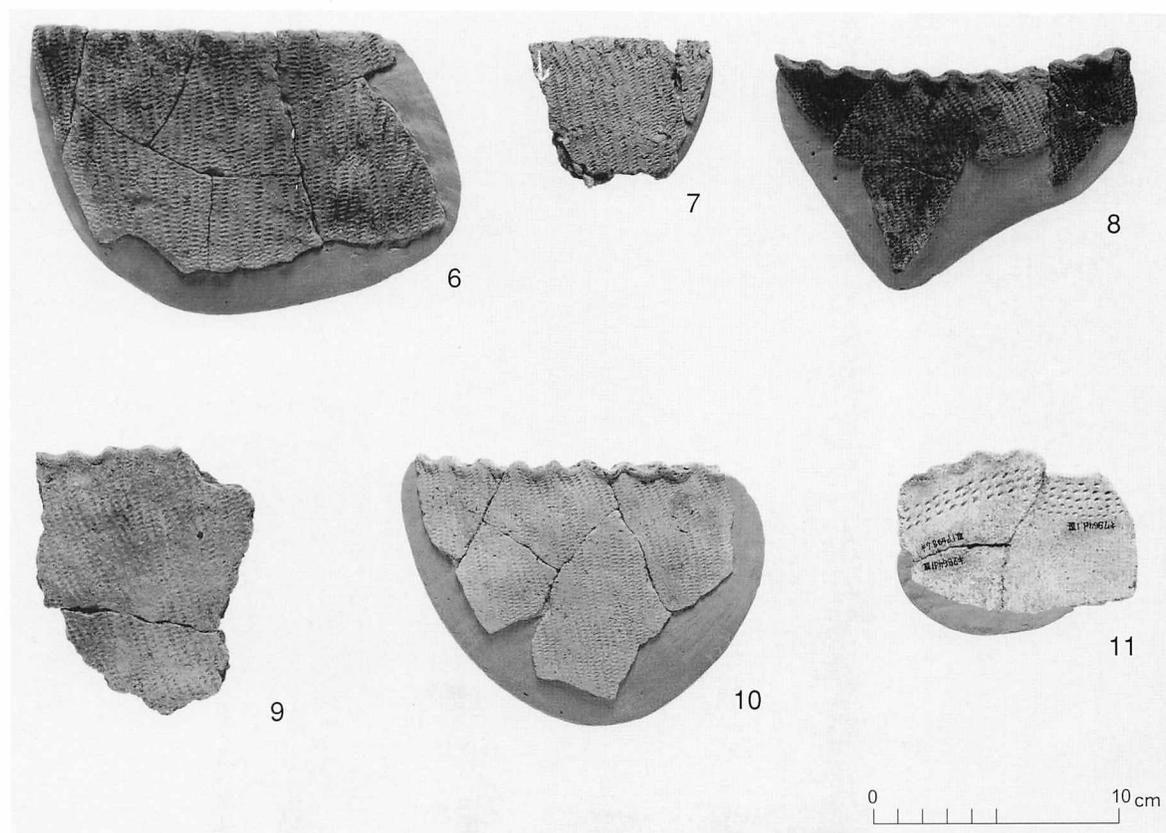
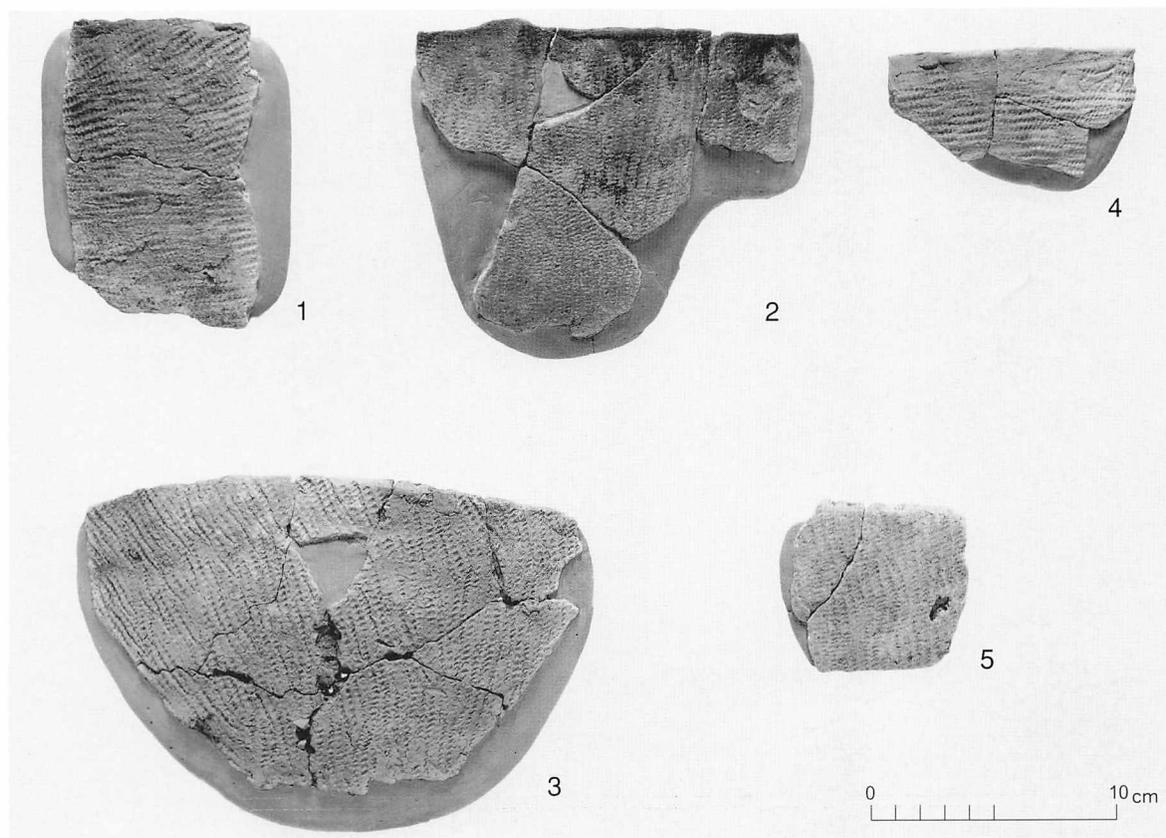
包含層の土器(13) 図IV-11



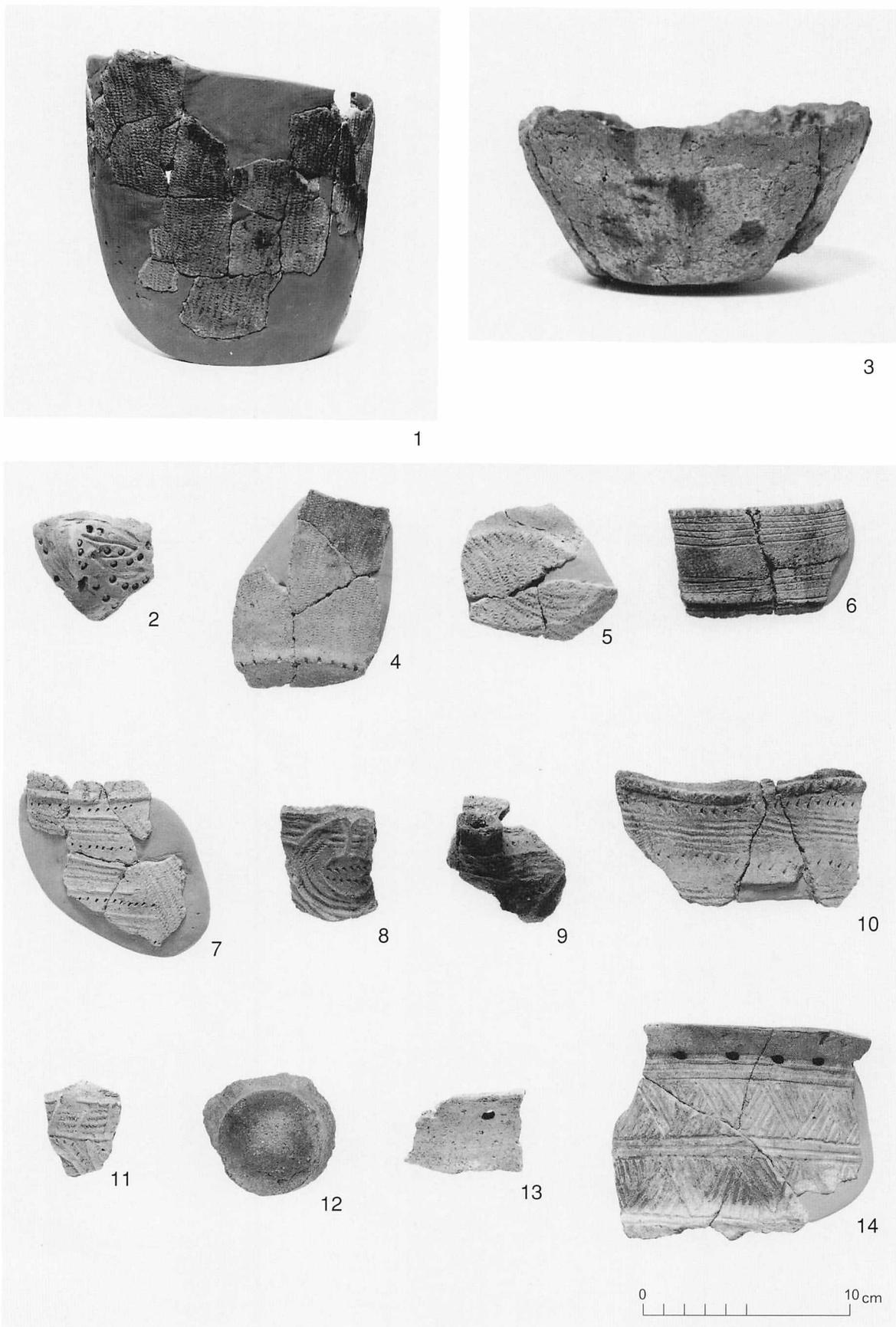
包含層の土器(14) 図IV-12



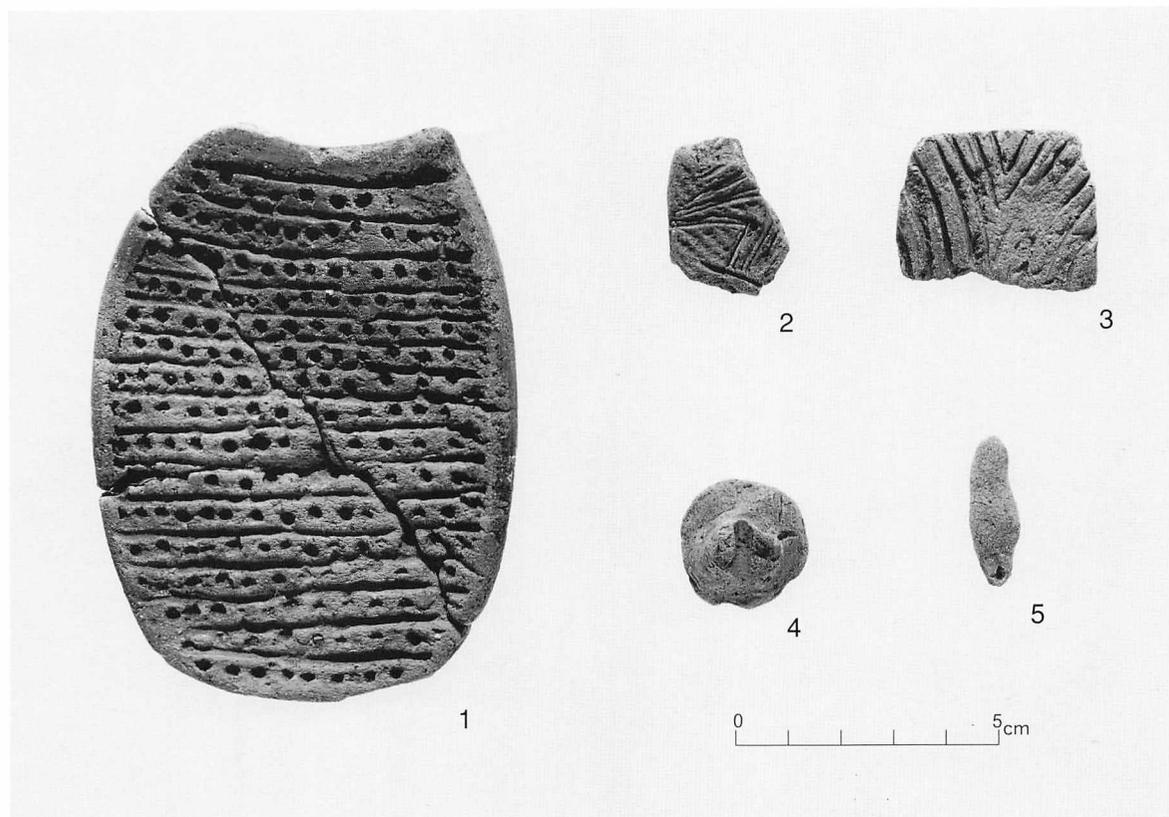
包含層の土器(15) 図IV-13



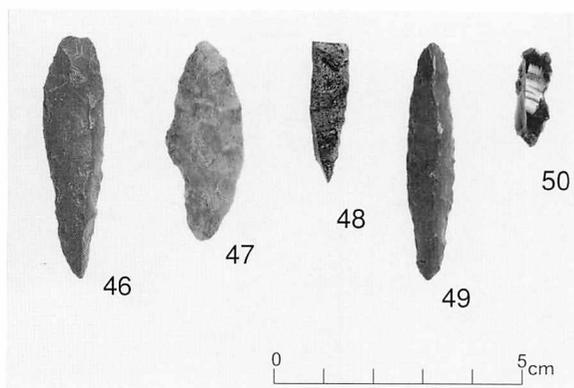
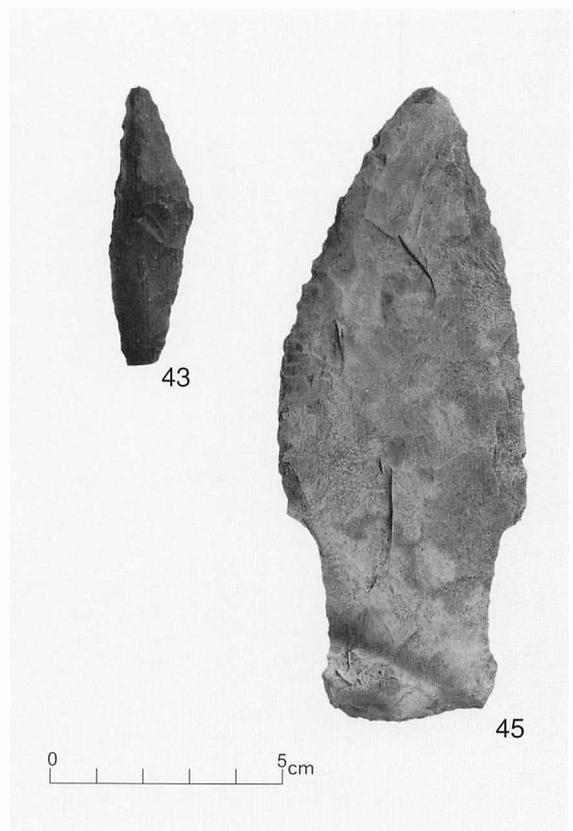
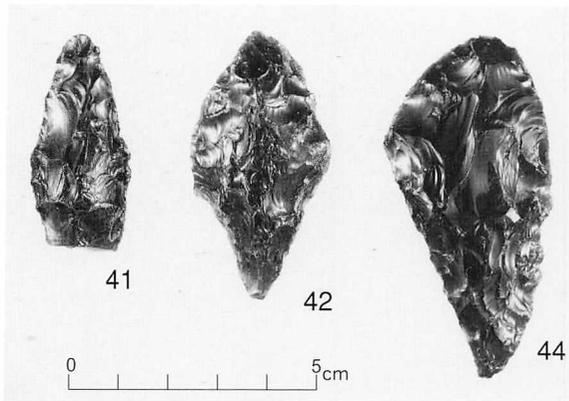
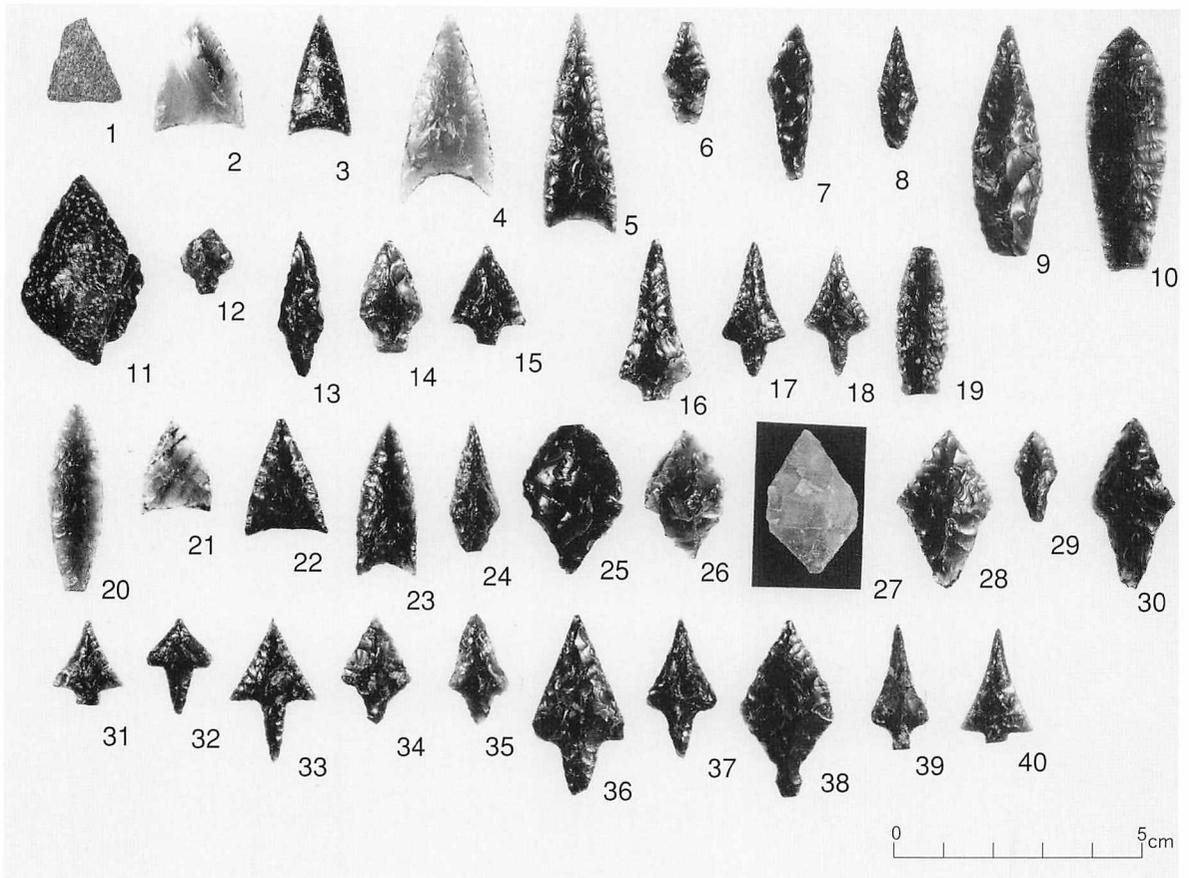
包含層の土器(16) 図IV-14



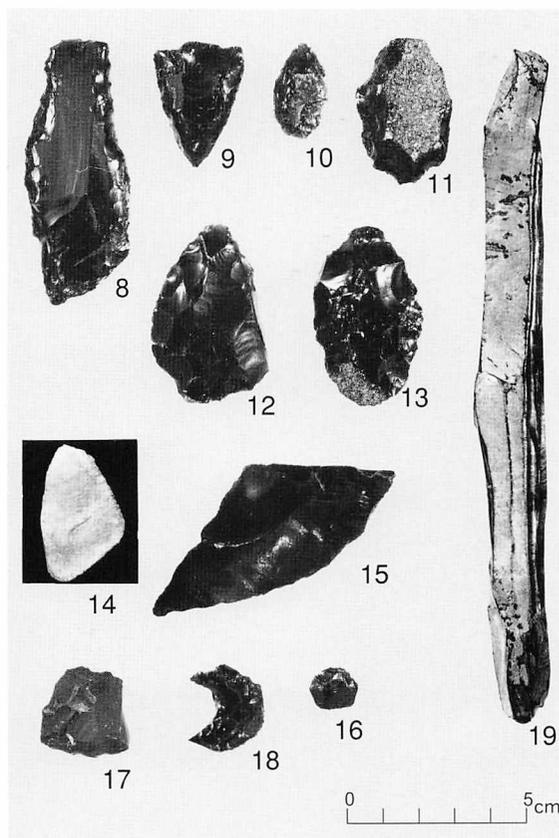
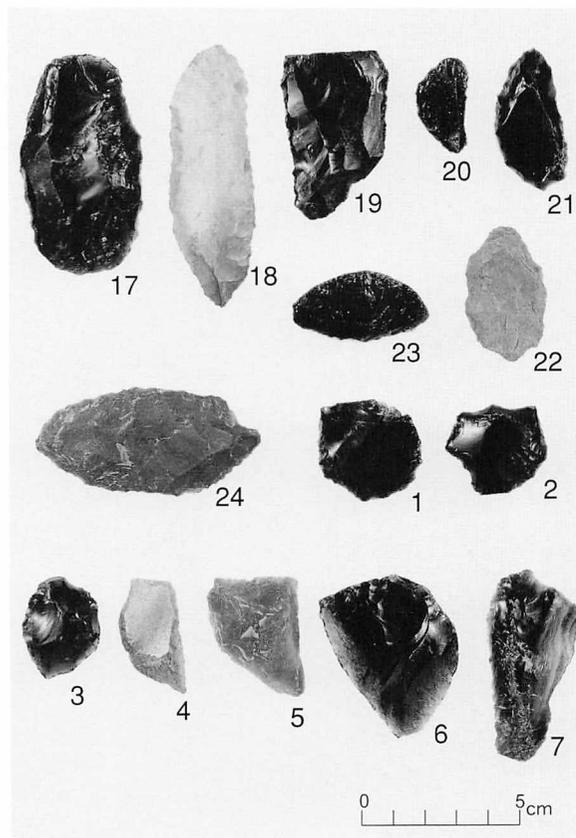
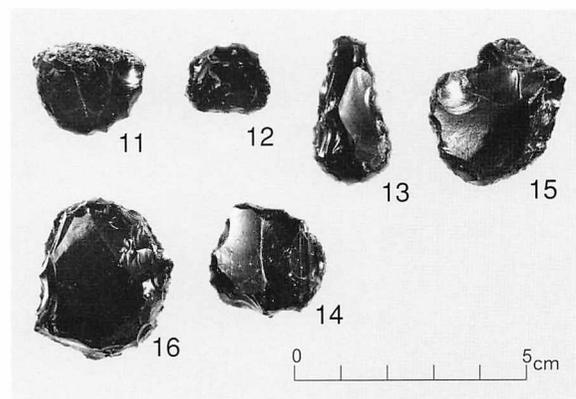
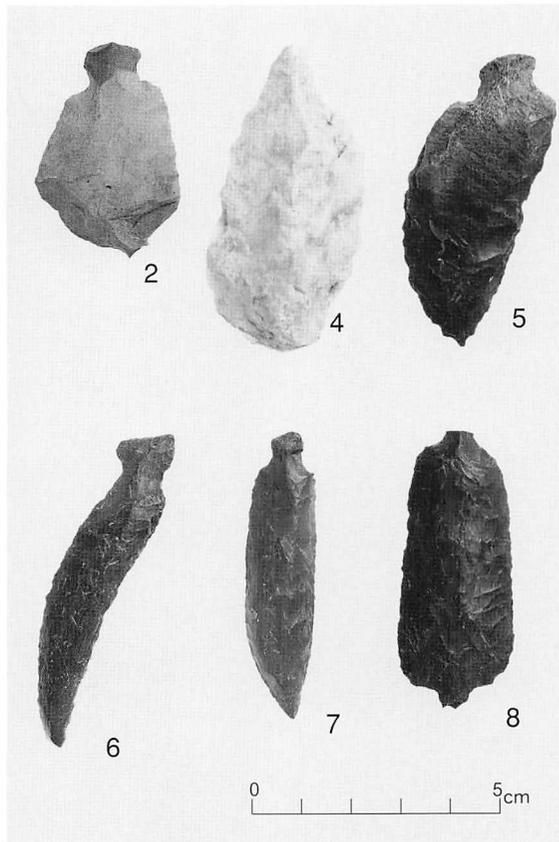
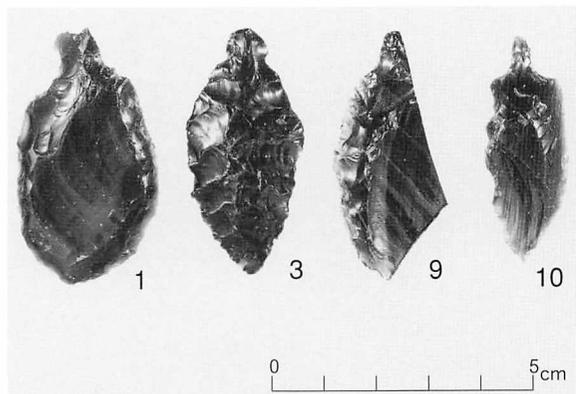
包含層の土器(17) 図IV-15



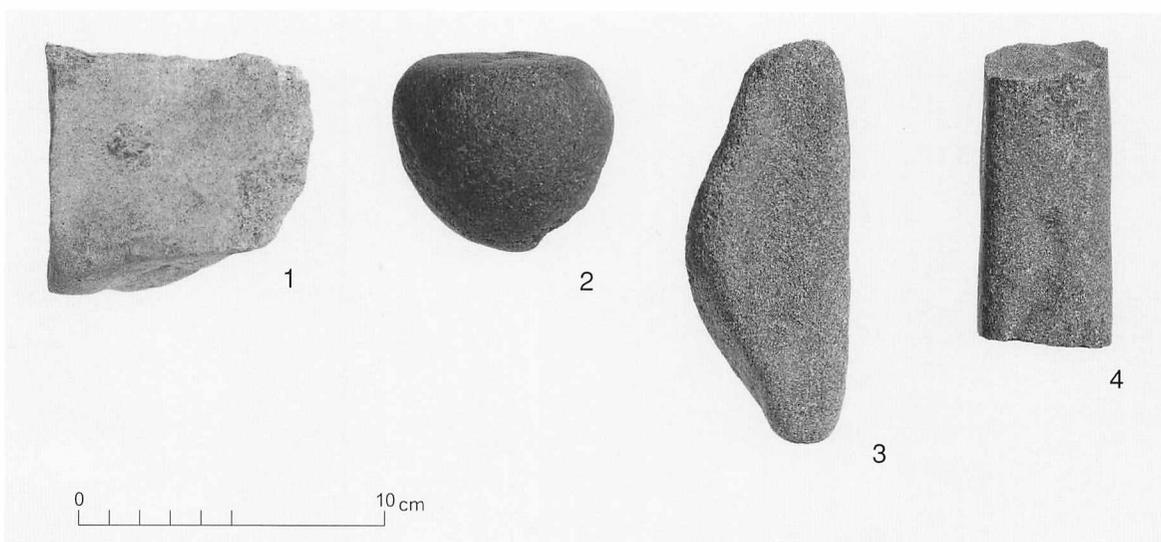
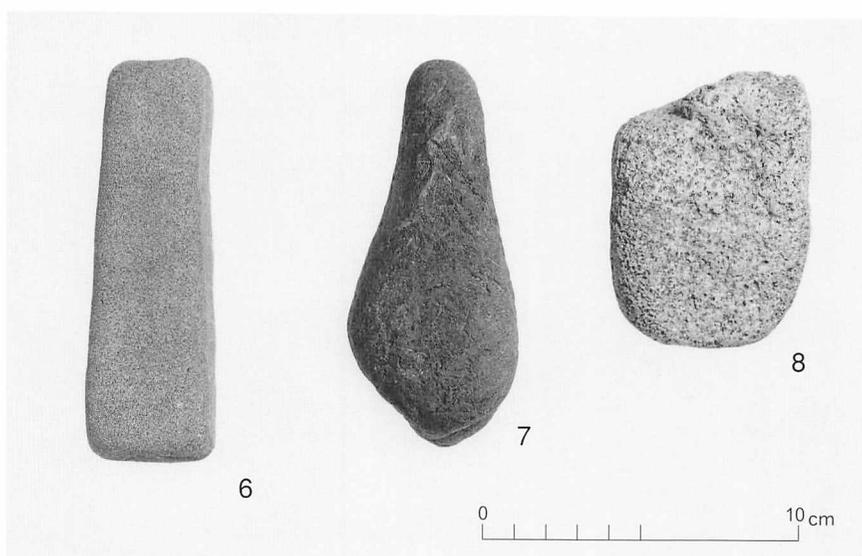
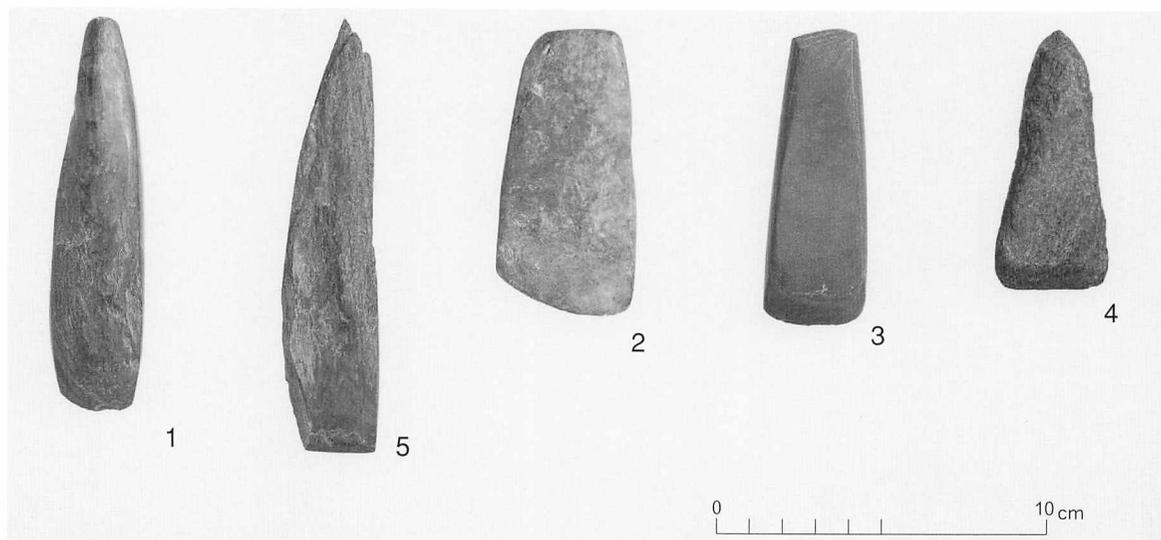
包含層の土製品 図IV-16



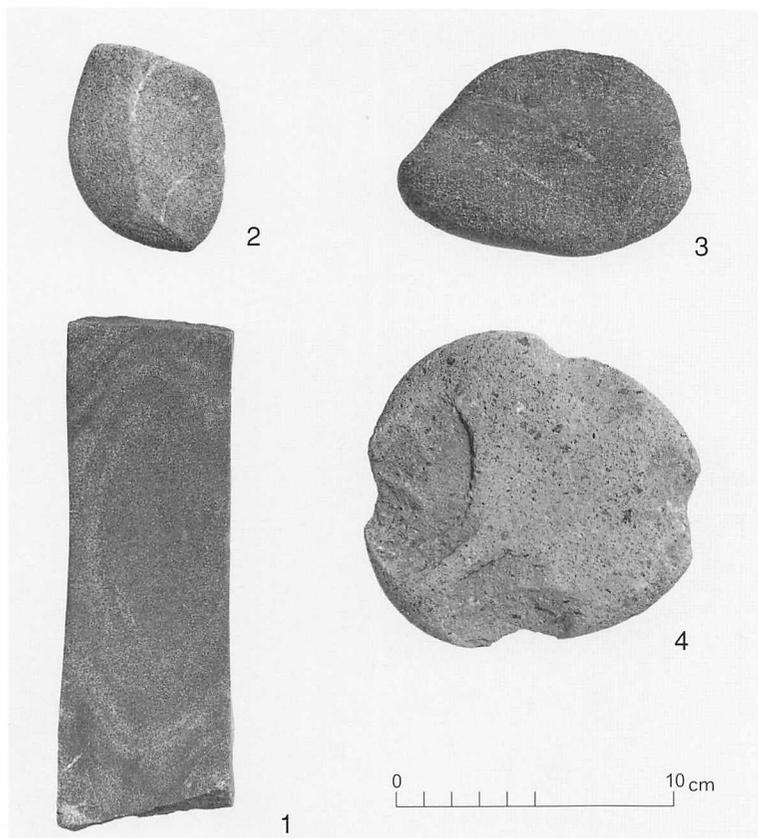
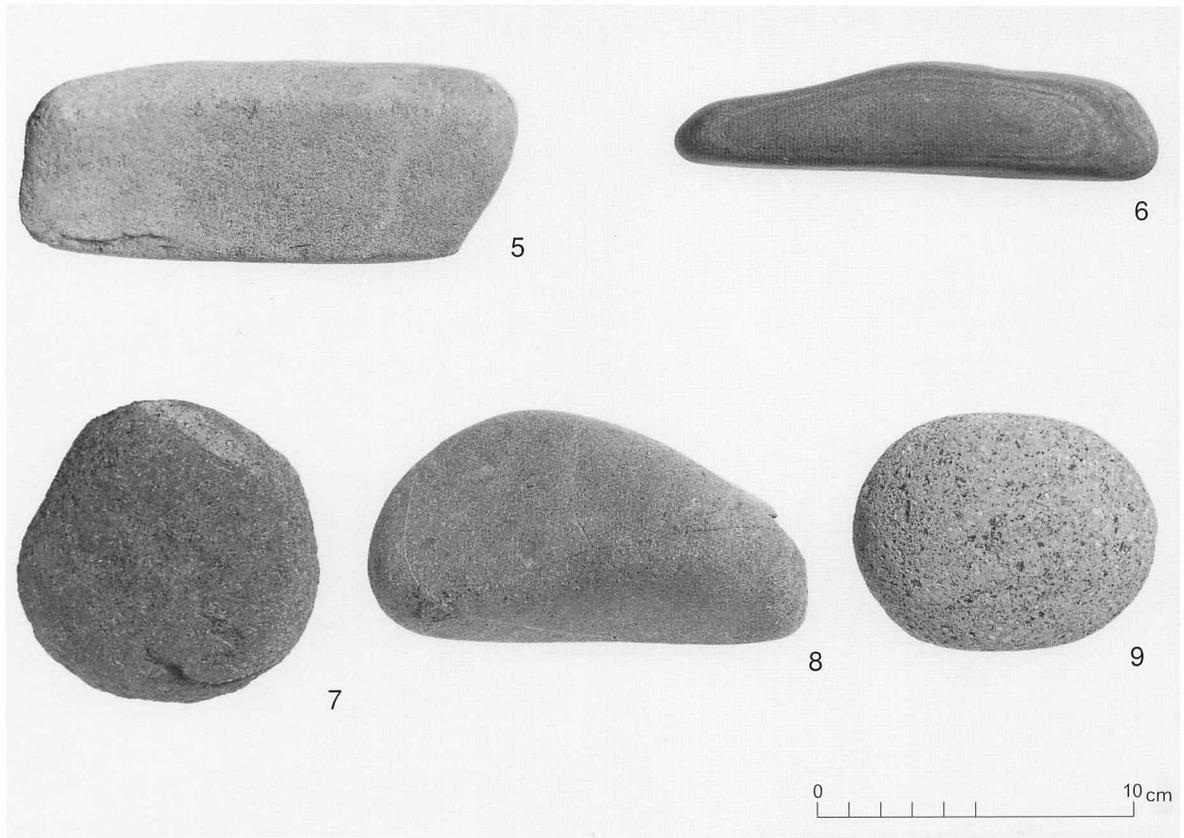
包含層の石器(1) 図IV-22



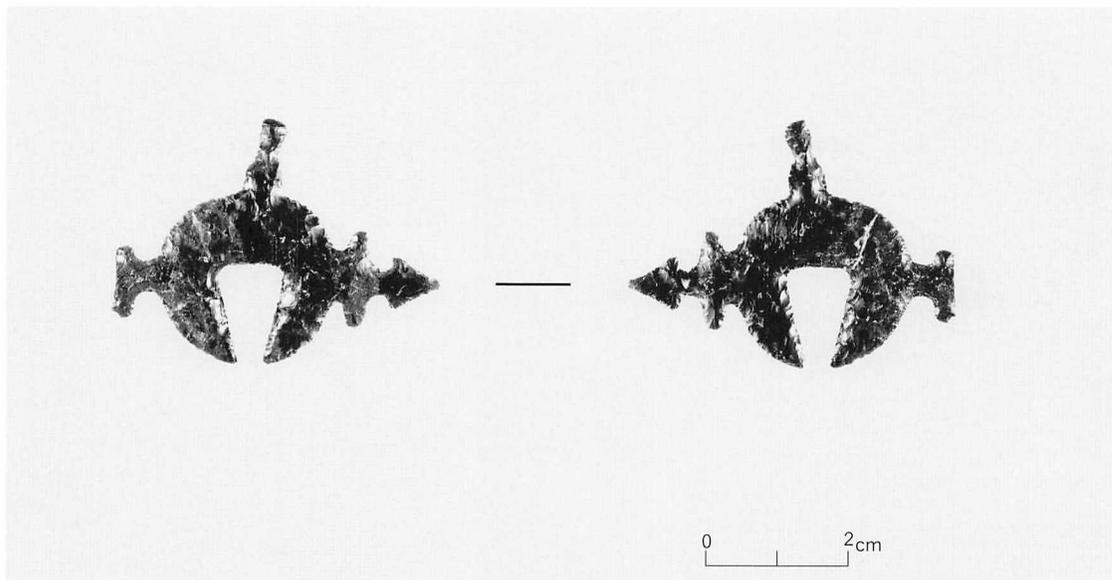
包含層の石器(2) 図IV-23・24



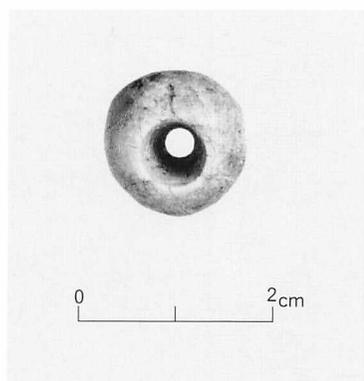
包含層の石器(3) 図IV-25-26



包含層の石器(4) 図IV-26・27



5



6

報告書抄録

ふりがな	ちとせし きうす7いせき 4															
書名	千歳市 キウス7遺跡(4)															
副書名	北海道横断自動車道(千歳-夕張)埋蔵文化財発掘調査報告書															
巻次																
シリーズ名	北埋調報															
シリーズ番号	117集															
編著者名	三浦正人, 倉橋直孝, 吉田裕吏洋, 鎌田 望															
編集機関	財団法人 北海道埋蔵文化財センター															
所在地	〒064 北海道札幌市中央区南26条西11丁目 Tel 011 (561) 3131															
発行年月日	西暦1997年3月25日															
ふりがな	きうす7															
所収遺跡名	キウス7															
ふりがな	ほっかいどう ちとせし ちゅうおう															
所在地	北海道 千歳市 中央															
市町村コード	01224															
遺跡番号	A-03-265															
北緯・東経	42度52分31秒・141度43分52秒															
調査期間	19960507~19960629															
調査面積	1, 720㎡															
調査原因	道路(北海道横断自動車道)建設に伴う事前調査															
種別	集落・包蔵地															
主な時代	縄文時代早期・後期・晩期, 続縄文時代, 擦文文化期															
主な遺構	<table style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <td style="width: 15%;">竪穴住居跡</td> <td style="width: 60%;">縄文時代後期</td> <td style="width: 25%; text-align: right;">3</td> </tr> <tr> <td>平地住居跡</td> <td>縄文時代後期</td> <td style="text-align: right;">1</td> </tr> <tr> <td>土 壙</td> <td>縄文時代後期~晩期</td> <td style="text-align: right;">13</td> </tr> <tr> <td>焼 土</td> <td>縄文時代後期~晩期</td> <td style="text-align: right;">77</td> </tr> <tr> <td>焼 土</td> <td>続縄文時代~擦文文化期</td> <td style="text-align: right;">4</td> </tr> </table>	竪穴住居跡	縄文時代後期	3	平地住居跡	縄文時代後期	1	土 壙	縄文時代後期~晩期	13	焼 土	縄文時代後期~晩期	77	焼 土	続縄文時代~擦文文化期	4
竪穴住居跡	縄文時代後期	3														
平地住居跡	縄文時代後期	1														
土 壙	縄文時代後期~晩期	13														
焼 土	縄文時代後期~晩期	77														
焼 土	続縄文時代~擦文文化期	4														
主な遺物	土器・土製品 石器・石製品 自然遺物															
特記事項	縄文時代後期が主体となり、精巧な黒曜石製異形石器も出土している。 また、縄文時代早期・続縄文時代最末期~擦文文化期初期・擦文文化期後期の各時期の土器の点在も特徴的である。															

(財)北海道埋蔵文化財センター調査報告第117集

千歳市

キウス7遺跡(4)

—北海道横断自動車道(千歳—夕張)埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成9年3月25日 発行

編集 財団法人 北海道埋蔵文化財センター
064 札幌市中央区南26条西11丁目
Tel(011)561-3131
Fax(011)561-0458
印刷 (株)北海道機関紙印刷所
060 札幌市北区北6条西7丁目
Tel(011)716-6141
Fax(011)717-5431
